

聖櫻番長のガールフレ
ンド（仮）だらけな日
常

クビキリサイクル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

成績は中の下、部活は未所属、おまけに超が付く鈍感。なのに喧嘩はチート級。トラブルだらけの一年間を聖櫻学園で過ごした彼は、いつの間にやら全校生徒の注目の的。

不良じゃないのに番長に祀り上げられ、けれど男子達は舎弟のように付き従う。

そんなお人好し番長・新城一也と、そんな彼と日常を過ごすガールフレンド（仮）達のお話。

※リクエストは基本的に受け付けております。こういう話が読みたいというご注文

があれば、メッセージボックスや活動報告などでお伝えください。なるべくは応えたいと思います。

ただ、他校メンバーの登場などはなるべく原作に沿いたいと思うので、難しいです。

目次

聖櫻番長の憂鬱な早朝 | 1

聖櫻番長の紹介したりされたりな朝

20

聖櫻番長が死にかける昼時 | 46

聖櫻番長の誘惑多き夕暮れ | 94

桃子と柚子のブラシと蕎麦 | 130

生徒会役員の役職変更 | 158

2年C組の身体測定 | 179

文緒とエレナと小瑠璃による小さなコス

プレ撮影会 | 223

にゅーろん★くりいむそふとの枕談義

261

円岡燕の打ち砕かれる出会い | 285

放送部の第一回・番長ラジオ | 305

聖櫻番長の見回る保育園 | 319

真尋と芽以の視線と壁ドン | 358

美知留と春瑚の花壇とファミレス

401

円岡燕の歩み出す一步 | 前編 |

424

円岡燕の歩み出す一步 | 中編 |

456

円岡燕の歩み出す一步 | 後編 |

485

真白透子の溜息の多い転校初日 | 532

不知火五十鈴と猫と勉強と虹と（前編）

602

不知火五十鈴と猫と勉強と虹と（後編）

629

聖櫻番長の憂鬱な早朝

不慮の事故、というものがある。

油断や思い込みが原因で起こる人災のことだ。

両者とも悪くないが、強いて挙げるなら注意が足りなかった。そういう種類の事故だ。悪気があったのならそれは事件だし、注意が足りていても起こってしまうことから、「不慮の」とはつかない。つくとしたら「不運の」だ。

その場合、果たしてどちらに責任が及ぶか。

これが意外に難しく、要因がほとんど向こうにあるにも関わらず、向こうに一方的な被害がある場合、被害がないこちらが悪いとされる場合もある。

そう、例え。

隣の家に住む幼馴染の下着姿を目撃してしまった要因が、自分の部屋のカーテンを開けただけだとしても、だ。

「……………」

幼馴染——かみじょう上条るいは顔が林檎のように真っ赤に染まり、その小さな口をあんどりと開けて固まっている。

俺はというと、突然の状況に頭が追いついていなかった——わけではなく。

ああ、またか。と、頭を抱えてた。

なにせ、これが初めてではないのだ。幼馴染の下着姿に遭遇するのは。

いや、窓越しで遭遇はこれが初めてになるけど、他の場所で似たようなシチュエーションは何度経験した事か。

それで毎度毎度この後、俺に罰というか天誅が下るであろう未来が目に見えてしまうのだ。

不慮の事故で、悪気はなかったのに天誅とは。天も理不尽なイベントを用意してくれるものである。

「……あー」

それでも俺は男で、向こうは女子。

いくら幼馴染で子供の頃は一緒の風呂に入った仲でも、きっちりしなきゃいけないと

ころはしなきやいけない。

例え天誅が避けられないものだとかわかっていても。

例え長い沈黙でその半裸を無意識の内に見続けてしまっていたとしても。

例え水色縞々の下着を見てこいつの趣味子供の頃から変わんねえな……と心の中で思っていたとしても。

「その、すまん」

「きやああああああ!!!」

置時計を投げられた。

甘んじて顔面で受けた。

「バカ」

「はい。バカでした」

「バカ。バカ。バカ」

「はい。ごめんなさい」

「今世紀最大のエロ男」

「それは違う」

今世紀始まったばっかだぞ。

痛みが引いた頭を抱えながら歩く俺。

「……なあ」

「なに？」

ギロリと睨まれた。

……まあいつまでもそっぽ向かれてるよりかはマシか。

俺とるいは朝の通学路にて縦に並んで歩いてた。

横じゃないのは、向こうが頑なに先に行こうとするから。

起き抜けにあんなことがあった手前、怒る気持ちはわかる——わけでもないが。同じ状況で見られるのが反対でも俺は気にしないし（実際逆のパターンが過去にあったが、キョドったのはるいの方だけだった）。

るいは弓道部に所属していて、俺は帰宅部。本来朝練がある弓道部と登校時間は被らないのだが、面と向かって謝りに行かないまま学校で過ごすのも嫌なので、隣家のいるを待っていた形で登校していたのだ。

それからずっと謝り通しの罵られ通し。

とはいっても、そろそろ遺恨を残さないようにしないとだ。

「言っておくけど、子供の頃はとかそういうのは効かないし聞かないから」

「文字にしないと違いがわかんねーような同音異義語を連続して使うな。流石にそんな逃げ道を通そうとは思わねーよ。でもさ、結果的に覗かれたのはお前だから俺が悪いことにしているけど、着替え中に窓もカーテンも全開にしたのは他ならぬお前だからな」

「うぐ」

「俺も不注意な点があるのは否めないけども、別に俺の部屋じゃなけりや覗けないわけじゃないから」

「うぐぐ」

「こんなこと俺にしても他の誰かにしろもう勘弁だろうしよー。俺の注意も限界はあるんだから、お前も出来得る限りの注意はしようぜ。ていうかしてください」

「う~~~~~……」

歯噛みするかのようにはるるい。

こいつのことだ。俺相手に正論吐かれての悔しさだろう。

それでも聞き分けが無い訳じゃないから、なんとか自分の感情を整理しているはず。

「……わかったわよ」

「そうか。まあ気が済まないようだったら言えよ。学校着くまでは殴られてやるから」
「しないわよー!」

そんな感じで仲直り終了。

その後しばらく雑談（ほぼ俺発信）しながら歩いていると、校門が見えてきた。

俺達が通う聖櫻学園は、俺達高等部だけでなく幼稚園から大学院まで幅広く存在している巨大な学校だ。といってもエスカレーター式でずつとここに通っていたという生徒は数少なく、俺とるいも歩いて通える程度の近所であつても学区は違ったので、高校からの外部受験になる。

個性を尊重した、自由をモットーとする校風である。部活動やその他でも優秀な成績

を収める生徒も多いものだから、メディア人気も相当なものだ。

个性的と言えばうちの理事長程个性的なものないだろうが、まあそれはまたの機会に。

「……なんだか、随分と騒がしくない？」

「……まあた誰かなんかやらかしてんのか？」

校内から聞こえてくるざわざわ音は、なにやら騒ぎを感じさせるものだった。

ふーむ。

このざわつきの大きさ。望月先輩もちつきならもつと小規模だろうし、クロエ先輩ならもうみんな慣れてる感じでスルー案件だろうし、これも除外。といっても悲鳴やは聞こえてこないから、螺子川ねしがわがなんか暴走させたとかでもないだろうし。

(果たして何の騒ぎやら……つと)

校門の陰から覗いてみた。

「挑戦だあ挑戦だあ！ 他校の空手部がうちに殴り込みをしに来たぞー！」

「でもうちの空手部にも用は無いとか言ってるぞー！」

「なんでも番長の噂を聞きつけて、向こうの部長が一对一を申し込みたいらしいー！」

「その通り！ 我々は、ただ男と男の真剣勝負を望むのみ！ 勝敗がどうなろうと構わん！ 俺は味わいたい！ 音に聞いた聖櫻学園の番長の強さを！ 力を！」

「なんだって!? 番長の鬨いが見られるのか！」

「見ろ！ 向こうの空手部、みんなガタイいいけど部長は抜きんでてるぞー！」

「馬鹿野郎！ うちの番長はもつとすごいぞ！ あんな2mありそうな巨体じゃなくても脱いだ時の筋肉やべえんだぞー！」

「お前こそ馬鹿野郎！ 番長は脱がなくてもすごいぞー！」

「いやその前に脱いだ時について詳しく！」

「「「番長！ 番長！ 番長！ 番長！ 番長！ 番長！ 番長！ 番長！ 番長！」」」」

「よし。るい、裏門から入るぞ」

「え、いいの？ 呼ばれてるみたいだけど」

「番長？ 知らない人ですね——」

「あ、兄貴！おはようございます！」

「……………」

「今日も爽やかな一日ですね。のんびりとした時間を過ごせそうです」

「そうだね。君が俺に気付かなかつたらね」

「？」

「あ！ あいつはまるわか円岡！」

「番長を兄貴と呼ぶ数少ない一人だ！」

「あれ？ あいつが兄貴と呼ぶつてことは…………」

「「「番長!!」」」

バレた。

「ぬう！ この場に居合わせておきながらこそこそと隠れるとは！ 聖櫻番長！ 噂に

聞くほどではないな！」

「うちの部長に恐れをなしたか！」

「何だどこの野郎！　うちの番長はお前達と違つて無闇矢鱈に暴力を振るわないんだよ
！」

「敵には厳しくても味方には超優しいんだぞ！」

「兄貴肌が強過ぎて後輩の女の子に間違えてお兄ちゃんと呼ばれた経験ありだぞ！」
「そう思うんなら俺を矢面に立たせるのやめてくれませんかねえ……」

俺の抗議も聞こえる筈も無く、空手部部长とやらまでの道を開けられる。

るいは……騒ぎに乗じてギャラリーに紛れながら弓道場に向かったようだ。

よし。とりあえずこれ以上騒がれる原因は無くなつたか。

また噂されるのも厄介だな。

「兄貴。これは一体？」

「一体も何も見ての通りだよ。……で？　挑戦、でしたっけ？」

「然り！　聖櫻学園には、阿修羅のように強く！　悪鬼羅刹のように冷酷！　近隣の名
声を欲しいままにする番長がいると聞いた！　それがお主だな！」

「まあ不本意ながらそう……つて待つて！ 悪鬼羅刹のように冷酷は誰だ！ 言い出したの！」

ていうか暑苦しっ！

あまり近くに寄りたくないタイプなんですけど！

「いや、いやそれは。もういいや。でも俺さつき言つてた通り、暴力は好んで振るうタイプじゃないんで、決闘とか無しにしません？」

「否！ 我が部員を引き連れてここまで来たのだ！」

そう言いながら向こうはこちらに近づき、空手の試合位置にまで間合いを詰める。

「お主の実力を見極めずには帰れぬ！」

「ここまで近付いて見極められないから言ってるんですよ。こんな時期に怪我したくないでしょう？」

「おお！ 番長が勝利宣言したぞ！」

「あんな熊みたいな人も、やっぱり番長には及ばないんだな！」

「よくわからないけど……、頑張ってください兄貴！」

「う、うちの部長を見て何を言ってるんだあいつ！」

「部長は高校空手個人戦で全国に行った男だぞ！」

「あの正拳突きで何人がゲロ吐いたと思ってるやがる！」

俺の言葉を挑発と受け取ったギャラリーが色めき立つ。

燕つばめも場の空気を読んだのか、俺から離れてギャラリーの方に混じっていた。

一方部長さんは――

「……」

さつきまでの暑苦しさが消え、静かに構えを取っていた。

半身で足を前後に大きく開き、左拳を腰に、右腕は前に出した右の太腿と水平に突き出す。重心は上半身から真下に、姿勢は低く。

空手の構えの一つ、不動の構えだ。

自信の表れだと受け取ったのか、それとも隙を一切見逃さないというつもりか、その

目つきからはただならぬ闘志が見て取れる。

まあ、それだけだが。

「……退く気はない、つてことですね」

これ見よがしに左手で掴んだ鞆を、腕を伸ばしたまま肩の高さに持ち上げた。

緊張が広がる。

賞賛と罵詈雑言が入り混じったギャラリーの声も静まり返り、これから始まることを見守るように視線が集まった。

シン、とした空気で、部長さんの大きな呼吸だけが響く。俺はいつもと変わらない呼吸。

沈黙が五秒続き、俺は鞆を手放し。

落ちて。

落ちて。

落ちて。

地面に音を立てて落ちた。

それが合図になった。

「——破ッ！」

間合いが詰まる。

不動の構えは、その名の通り動きをつけずに重心を固め、固めた下半身から拳を繰り出す、いわば固定砲台だ。姿勢がブレない分、軽快な動きを持たないため、基本的に後手の構えとなる。

が、あくまで基本的に。

足に力を溜めて、力強いスタートダッシュを切るためにこの構えを取る場合もある。突進する巨体から繰り出される、右腕の腕頭打ち。

左手で止めた。

「っ！」

右腕を出す前の肘を抑えられ、ビクともしないことを悟った部長さんは、すぐさまその腕を引く。

返す刀で撃ち出される左中段突き。

右手で外に流す。

しかし流された勢いそのままに、右回し蹴りを仕掛けてきた。狙いは俺の左上腕。しやがんで避ける。

普通なら、ここで体勢を崩して転倒。そこを押さえにかかって決着。

そういきたいところだったが、ここで部長さんが意地を見せた。

「う、おお!!」

流され、躲され、右によろけた姿勢を、強引に戻したのだ。

左足の踏ん張り。

急激な体重移動。

脚から腹筋までにかかる強大な負荷。

それら全てを乗り越え、振り切った右足を元の位置へと。

重心も再び縦一直線の物に変わった。

「墳ッ!!」

大上段から打ち下ろされる左の一撃。

ほとんど垂直に落下するそれは、瓦割りと何ら遜色なく、相対した者の頭蓋を叩き割らんとする拳だった。

最早、相手の気を遣う余裕さえ無いのだろう。

その拳は一切の躊躇もなく、真つ直ぐ俺へと向かっていた。
が、空を切った。

「っ!？」

ボクシングではスウエイと呼ばれるそれだが、空手家である部長さんには経験したことの無い躲し方だろう。

そうでなくても、しやがみながらのスウエイ。

完璧に決まったと思っただであらう一撃が想定外の動きによつて躲され、その巨体が硬直した。

わざわざそのデカい体を曲げて、頭を下げたのだ。

それが決まり手だった。

スウェイで後ろに下がった足を止め、全身を跳ね上げて――

「そら」

その顔面目掛け――

「ぶっ飛べ」

地面スレスレから舞い上がる、右の一撃を撃ち込んだ。

砲丸が激突したような音が響く。

巨体は宙を舞い、二転三転。

俺の斜め上で縦回転をして、地面に重い音を立てて落ちる。

「「……………」」

静まり返るギャラリ。

背中から落ちた部長さん（頭からは落ちてないから大丈夫。多分）の足が、一拍遅れて地面に落ち、俺の体勢も普通の立ち方へ戻る。

落とした鞆を拾った数秒で、急に湧き上がった。

「す、スゲーー!! あの、あの巨体が回ったぞ!!」

「今何秒で決まったんだ!? 俺の体感だと二、三秒なんだけどー!」

「部長がー! 部長がやられたぞー! は、早く手当てを!!」

「気絶してる! ね、念のため救急車を!」

「すごい! やっぱり番長は最強の漢だよ!」

「番長の一撃、5 mは離れてるこっちまでビリビリ来たぜ!」

「これで無敗伝説が更に更新されたぞ! 番長に勝てる生物なんて存在するのか!」

「見たか!? これが聖櫻学園の守護神! しんじょうかざや 新城一也番長だぜ!!」

「兄貴ー! 今日も最高でしたー!」

沸き立つうちの生徒と、部長さんに群がる部員達。

その中心で、俺はひっそりと溜息をついた。

(乗り込んできた全国選手を返り討ち。また噂にされんだろうなあ……)

別に目立ちわけじゃないのになあ。

聖櫻番長の紹介したりされたりな朝

『私達、高校ではあんまり近づかないようにしない？』

もう一年前になるだろうか。

高校に入学する前に、突然るいがそう言いだした。

小さい頃から大概一緒にいた幼馴染で、男女の垣根無く、変わらず友達としてやってきた。

周りからは夫婦だとか嫁さんだとか噂されたこともあるが、特別気にしたりはしていなかった。

気にしてはいなかった、が。

向こうもそうではなかったらしい。

幼馴染と言えど、男と女。気にする如何は違うところもあるのだと考え、その提案を受けた。

るいは少しだけ寂しそうな顔を見せたけれど、だからと言ってやっぱ無しということにはならなかった。

友達と距離を置くのは辛いものがあるのは、俺も同じだったけれど。それでも、いつまでも勝手に噂されると、ずっと気にしたままだろうからと。

「それが今度はこんな噂が出来るとはなあ……」

「? どうかした?」

「いや、なんでも」

朝の騒ぎの後、その場に居合わせた保健委員の佐伯さえきによって、俺は保健室へと連行(問題ないって言ったのに)されていた。

2 m 超え、重さも7・80キロはありそうな大男をぶっ飛ばしたのだから、拳が怪我してないかと心配だったそう。

ちなみに向こうの部長さんは部員達によって運ばれたので、佐伯が声を掛ける暇もなかった。

「……やっぱり、あれだけやって右手、それに他も怪我は全然だね」

「だから言っただろ? 大体殴ったのは特別骨が硬いとかでもない顔だぞ。向こうの攻めだっけきつちりノーダメージにしたし」

「それでも心配なの。本当なら、ボクサーみたいにグローブを着けたりしても、殴ったりなんかしたら手は痛むものなんだから」

とりあえずテーピングはしておくね、と言って、佐伯は保健室の棚からテープを取りに行く。

全く。心配性な奴め。

「そういや、神崎先生かんざきは？ 空いてたってことは、学校には来てるんだろ？」

「ああ、先生なら——」

「呼んだあゝゝゝ……？」

シャー、と開いていくベッドのカーテン。

「……何故保健の先生がベッドに横たわっているのか」

「あはは……」

「ごめんなさいねえ。昨日ちよつと飲み過ぎたのかしら……」

「二日酔いかよ！」

それで学校のベッドで寝てんのかよ！

ほんつと美人なくせに酒には弱いな！

あれ？ 関係ない？

「ごめん。頭に響くから、音量は下げて……」

「はあ。でも、酒飲むのも程々にしてくださいよ？ うちの親父とかは肝臓が怪物ですから、どんだけ飲んでも明日には平気な面して仕事に行ってますけど」

「流石にあの人は参考にならないでしょ……。えっと、テープはどこにあったつけ？」

「あ……。一番左下の棚の奥の方にあると思いますよ」

「左下ですか？ えっと……。あ、あったあった」

「おお。保健委員より保健室の設備に詳しいとは」

「ここにいる時間は長いので。自然と、ですね」

「そうねえ……。置き場所に関しては、私より詳しくあったりするわ」

「保健の先生よかって、正岡先輩通い詰め過ぎでは……って正岡先輩い!？」

「わ」

「ちよ、音量……」

「あ、すいません」

神崎先生の隣のベッドカーテンを開ける。

正岡先輩が寝そべっておられた。

「ちよつと！ 何でこんな朝っぱらからもういるんですか！ まだ部活も朝練始めたばつかですよ！」

「い、いえ……。今日の朝は気分よく目覚められたので、そのまま登校したのですけれど、学校に着いてから気分が優れなくなってしまつて……」

「先輩の家つて歩いて三十分かそこらでしたよねえ!? 三十分で急降下するんですかあなたの体調は!？」

リアクションはそう見えないだろうが、今はヒソヒソ音量である。

「ご、ごめんなさい。心配しなくても、今は体調は良い方ですから……」

「その台詞もう何回目ですか……。とりあえず何か元気が出るようなものを口にした方がいいですよ。うちの購買限定の元気炭酸なりがんばるんバーなり」

「わかりました。……ふふ。新城くんの元気を分けてもらえたら、私ももう少しちゃんと学校に通えたかもしれませんね」

「分けるっつーか、もう足して二で割ったらちようどいい感じになるんじゃないですかね？」

「それはどうだろう。二人共鈴河さんすずかわぐらい元氣有り余ってそう……」

佐伯がこちらに戻ってきた。

果たしてあれは有り余ってると言えるのだろうか。

思いつきり遊んで思いつきり昼寝するイメージだが。

「さ。テーピングするから右手出して」

「はいはい」と

「成程。やはり一撃だったんですね」

「ウイ。お相手のブチョーサンはそれはそれは大きな方でシタガ、一也サンはドカンと

一発。勝負は一周でシタ」

「一瞬で終わったんですか。まあ、前馬評は覆らなかつたってことですかね」

「そうデス一瞬デス！ 間違えてしまいマシタ」

(ん?)

保健室でテーピングを巻かれ終え、教室に向かっていると、階段の昇降口の方から声が聞こえてきた。

この声は……南條なんじょうとクロエ先輩か。

内容から察するに、さっきの騒ぎを見てなかつた南條が、見たたクロエ先輩に話を聞いてるつてところか。

うーむ。

南條に捕まるのは面倒だが、かといつて階段を遠回りするのも面倒だしなあ。上の窓が開いてなかつたら飛び移れもしないだろうし。

クロエ先輩の証言も無駄に増長しそうだし、ここは引き上げさせる方向で行くか。廊下から顔を出す。

「おーい、お二人さん——」

海軍司令官みたいな恰好をしたクロエ先輩と、その前でメモを取る南條がいた。

「Oh! 一也サン! オハヨウゴザイマス!」

「お。噂をすればなんとやら。新城くん、ちよつと話聞かせてもらっていいかい?」
「クロエ先輩」

無視してクロエ先輩を問い質す。

「なんですかその恰好は?」

「艦長! デスヨー!」

「へー」

何の恰好かって聞いたんじゃないんだよなあ。

何でそんな格好してるのかって聞いたんだよなあ。

「ああ。これのこと？ いや私も気になってたんだけど、それより先にする話があったからさー」

「なんで目の前のこれよか俺の騒ぎの方が優先度上なんだよ。それでどうしたんですか？ それを」

「よくぞ聞いてくださいマシター！」

ズビシツと、その細長い指をドアップまで突きつけるクロエ先輩。

「アレハ、とあるアニメを見ていたことデシタ」

「ほほう。アニメ」

「ハイ。その中で、ある女の子が着ぐるみを着ながら語っていたのデス。

『ウサギの気持ちになるでござーますよ！』と。

ワタシは教えられますシター！ コスプレをすれば、そのコスプレの人に近付けると

！」

「あなた小学生アイドルに教わる立場なんですか？」

よ。確かにあの子のいい子っぷりは見習うところがあるけど、とんだ的外れでござえますよ。

「ワタシは一也サンの気持ちを知り、その強さや火の起こしなどを学びたいと常々思っています」

「ライター使えよ」

「そこで！一也サンの代名詞である『艦長』のコスプレをすることで、一也サンの気持ちを知る！それが狙いだっただのデス！」

「うん。俺『番長』だからその恰好じゃ知れないですね」

「Oh！また間違えてしまいマシタ！」

「ついでに言うとなんか『艦長』っていうより『提督』って感じですね」

「ムムム……。ワタシの『未元物質（ダークマター）』に、常識は通用しないのデスヨ！」

「それは垣根提督」

冷蔵庫に備え付けられた第二位の話はしていない。

「またも間違えてしまいマシタ……。ワタシ、こつてりさんデス」

「豚骨スープじゃないんですから。しかも何でよりマニアックな方にズレる……」

ほんつと、この人はほんとにもう……。

天然なのはわかってるんだけど、ツツコミ疲れるわ。こんなん。

「しかし、美知留^{みちる}サンとも相談したので、間違つてないと思つていたのデスガ……」

「あんのトムトムミツチー……」

間違いに気付いていながら、クロエ先輩に提督コスプレをさせたいがために黙つてやがったな。

しかもまたレベル高く作り込んできやがってるし。

戦闘艦が擬人化したアレの提督がイメージの元なのだろうが、やたらと装飾が派手だった。

あの提督はほとんど白一色が一般的だが、目の前の提督は勲章バッジや肩に掛けた防寒着、襷や腕章を付けていらっしやる。

しかし腰から下は完全に女性用で、白いミニスカと黒いハイソックスの境目にある絶対領域から、乳白色の太腿が覗き――

じゃなくて。

「とにかくその恰好じゃ無駄に叱られるだけですから、着替えてください。ちやつちやと」

「そうデスネ……。一也サンの気持ちになるには、勉強が足りませんデシタ。出直します……」

そもそも俺の気持ちになったところで強さを学べるわけでもないんだが……。

「んじや、俺もそろそろ行くわ……って。南條、電話か？」

「あ、うん。ちよつとね。……はい、新城くんなら目の前にいますよ」

「……ん？」

何やら嫌な予感。

「はい、わかりました。代わりますね。……はい、新城くん」

差し出される携帯電話。

画面に浮かぶ通話中の文字。

その下には、『部長』という名前欄。

「……………」

正直物凄く受け取りたくないが、ここで無視すれば後でお怒りを買うのが目に見えていた。

南條から携帯を受け取り、耳に当てる。

「もしもし。新城一也です」

『新城くんね。今すぐ新聞部の部室にいらつしやい』

「来たわね」

所変わって新聞部。

入り口と対面にあるやたらクッション性の高そうな椅子に、につこり笑った神楽坂先輩が鎮座していた。

腕を組んでは……いないか。笑顔にも気迫は感じないし、本当にただ笑顔で迎えてくれただけらしい。

「聞いたわよ。他校の空手部部长が挑戦に来たんですってね」

やはりその件か。

「俺視点の話を知りたいって言うなら、あんまり効果無いでしょうね。周りが見てたこととで全部でしょうし」

『聖櫻学園番長、高校空手個人戦全国大会出場者を一撃で撃退』。まあ、あなたを知らな

い人からしてみれば、耳を疑う内容でしょうね」

私の新聞読者に、あなたを知らない人はいないでしょうけど。と付け加えられる。

「ああ、それと。私への情報提供は『まどか』くんがしてくれたわ。自分から進んでね」

「まーたあいつか……」

「いいことじゃない。あなたに有名になってほしいって思いの表れよ?」

「本人の意思が介在してないのが問題なんですよ」

「私達としても、あなたは有名でないと困るもの。聖櫻学園の平和の象徴さん?」

「……別に活動時間に制限があったりはしないんですけれど」

「オールマイトみたいにしおれてもらっても困るわ」

「ネタ伝わるんだ……」

てつきり読んでもマガジン辺りだと思っていたが、素直に驚きだ。

平和の象徴、ねえ。

何時からそんな仰々しい呼び名がついたんだっけか。

事の始まりは覚えてるんだが。

「もう一年も前になるかしら」

手元に広げてあつた資料に目を通しながら、神楽坂先輩は物思いに耽る。

「聖櫻学園の生徒は色々優秀な子が多くて、メディア露出も多かった。けど、模範的な生徒が多かつた分、他校の不良生徒や不審者に目をつけられて、学園側も問題に対して手が付けられない状況にあつた。おかげで、暴行を受ける生徒。無理矢理学園に侵入してくる闖入者が後を絶たなかつたわ」

「……」

「でも、そんなときあなたが入学してきた」

「……」

何故急にそんな過去話を引っ張ってくるのだろうか。

俺の黒歴史を穿り返して楽し——んでそうだな、この人なら。

「入学初日から、だったそうね？ まどかくん、円岡燕くんが最初にあなたに助けられた

被害者だった、と」

そうそう。

るいとの高校における接点が無くなり、それとは別に中学ではとある事情で直帰だった俺が、高校入学した日に学園近くの商店街の方へ寄り道したんだよな。

そこで燕がチンピラにカツアゲされそうになっている場面に出くわした。

殴られ蹴られ、怪我した燕を放つてはおけなかったが、別に一悶着起こそうという気も無かったから、燕だけ早々に病院に連れて行こうとしたんだが、向こうのチンピラ（三人）の沸点があまりにも低かった。

出くわしただけでメンチを切ってきたし、穩便に燕を連れて行こうとしたら、殴りかかってきた。

結局救急車を三台呼ぶハメになり、燕はそれから俺を「兄貴」と呼び慕ってくるようになった。

「その加害者はその商店街の不良グループの一員で、恨みを買ったあなたに対して、後になって仲間を多く引き連れてきた。後日、近くの廢ビルで五十人余りの不良が倒れていたのが発見され、あなたは素知らぬ顔で登校してきてた」

「以来あそこはなんか名所認定されましたね」

「その話が知れ渡って、この辺り一帯の不良グループが時には競争、時には結託しながら、あなたの首を取らんという噂が立った。けれど、その噂は各校の問題児達がある日、川を埋め尽くさんばかりの人数で流されているのが発見されて、急速に収縮されていったわ」

「そういうや新聞沙汰にもなりましたっけ」

「生徒を攫おうとする不審者が何人も出てきて、警備員も手を焼いてたこともあった。気付いたら校門の前で全員ポロ雑巾のように打ち捨てられていたけど」

「あれは気持ち悪かったなあ……。なんか金ぴかの奴等がいましたもん」

「他にも、ある生徒の家庭が不法な借金取りに追われていれば、逆に借金取りから大金を、それも法には一切触れない方法で筆取り」

「筆り取るとは失礼な。ちゃんと借りただけですよ。返す相手がいなくなったただけで」

「ある生徒の営業する店がヤクザに目をつけられていれば、そのヤクザ団体はお店に後日謝礼金を払って街から出払い」

「あいつら、人の食事中に営業妨害しやがるし、周りの奴等もビビらすしで最悪でしたね」

「銃器を所持したテロリストグループと喫茶店でドンパチ起こして、被害者0、本人も無

傷で勝利」

「それは俺単独ではないんですが……」

「エトセトラエトセトラ……。そうして一年も経つ頃には、我が校とその近隣で知らぬ者はいないと言われる程の有名人。この辺りじゃ、『聖櫻学園の生徒に手を出せば、必ず番長が現れ、裏表関係なく暴虐の嵐に包まれる』なんて噂まで立ってるくらいだよ。それだけやっていて、本人の素行自体は至って良好な生徒なんだから、嘘みたいな話よね」
「嘘であつて欲しかったのは俺の方ですけどね……」

「というか、思い返してみてもトラブル起こり過ぎだろ、この学校。」

「ほとんどが放っておけないから自分で首突っ込んだ案件とはいえ。」

「まあそんなわけで、あなたが有名である内は抑止力として働いて、悪人達は沈静化して、うちは至って平和。新聞部もネタが尽きない。万々歳でしょう?」

「俺の得が無いんですがそれは」

「有名税よ。恨むなら自分のお人好しを恨むことね」

「さてと。と言って、神楽坂先輩はボイスレコーダーとメモ帳を取り出す。」

……うん？

「あの、俺朝の騒ぎに関してはギャラリー達ので全部だつて言った筈ですけど……？」
「そうね。朝の騒ぎに関しては」

先輩はにつこり笑う。
今度は気迫込みで。

「あなたに対する質問のリクエストが多くて、次の記事ではそれを組もうかと思ってるの。もちろん、協力してくれるわね？」
「……」

この後滅茶苦茶取材された。

「はあ……」

結局解放されたのはHR前。俺は自分のクラスへと続く廊下を歩いていた。

割とプライベートなことまで言わされるし、口を噤もうとしたら重圧が襲い掛かるし、だから来たくなかったんだ。

しかも、最後に憎めない発言残していくしぎ。

『ああそれと、別に気張ることはないわよ。あなたから何かしようとしなくてもどうぞせ何かは起こるだろうし、あなたがいるだけで私達は何も心配することがないもの』

(ほんつと、ずるいよなー。ああいう人は)

あれだけでそれなりのことは笑って許してしまうようになる俺も大概だが。

まあ、感謝することが無い訳ではないのだ。

元々の噂を広めたのも神楽坂先輩の働きが大きいのだが、それが悪しように誤解を生まず、拳を振るおうとそれが正当なものだったと正しく伝わっていたのも、神楽坂先輩の働きが大きいのである。

お陰で俺はヒーロー扱いでどこにいても自称舎弟だらけだが、居場所が無くなって

しまうよりは断然マシだった。

(不審者も激減して、不良グループも活動してるといふ話は無し。実に平和なもんだ)

朝みたいな挑戦者が週を挟まずに来たりするけど、昔に比べたらな。

クラスの教室の扉を開けた。

「番長！ お勤めご苦労様です！」

「聞きましたよ！ 熊みたいな男を相手に完封勝利したんですってね！」

「この前はバスジャックを制圧したって本当ですか!?!」

「いや、俺は銀行強盗をその場で武力制圧したって聞いたぞ！」

「他校の空手部部长さんと激しく突き合ったそうですね!?! 詳しくお聞かせください!!」

「色々言いたいけど、とりあえずお前の眼鏡破壊して良い？」

「ノー！ ノー！ ノー！ ノー!!」

フレームを引つ掴んでやると、掛井かけいはバタバタと抵抗しだす。全く、この腐女子め。

妄想は結構だが、俺を題材にするのは不愉快だからやめろと何度言えばわかる。

「はいはい、じゃれつくのもそこまで。みんなー、席に座ってー！ HR始まるわよー！」

間に委員長の八束やつかが割って入り、破壊活動は中断された。

そのままパンパン、と手を叩いて、盛り上がりつつある男子連中に着席を促した。

いそいそと席に戻っていく男子達。

委員長の言う事はちゃんと聞くよなお前等……。

「ほら、新城くんも」

「おう。毎度毎度騒がしくて大変だな」

「誰が原因だと思ってるの……。聞いたわよ？ 今日の朝もなんですってね」

「またその話か」

「……まあ、君の事だから悪いことはしてないんですけど、フォローするこつちも大

変なんだから」

「頭が上がりませぬー」

「もういいから、座って座って」

「ほいほいっと」

かくいう俺も素直に席へと座る。

と、前の席がこちらを向いてきた。

「やーやーカズ君。今日も大活躍だったそうだねー?」

「ようトムトムミツチー。お前クロエ先輩のあれはなんだよ」

「あー。もう着てきたんだ。いやね? クロエ先輩に合うサイズのコスプレを制作してまして、完成していざ行かん! って時に、クロエ先輩が相談ーってしてきたのだよ」

「つまり?」

「タイムリーだったってこと」

「……はあ」

「で? どうだった?」

「どうだったも何も、いつも通りレベルの高いコスプレでしたよ。本人はまるで意図を

理解してなかったけどね」

「あははー、そつかそつか」

「あはは。クロエ先輩なら私も見かけたけど、なんかしょんぼりしてたね」

横の席の櫻井さくらいが話しかけてくる。

「そりや、勘違いに気付いていそいそと着替えに行つてたからだろ」

「クリスマスプレゼントを待つ子供に、サンタはいないと残酷な真実を突きつけるかのような所業……！ 鬼！ 悪魔！ ちひろ！」

「元々はテメエの仕業だろうが」

いけしやあしやあとボケる戸村とむら。

「そうそう。今回空手部の部長さんがやってきたんだってね？ あーあ。ポニーテールがピッタリ合つてたら、そっちの実況に来られたかもしれないのにい」

「来られたところで始まる前と終わった後しか実況出来なかつたらうぜ。なんせものの数秒で終わつちまつたし」

「そ、そこはほら！ 新城君が場を盛り上げるために、相手の攻撃を躲し続けるとか！」
「はいそこー。HR 始めますよー」

担任の久保田先生くぼたが号令して、その話は終わった。
俺、新城一也の一日は、こうして始まる。

聖櫻番長が死にかける昼時

「つまり、サラダ記念日というのは恋人との小さな幸せを思い出の日としたことが始まりで……」

(そろそろ時間か)

聖櫻学園では、校舎は三つに分けられる。

生徒が教室として扱う教室棟、職員室や保健室などの特殊教室を扱う職員棟、各部活が部室として使用する部活棟だ。部活棟といっても全ての教室がそうというわけではなく、特殊教室を扱う棟に収まりきらなかつた特殊教室があったり、空き教室や倉庫として扱われてる部屋もあつたりするが、まあそれは些細なことだ。

これに図書館、体育館、食堂、各運動部が扱うグラウンドやコート。そして体育倉庫などを含めて、高等部の全容になる。

近くに初等部や中等部などの校舎がまた別に存在してはいるが、互いに干渉することは滅多にない。

これだけ大規模な学校になるまでにどれだけの費用がかかったか想像もできないが、

つまり俺が言いたいことは何かというところだ。

食堂棟の二階にある購買に行くまでは、一度この教室棟から出なければならぬというところだ。

「……あ、そろそろ終了のチャイムが鳴る頃ですね」

四限の授業、国語を担当する橘響子先生（たちはなきょうじ）（見た目はうちの生徒と大差ないが、先生である）が黒板に向かっていた体を、クラスの方へ向き直す。

クラスの席は最初こそ名簿順で並ぶが、今はくじ引き席替えの影響でバラバラにバラけていた。

俺は教室を上から見て一番左下、つまり窓側一番奥のスペースを確保。右横の席に櫻井（昼の放送でのネタをまとめた）、前の席に戸村（コスプレのデザインをノートに描いていた）、斜め右前に姫島（ひめじま）（一狩りしてた）という位置になっている。

時計の針がもうすぐ昼のチャイムが鳴るのを指し示すのを見ながら、俺はすぐそこにある窓を静かに開けた。

クラス大半の意識がこちらに集中するのがわかる。

俺が授業終了直前でこういった動作をするのは、ある前触れだとわかっているから

だ。委員長や霧生^{きりゆう}辺りは「またか……」という感じで俺を見ていたが、引き止めようとするのは、まあ慣れたからだろう。

「それではこれで、授業を終わりにしたいと思います。わからないことがあれば、先生に質問しに来てくださいね」

秒針が11を指す。

5。4。3。

2。

1。

窓枠を掴む。

「では、きりーつてあああああ!!」

飛び出した。

掴んだ左腕で全身を引っ張り上げ、腰を直角に折り、俺の全身ほどには及ばない大きさの窓から外へと。いわば窓枠で手をつく爆転のような姿勢で外へと身を投げ出す。

窓枠を基点に270度回転。

校舎の壁を蹴って、飛ぶ。

すぐ斜め下の位置にちょうどいい高さで太さの木があり、横に伸びた幹を両手で掴む。

勢いをそのまま、今度は幹を基点に一回転した。

戻ってきたところから更に勢いをつけ、手を放して斜め上へと飛び立つ。

身体を畳んで縦回転しながら最高点へと達し、そこから自由落下する俺。

前述した通り、俺達二年生の階数は三階だ。そこから飛び出したならば、足からならば骨折、頭から落ちれば命さえ危ういとされている。

関係ないが。

「ほっ」

足から着地。

衝撃を最小限に抑える五点着地というものも出来はするが、今回は地面から足に伝わった衝撃を全身で流し、また足から地面へと返した。

中国武術で伝わる発勁の応用だ。

「せめて号令が終わってからにしなさい!!」

三階の窓から飛び出した生徒への注意がそれでいいのだろうか。

『え、心実ちゃん？ 授業終わったらすぐ出て行っちゃったけど』

（つて相樂は言ってたけど）

用事を済ませてすぐにB組に行ってみたはいいのだが、生憎椎名は不在。
心当たりを探ってみようかと中庭に来てみたところで。

「はあ……」

（もう見つけた）

三つの校舎に囲まれた中庭の中心に聳え立つ大木、その下にあるベンチに座ってい

た。

しょんぼりとした様子で。

椎名心実と言え、この学園で知らない奴はいないだろう。

俺が聖櫻学園男子の顔役だとすれば、椎名は聖櫻学園女子の顔役。

部活動として優秀な成績を収める聖櫻学園の中でも、現世代で最たる成績を獲得している新体操部期待のホープである。

勉強にも秀でている上に、その美貌から毎年秋に開催されるミスコンでも上位に位置する、非の打ちどころがない美少女。それが椎名心実だ。

とまあ、テンプレの紹介を並べたところで。

「よ、椎名」

後ろから声を掛けた。

「はい？ ふんやん？」

振り返った拍子に突き出してた人差し指が頬に埋もれ、妙な擬音が椎名の口から零れ

た。

おお。やっぱ柔らかいな。

余分な脂肪がついてるわけでもないのに、俺の頬とはダンチだ。

「なーに背中丸めてんだよ。蟻でも愛でてんのか？」

「し、新城さんでしたか。いえ、そういうわけでは」

後ろから現れた俺から距離を離すように、椎名はパツとベンチの端の方に飛び移る。俺がつついた方の頬をさすりながら続ける。

「大したことでは無いんですけど、少しだけ落ち込むことがあります……」

「ふーん」

なにも拭かんでもいいだろ。

「購買で、三日間限定販売の『ふわふわかめさんメロンパン』ってありましたよね？」

「あの原寸大サイズのだろ？」

「そうなんです！ 亀さんは元々好きなんですけど、前にあった『ふわふわメロンパン』のデザインが亀さんになるんですよ！ 甲羅の色遣いが本物そっくりなんです！」

「うんうん」

語る言葉に熱が籠ってきた。

非の打ちどころのない美少女、ではあるんだが。

椎名はちよつと変わった感性の持ち主だった。

亀って、デフォルメされたのとかだと確かにぬいぐるみ的な可愛い部類に入るんだろ
うけど、リアルって凄い爬虫類してるよな。

うちの学校単位で考えたらたかが好きな動物くらいなんだが、こればかりは語りに
共感を覚えられない。

「ポスターで事前告知をされていたのを見て、これは是非買わないと！ ……と、思っ
たのですけれど」

「買えなかった、と」

「はい……。授業が終わって急いで購買に向かったのですが、ちょうど私の前の人で売
り切れてしまいました……」

「ギリギリ終わっちゃったのか……」

「頑張ってはみましたが、人気の品ってすぐに売り切れてしまうんですね……」

その人気は大半ふわふわメロンパンの味の方に集中しているんだろうが、まあそれは言わないでおこう。

別に嫌味を言いたくて探してたわけじゃないのだ。

「デザインの要望アンケートを投稿して選ばれたのもあってすごく嬉しかったのですが、こんなことが起きてしまうなんて思ってもみませんでした」

「お前考案かよ」

「それで落ち込んでいたのと、お昼をどうしようかと悩んでいたところ……」

「そうかい。ところで椎名。お前のデザインって忠実に再現されたのか、これ？」

「あ、はい。確かにこんな風になってええ!？」

超驚かれた。

「ど、どうして?!? どうして『ふわふわかめさんメロンパン』が……に?!? 私は夢でも見

ているんでしょっか!？」

「夢に見るほどこいつを楽しみにしてたのか……」

そこまでいくとちよつとついてけないんだけど。

そう。俺が授業終了直後に三階から飛び降りまでして購買に最短距離で向かったのは、これを買うためだったのだ。

別に廊下から普通に購買に向かっても他の誰より早く着く自信はあったが、途中で教頭先生に遭遇して廊下を走るなどお説教を受ければ話は別だ。万難を排して俺だけのルートを取ったというわけだ。

その甲斐あって、購買ががらんどろの内に見事かめパン（フルネーム無駄に長い）をゲットしたのである。

「そ、そういえば新城さんが飛び降りしたと窓際の人が言ってたような……。新城さんも全力で最短距離を選ぶほど『ふわふわかめさんメロンパン』を狙っていたんですね……」

「いや、お前にやるために買ってきたんだが」

「でも新城さんがそんなにも頑張ってくれた上で食べてくださるなら、きつと亀さんも

本望でしょうってええ!? 私のためにですか!?

「いちいち遅エなお前!!」

反応まで亀さんか!

「で、でもでも! セツかく新城さんがちゃんと自分の手で買った物なのに……!」

「お前のためつつつたる。遠慮しないで受け取れ受け取れ」

「あ、うう」

押し付けるように手渡し、椎名は恐る恐る受け取る。

ここのう時このいつはちよい強引にいった方が話が手早く進む。

「でも、その……あ、そうです。お金は」

「いらん」

「そんな! せめて代金ぐらい、いえ! 限定だったのですから倍額は」

「その代わりと言っちゃなんだが」

「え?」

「……宿題、手伝ってくんね？」

「え？」

驚き仰天、といった様子。

……まあパンの代わりが宿題とか、訳わからんよな。

「明日提出の課題が溜まってんだが、全然手え付けてなくてなー。問題も解き方とか教科書見直してもわからんし。かといって今回の宿題は小テストに出るって言うし」

「あ、明日まで、ですか？」

「ああ。んで、椎名に教えてもらえれば、宿題はなんとか終わるし、小テストもいい線いけるかもなーって思ってた話を持ち掛けたんだが」

「あの……でもそれでしたら、私じゃなくても上条さんなどにお問い合わせすれば」

「上条は……ちよつとな。頼めば引き受けてくれるだろうけど、今は後ろめたいところあるし」

「？」

ちなみに俺とるいの幼馴染関係は二年に進級して間もなく明らかになったが、未だ学

校では苗字呼びだったりする。

一年それで通してきたので慣れてしまったというのもあるが、本人が関係がバレたからといって呼び方まで変えると意識してると思われると言うので、それに従っているのだ。

そうやって徹底している方が意識してるんじゃないかと思われるのではと思いましたが、慣れてる方が気兼ねしないで済むと判断したので言わないでおいた。

「それに、椎名の教え方は分かりやすいからな」

「……そう言っただけなのは、とても嬉しいですけれど」

「いやこれマジな話な。正直先生よかスツと入ってくる時もあつたし」

宿題が溜まってることといい小テストにピンチを覚えてることといいで察せられるだろうが、俺は正直頭の出来が悪い。

特定分野に関しては、駄弁ってる時になんでそんなの知ってるのって目で見られることがしばしばあるが、言ってしまうえばマイナー分野。学校の勉強にはまるで役に立たない。加えて授業には意欲を持って取り組んでもとも言えない。先生に指されたらちゃんと応えるし、問題を解く時間ならばちゃんと解こうとするが、それだけだ。

予習復習を普段からやっているなど、俺からしたら尊敬に値する。

「……………わかりました」

椎名は少し考える素振りをしたが、やがてそう言つて微笑んでくれた。

「今日は新体操の練習もありませんし、私でよければお教えしますね」

「サンキュ。あ、そうそう」

「はい？ どうかしましたか？」

「相楽と佐伯が、お前に会つたら屋上に来てつて伝えてほしいつてよ。何回かLINEで送信したけど既読つかないからとかなんとか」

「相楽さんと佐伯さんが、ですか？ ……あ、本当でした」

スマホを取り出して画面の通知を確認する椎名。

ちらつと見えちまったが、通知の数『30』つて無かつたか…………？

こんだけ催促するものかどうかと思うが、こんだけ鳴つてて通知に気付かない方もどうなんだろう。どんだけかめパンに意識を注いでたんだ？

「昼飯一緒に食べたいからだとき。んじゃ、また」
「あ、あの！」

ん？ と背を向けようとした身体を止める。

「どした？ 宿題ならまた放課後に連絡しようかと思つてたけど」

「それはわかりましたけれど、そうじゃなくて……。良ければ、お昼一緒にしませんか？」

「え？ 俺？」

「他に誰もいませんよ？」

いや、それは分かつてるけど。

ちよつと驚きだ。てつきり仲良し三人組でキャツキヤウフフしてくる流れだと思つてたが。

「まあ向こうも嫌とは言わんだろうし、おつけおつけ。じゃ、屋上行くか」

「え？ 理由、聞かないんですか？」

「いちいち聞かんでもいいだろ。それよか結構時間食っちゃったし、早く行こうぜ」

「は、はい！ 『ふわふわかめさんメロンパン』の御恩に報いるためにも、しっかり栄養補給しないとイケませんよね」

「……………」

「？ どうかしましたか？」

「いや……………」

別に引き受けてくれなくてもかめパンはくれてやるつもりだったんだけどな。

だって、さあ？

あんな熱心にポスターを見つめてる姿を見たら、ねえ。

屋上に来るとジャグリングによるパフォーマンスが行われていた。

……………いや、間違っではない。

待ち合わせの片割れである相楽エミが、ボール10個を宙に放っては受け取り、宙に

放つては受け取りを繰り返していたのだ。ボール群が描く放物線が繋がって見えるように、なるべく綺麗に同じ放物線を辿っていくようにボールの軌道を調整していた。観客役なのか、正面で佐伯が女の子座りしている。

「あ！ 来たね心実ちゃん！ それに新城くんもってわわわあ!!」

軌道が途端に崩れて、いくつかのボールが相楽に降り注ぐ。

俺達の姿を見つけて集中が途切れたようだ。

ボールは頭でぼてんと跳ね、既に先客がいる手でボール同士がぶつかり、上着ポケットにも一個侵入し。

そして。

胸の谷間に乗った。

「……………」

「ああ、相楽さん。手元から目を離しては駄目と言ったのに。……？ 新城さん、顔が赤

いですよ。」

「いめん。ほっといて」

「はあ……?」

そういえば最近たわわチャレンジなるものが流行っているそうですね。

スマホを女の子の胸、つまりおっぱいに乗せる挑戦。乗せられるのはかなり巨乳でないとは不可能だと言われているそうだが。

でもあれって、スマホはそつと置出し、基本寄せ上げて固定するよね?

落下してきた物、しかもスマホよりずっと不安定なボールが、固定するものが服しかないのに、乗るってさ……。乗るってさ……。

「心実ちゃんは呼んでたけど、新城くんも来たんだ?」

慌ててボールを拾いにかかる相楽（しやがんでも落ちない）と一緒にボールを拾う佐伯。

「私がお誘いしたのですけど、ごめんなさい。断りなく呼んでしまつて」

「いいよいいよ。むしろ、新城くんが空いてたことが意外。待ち合わせか何かが昼休みのすぐにあるから、あんなに急いで購買行つてたのかと」

「そんな急ぎの待ち合わせなら朝の時点で買っとるわ……」

「それは、新城さんが『ふわふわかめさんメロンパン』を買うためだったんです。限定販売でしたので」

「あ、成程あれか。もしかして、心実ちゃんにあげるため？」

「……まあな」

「ふーん……」

そう言われるとちよつと照れくさい。

お人好しは自覚しているが、他人に言われてもなんともない程冷めきつてるわけでもないのだ。『ほんと、君っていい人だね』とでも言いたげな佐伯の視線から顔を逸らす。

佐伯はボールを拾い終えて相楽に手渡すと、椎名の隣に歩み寄って耳打ちするように言った。

「良かったね、心実ちゃん」

「——っ！ さ、佐伯さんっ」

「聞こえてんぞー」

「はっ！　だ、だめ！　新城さんは聞いちやだめです！」

椎名、真つ赤になってぶんぶん。

「まったく、何を照れてんだか。」

「かめパンをどんだけ欲しがってたなんて、俺にやもう筒抜けなんだから今更だろうに。」

「うーん、やっぱりこの数は難しいなー。もう一回！」

「もうええわ」

またジャグリングを始めようとする相楽にストップを掛ける。

「エミちゃん。心実ちゃんが来るまでって話だったでしょ？」

「てへへ……。でも、もうちよつとで感覚掴めそうだったし、あと一回ぐらい。ね？」

「この前それでどんだけ粘ってたか、もう忘れたか？」

「むーん……」

「相楽さん。食べ終わったら私達も相楽さんに付き合いますから、今はお昼にしましよ

う。ね？」

「……まあ、心実ちゃんがそう言うなら」

いつの間にか俺まで付き合うことになっているが、まあいいだろう。食い終わって何かするわけでもないし。

各々食べる物を取り出し、一塊になって座ろうと――

「あれ？ みんなもここでお食事？」

「んお？」

「さ、笹原先輩!？」

「心実ちゃん。それに新城くん、エミちゃんに鞠香ちゃんまで」

屋上ドアから新客が現れた。

その手に購買の弁当を携えた笹原先輩だった。

「こんにちはー！ 先輩、お一人ですか？」

「うん。砂夜ちゃんも誘ったんだけど、『次号の特集に集中したいから』って断られ

ちゃった」

「朝に聞いた特集でもうそこまで取り掛かっているのか……」

俺の割とプライベートが白日の下に晒される日はそう遠くないようだ。

「そうそう！ 砂夜ちゃんから聞いたよ？ また大活躍だったんだってね」

「またその話ですか……。俺の蒔いた種が芽生えてきただけの話なんですけどね」

「それも新城くんがみんなの事、いっぱい助けてくれたからだもの。でも、危ないことしちゃだめなんだからね？」

めっ！ と言って座っている俺の頭にペチンと一発。

そしてそのままなでなでに移行。

「えらいえらい」

「……………」

この人は俺の事を弟か我が子だと思ってるんじゃないだろうか。

今はこの面子だからいいけど、実際に年上ではあるけれど、186cmの男が20cm以上も下の女性に頭を撫でられてるって相当シニールな光景だぞ。

しかしそこは俺。黙って撫でられるのみである。

恥ずかしいけど、悪い気はしないし。

「はわわわわ」

「ほら、心実ちゃん！ 憧れの笹原先輩とお近づきになれるチャンスだよ？」

「む、無理です！ 何を話したらいいのか、何も出てきません！」

「そこはほら！ その限定販売のメロンパンを取り出してから話題を広げるとか！」

「それはその、笹原先輩に新城さんからの贈り物を自慢してるようで……」

また椎名と佐伯が筒抜けの内緒話をしていた。

俺程耳が良くない笹原先輩は二人を見て首を傾げていたが、どうやら笹原先輩へのアプローチを決めあぐねているらしい。

笹原先輩と椎名とのこういう関係は、椎名が中等部にいた頃からだと聞いている。

中等部、高等部などの交流がほとんど無いのは先にも述べた通りだが、しかし全く無いというわけでもないのも確かだ。

例えば、学校見学。

中等部からエスカレーター式でも、自分の通うことになる高校がどういふものなのかを見ておきたいという生徒はいる。椎名もその一人で、そうして見学している時に出会ったのが笹原先輩なのだそうだ。

ほとんど一目惚れのように憧れを抱き、また先輩も椎名を妹のように可愛がっている（仲のいい年下の子には大概そんな感じだが、椎名は一際だと思っただけ）ので、関係は良好だと言える。

言える、が。

椎名の憧れは日増しに強くなる一方なので、未だに不意打ちだところやつてキョドる。

「良かったら、先輩も一緒に食べませんか？」

そんな想いは露知らず、相楽があっさり誘いに行ってしまう。

「いいの？」

「せっかく屋上に集まったんですから、みんなで食べなきゃですよ。みんなもいいよね

「？」

「もちろんだよ」

「は、はい！ 私もご一緒したいです！」

「ま、俺も誘われた側ですしね」

「じゃあ、お言葉に甘えちやおうかしら」

満面の笑みを浮かべる笹原先輩。

そうして、仲良し三人組と俺、笹原先輩による五人の昼の時間が流れ始める。

俺と笹原先輩は購買の弁当。と言っても種類どころかサイズも違う。

俺がガッツリサイズのチキン南蛮弁当ならば、笹原先輩はお手軽サイズの幕の内弁当。
当。

椎名はさっきのかめパンを取り出し（一個だけだが、これが割とボリュウムがある）、相楽と佐伯はそれぞれ親が作ってくれたであろう弁当箱（冷凍食品っぽい相楽の弁当に對して、佐伯はバランスガチガチのレパートリーだった）を取り出した。

各々手を合わせていただきます。食事を始める。

「新城くんって、よく食べるよね。そんなに大きいお弁当も食べちゃうんだもの」

「男にやこれが一般的ですよ。むしろ、そっちのがよくそれで足りるなって思いますが、女の子ってみんなそんなもんですか？」

「うん。私、小食ってほどでもないけど、そんなに食べる方でもないかな」

「私はちよつと小食気味、かな？　お店で出されるのも小さいのばかり選ぶし」

「私は、新体操もするのでお腹も空くのですけど……、我慢です。この『ふわふわかめさんメロンパン』がある間はどうしてもだめでしょうけど、贅沢は厳禁です」

「それ一個を昼飯にしたくらいで贅沢なのか……」

「私も女の子にしては食べる方かなって思うけど、心実ちゃんほど気にしてないかなー。ボールに乗ったりしてはおかけか、栄養がお腹にはいきにくいんだよね」

「持ち上げるな。胸を。男の前で」

正直眼福もんだけどき。

笹原先輩も大概だが、こいつもこいつで男の煩惱に鈍感だから困りものだ。

佐伯に小突かれて「てへっ」て感じで舌をペロリと出しやがったが、普通に可愛いんだから更にだ。

「心実ちゃんのそれって、今日限定販売してたのだよね？」

「は、はい。とっても美味しいですよ」

椎名はまだ（頭から）かぶりついたばかりだが、味はやはり好評のようだった。じいっとかめパンを見つめる笹原先輩。

「……あの、なにか？」

「良かったら、私にもちよつと分けてくれない？」

「ええっ!？」

仰天。

「私もそれ買おうかなって思ってただけど、買いそびれちゃって。ちよつと気になつてたから、心実ちゃんが良いければって思ったんだけど……」

「か、構いませんよ! ……………構いません、よね?」

「いや、俺に聞かれても。お前の物なんだからお前が決めな」

「で、では」

「あ、足の部分をちよつとでいいから」

「あ、は、はいっ」

ぷちつと千切られる足一本。

そのままそれを手渡そうと、椎名は腕を伸ば

「あー」

目を閉じて口を大きく開く笹原先輩。

「……………え？」

椎名フリーズ。

……………これはあれか。

俗にいう、『あーん』を椎名にしろという、無言のメッセージか。

傍から見たら微笑ましい光景だが、しかし笹原先輩め。中々ハードなことをさせようとしている。

「え、ええと……う？」

フリーズが溶け、困ったように周りを見回す椎名。

「……………」

じー。

「はうう……」

しかし止める者は誰一人いなかった。

佐伯や相楽は心なしか頑張れて感じのメールを送っているようだし、俺にしても諦観入り混じった感じのサインしか送れない。

そりゃあ、恥ずかしいのはわかるけど。

でもそれ以外に問題が見当たらないし、二人共嫌がるとは思えないから、止めようにも止められない。

「うう……。では、その、行きます」

意を決してかめパンを膝の上に乗せ、片手をぐつと握り、一度引つ込めかけた腕をもう一度伸ばす。

「あ、あーん……」

「あーんっ」

ぱくんちよ。

椎名の指ごと啜えたりしないように、かめパンだけがその口に含まれる。

接触はしていない、していたとしてもわずかだるうに、かめパンが手放されたことを確認すると、椎名はすぐに手を引つ込めた。胸のあたりでその手をぎゅつと抱きしめ、鼓動と呼吸を抑えるかのように落ち着かせている。

どこまでも乙女的だった。

「もぐもぐ……。うん！ やっぱりとっても美味しいわ！」

「そう、でしたか……」

「頑張ったね、心実ちゃん！」

「やったね心実ちゃん！ 確実に距離が縮まったよ！」

なんでこう、笹原先輩に対して何かできた時の椎名に寄り添う二人に、有栖川先輩がダブって見えるんだろうか。

二人に同性愛とかそんな気はちつとも無い筈なんだが。え？ 無いよね？

「……………そういや、ですけど」

このままの空気もなんだか食いづらいなので、話題転換。

「このサイズの弁当は食べれない的なこと言ってましたけど、チキン南蛮って見かけるのだとこれくらいじゃないですか？」

「そうね。だから実は、チキン南蛮って食べた記憶無いの」

「マジっすか。家族が食べてるのを分けてもらったりとかも無いんです？」

「うちは私の一人っ子だし、おじいちゃんも歳が歳だから油物が駄目みたいなの。両親も、お母さんは私と一緒にそんなに食べられないし、お父さんもお弁当にするときはこ

ういうの頼まないかな？」

「家族全体が油物駄目なんですわねえ……。うちはすぐに消化しちゃうから油物が大好物でも問題ないんですけどね」

「好物なの？」

「天ぷらとかのが好きですけどね、俺は」

「そうなんだ。ね？　どんな味がするかちよつと興味あるから、分けてもらえるかな？」

「ん。いいですよ。この一切れでいいですか？」

「うん。それじゃ、あー」

「……………ん？」

なんで目を閉じて口を開けて待ってるんだらうか。

………なんでいつの間にか今度は俺が『あーん』する流れになってるんだ？

え？　冗談でしょ？

椎名と同じ感覚でそんなの出来るはずないよね？

「あー」

しかし、笹原先輩は雛鳥のように口を開けて俺からチキン南蛮が運ばれるのを今か今かと待ち望んでいる。

待って。これはハードとかマニアとかってレベルじゃない。最高難易度アンノウンの試練なんだから！

助け舟を求めて、周りを見渡した。

「……………」

じーっ。

「……………」

しかし止める者は誰一人としていなかった。

佐伯や相楽、椎名までもが、エールを送るでもなく非難するでもなく、ただただ成り行きを見守っていた。

おかしいよ！ なんでお前等無反応なんだよ！

向こうも嫌がってないし、俺も嫌がってわけじゃないけど、これは色々問題あるだろ！

「ぬぐぐ……」

とはいえここで俺がこの行為を止めるわけにもいかない。

何故なら、俺がさつき止めなかったから。

他人にはやらせておいて自分は出来ませんなんて、俺の男としてのプライドが許さない。

プライドか一時の恥か。捨てるならばと考えた結果——

「……………あ、あーん」

チキン南蛮を一切れ摘み、笹原先輩の大きく開いてもまだ小さい口へと運んだ。

「あーんっ」

「あ、ちよ」

「もぐもぐ……へえ、こんな味がするのね。美味しいけど、やっぱりそんなに食べ切れな
いかな?」

「……………そう、ですか」

くっそ！ 顔から火が出そうだ！

つーかなんで端の方掴んで差し出したのに、割り箸ごと口に含んでんだよ！ 俺はこれからこの箸で残りの弁当食べなきゃいけないんですけど!? 素手か！ 素手で食えってか!? 美食の神は素手だとしても言いたいのか!!

「笹原先輩、すごいですね……………」

「だね……………。割と淡白な時が多い新城くんが、ここまで赤くなるって結構なレアだよ」

「でもちよつと意外かなー？ 新城くんだったら『そういうことしちやいけません』って注意するかと思った」

うるせいやい！

「ありがとう、二人共。なんだかすごく得しちやった気分」

「それなら良かったです。ね？ 新城さん」

「……………そーっすね」

「ほら、拗ねない拗ねない」

相楽にぺちぺちと頬を叩かれ、なんだか馬鹿らしくなってきた。

なんていうか、いちいち気にした方が負けって感じた。

ちよつと大きめに咳払い。

「まあ、好みの味ならあげた甲斐があるってもんですよ」

「うん、ありがとうね？ そうだ！ 私からもお返ししないとね」

「えー！ いえ、そんな！ お返ししてもらう程では……」

「お返して、そんなお手軽サイズからおかず貰う程食い意地張ってませんよ」

「大丈夫よ。私が作ってきたかぼちや煮があるから」

——
空気が凍った。

彼女以外の全員の表情から呼吸までがまるで時ごとピタリと止まったかのように動

かなくなり、世界全体の色が反転したかのような錯覚を覚える。

しかしその中、俺の顎から滴り落ちた汗だけは、鋭敏に感じ取れた——今。
なんて言った、この人……？

「か、かぼちや、煮……？」

「うん。昨日作ってみたんだけど、夕食の間には間に合わなかったし、朝もこれを食べる時間が無かったから、タッパーに入れて持ってきたの」

そう言つて笹原先輩は、購買の弁当を入れていた袋から、蓋が閉められたタッパーを取り出す。

そこには確にかぼちや煮が詰められていた。

「二人には、これをお礼に。ね？」

「「「……………」」」

張り付いた笑顔が引きつく俺達。

ここで、笹原野乃花先輩について少し語ろう。

彼女は俺や椎名のように他校にその名を轟かせるとまではないが、学園に数多い有名人の一人だ。

その人気は、偏に彼女の人柄とその容姿によるものだと言っている。

ふんわりとした、いわば癒し系と呼ばれる雰囲気を持ち合わせ、更にそのスタイルも男の煩惱を多めに刺激するものだ。それに加え、彼女自身慈悲深い女神のような心優しさを備え、何事にも挑戦的な面は先生方にも人気を博している。あの神楽坂先輩と下の名前で呼び合う間柄であることから分かる通り、異性からは勿論同性からも好かれやすい人だと言えよう。椎名もそういう先輩に惹かれた一人だ。

しかし、そんな彼女にも欠点がある。不器用なのだ。

陶芸部に所属しているながら不器用だとはおかしな話だが、ほとんどが彼女ならと笑って済ませられる事柄である。

笑って済ませられないのが、これだ。

目の前にあるかぼちゃ煮だけではない。料理全般だ。何故かコーヒーだけはプロかと見間違えうほどの腕を持っているが、それ以外が不器用なんてもんじゃない。

すごく辛い。すごくすっぱい。すごく苦い。

そんなのあまつちよろい。

笹原野乃花。彼女の料理は——兵器だ。

それも、大砲だとか戦艦だとかじゃない。例えるなら、そう。核兵器。その料理を口にして、無事で済んだ者はいない。

「それじゃ、食べてみて?」

輝かんばかりの笑顔で、タッパーを開く笹原先輩。

この人のタチの悪い所は、失敗する要因について自覚がないことだ。

何度目の前で人が倒れようとも失敗してしまったとは思うが、何故失敗したかをまるで考えていない。

だから何度も同じ失敗をしようと、何度も同じように料理という名の兵器を持ってくる。

不味いのだと、直接伝えたこともあった。

本人にも食べてもらって思い知らせたこともあった。

あなたはもう料理をしなくていいと、諭したこともあった。

それら全てが無意味だった。

何故なら彼女は、諦めないから。

どれだけ失敗を積み重ねようと、次は上手く行く筈だと、何度だって挑戦するから。見上げた精神だと思うし、椎名もきつとそういうところにも惹かれたのだと思うが、この場合は負のスパイラルでしかない。

「あ、あはは、あはははははは、はははは……」

椎名が狂ったように笑い、汗が滝のように流れ落ちていく。

無理もない。

ここにいる全員、笹原先輩の料理の威力を間近で見た、もしくはその身を以って知った者達なのだ。

傍から見ていただけで予先が向けられることはない相楽と佐伯の二人でさえ、震えを抑えられないでいる。

そして俺も、鼓動が32ビートを刻んで寿命が大分削れている真つ最中だった。

見た目は少し煮崩れしているだけの普通のかぼちや煮だが、油断してはならない。

悪魔は、いつでもその身を表に曝け出しているとは限らないのだから。

(……………もし)

かぼちや煮というのは、かぼちやを切つて、煮て、そして味付けするもんだ。もし、だ。

笹原先輩がかぼちや煮に対して調理を施した際、味付けがされていたならば。

その味付けが決定的なゲシュタルト崩壊を引き起こし、口にした瞬間超新星爆発のような衝撃が巻き起こるといふ、避けられない運命が待ち受けているだろう。

だが、もし、だ。

その味付けが、されていなかつたならば——！

勿論味付けが無い分かぼちやの素材の味しか味わえないだろう。

しかし、彼女の料理による犠牲者は出ないということに——

「このリア充が」

「っ!？」

突然死角からの声。

驚いて振り向くと、そこには姫島が立っていた。

い、いつの間にいたんだ？ 笹原先輩の料理に気を取られて気付かなかつた。

「ひ、姫島？ お前いたのか？」

「おー。昼休みになつてそのベンチで寝つ転がつてきのこの森を食べてたら、いつの間にか寝てたみたいだな。ベンチからも転げ落ちてた」

そう言つて姫島が指差したベンチだが、はて。あそこなら俺の視界にも入つた筈だな。

転げ落ちた後、ベンチの死角に入り込んでいたのだろうか。

「それよりお前等、さつきからリア充力場を全開にしよつて。細胞単位で拒絶されてたぞあたし」

「知らない単語をポンポン出すんじゃねーよ」

「？ リア充力場？」

「知らんでいいです」

「さつき急に途切れたから来てみたら、まーたりア充してるし。どこまでフラグメーカーなんだお前は」

「リア充リア充うるせーわ。つか、お前こそどうしたんだよ。目覚めたら集まつてたか

ら声掛けたなんてタイプだったか？」

「いやなに。若干ムカついたし、小腹が空いたからちよいともらおうかと思つてな」

そう言つてひよいつと笹原先輩の手元のタッパーからかぼちや煮を指で摘まみ取る
姫島。

「「「あ」」」

制止も間に合わないままそれを口に放り込み——

「げふうふうふうふう
!!!!!!」

背面へと頭から落ちた。

「「「……………」」」

屋上の床に頭を打ち付けた姫島は、その身体を痙攣させるばかりで、意識を感じられない。

一縷の望みが絶たれ、俺の精神はますます絶望色に染まっていく。

間違いない……。こいつは本物だ……！

「ど、どうしたの姫島ちゃん!？」

一人大慌ての笹原先輩だが、先輩。これはあなたの犯行です。

「……わ、わー。大変だー。姫島さんが頭を強打しちゃったー」

ぐったりと倒れている姫島を見て、佐伯は突然超棒読みでそう言う。

「すぐに保健室に連れて行かなくちゃー。笹原先輩、そっちを持ってくれますか？」

「え？ う、うん。わかったわ」

そうして佐伯と笹原先輩は、白目を剥いた姫島を担ぎ、屋上のドアから退出していった。

取り残される俺と椎名と相楽。そして諸悪の根源たるかぼちや煮。

姫島は犠牲になったのだ……。犠牲の犠牲にな。

「えつと……。どうしよつか。これ」

「どうしよつかと言われましても……。折角笹原先輩が作ってきてくださったものを捨てるわけにもいきませんし」

正直形振り構わず捨ててしまいたいのが、捨てた場所で何が発生するのかが恐ろしすぎてそれにも踏み込めない。

今や兵器であることが確定したかぼちや煮。

……俺は高校生でありながら、何度も死線をくぐってきたことがある。

死線。

それを予感させるものには、いつも死の気配を幻覚するのだ。

何をしたらかぼちや煮にその気配を感じられるようになってしまうのだろうか。

しかし、それでも。

どうするかなんて、決まっていた。

「……俺が行く」

「し、新城くん!?!」

「だ、駄目です! 元々は私が原因なのですから私が!」

「お前が俺を呼んでようが呼んでまいが、ここに来たらどーせ俺には見て見ぬ振りなんか出来ねーよ」

兵器が詰まったタッパーを持ち上げる。

「お前等と違って俺は重くてしよーがねーだろうけど、頼むわ」

手の震えは止まらなかつたが、構わず一気に搔っ込んだ。

あつという間に空になるタッパー。

口いっぱい詰まった兵器を、飲み込めるように嚙んでいく。

……あれ?

意外と食えるんじゃないか——

「ごはあつ
!!!!!!!」

「新城さああああああん
!!!!!!!」
「新城くううううううん
!!!!!!!」

広くて綺麗な花畑で、姫島と寝っ転がってゲームをする夢を見た。

聖櫻番長の誘惑多き夕暮れ

六限が始まった頃に保健室で目を覚ました。

右隣のベッドには未だ気を失っている姫島。どうやら俺が先に目を覚ましたらしい。

そして、俺のベッドの縁に正岡先輩が眠りこけていた。

「すう……すう……」

「……………」

規則正しい寝息を立てる先輩の手は、俺の手を包んでいた（包む、というには先輩の手と俺の手ではあまりにも差があつたが）。

神崎先生から聞くと、どうやら椎名と相楽によつて運ばれ、佐伯共々後ろ髪引かれながらも授業があるからと三人が去つていた（笹原先輩は佐伯によつて先に教室に戻されたそうだ）後、俺が魘されていたから心配でせめて手を繋いであげるだけでも、自分のことを後回しにしてずっと隣にいてくれていたらしい。そうやって気を遣われていたというのに、魘されていたのに思い当たる原因が夢の中で姫島との格ゲーでハメを受

けていたことだけだと思うと、姫島に怒りがこみ上げる（八つ当たり）。

優しさに報いるものがそれだけなのは歯痒いが、正岡先輩を手をそつと解き、ベッドへと運んで布団を掛け、そのまま保健室を出た。

（あの兵器、食った衝撃はとんでもないのに、目覚めたらなんともないんだよな……）

生み出された経緯といい、謎多き代物である。

それとも臨死体験している間の処置が完璧だからだろうか。だとすると今まで目覚めるまでの面倒を見てくれた人には感謝感激だ。

教室に戻ると月白つきしろ先生が鬼の形相で出迎えてくれたが、理由を尋ねられて「笹原先輩の料理を食べて、気付いたらこの時間でした」と答えたら、全てを察した表情で着席を促された。教室中の雰囲気も、疑惑や心配するものから同情するものへと様変わり。

知る人ぞ知る笹原先輩の兵器料理、このクラスでは周知の事実である。

『（真つ白に燃え尽きたジョーのスタンプ）』

『ど、どうかなさったんですか!?!』

『いや、帰りのHR終わったから報告をと』

『そうだったんですか……。てつきりあの後病院に搬送されることになったのかと』

『今のスタンプでそこまで発想が飛ぶか……。まあ心配すんな。ちよつと子供の頃に死んだ近所のじいちゃんが見えたくらいで、なんともなかつたから』

『それは、なんともなくはないような……。』

『それよか約束だよ約束。忘れてないよな?』

『あ、はい。その件なのですけど』

『え? なに? バックレ?』

『いえ! そうではなくて』

『じゃあどうした?』

『その、シャーペンの芯が授業中に切れてしまいました。授業は佐伯さんに一本分けて頂いた物でなんとか。でも、この後の宿題にお付き合いするには、購買で買い足さなければならなくて……。』

『あー。遅れることになりそうだから、待っててほしいってことか?』

『はい。申し訳ありません』

『気にすんな。第一教えてもらう立場だし、シャー芯が切れたから待つ程度で怒るよう

な小っちえ奴のつもりもねえよ』

『……そう、ですね。新城さんはとても器の大きい方だと思えます』

『そういうのはもつと大事の時に……いや、やつば言わなくていいや。んじや、図書館の方で待ってるな』

『はい。なるべく早く向かいますね』

『(OKの吹き出しがついたナマケモノのスタンプ)』

『可愛いです!』

というやり取りを椎名とLINEで。

デフォルメされてないナマケモノなのにすぐにこの感想が出てくるって相当だよな……。

図書館へ向かおうと廊下を歩いていると。

「兄貴! お疲れ様です!」

「兄貴! お帰りツスか!?!」

後ろから男の声を二種類で掛けられた。

……俺のことを兄貴と呼ぶ奴は、知る限りでは二人しかいない。
若干辟易しながら後ろを振り向く。

「燕つらすけに狼丞か」

「聞いたツスよ兄貴！ またちよつかい掛けて来やがった奴をぶつ飛ばしてやったんスよね？」

「その話もううんざりなんだよ……。朝っぱらからみーんなその話ばつかしやがって
」

「失礼したツス！」

「いや、お前に謝られることでもないんだが」

「僕と狼丞くんは、これから兄貴の偉業を広めるために朝の写真を新聞部に提供しにくところなんです。兄貴はどうしますか？」

「お前は謝って」

やはり円岡燕と、狼丞——もりのかわ杜ノ川狼丞だった。

見た目は対照的とも言える組み合わせである。

燕は男にしては小柄——150台の低い方だそうだ——で、顔立ちが童顔なもの

相まってしばしば中学生、小学生にさえ間違われることもあるという。付け加えて体格や持ち合わせた雰囲気やシヨタっぽいとか、どうにも男らしさというのが足りないため、苗字の円をとって『まどか』という女っぽい渾名が付けられていたりする。

対して狼丞は大柄——この前もう少いで2mの大台に乗るとか言っていた——、それも顔立ちも体格も男、という出で立ちだ。ただ雰囲気がいわゆるヤンキーで、目つきが良いとは言えず（人のことは言えないが）、生まれ持った金髪をオールバックにするのもより一層その雰囲気を際立たせていた。朗らかなのはその表情ばかりである。

で、一見噛み合わなさそうなこの二人が何故仲良く隣り合っているかと言うと——

「悪いがこれから椎名と図書館で勉強会するところだ。明日小テストなんで」

「学園のマドンナと図書館アート……！ 流石は兄貴です！」

「図書館ということはアレツスカ!? あの図書館の華と噂むらかみされる村上先輩ともしつぽりスか!？」

「妙な邪推すんな！」

「うううと」だよ。

今じゃ学園中の男子がこんなノリなんだから救いが無い。

「そういうことなら邪魔しちやいけないツスね！　馬に蹴られないように俺等は早々に退散するツス!!」

「兄貴ー！　学園トップクラスの美少女お二人との秘密の勉強会、是非後日感想を聞かせてくださいねー！」

「何の感想を聞くつもりだテメーら!!　そんなんじゃねーしなんで村上先輩も参加する前提なんだよ!!!」

俺の叫びが聞こえているのかいないのか、二人は足早に廊下を駆け抜け、俺の視界からその姿を消した。

学園じゃ筆頭舎弟とか呼ばれてる奴等で、最初こそ衝突したものの、俺が仲裁したことによってすっかり（主に俺の）話が合い、今じゃ有名な凸凹コンビである。息が合うこと合うこと。

追いかけて拳骨喰らわすのも考えたが、絶対懲りないだろうし、馬鹿二人に無駄に時間喰って待ち合わせ場所で待つどころか待たせるのも悪いので、図書館へと歩みを進めることにした。

果たして何のために現れたんだろうか、あの二人。

図書館へ着くとカウンターで村上先輩と加賀美が話し込んでいた。

「あの、村上先輩」

「はい。どうかしましたか？ ……あ、絵本のことですか？」

「し、しーっ！ 誰が聞いているかわからないですから！」

「あ、ご、ごめんなさい……。それで、今日はどういったものを？」

「……………」

「えつと……。今日は、なんていうか……。お話が深い、語り掛けてくるようなものがいかなって」

「語り掛けてくるもの、ですか？」

「あ、もちろん、何も語り掛けてくるものがない絵本はないと思いますよ？ でも、次に描こうと思っているのは、例えば悲しくても、それを乗り越えようとする。例えばハッピー

エンドじゃなくても、ただ悲しいだけじゃない。そんな絵本でして……」

「わあ……。素敵だと思います、そういうの」

「わかってくれますか？　なので、そういうお話を参考にしたいなって。絵本や童話であれば、厚さや作者は問いませんので。何かおすすりはありますか？」

「そうですね。それでしたら——」

「それなら『はちの王子様』とかどうだ？」

「ぴゃっ！」

「あ、新城君」

後ろから声を掛けると加賀美は飛び上がった。

そのツーテールも連動して跳ね上がった。

触覚かなんか？

「俺が知ってるのは第一章までだけど、あれだけでもかなり完成度高かったしな。参考になるかはわからないが、読む価値はあると思うぞ」

「し、新城くん！　後ろから急に声掛けないでよ!!」

「秘密にしたいつつーんなら周りを警戒しとけよ。俺じゃなかったらどうするつもり

「だっただんだ？」

「君は足音が全然しないから気付けないの！ 私これでもそういうの敏感な方なんだからね！」

「まあ図書館だしな」

足音ズカズカ立てるのも悪いと思つて。

「それで、新城君はどういった御用向きでしょうか？ 何かお探しの本でも？」

「いや、今日はちよつと勉強会をしようと思つて。席空いてます？」

「ええ、空いてますよ。夏目^{なつめ}さんも今日はいらつしやらないようですし」

「ああ、そつか。明日小テストだつて？」

「まあそれもあるんだが。そういや加賀美は宿題終わつてんのか？」

「うん。随分前に出されたものだしね。そういう新城くんは？」

「質問した意図を察して頂きたい所存」

「何その喋り方……。そつか、終わつてないんだね」

「加賀美が終わつてんなら写させてもらう方が楽だったが、生憎内容が小テストに出るつて話だしな……」

「小テストに出なかつたら写させてもらうつもりだったの……？」

呆れて言う加賀美だが、こう言いながらも頼んだら写させてくれるんだから良い奴である。

正直違うクラスの椎名の前に宿題の手伝いを頼もうかと考えていたくらいだ。

今日がテニス部の練習の曜日じゃなければな！

『はちの王子様』か……。見たことないなあ。先輩は？」

「私も覚えがありませんね……」

「あ、マジですか？　じゃあこの図書館には無いのかもな」

「い、いえ！　探してみたらあるかもしれませんし。あらすじを教えて頂けたら、思い出せるかもしれません」

「そうですか？　結構印象深い話でしたし、村上先輩がパツと思いつけないんなら無いと思いますけど……」

ここの図書館は一応パソコンで書籍管理をしていたりはするが、ハッキリ言って村上先輩に聞いた方が頼りになったりする。データが膨大な分曖昧な検索を許さない機械

類より、図書館の書籍を読み尽し、置き場所から内容まで粗方頭に入っている村上先輩の方が目当ての物を早く見つけられることの方が多いからだ。

ただ、先輩も人間であり、何から何までずっと覚えていられるわけではない。基本的にジャンルを問わない村上先輩であるが、新しく入荷された本をまだ読んでないということも充分に有り得る。

それを差し引いても『はちの王子様』を村上先輩が知らないのであれば、やはりこの図書館には無いと思う。

話が印象深いのは言った通りだが、初見であつてもあの絵本には手を取るだけの価値はあると見れるだろう。

思った通りと言うべきか、実際に内容をネタバレにならない程度に掻い摘んで話してみても二人から思い当たるような反応は見られなかった。

「……やっぱり、心当たりがありませんね」

「そうですか……」

「お力になれず、申し訳ありません……」

「でも、あらすじだけでもすごく面白いつて思えちゃうな。君が印象深いつて言うのも納得」

「つつても図書館にないみたいだしなあ……。あ、なんなら明日にでも持つてくるか？」

「ほんと!？」

「近い近い」

ずいつと乗り出してきた加賀美の顔を右手でぐいと押して引き離す。

ちつちえなこいつの顔。

俺の手がデカいだけか？

「結構最近読んだ本だから奥底に仕舞われてることはないだろうしな」

「じゃあ、お願いしてもいいかな？」

「おう。お前もそろそろ部活の時間だろ？」

「……あ！ 本当だ、もうこんな時間」

「明日の朝にでも渡すから、今日の所は部活に精を出せよー」

「ありがと！ じゃ、私行くから！」

「俺が忘れてなければな！」

「忘れないでね！」

そうして加賀美はすたこらさつさと図書館を後にしていった。

「……さて、俺も勉強会の準備をしますか。しばらく話し込むかもなんで、先に謝っておきます」

「構いませんよ。……それにしても、なんだか意外ですね」

「? 何がですか?」

「新城君は、加賀美さんの童话好きについて知っている数少ない人なのは知っていますけど、あなた自身も読むんだなって」

「とてもそんな風には見えない、ですか?」

「いい、いえ。そんなことは」

「いいですよ、気にすることじゃないですし」

かといって大つぴらに語りたいわけでもないが。

「まあ絵本にも手え出すようになったのは完全にあいつの影響ですけどね。自分で買った絵本ってないんですよ」

「え? でも『はちの王子様』は……」

「どっかの古本屋で母親が取り寄せてきたって言ってました」

「母が、ですか？」

「あの人、自分が名作だと思ったらジャンルを問わず持つてくるんですよ。漫画でも小説でも、それこそ絵本でも」

「……なんだかすごい方なんですネ」

「ええ」

昨日なんか良作だとか言ってエロ漫画を持つてきて息子の俺にひけからしたくらいだからな。

村上先輩の言う「すごい」と、俺があの人に思う「すごい」じゃかなり意味合いが異なるだろうが、言及する気も起きない。

「すみませーん。ちよつといいですか？」

「あ、はいっ。……すみません、呼ばれているようですので」

「いいっすよ。むしろ俺こそ立ち話に付き合わせてすみません」

「謝らないでください。また、お話したいです」

そうやって、村上先輩は綻んだような笑顔を残して、呼ばれた方へと駆けていった。
……さて。名残惜しいが俺も席を確保しないとな。

聖櫻学園の図書館は二階建て構造になっているが、生徒の主な利用は二階に集中している。というのも、一階の本棚に並べられているのは専門書ばかりだからだ。都心の大学の図書館でも、あそこまで並べられているかは疑わしい（それでも少ないながら利用者がいるのがうちの学園だ）。

反面、二階の本棚に並べられているのは小説、ライトノベル、漫画や絵本、雑誌類といった、一般的な高校生でも手の出しやすいものだ。かと言って二階が俗っぽいかと言えばそうでもなく、今でもスペースを多く占めているのは分厚い本だったりする。付け加えて言うと、二階ではテーブルスペースがある。本棚を超えるほどではないが、二階のスペースはそれに次いでテーブルに占められていると言っている。本を読むだけでなく勉強、歓談、作業をするなどでここが使われることも多い。

「おや。新城さん、ですか」

テーブルスペースに先客がいた。

ミス・モノクロームだった。

「モノクロか。何してんだ？」

「読書、です。作品に触れることは、心を知る事にも、繋がると、お聞きしました」

「読書ねえ。その厚さと大きさをみるに、漫画か？」

「はい。これは良作だと、つい昨日、薦めて頂いた、方から」

熱心に読んでいる様子。

ブックカバーを掛けられているので表紙は窺えないが、ラノベにしては大きいし、小説にしては薄いといった感じなので予想をつけたが、どうやら当たりのようだ。

漫画でも読書というのかと言われるだろうが、逆に他に何と何を聞いてみたい。

「新城さんは、何か、お探ですか？」

「いや、今日はここで椎名に勉強教えてもらう予定だ。明日小テストあるのは知ってるだろ？」

「勉強、ですか。言ってくだされば、私が、力になります、のに」

「お前の教え方は機械的過ぎて逆に要領を得ないんだよ。勉強が出来ても教え方が悪いの典型的例だったぞ」

この前なんか国語の宿題中に「何故、メロスは、自分が処刑される前に、妹の結婚式を、祝いに行きたいと、願ったのでしょうか？」とか言つて問題にない問い掛けをしやがるし。

「気持ちだけ受け取つとくわ。サンキユ」

「教え方が、悪い、ですか。対処せねば、なりませんね」

頭を軽く撫でると、モノクロのツインテールがびこびこ動いた。

尻尾かな？

「そういえば、ですが」

「あん？」

「今読んでいる、本の事で、少々、お聞きしたい、事が」

「聞きたいこと？」

「はい。これ、なのですが」

モノクロは持っていた本の内容が見えるように、こちらに向

男女が絡み合う卑猥な絵が広がっていた。

というかガッツリエロ漫画だった。

「オラアツ!!」

本だけ蹴り上げた。

「ああ。なんてことを」

「なんてことを。じゃねーよ!! お前こそ学校の図書館でなんてものを読んでんだよ!!」

「……? 何か、問題が?」

「しかもなんか見覚えのある絵柄だったんだけど!? なにあれ!? お前にこれ薦めた人ってどんな人!？」

「あなたの、母親と、名乗ってました」

「あんの馬鹿親がああああああ!!!」

「『これで得た知識を是非うちの息子で活かしてあげてね♥』と、言っていました」

「素直に応じようとすんな!! お前のそういうところ良い所だけど悪い所でもあるからね!!?」

どーりで昨日「あなたって可愛らしいお友達がたくさんいるのね」とか話してたわけだよ! 家にほとんどいないお袋が俺の友達事情を知ってたわけだよ!! 俺の好みの女の子についていつも以上に食い下がってきたわけだよ!!!

「没収だ没収! これは俺が責任を持ってあの母親に叩き返す!!」

「そんな、殺生な」

「何も殺生じゃねーよ!」

「ならば、せめて、教えてください。それに載っていた、『でいーぷすろー』とは、一体、どういうことでしょうか?」

「淫語について問い質そうとすんなあああ!!」

「あの、図書館ではお静かに……」

いつの間にかやってきていた椎名に注意され、(しつかり誤解を解いた後に)勉強会が始まった。

「はい。これで左辺も右辺も整理出来ましたね」

「じー」

「んで、この二つが全く同じわけだから」

「じー」

「この等式は成り立つ。証明完了です」

「じー」

「おお。出来た出来た」

「じー」

「はい。ではこれで、数学の宿題は終わりましたね」

「じー」

「……………」

「じー」

「……………」

「じー」

「……………」

「じー」

「…………あの、モノクロームさん？」

視線に耐え切れなくなったのか、椎名が前方に居座っているモノクロに声を掛ける。居座っているというかなんというか。俺達が並んで座っている席とはテーブルを挟んで対面にある位置から、顔と指先だけを出してずっと俺達の様子を見守っていた。

「はい。どうか、しましたか？」

こっちの台詞だよ。

「いえ。その……先程から随分と熱心に見ていらっしやいますから、どうしたのかと」「お気になさらず。ただの、研究、ですのぞで」

「研究、ですか？」

「はい。新城さんは、私は、勉強が出来ても、教え方が、要領を得ない。そう、仰いました」

「気にしてたよ……」

モノクロの場合は根に持つタイプとかではなく、ただ忘れず素直に受け止めているだけなんだが。

なんか俺が悪者っぽい。

「なので、教えるとは、どのようにすればよいのかと、椎名さんを見て、研究、です」
「どのようにすればよいか、ですか。そうですね……」

少し考える素振りを見せた椎名だが、やがてそれに答える。

「私個人の意見になりますが、自分が分かっていることを言うだけではないのだと思います」

「言うだけではない……」

「教える人が、どこでわからないのか。どうしてわからないのか。どう言えば分かってくださるのか。教えられる人の視点に立って考えるべきなのではないでしょうか？」

「成程。教えられる側の、視点に立つ……」

「そうしたら、きつとモノクロームさんも立派な先生になれる筈ですよ」

「先生……。それは、立派なこと、ですね」

へえ。

教える側って逐一そういうこと考えてんのな。

「わかりました。では、それを踏まえて、観察を続けます。どうか、お気になさらず」

「見てることを微妙に口に出してるから聴覚的にも気になるんだが……。次は歴史か。『遣唐使の廃止は何年の出来事であるか？』」

「年号の問題ですね。えつと、これは……あれ？ いつだったでしょうか？」

「なんだったっけな……。先生が年号語呂合わせで何か言ってた気はするんだが」

「これは、894年のことですね」

「わ！」

「あ、村上先輩」

「語呂合わせは確か、『白紙に戻す遣唐使』だったかと思えます。『894』を『はくし』と読んでいるんですよ」

椎名と俺の間の背面から、村上先輩が覗き込んでいた。
ぷち飛び上がる椎名。

「あ……、ごめんなさい。お困りのようでしたから、つい口を……」

「い、いえ！ こちらこそ、驚いてしまつてすみません」

「いえ、それは急に私が声を掛けたからで」

「いえ、私の方こそ不用意に大きな声を」

「いえ、ですからそれは」

「いえ、私が」

「そんぐらいにして」

謝り合おうと止まらねーなこの二人は。

「村上先輩。呼ばれてた事情は終わつたんですか？」

「ええ？ ええ、はい。本を探していたそうなので、案内しました」

894年と記入欄を見ずに書き込みながら、村上先輩に問い掛ける。

「委員のお仕事も簡単なものがいくつかあっただけなので……。そちらを済ませた後に、こちらの様子はどうか、と思ひまして……」

「ご心配をお掛けしたようで……。見ての通り、椎名のお陰で順調ですよ」

「ふふ、光栄です。でも、新城さんも飲み込みが早くて、こちらとしても教え甲斐があります」

「本当に飲み込みが早いんならこんな溜まったりしてないんだよなあ……」

「……あの。良ければ、私もお手伝いしましょうか？」

「え？」

村上先輩からの望外の提案。

……村上先輩からも教えてもらえるど？

もちろん、三学年でも成績上位に位置する先輩に教えてもらえるなら願ったり叶ったりではあるけど。

「私の方が一つ先輩ですから、お力になれるかもと思ったので……」

「俺としては有難いけど……椎名は？」

ただ、俺は今椎名に教わっている最中なのである。

それでありながら新しく教授をお願いするなど、そのつもりがなくなるとも椎名の力が足りないと言ってるようなものだ。

そう思っ、椎名に意見を伺ったが。

「もちろん喜んで！」

椎名は笑顔さえ浮かべてそれを受けた。

「先程のように私も分からないことがあったら、是非教えて頂きたいです」

「……ふふふ。ええ、わかりました。その代わりと言っはなんですけど、私にも復習、させてくださいね？」

そうやって、先輩は俺を挟んで椎名とは逆の、俺の右隣の席に座った。
マジか。

学園トップクラスの美少女かつ才女である二人から教えてもらえるとは。
燕と狼丞の邪推じゃないが、かなり恵まれた状況じゃ——

ふによん

「……………」

柔らかい感触が俺の脳髓を襲った。

発生源は、俺の右隣に座った村上先輩からでも、左隣の勉強道具を三人の真ん中に集
中させた椎名でもない。

背中からである。

「……………あの。モノクロームさん？」

敬語になってしまった。

割とパニック状態の俺。

「はい。なんででしょう?」

モノクロはいつもと変わらない平坦な声で応える。

「いや、何やってんの?」

「教えられる側の、視点、です」

「は?」

「椎名さんは、教えられる側の視点に、立つべきだと。そう、仰いました」

「仰いましたねええそうですねそれが?」

「なので、現在教えられている、新城さんの視点から、観察をするべきだと、判断しました」

「視点一つか、隣に這い寄る混沌みたいなんですけど」

「というかお胸が当たってるんですけど。」

程良い膨らみが俺の背中いっぱいに広がっているんですけど。

服とかブラとかその内側にある柔らかかなものとかの感触が伝わってくるんですけどおおお!!

「成程。これが、新城さんの視点、ですか」

「俺の視点じゃねーよそれ！俺の肩に顎乗せてるお前の視点でしかねーよそれ！」

「モ、モノクロームさん。私が言っていたのはそういうことではなくて」

「……えつと。こういう時、なんて言ったらいいのか……」

「お二人も、この視点から見れば、より、教えられる人の、気持ち、理解できるかと、思われます」

「「え？」」

「……は？」

え、ちよつと。

なんで二人の肩をガシツと掴んでるのこの子？

いやまさかいくらモノクロームさんといえどそこまでのことをやらかしたりはしな

「では、どうぞ」

ぐによん、もによんと。

椎名と村上先輩の体でサンドイッチされた。

(あぶあああああああああ!!!)

いやあああああ!!! 三方向から六つの膨らみがあああああああ!!!
後門にモノクロ! 右門に村上先輩! 左門に椎名ってなにこの布陣!?! 前門は
テーブルで四神包囲されてるし! 上にも下にも逃げようにもモノクロのホールドが
固すぎるのと引つ掛かっている物体の感触が凶悪過ぎて身動きさえ取れない状況だし
!! こんなところでアンドロイドばうわー発揮してんじやねえよお!!!

「これで、効率が上昇するかと、思われますが」

「放してエエエ!!! 今すぐこの拘束を解いてエエエエ!!! これもう効率云々以前の問題

だからア!! 当たつてるとかってレベル超えてるからア!!」

「はて? 当たっている、ですか?」

「も、モノクロームさん!」

「そうだ! 言つたれ椎名!!」

「これじゃあ勉強が出来ません!!」

「そこじゃねーだろオオオ!!」

勉強が出来ませんじゃねええ!! 今そんなん気にしてどうするうう!!

「も、モノクロームさん……!! これは、その、問題があると言いますか……!!」

「ですよね村上先輩! 問題ありますよね!」

「問題……? なにが、でしょうか?」

「それは、その……」

「はい?」

「か、顔が……近いというか……」

「そこは問題ですけど! 他が大問題だらけです!!!」

なんで二人共自分の胸が形を変えて俺の体に押し付けられていることに関して何も言わねーんだよ!!?

自分の身体のエロさに自覚がないから!?

それとも俺の理性がこの煩惱に耐え得る氷山の如きだと信頼してるから!? 違うよ!
! 氷山だとしたらあなた達はマグマだよ! 氷の大地を溶かす熱量を持つてるの!
溶けようものならゴジラさんこんにちはだよ!!

「ふむ。顔が近い、だけであれば、問題はないかと——」

パシヤリ

「おや?」

前方からフラツシユが焚かれた。

……え? なに?

「ぐふふ……♪ 文^{ふみお}緒ちゃんに心実ちゃん、モノクロームちゃんが一度に撮れたわあ〜

♥

「も、望月さん……?」

「はあ、いい。望月エレナでえす」

その手にカメラを携えた望月先輩が、テーブルを挟んで前方にいつの間にか現れてきた。

「新城くんつてばあ、こおんなに可愛い女の子達とくんずほぐれつしてるなんてえ、羨ましいっいたらないわあ」

「だったら今すぐ代わ—— いややつばいいです」

「なあにい? 独占欲湧いちやつたあ?」

「あなたが今俺に成り代わったら洒落にならんことになるからです」

ぶつちやけ今も洒落にならんけど。

つーか何時までホールドしてるつもりだよモノクロ。

「まあそれはさておきい、モノクロームちゃん? そんなにぎゆうぎゆう詰めにされた

ら、勉強できるものも出来なくなっちゃうわよお？」

「……成程。これでは、動きが制限されると。申し訳、ありません」

そうして解かれるホールド。

六つの膨らみもそれに合わせて離れていった。

椎名も村上先輩も真つ赤になって俯いてしまったが、まあ男と体を寄せ合わせてたらこの二人ならこうなるよね。

それにしても、助かった……。

望月先輩がいたことといい、この人にホールド続行宣言されなかったことといい、色々想定外の救援だったが、あのままだったらどうなっていたやら――

「ああ、モノクロームちゃんはさっきのポジションねえ」

「はっ」

ふによん、と。

再び背中に押し付けられるモノクロームの膨らみ。

「……………」

「うん!! いいわあ! そのこてんつて新城くんの肩から顔を覗かせてる感じ! この構図すごく絵になるわあ〜♥」

前言撤回。やっぱ助けられるならこの人じゃない方が良かったわ。

「砂夜ちゃんから頼まれてた新城くんのレアな表情もついでに撮りたい、今日はツイてるわあ〜♪」

「ほんっと、マジ勘弁してください……」

その後、なんとか宿題を終わらせることは出来たが、背中の感触と右半身・左半身に残った感触、加えて写真を撮ろうと屈んだ望月先輩の谷間に意識を持つていかれて肝心の内容が全く頭に入らず。

翌日の小テストは散々な結果となった。

桃子と柚子のブラシと蕎麦

わたし——あさひなももこ朝比奈桃子は、土曜日に朝遅くに目が覚めました。

「ふああああ〜〜〜……………」

お布団で体を半分だけ起こして、大あくびです。

—— いけないです。

今日は予定が無いからって、こんなにお寝坊さんしてたらお母さんに怒られちゃいます。

早起きは三分の得と言いますからね。

…………あれ？ 三金の得だっけ？

あやや。

「うにゆう〜……………」

パジャマの袖で目をこしこし。

瞼が閉まつちやいそうな目と一緒に頭も冴えてきました。

ベッドから降りてカーテンを開けると、とつても明るいお日様が飛び込んできました。

ぽかぽかお天気です。ベランダに小鳥さんもいました。

「小鳥さん、おはようございます」

ぺこりとお辞儀すると、小鳥さんも鳴いてくれます。

えへへ。なんだか今日は、良い日になりそう——

「モモー？ 起きたー？」

お母さんの声だ。

いけない。この時間だと、お父さんもお母さんももう朝ごはん食べちゃったかも。

ごはんが冷めちゃってたらどうしよう。

「お店の方に先輩が来てるわよー」

「あや？」

先輩？

……今日は、特に何もない日です。

にゅーろんで練習があるっていうお話は聞いてないけど……。

(……あー！ わかりました！ きつと先輩達が、サプライズでわたしを驚かせに来たんですね！)

お店の中にかくれんぼして、びっくりするわたしを面白がるつもりなんですわね！
ふっふっふ。そうと分かれば怖がることはありません。

この名探偵・桃子。先輩達にいつまでも驚かされる女の子じゃないのです。
わたしは確信を持ったまま、あえてお母さんに聞きます。

「先輩って、誰の事ー？」

「新城先輩だってさー」

「あやつ!？」

すつごくびつくりしました。

—— 思ってた通り、今日は良い日になりそうです。

「はあ……はあ…………。せ、先輩！ おはようございます！」

「お、おう。おはよう」

急いでパジャマからお洋服に着替えて、急いで顔を洗って、急いでお店に来ると、新城先輩はまだそこにいてくれました。

いっぱい走ってきたので疲れちゃったわたしを見て、先輩は戸惑っています。

「先……輩。今日はお酒、買いに来た、のですか……？ はあ……はあ……」

「息落ち着かせてから喋れ……。まあそんなとこ。今日は祖父様じいさまがうちに来て親父と飲んでいくって話だからな」

わたしの実家は酒屋を経営しています。お家の1階で経営している商店街のお店の一つで、結構老舗のお店なんです。

新城先輩のお父さんはうちのお得意様の一人で、よくお酒をたくさん買ってきます。先輩のお父さんっていうのも納得できる、とつても良いおじさんでした。先輩のおじさんにはまだ会った事はありませんが、きつと優しいおじさんだと思います。

それで、うちでは先輩のお父さんが来ることが多いそうなのですが（お店にいることが少ないから、お父さんから聞いた話です。お手伝いするって言ってるのに）、先輩がおつかいで来てくれることもあります。

「すうー……はあー……」

深呼吸で息を落ち着かせて、改めて新城先輩に話し掛けました。

「新城先輩。今日はどうのお酒をお探しですか？ 私、お手伝いしちやいますよー！」

「いや、もう袋に詰めてる所」

「あややつ!？」

「八海山とか梵とかの諸々で日本酒12本頼まれてたけど、店長さんのお陰で思ったよ
か早く詰められそーだ」

「あうう……。遅かったですか……………」

せつかく新城先輩が来てくれたのに、もうおつかいは終わってしまおうそうでした。

お父さんはカウンターで先輩の言う通り、酒瓶を袋に詰めています。

しょんぼりです……。わたしがもつと早く起きてられたら……。

「あー……………とここで、だけど」

「? どうしました?先輩」

「朝比奈。お前寝起きで来たか?」

「あやつ!? な、なんで分かつちやっただんですか!?!」

「いや、髪」

「髪? ……あやややややや!」

言われて初めて、髪の毛が起きた時のままだったのに気が付きました。

いつものサイドアップテールじゃなくて下ろしたまま。梳かしてもいないのでぼさ

ぼさでした。

……そういえば、お母さんにお店に降りる前に、途中で梳かしていきなさいってブラシを渡されてたような。

「ご、ごめんなさい〜！ 朝急いでたら、こうなってしまうって〜！」

「謝られることじゃないけどさ……。急ぐ用事でもあったのか？」

「あや？」

「なんか店長さんが俺がいるーって呼んでたけど、まさかそれでってわけじゃねえだろうし」

「はい。そうですよ？」

「……………」

「？」

口元を抑えて俯いてしまいました。

……………は！ わ、笑ってしまう程にぼさぼさになってしまってますか!?

「は、早くブラシ！ ブラシをしないと〜！」

「つっても桃子。いつも母さんにしてもらってるから、自分でやったことねえだろ？」
「……そうなんですか？」

「お、お父さん〜！」

……ちよこつと涙声でお父さんに怒りますけど、実際そうでした。

自分だと上手く梳かすことが出来なくて、ぼさぼさが直らないままだったり、直すのにすごく時間がかかっちゃったりします。いつもならお母さんに直してもらうのですが、今日は急いでいたのでそんな暇もありませんでした。

渡されたブラシで梳かそうと頑張りますけど、中々髪はブラシの歯を通してくれませ
ん。

「あややあく……。か、絡まっちゃいます〜……」

「焦んなくても、兄ちゃんは逃げねえぞ」

「そ、そういう問題じゃなくてえ〜……」

「……………はあ。朝比奈」

「は、はい！」

「ブラシ貸せ。俺がやってやる」

「……………あやつ!？」

新城先輩は、ブラッシングがとつてもお上手です。

この前にゆるろんのみんなでその腕前を確かめるって言ってやってもらったことがあるのですが、あんまりにも上手くて優しかったので、驚いちゃいました。

なんでも、幼馴染の上条先輩の髪の毛を昔よく弄つてたことがあって、今でもたまたま先輩のお母さんのブラッシングをすることがあるそうです（いつもは先輩のお父さんのお仕事だそうです）。みんなでもらった時は久しぶりだったって言ってましたけど、全然そう思えないくらい腕前でした。

……………そういえば、ブラッシングしてもらった後、すみれ堇ちゃん先輩となぎこ凧子ちゃん先輩と陽歌ちゃん先輩はぐったりしてましたけど、あれはどうしたんでしょう？

「♪」

そして、今は新城先輩のお膝に乗って、ブラッシングをしてもらっていました。

お店のベンチに座って、優しく丁寧にわたしの髪の毛を梳かしてくれます。

お膝に乗るとき「俺が座るよう言ったのは隣なんだけど……」って言ってましたけど、顔を合わせたら「……なんでもない」って梳かし始めてくれました。

ご迷惑だったでしょうか？ でも、先輩のお膝はなんだか安心しちゃうので、好きなんです。

「先輩。枝毛とかないですか？」

「ないことはないけど、まあ寝起きならこんなもんだろ。跳ねてるのも少ない方だし。日頃からよく手入れされてる証拠だ」

「えへへ♪ 先輩に褒められちゃいました」

お手入れしてくれてるお母さんには感謝いっぱいです。

先輩はいきなりブラシじゃなくて、手櫛や頭皮マッサージから最初にしてくれます。ちよつとくすぐったいんですけど、終わった後はすつきりした気分になるのです。

「やっぱり、先輩はお上手ですね」

「そうか？」

「はい。わたしがやろうとするといつもぶちぶちつて髪の毛が抜けちゃって痛かったりするんですけど、先輩がしてくれろとそういうの全然ないんですよ」

「こういうの、力任せにやるとよくないからなあ。上手く察知できるようにするまで結構かかったもんだよ」

「そうなんですか。先輩は、こうしてブラッシングするの、疲れちゃったりしませんか？」

「いんや。こーうやつて髪弄ってんのも好きな方だし、お前の髪も手触りいいしな。俺としても楽しませてもらってるよ」

「あやや……。なんだか照れちゃいますね」

引つ掛かりそうになったら一度ブラシを外して髪先の方に移す。それがコツだとは聞きましたけど、わたしにはよく分からないです。

先輩は一房一房、一本一本大事そうに梳かしてくれます。

ゆつくりと時間をかけて、傷つけないように優しくしてくれるんです。

それがほかほかとあつたかくて、気持ちいいのです。

まるでお日様の中、お花畑で眠ってるみたいで……。

なんだか……。

だん、だんと……。

眠た、く……。

……。

……。

……。

「……おい朝比奈ー？」

「くう……」

「朝比奈ー？ 朝比奈さーん？ 終わりましたよー？」

ぺちぺち。

「すう……すう……」

「……寝てるし」

「むにやむにや……」

「はあ……。見^み吉^{よし}じゃないんだから、ものの数秒で寝に入るんじゃねーよ」

「うにゆう……。しんじょうせんぱあい……」

「寝言で俺が出てくるのも一緒だし……。ま、わざわざ寝てんのを起こすのもあれだしな。店長さーん。朝比奈ここに寝かしときますよー?」

「ああ、悪いな。酒瓶は詰めたから、もう持っていけるぜ」

「よつと……。すみませんね。娘さん、ああいう子だからついつい甘やかしちゃって。こういうのは親のやることでしょうに」

「気にすんなよ。俺としてもお前達を見てると、なんつーんだ? 和やかな気分になるんだよ。まるで本物の兄妹みたいでな」

「あいつが妹だったらもつと甘やかすでしょうね。じゃ、お代はこれで」
「おう。じゃあ釣りはこれだな」

「はーいつと。じゃ、朝比奈。またなー」

「は!!」

「うおう!!」

飛び起きました。

い、今寝ちやつてましたか?!

「あやや! ご、ごめんなさい〜! せっかく先輩がブラッシングしてくれてたのに、わ

たしつたらついで〜！」

「いや、眠たくなるほど気持ち良かったんなら、こっちとしても嬉しいけどさ……」

「あ！ せ、先輩！ もうお帰りですか!？」

「あ？ ああ。そこまで急ぎでもないけど」

「良かったら、わたしにも持たせてください！ ブラッシングのお礼です！」

「女の子に荷物持ちなんざさせられません」

「そんなあ〜。わたし、こう見えても力持」

くう〜〜〜

「ちなんで、す、よ……」

「……………」

わたしのお腹からの音でした。

「……………」

「……………あややあ」

あたし——葉月はづきゆずこ柚子は、溜息をついていた。

「暇だなあ……」

あたしの実家は蕎麦屋を経営している。

そんなに大きくはなくて従業員も多くはないお店だけど、商店街のみんなが足繁く通ってくれるのもあってそれなりに繁盛している。

モモとの予定がなかったりラクロス部の部活動がなかったりで暇な時、お店が大変で人手が足りない時にあたしもお手伝いとして働いている。

今日は前者なので、お店の制服を着てテーブルを拭いてる所なんだけど……。

「モモも今日は部活ないって言ってたし、ドーせだったらどこかに遊びに行けばよかったですか」

いや、今からでも誘いに行けばいいかな？

でもどこかかってどこに？

ファンシーショップでシール探し？

ゲームセンターで太鼓の達人？

それともどっちかの家で遊ぶかな？

うーん。

そう言えば、新城先輩の家ってどうなってるんだろ？

この前モモとその話になったけど、先輩の家庭環境ってなんだかものすごいことになってるって聞いてるんだよね。

「先輩自身もものすごい人だから、正直納得しちゃうんだけど」

ね、と言ったところで。

お店の入り口が開いた。

ガラガラ、と引き戸特有の音を立てて、お客さんが入ってくる。

「あ、いらっしやいませ〜！ ……って」

「ユズちゃん！ 来たよ〜！」

「おーつす葉月」

「モモ！ それに先輩！」

にここに笑顔のモモと、重そうな袋を提げた新城先輩だった。

——樽をすればなんとやら、つてことかな？

「——まあというわけで、そろそろ良い時間だったし葉月ん家の蕎麦でも食いに行くかって話になったんだよ」

「あっはっは！ なんだかモモらしいですねー」

「あやや。は、恥ずかしいですよ〜……」

早速二人を席へと案内した。

メニニューを開きながら何を頼もうかと悩むモモと、モモのお店で起こったさつきまでのことを話してくれる新城先輩と、それをテーブル脇で立って聞いているあたし。

あたしがお暇している時にそんなことになっていたとは。

我が幼馴染ながら、なんて可愛らしい生き物なのか。

「でも、良かったんですか？」

「ん？ 何が？」

「いえ、来てくれるのはあたしとしても嬉しいんですけど。先輩のおじいさんが来るっていうなら、早めに帰らなきゃいけないんじゃないんですか？」

「ああそのことか。心配すんな。祖父様が来るのは夜だし、多少遅刻したって怒る人もねえよ」

「へえ。なんていうか、良いおじいさんなんですな」

「あれはただの爺馬鹿ってやつだと思うけどな……」

「先輩のおじいさんなら、良い人に決まっていますよ」

「その判断基準はどうなんだ？」

モモはお気楽っぽくそう言うけれど、あたしもそうに違いないと思う。

先輩がおじいさんの事を話す言葉に悪感情は感じられないし。何より、あの新城先輩のおじいさんだから。

「それで、モモはメニユー決まった？」

「あ！　そ、そうだったよ。えーつとえーつと……あやや。き、決められないですう
」

「あはは。これもまたモモらしいや。じゃ、あたしが良さそうなのを」

「え？　ユズちゃんが決めてくれるの？」

「うーんそうだな。……。モモなら、きつね蕎麦とか？」

「きつね蕎麦……。それ、いいかも！　それにするね？」

「はい。きつね蕎麦おひとつ」

「うし。じゃあ俺は」

「先輩は、イモ天蕎麦に、トッピングで海老天ととり天、ですよね？」

「わわっ！」

「……葉月」

「はい？」

「わかつてんじゃん」

「ふふーん」

親指を立てて口角を上げる先輩に、あたしも親指を立てて応える。

ちよつとした以心伝心。

なんだか誇らしい。

「すごいすごい！ ユズちゃんつて、エスパーさん？」

「まあ、新城先輩はいつもので通じるくらい頼むメニユーだからね。あたしも自然と覚えちゃったつていうか」

「他のメニユーも良いとは思うんだが、やっぱ天ぷらに還るんだよなー。汁に浸して食うのがいいんだよ」

「それじゃあ、そのお二つで！ お父さーん！ 注文いいー？」

「出来てるから持つてきな」

「はやっ!!」

先輩と同時ツツコミ。

調理室からオーダーを取る従業員に品物を受け渡しする場所（受け渡し口という）を見ると、確かにそこには二人が頼んだ蕎麦が二つ。

あたしまだ注文取ってきてなかったんだけど！ メモしたのが終わった瞬間だった

んだけど！

「いやいや！ なんでもう出来てるの!?!」

「ふっふっふ。柚子。二人の注文する蕎麦を読めるのが、お前だけだと思ふなよ?」

「あややく。エスパ―さんは、ユズちゃんだけじゃなかったのですね?」

「しかも作りたてだし！ 二人がいつ注文するかまで読んでたの!?!」

「ああ。お前の分も作ったから、二人と一緒に食べておいで。肉蕎麦で良かっただろう?」

「娘の分も既に読心済みだとお!?!」

「あ、それなら生卵乗せて月見にしている?」

「ちよつと外してた!」

そうして三人分のそばを持って、二人の席へと戻って行った。

「お待たせしましたーってあたしも食べることになりましたけどね」

「ううん。全然待つてないよ?」

「ほんとにだよ……」

それぞれ配っていく。

モモにはきつね蕎麦。

新城先輩にはイモ天(×2) 蕎麦(十海老天(×2) 十とり天(×2))
そしてあたしは肉蕎麦(月見)。

「……なんか、俺だけ盛り盛り盛りなんだけど」

「そこまではいりませんでしたか?」

「いや、嬉しいけどさ……。客に無断で金額増やすようなことしていいのか?」

「あ、お代は結構だそうです」

「あやっ!?!」

「マジで!?!」

「いつもあたしがお世話になってるからって、お父さんが」

「うわあ……至れり尽くせりじゃん……」

「あやや。お得しちゃいました」

「それじゃあ、食べましょうか」

「お、おう」

「はくい。それじゃ」

「「いただきます」」

手を合わせて食事の挨拶。

示し合わせたわけでもないけど、三人で割り箸を一緒に割って（モモだけ上手く割れなかった）、一緒に蕎麦を啜った。

うん。美味しい。

「……そういえば」

「ん？」

「新城先輩って、上条先輩と幼馴染だって聞いたんですけど」

「それあいつには言ってるよ。自分のミスでバレたこと結構気にしてるから」

「あ、はいわかりました。それで、聞いてみたいことがあったんですよ」

「聞いてみたいこと？」

「お二人って、小さい頃はどんな風だったんですか？」

「あ、それわたしも聞いてみたいですよ」

「んー……。まあいいけど、またどうしてだ？」

どうして、かあ。

まあ興味本位というか、なんで上条先輩がそれを一年間隠してたのだったのかっていうのもあるんだけど……。

「強いて言うなら、あたしとモモも幼馴染だから、でしょうか？」

「ふーん」

汁に浸した海老天を食べながら言う先輩。

あたしとモモは、家が隣同士なのもあって、幼稚園の頃から一緒だ。

モモはあたしの後ろについて回っていて、あたしもなんだか危なっかしいモモを放っておけなくて、それがずっと続いてたって感じで。

だから、先輩達はどんな風なのかなって。

「そーだなー……。ガキの頃っていうと、いつもあいつにや叱られてばかりだったな」「叱られて……。先輩、何をしてたんですか？」

「いんや。俺からは特に何も。ただ……。俺ってやつは昔からこうで、当時から同年代の

中じや喧嘩も強かったから、近所の悪ガキが悪さしてんのをのしてたんだよ」

「あやや……。先輩は、昔からそういう人だったんですね」

「つつても、負けはせずとも無傷ってわけにはいかなくてな。怪我だらけで帰ってきたのを親はよくやったって褒めてくるんだが、上条のやつはいつつも怒ってきてたんだよ。怪我してるところに絆創膏したり、かと思いきやべしべし叩いたり」

「あはは……。治したいのか悪化させたいのかわかりませんが、それ……」

「でも、それだけ新城先輩のことが心配だったんだと思います。わたしも、先輩が怪我しちゃったたら、泣いちゃうかもしれないです……」

「もう心配無用だつて。まあ無茶すんなつてことは言われたんだが、何言われたつて懲りようがなかったしな」

「けどまあ、と。海老天の尻尾までぼりぼり食べて、先輩は言う。」

「ガキの頃はいちいち怒られるのも嫌だったから。お蔭様で俺自身も怪我しないように立ち回るようにもなったんだよ」

「そうなんですな……」

じゃあ、先輩がどれだけ喧嘩しても怪我をしないようになったのも、元を辿れば上条先輩のお蔭ってことなんだ。

みんなが安心して喧嘩番長である新城先輩を見てられるのも、先輩が無傷で勝つから。

あたし達が安心してられるのも、上条先輩のお蔭ってことになるのかな？

「まあちようどノーダメで闘う技術を学んでた頃なんだけどな」

「台無しですよ！」

「あつはー。それとあれだな。クラスで俺等みたいに男女の組み合わせは無かったから、男女間の橋渡しをしてるところはあつたと思う」

「あ、そうなんですか？　あたし達のクラスは、ほんとに男女の垣根なしって時が多かつたんですけどね」

「うんうん。ユズちゃんはクラスの人気者だったもんね」

「へえ。ま、確かにそんな感じあるよな」

「や、そんなに大層な物でもないですよ」

「わたしとユズちゃんは共通のお友達が多くて、男の子も女の子も一緒にグループだったんですよ」

ああ、でも。

「わたしのお家に男の子のお友達を連れてきた時はお父さん、すつごく怖い顔をしてたんですけど。新城先輩だと全然そんなことないんですよね〜」

「……………」

押し黙るあたしと先輩。

「これはきつと、先輩がとっても優しくて、とっても頼りになる先輩だつてことが伝わってるからですね！」

「……………ウン。ソウダナー」

「……………ウン。ソウダナー」

モモは知らない。

新城先輩が、この商店街のことは全く別のお店で営業妨害をしていた、ヤのつく人達をこの町から追い払ったことから、商店街では英雄扱いされていることを。

多分きつと、商店街ではモモだけが知らない。

その後モモの眩しい笑顔から若干目を逸らしながら食事を終えると同時に、お客さんのラツシユがやってきて、あまりの多さに二人にも手伝ってもらうことになり。結局二人が帰ったのは、夕日が沈む頃となった。

生徒会役員役職変更

ある日、聖櫻学園生徒会長・天都あまつかなたが言った。

「役職、変えてみたいわねえ」

なんでもない日のことだった。

大なり小なり、善なり悪なりイベントが盛り沢山の聖櫻学園で、その皺寄せを引き受ける生徒会はほとんど日常的に仕事に追われている。

とはいえ、それにも波はある。

学校行事直前の準備、直後の後始末。そういった特に忙しい日に比べれば、今日はないでもない平和な時間だと言えるだろう。仕事も、普段に比べれば片付けられている方だ。

かといって無い訳ではなく、いつものように積まれた書類を生徒会の二人が片付けている最中のことであつた。

生徒会には現在三人の役員が部屋にいるが、他二人の仕事ぶりを前に残り一人が仕事をしているなどと認められる人間はいないだろう。

何せ、給仕係のように紅茶を振る舞っているだけなのだ。

その一人が生徒会長なのだから笑えない。

ちなみに生徒会にはもう一人、若林璃子わかばやしりこという三年生女子が会計に在籍しているが、彼女は家の事情で生徒会に顔を出すことは極めて少なく、また彼女の話題が上ることはほとんどない。かと言ってサボっているのかと言えばそうではなく、いつの間にやら彼女の仕事は終わった状態で提出されているのだから、不思議な生徒である。

「はーっ。」

誰にも向けたわけでもないかなたの言葉に、副会長である篠宮しのみやりさが反応する。

書類に判子を押しながら。

本来なら積まれた書類の大半は会長の仕事であるが、その会長がご覧の有様なので代わりを務めているのだ。

良くも悪くも面倒見が良い性分である。

下手に任せて逆に始末に負えなくなるのが恐ろしいのもあるが。

「役職、ですか？」

「私達つて、今期に入ってからずっと役職変わらないでしょう？」

「役職はそういうものですし、今期だつてまだ始まつたばかりじゃないですか」

呆れ交じりで応えるのは書記の嶋野睦^{しぎのむつみ}である。

彼女もまた積まれた書類と格闘している現状だが、一年である彼女もまた生徒会に入つたばかり。

それを成すのも彼女の生まれ持った真面目さ故なのか。生徒会と交流がある者は口々によくやると言うものだ。

「そうねえ。でも、たまには新鮮さも必要だとは思わない？」

「思いません」

「思いません」

にべもない二人だが、それで折れるかなたではなかった。

「だからね。一度、役職を変えてみたいと思うのよ」

「そんな暇があるなら仕事してください」

「そう言わずに、ね？」

「私達も暇なわけではないので……」

「ねえ、お願いりさちゃん♪」

「……………」

「ねえ」

「……………わかりました」

「副会長!？」

あっさり折れるりさ。

驚きの声を上げる睦ではあるが、仕方がないので。

かなたの『お願い』と小動物のような瞳を前に折れない者など、少なくともこの学園には存在しないのだから。

「睦ちゃん。役職変更なんて言っても、本当に変わるわけじゃないし。今日だけのちよつとしたお遊びみたいなもの。ですよね？ 会長」

「もちろんよ〜♪」

「言い出したらやるまで言うでしょうし、付き合つてあげましょ」

「は、はあ……」

何故私の方が説得される側なのでしょうかと、と思う睦だったが、民主主義は時に残酷なものである。

結局、生徒会役員による一日限りの役職変更が行われる運びとなった。

会長 かなた↓睦

副会長 りさ↓かなた

書記 睦↓りさ

「……はい。では副会、じやなくて篠宮先輩。これをお願いします」

「わかったわ、じやなかった。わかりました会長。代わりにこれにサインを」

「はい、確かに。……あ、この書類記入漏れがありますね」

「あら、そうなの睦ちゃん？ それじゃあ、直してあげないと」

「ですが会ちよ……副会長。この書類ですと、生徒の方のやり直しでないと受け取れませんで」

「今すぐには無理ね……です。後程処理するものとして、他の書類をまとめましょう」

「そうなのね。あ、りさちゃん睦ちゃん。紅茶はいかがかしら？」

「あ、ではいただきます会、副会長」

「ありがとうございます会ちよ……副会長」

「どうぞ」

「……………ふう」

アールグレイを一口飲んで、ほっと一息吐いて。

二人は思った。

(やることなんにも変わらないなあ……)

とりあえず席と腕章を替えて、呼び名とある程度の上下関係も変えてみたが、やることは結局仕事だった。

会長の権限は一時的に睦へと移ったので、会長を通さなければならぬ仕事はかなたを通さずに済むようになったが、それだけだ。

ちなみにサインの筆跡は睦でも、名義はかなたのものである。

「う〜ん……………」

肝心のかなたも眉を寄せた表情だった。

「なんだか、いまいちね〜」

「そもそもとして会長が副会長になっても、やることは変わらず紅茶を淹れることですからね……………」

「役職が変わったところで仕事内容が大幅に変わるわけでもないですし……………」

「あ、でも。会長席に着いたら、睦ちゃんちよつと嬉しそうだったわね〜」

「う、嬉しがってなんていませんよ！ ちよつと、ほんのちよつと誇らしい気持ちになっ

ただけですから！」

「それは嬉しがつてたでいいと思うわよ……」

「でもそうねえ。せめて生徒会とは違うお仕事してる人が一人でもいてくれたらな
」

「遊びとはいえ、流石に他の人を巻き込む気にはなれませんよ」

「それに、他の人を呼びに行くわけにもいきませんよ。そんなに時間掛けたくないです
から」

「うーん。どうしようかしら」

悩む三人。

発案者であるあなたはともかく、りさと睦の二人まで真剣に悩んでいるのは、真面目
に生まれた彼女らの性だ。乗せられる時はとことん乗せられるものである。

しばらく悩み続けていると、生徒会の扉が開かれる。

「こんにちは」

「あ、新城先輩」

「ああ、新城君」

「あらく。いらつしやうい♪」

言わずと知れた喧嘩番長・新城一也である。

生徒会の三人がぱたぱたと近付いていく。

「どうかしたの？ 生徒会に何か用？」

「ちよほどよかったです。この書類なんですけど」

「今日はアールグレイを淹れてみたの。新城くんも飲む？」

「待て待て。聖徳太子強要しないで」

一斉放射に制止を掛けて、改めて切り出す一也。

「まず篠宮から」

「あ、えっと。生徒会に何か用？」

「霧生に頼んでた書類運びだけど、俺が代わりにやっといたから報告」

「そうなの？ ありがとう。霧生さんは？」

「望月先輩をお説教中」

「ああ、そう……」

「はい鳴野」

「先輩。この書類なんですけど」

「ん？ ああ、うちのクラスの本類だな。それが？」

「記入漏れがありますよ。ほらここ」

「んー？ ……あー、これか。八束に渡しとけばいい？」

「いえ。生徒会による書き加えは駄目ですけど、これくらいなら2—Cの先輩が書いてくだされば」

「八束の字と比べて俺の字汚えからな……ま、いいか。で、会長ですね」

「えつとく。私は」

「紅茶なら頂きます」

「はくい。ちよつと待っててね」

「言葉先回りするんですね……」

「ま、目的の八割は紅茶だったし」

「報告ついで!？」

で、と一也は言う。

ずっと気になってたんだが、とも。

「お前等、なんで腕章が変わってんだ？」

「あー……………」

「いいでしょう？ 私、今日は副会長なのよ」

「役職ランクダウンしてますがそれは……」

「あ、そうだわ！」

「ん？」

「新城くんにも参加してもらいましょ」

「……………はい？」

会長 睦↓りさ

副会長 かなた↓一也

書記　りさ↓かなた

番長　一也↓睦

「いや、何これ？」

「役職変更、だそうよ」

「番長って役職だっけ!?　称号でしか無かったよね番長！」

「生徒会で番長っていう役職を作るのも、いいかもしれないわね」

「継ぐの!?　継承性になるの番長!?　模範になるべき生徒会の役職に不良の象徴である

番長が君臨していいの!？」

「大体なんで私が番長なんですか!?　くじ引きとはいえあまりにも似合いませんよ私に

は！」

「それ言ったらこの生徒会似合う人一人もいないけど!？」

こうは言いながらその腕にはしっかりと副会長の腕章が着けられていた。暴において最強の一也と言えど、かなたのお願いには勝てた試しがない。

「でも、いいと思うわ〜♪ とつても可愛らしい番長さんが出来ちゃったもの〜♥」
「か、からかわないでください!」

「あー……………。なに? さつきまでこんなことして遊んでたのか?」

「始めたのもさつきなんだけどね……。三人だけじゃ腕章諸々が変わったただけだったからどうしようかってなつてたの」

「俺が言うのもあれだが仕事しろよ」

「してたわよ。でも、似合つてるじゃないその腕章。来年になったら本当にそれを着けることになるのもいいかもね」

「生徒会なんざ手伝いだけで一杯一杯だつつの。鳴野もショックを受けた顔しない」
「でも、イマイチ実感が湧かないかもしれないわね〜…………」

番長の腕章（即席紙製）を着けた睦を抱き寄せながら、かなたは言う。

「実感、ですか?」

「腕章を交換したのはいいけど、お仕事してる時つてそんなに役職つて意識しないのよね〜」

「それは、会長が仕事を、しないから、でしょう…………!」

「そうかしら〜?」

「会、かなたさん。睦ちゃんが抱き締められすぎて余裕なさそうですよ」

「つーか、番長の仕事ってなんですか?」
「番長ジャッジメントですの!」とでも名乗りを上げて不良生

徒ぶちのめすんですか?」

「「?」」

「ネタが通じない……」

残念ながら生徒会の三人はとあるライトノベルを読み漁る人種では無かった。

これはボケた一也の落ち度である。

と。

そこで唐突に何かを思いついたかなた。

「あ、そうだわ〜!」

「? どうしました?」

「名乗りを上げるのはどうかしら〜?」

「……はい?」

「な、名乗り、ですか?」

「そうそう。「私は聖櫻学園生徒会書記、天都かなたです」。っていう風に、ね？」
「ああ。そういう感じで」

某塾長が頭に浮かんだ一也は、早速取り掛かる。

「俺が聖櫻学園生徒会副会長！ 新城一也だ!!」

「わあ〜♪」

ぱちぱちぱち、と拍手を送るかなた。

結構ノリがいい彼は「以上!」で締めようかと思っただが、後に続くであろう二人に合わないかなのでやめておいた。

「ほれ、次」

「え!?! わ、私!?!」

「どーせ会長に言われたら渋々やることになるんだし、さっさとやっちゃった方がいいだろ」

「そ、そう言われても……」

「ねえ、りさちゃん？」

「ほれほれ。篠宮会長の名乗り上げをこそ所望だぞ」

「うう……」

意を決し、りさも立ち上がった。

「わ、私が聖櫻学園生徒会長！ 篠宮りさよ!!」

「わあ〜♪」

「おおー」

ぱちぱちぱち、と二人で拍手を送る。

赤く染まった顔で現部下二人を睨みつけるが、迫力は0だった。

ストン、と元の席に座り直し、他二人と共に視線を最後の一人へと送る。

「……な、なんで見ているんですか？」

「だって。みんなやったわけだから、ね〜？」

「そうね。睦ちゃん、いえ。睦番長。是非名乗りを上げて頂戴」

「い、嫌ですよ！　なんで私が！」

「篠宮だって恥を忍んでやったのになー」

「うっ……」

見え見えの挑発を放つ一也だったが、睦には大ダメージだった。

繰り返し言うが、鳴野睦は真面目である。

こんな見え透いた挑発であろうと、流すことが出来ないのだ。

「うぐう……」

しばらく歯噛みしていた睦だが、三人の視線に耐え切れず、立ち上がり
はしなかった。

「わ……私が、聖櫻学園、番長。鳴野睦、です……」

「……………」

「な、なんですかその冷ややかな目は!？」

「手緩い」

「え？」

「これはあれだな。思い切りが足りんからだな」

「な。お、思い切りって」

「よし鳴野。ここは立ち上がって決めポーズもつけよう」

「決めポーズ!? ここですか!？」

「それとあれだ。俺達が見てるってこと意識しないよう、まずは後ろ向いて、そこから半

回転でビシッと決めよう」

「それ余計に恥ずかしくくないですか!? 回って決めポーズって、魔法少女じゃないんで

すからー!」

「面白そうね。お願い睦ちゃん♪」

「その広いスペースの方がいいわね」

「会長!?! 副会長!?!」

再び民主主義の残酷さに翻弄され、生徒会室の広がったスペースへ移動させられる

睦。

「ううう……。こ、こんなのこれつきりですからね！　もう絶対やりませんからね!!」

「わかったわかった。じゃ、いいぞー」

「くう……………」

先程よりも歯噛みの時間は長くなったが、やがて両手をぐつと握った。

三人に背を向けた体を、半回転。

両足をクロスさせ、右手を左前の腰の高さ。左手を顎に添えて。

高らかに名乗り上げた。

「私が聖櫻学園番長!!　鳴野睦です!!」

「はい。オツケーです」

ピピッと電子音を鳴らす一也のスマホ。

「……………え？」

「いやー。テイク4ぐらいはやるつもりだったけど、流石嶋野だなー。一発で決めてくれるとは」

「な、なにを、しているんですか……？」

「なについて録画だけど」

一瞬にして顔が真っ赤に茹で上がる睦。

「け、消してください!! 何考えてるんですか先輩!!」

「だって二度とやらないって言うからこの貴重な一回を永久保存しておこうと思って」

「そういうのは脳内に留めてくださいよ!! いや、脳内でも駄目です!! 動画を消して

記憶からも消してください!!」

「あ、新城君。私にも後で送っておいてね？」

「私にもお願いね♪」

「りよーかいです」

「了解しないでくださいってばああああああ!!!」

その後しばらく睦は食い下がり、一也が動画を消去する画面を見せながら消したところで、ようやく元の役職に戻って仕事を再開した。

一也が動画をコピーし、二つ用意して一つを消し、残り一つは三人に共有されたことを、睦は知らない。

2年C組の身体測定

今日は身体測定。

全校生徒が体操服を着て保健室にて身体のデータを取る日である。

まあそうは言っても、男子の身体測定など特に描写することもないので、さっさと終わらせてきた。

保健医である神崎先生が心拍測定の際、「結構見てきたけど、やつぱり貴方は違うのね………筋肉の質が」とか言って何やらぺたぺた触ってきたのは気になったが。

しかし、女性教職員に対して男の半裸を晒さなきゃいけないって、人によつては軽く拷問だよな……。

日頃から鍛えている俺も胸元（オブラートに包まず言うなら、乳首）まで晒すのは気が引けたくらいだし、そうじゃない奴は精神がやばそう。

「ふむ」

うちに男職員が理事長しかいないのもあれだが、こういうのって外部の医者と呼んで

くるものじゃないんだろうかと思いつながら、測定データを見る。

正直言つて、あまり注意深く見る気は起きなかった。

我が家では身体測定など月1、場合によっては2くらいの頻度で結構詳細に調べていくので、自分の身体のこととは学校で調べるよりも深く知っているのだ。

なので見るとしたら、去年のデータとどれぐらいの差が出たか、ぐらいである。

「結構差が出るもんだな……。180超えても」

成長期における成長速度に若干の感銘を受けながら歩いていると、前方に小柄な男子を発見した。

「はあ……」

「お。……」

背中から哀愁漂う円岡燕だった。

「……よう、燕」

「あ、兄貴……」

声を掛けるとちゃんと振り向いたが、しかしその顔は浮かない。

燕の特徴であるアホ毛もしょんぼりと項垂れているようである。

このアホ毛は燕の半身と（心の中で俺に）呼ばれ、燕の心理状態を見るにあたって分
かりやすい指標だ。

「兄貴は、身体測定。どうでしたか……？」

「そんな顔してる奴にあまり言いたくないんだけど……、そうだな。背は4センチ伸び
てて、体重は3キロ増えてた。去年よか筋肉量が増えたしな」

「……やっぱりすごいなあ。それに比べて……」

「あー……」

察するに、背が伸びなかったのね。

燕は周りの男子と比べて小柄なことを気にしている。

昔はそれと気弱な性格が災いしていじめを受けていたと聞いているし、そうでなくとも成長期に成長しないというのは、男子には心に来るものなのだ。

2 m近くある狼丞は元より、俺も180台と高身長に分類される体格を持っているのもあって、周りとの比較が加速しているのだろう。

顔を俯かせている燕に、俺は上から声を掛ける。

「燕」

「は、はい」

「知ってるだろ？ 身体が小さかろうが、喧嘩が弱かろうが、かつこい奴はかつこいもんだってよ」

「……そ、そうですけど」

「小さいのが嫌なら、背を丸めて小さく見せんな」

「う」

「シャキツとしろよシャキツと。お前は、俺が名前で呼ぶ男子の数少ない一人なんだぜ？」

「……………兄貴が男を名前で呼ぶのは、兄貴が認めた男だけ。は、はい！」

「誰が何と言おうが、お前はかつこい男だ。な？」

「はい！ ありがとうございます、兄貴！」

顔に気合が入る燕。

よしよし。元気づけられたか。

ほぼほぼ過去に言ったことの反芻だったけど、暗い顔されんのは気分が悪——

「あ！ 兄貴！ 聞いてくださいよ！ 俺、ついに今回2m超えたツス!!」

「……………」

「……………」

「いやー。今までずっとギリギリ届かない感じだったもんで、この大台に乗ると気分が
いいツスね！」

「……………」

「……………」

「お！ 燕もいたのか！ お前は結果どうだったよ!？」

「……………」

「……………」

「ろ？」

「狼丞くんなんか嫌いだあああああああああああ
!!!」

絶叫とも取れる声を上げながら、燕は廊下を駆け抜けていつてしまった。

「……………? どうしたんスカね燕の奴。ねえ兄貴?」

「とりあえずお前は俺に謝れ」

「え!? す、すいやせんツス!!」

折角の俺のフォローが台無しだよちきしょう。

「つたく。デリケートな少年心に軽々しくナイフを突きたてやがって」

「はあ……あの、何があったんスカ?」

「向こうから来るまでお前は関与せずにはばらく放っておいてやれ。身長の話も話題に出さない」と

「り、了解ツス」

「で、話は2mで終わり?」

「あ、いえ。それと、向こうにいる奴等から、兄貴に頼みがあるって」

「頼み？」

狼丞が視線を寄越した方を見ると、そこには同学年であろう男子が数名。期待の眼差しを俺達に向けていた。

ふむ。俺に頼みか。

わざわざ狼丞に伝言を頼むとは、どんな事情なのやら。

「あいつらはなんて？」

「ええ。そのまま伝えると」

ゴホン、と咳払いしてから狼丞は言った。

「『番長のお知り合いの女子達の身体測定事情！ 聞いてきてほしいです！』とかなんとか」

「断固拒否!!!」

「ダーリン♡」

「ぐはあつ」

教室に入って数歩歩いたら抱き付かれた。

「褒めて褒めて。私すごいんだよ」

「だーもう！ おいこら見吉！ 何かある度抱き付くなって何度も言ってるだろーが
！」

「えへ♡ ダーリンは抱き心地いいな」

「はーなーせて！」

身体全部を密着させて、俺の身体に顔を埋める見吉をベリツと引っぺがす。

「うきやう。もお、ダーリンは恥ずかしんぼなんだからあ」

「躲さないだけ甘やかしてるわ!! だだ甘だわ!」

「つか体操服なんて生地のおっすい服で抱き付いてくるんじゃねえよ!!」

「しかも女子の身体測定はパッドとかの不正を防ぐためにノーブラなんだろ!？」

「そんなんで密着されたら大変なことになるの!!」

「主に俺が!!!」

「そうだねえ。私、ダーリンのそういうところ大好きだよ」

「ったくもー……。で? 何を褒めろって?」

「あ、そうだそうだ。ダーリンに、喜んでもらえるかなって思ってた」

「俺が? 何故?」

「うん。今日、データを見て分かったんだけどね?」

「うんうん。データを見て?」

「去年よりおっぱいが、2カップ大きくなってたの」

「そっかそっか見吉は順調に成長して俺は嬉しいなってアホかあーっ!!」

「周りを気にせず叫びつつコミ。」

「スリーサイズは日頃から計ってるからあまり気にしてなかったんだけどね？ 学校のデータ見てみたら、前よりすっごく成長してたんだ」

「心に留めておけよそういうの!! なんでわざわざ自己申告するの?!!」

「男の人って、そういうの好きかな」って

「教室でそれを聞かされる俺の身にもなれや! 今日の保健室の気恥ずかしさを軽く凌駕するからなこの状況!」

「ん。二人きりならいいのお?」

「……………駄目!」

悩んだけどやっぱり駄目!

むしろ俺の理性が危険信号!!
シグナルイエロー

ジグザグになりそう!!

「勘弁してくんない!? そういうの心臓に悪いの! いつまでも自分を信じてられないの!」

「うー。ふあああ〜……………。ちよつと眠くなってきたかな〜…………。だ

くりくん、だっこだっこ」

「だああああああああ!!」

(……見吉さん、やっぱりすごいなあ)

教室の後ろではしゃいでる二人を見て、私——白鳥詩織は思う。

新城くんは見吉さんにお説教してるのに夢中で、見吉さんは新城くんに夢中で、自分の席からじーっと見てる私に気付く様子は無い。

私はおろか、クラスの大多数の人に注目されているけど、それを気にしてる風じゃなかった。

いわゆる、二人の空間。

甘酸っぱい空気とは、ちよつと違う気がするけど。

(ああいう風に、人前でも新城くんに甘えたり、好きって言えることもそうだけ……)

2カップ。

胸が2カップ成長した。

……去年でも、見吉さんはスタイルの良い人だったのに。あれから2カップも成長したなんて。

やっぱり……恋をしたから、なのかな？

(それに比べて私は……)

手元にある身体測定の数値を見る。

白鳥詩織

しらとりしおり

身長：156cm

体重：45kg

B (バスト) : 72cm

W (ウエスト) : 55cm

H (ヒップ) : 75cm

(去年から1cm大きくなっただけじゃなあ……)

成長しなかった時期があったことを考えたら、成長するだけマシかもしれないけど。背もちよこつとしか伸びなかったし……。

(や、やっぱり男の人って、大きい方がいいのかな……?)

新城くんは、優しい人だ。

見吉さんだけじゃなくて、同級生。後輩の子。先輩にも。みんなに、私にも、優しくしてくれる。

言葉が強かったり、お説教したり、たまに軽く小突いたりするけど、それも新城くんなりの優しさだと思う。

でも、それとこれとは話が別で。

優しくするのは好きになるのは、また別であつて……。

(見吉さんは勿論、にった新田さんやひいらぎ柘さんも大きいしなあ……)

それに、新城くんの周りには可愛い女の子も綺麗な人もいっぱいいるし……。自信を持ってない私は、机で一人頭を抱えるしかなかった。

「すやあ……むにやむにや……」

俺への報告で満足したのか、自分の席にもつかないまま眠ってしまった見吉。

ほっとくわけにもいかないのがご要望通り（お姫様）だつこで運び、見吉の席へと着席させた。

実に幸せそうな寝顔で、怒る気力も霧散してしまうものだ。

口元に垂れていた髪を払ってやり、自分の席へと戻りに行く。

「……また騒がしかったわね」

「む」

道中、じつとりとした声を掛けられた。

ジト目でメガネの端を持ち上げる遠山未涼とおやまみずずだった。

「原因が見吉さんにあるとはいえ、大声出し過ぎじゃない？」

「まあそう言ってやるな。あいつもあいつでふざけるつもりも悪気があつたりもしないんだからよ」

「私は今あなたの話をしているんだけど」

「やめろ。男子高校生の純情が弄ばれたことを穿り返すんじゃない」

「……………純情、ねえ」

「その『ぬかしおるでこやつ』みたいな顔もやめーや」

「だったらあなたも私が変な口調喋る人みたいに扱うのもやめなさいよ」

けど、それはいいわ。と言って、遠山は手元の身体測定データの紙を持ち上げる。

もちろん俺には見えないように。

自分のデータを異性に見られたくないのは当然なんだろうが、こいつの場合同性にも見せようとはしない。

「あなた、視力は？」

「あん？」

「視力よ。し・りよ・く。測ってきたんでしよう？」

「視力？ 聞いても面白くねーだろうけど？」

「聞いているのは私よ。どうだったの？」

「2.0 以上だったけど」

「ふーん……」

「聞いていてその面白くなさそうな反応はなんなんだ……？」

「そういうお前はとうだったんだ？」

「女性に身体測定の数値を聞くのはセクハラよ」

「「お前視力いくつだった？」でセクハラが成り立つならこの世は性犯罪者だらけだ
よ」

「………0.2。裸眼でね」

「0.2」

「眼鏡ありでも0.8が限界だったし、年々衰えてきてるわ……」

「とか言われてもなー。数値の数値じゃどれぐらい見えてるかなんて、聞いたところ

「でわかんねーし」

「かなり厳しいわよ? 例えば、眼鏡を外してどこまで見えるかって言うのと」

遠山は眼鏡を取り、適当な方向へと指差して――

「はあ……」

「? 溜息なんかついて、どうしたの霧生さん」

「あ。八束さん……。いえ、ちよつと……」

「ちよつとって顔じゃないわよ? 話してみてくれない?」

「……」

「勿論、無理には言わないわ。話したくなければ――」

「……つてたの」

「え?」

「……大きく、なつてたの」

「あら。よかつたじゃない」

「よかつた!?! なにが!?!」

「え？　だ、だって、女の子でも大きくなった方がいいものでしょ？」

「よくない！　私はちつともよくない！　むしろこれ以上なんかいらぬわよ！」

「ええ!?!　ちよ、そんな！　霧生さんってそういう主義だったの!?!」

「ええそうよ！　女の子なら誰だって小さい方がいいものでしょ!?!」

「それはかなり少数派だと思わよ!?!」

「八束さんには分からない悩みよどーせ！」

「むしろ分かち合える仲間だと思ってた！　大きくなりたいと思ってるものだと思ってたわー！」

「むしろ小さくなりたいぐらいよ！　そんなに言うなら分けてあげたいくらいよ!!」

「失礼だけど分ける程ないじゃないの！」

「何言ってるの節穴なのその目は！」

「誰が見てもそう見えるわよ絶対！」

差した先で真面目女子筆頭コンビがアンジャッシュしてた。

「……………」

「……………」

「……………教室の何かを目印に出来ないくらいは見えなくなるわ」

「……………そうか」

「2. 0 以上……………」

遠山さんと新城くんのやり取りを私——川淵一美は遠巻きに聞いていた。
かわぶちかずみ

2. 0 以上。

それだけでも一般人ならあまり見かけられない視力なのだろうけど、もっと詳細に測れるならば彼は更に上の数値が出るだろうな。

「背もどんどん伸びてるみたいだし、身体能力も申し分なさすぎるくらいなんだけど……………」

「一美。まーた新城のスカウト考えてるの？」

隣にいた早見英子はやみえいこが若干呆れながら尋ねてきた。

「うん。でも、彼は部活や委員会には入らないっていう主義みたいだしね」
「あれだけ運動できるのに、勿体無いよねー」

前の席から話しかけてくるのは羽鳥晶はとりあきら。

英子と違ってサッカー部ではないけれども、新城くんの運動神経がスポーツで活かされないのが残念でならないのは、バスケ部とて同じなのだ。

勿論、彼とて才能の無駄遣いをしているわけではない。

彼には彼の道があつて、それがスポーツでないだけ。

「でもさ。助っ人くらいだったら受け入れてくれるんだからいいんじゃない？」

「そうは言うけど、サッカーだつてチームプレイなんだから一人だけ突出して上手くてもね。普段から合わせられるように一緒に練習してほしいんだけど……」

「新城だったら、むしろ男子達が必死になつて合わせてくれるようになるんだし。試合の数日前とかでも」

「ううん。やっぱりもう一回勧誘してみる」

「あつ！ ちょっと一美!!」

立ち上がって新城くんの元に歩き出す。

二人の制止も聞かず、私は何度目になるか分からないスカウトをした。撃沈だったけど。

「ふう……」

川淵にまでも勧誘され、遠山との会話は横槍で終わる形になった。

あいつも聞きたいことは終わったようだし、あれ以上会話を続けるのが難しそうなのを考えればいいタイミングだったのだろうが、話題が話題だからな……。

流石の俺も良心だけで部活に入るほどお人好しではない。

「ねーねー」

「あん?」

「またも席に戻る道中に声を掛けられる。」

「新城くんって、星座はなんだっけー？」

「ふるや古谷か。星座？」

古谷からは出て来そうにない話題が振られて何事かと思つたが、周りでは南田と桐山みなみだ きりやまがいて、星占いの雑誌を広げていた。

あーね。この二人がいるならこの話題も納得だわ。

しかし身体測定全然関係なくなってるな。

「獅子座だな」

「獅子座ねー。獅子座獅子座……どう？」

「『今日の獅子座の方は、身近な人との仲が深まるでしょう』だそうです」

南田が答える。

「えーつと。『ただし、張り合い過ぎると周りに迷惑が掛かるので、程々に抑えましょう』とのことで」

「張り合い？」

「あはは。新城くんと何を張り合うんだろうねー？」

「新城さんはそういうことしなれないと思いますけど、一応気を付けてくださいね？」

「いや、桐山。俺も占いもそこまで信用されてもだよ」

確かにそうそう危ないことしようとは思わんけどさ。

心配されるようなことがこれから起こるとも思えない。

「どうでしょうね〜？ この雑誌、よく当たると評判なので」

「えー？ 当たんのか？ そうなの？」

「この前水瓶座の人が食べ物に気を付けてという占いが出て、その日お腹を下したそうです」

「ダブルで当たってる!？」

「実はこれ予言の書だったりしてー!」

「おお！ 宇宙の星を観測した予言者が生み出した書の源泉を巡って、ライトセイバー

をその手に達人達が!!」

「この雑誌でそこまで壮大な物語に至りますか!？」

「最強の達人役に、是非新城さんを！」

「お前が撮るんかい!!」

「ラスボスは古代兵器で決まりだね！」

「神話に由来した兵器だと、より一層深みが増すかとー」

「話題脱線しスギイ!!」

「ちよいとデータ見ーしてー」

「見ーしてーってお前、ボク達のデータ強奪しといて頼み事みたいに言うなよ」

ボク——東雲^{しのめ}レイは、身体測定^{しのめ}のデータを目の前のクラスメイト・戸村に奪われていた。

ボクだけではなく、姫島と掛井のデータまでその手に収められている。

別に女に見られたぐらいでどうってことはないし、他二人もそこまで反応してないけ

ど、なんか腹立つ。

「ふむふむ……。あ、これなら今までのもちよつと調整すれば入るかな？ おつけありがとー！」

「掛井の。こいつあたし達を馬鹿にしてるぞよ」

「そうですね姫島の。自分のスタイルがいいからと見下しておいでですな」

「おい掛井。お前どつちかというと微妙に向こう側だろ」

ていうかコスプレのデータ集めかよ。

「あーいやいや。別にそういう意図はないんだよ？ でもみんな用に用意してたコスプレが入らなくなったら、私としても大損だしー」

「なんでボク達が着る前提なんだよ……？」

まあ、この学園のイベントで着せられるんだろうけどさ。

ぶつちやけサボりたいけど、出なきゃいけないのばっかだし。

こいつの場合はイベント関係なく着せようとするんだけど。

「でもさー。そんなに拘るものかな？　大ききだけが胸の価値ではないとトムトムは思うのですが」

「それは持つ者の意見だろ。持たざる者の気持ちを考えたことあるのか？」

「いや、別にいらんけどなわしは」

「あつさり裏切るなよ」

確かにお前は貧乳はステータスだとか言い張る奴——でもないな。

こいつは本当にどうでもいい派だ。

「いやいや東雲殿。女の価値が胸の大小でないのは、私も同じ気持ちですぞ？　むしろ

小さいからこそ萌えられるものがあるというもの」

「お前が言っても何の説得力もないなー」

「そんなことはないぞー。枕はこう、少し硬めの方が」

「ボクの胸に頭を預けて言ってんじゃねーよ！」

胸に飛び込んできた姫島の頭を拳骨で挟んでぐりぐりしてやった。

呻き声が聞こえてくるけど無視。

「やっぱり譲れないな。胸は柔らかく、そしてでかくだ」

「自分で言ってる悲しギャーッ！ 強めるな強めるな!!」

「むう……。そんなことないと思うけどねん」

「そこまで言うなら証明してみろよ」

「うー……あ、そうだ！ おーい！ カズくんちよつち来て——」

「うん？」

なんでここで新城？

意図を察せないのは新城も同じようだったけど、新城は疑問顔のままSF好き三人と離れ、こちらに来る。

「どうしたんだよ戸村」

「ちよつとね。レイきゅんはカズくんの前に立ってね」

「はあ……。これでいいのか？」

「うんうん。それでー」

「？ 何するん——」
「ほい」

新城の胸板に顔を押し付けられた。

「！」

「？」

「どやあ？」

「………もうちよいこのまま」

「おい」

「新城さん」

なんかホワツとしてる東雲を引つpegすと、モノクロが話しかけてきた。

「ん。どした?」

「勝負、です」

「は?」

「勝負? なんの?」

「ああ。私が説明するね」

唐突過ぎる宣戦布告に戸村共々疑問符を浮かべていると、伊勢崎いせざきがモノクロの後ろから出てきた。

その後ろで、熊田くまだが何やら机に頭を置いて悔しそうな顔を浮かべている。

……なんだなんだ?

「今、暇な時間を腕相撲大会して潰してたの」

「腕相撲?」

「そ。男子女子混合でね。それで、今のところ一番勝ち進んでるモノクロームさんが、シード枠の新城君に挑戦してるってわけ」

「いつの間にそんなことに……」

「かつての組み手では、あなたに、手も足も出ない、有様、でした」

「組手つつーかいきなり襲ってきたのを抑えただけだろ」

「そもそもあなたは、相手が、アンドロイドである、私であっても、女性には、暴力を振るわない方、です。しかし、この腕相撲という、競技であれば、問題なく、力比べが、出来るであろうと、判断、しました」

「いや、腕相撲であつても怪我するときはするもんよ……？」

腕相撲なら女子相手でも全力出せるかと言えば、全然そんなことはないし。

手加減して負ける気も起きないけど。

「私も、かるたで鍛えた初動の速さで勝つつもりだったけど……やっぱり力の強い人には敵わないね」

「あー……。ちなみに、他の人はどうなってるの？ 男の子は？」

「熊田さんと春宮さん相手に全滅した」

「……………」

熊田はともかく、春宮相手に全滅させられる2―C男子達の不甲斐無さよ……。

「加賀美さんはまだ帰ってきてないみたいだけど……」

「いやいや。加賀美殿も運動部ではありませんが、さすがにこの頂上決戦に参加できる方では……」

「だよねー……。あ、私達もパスね。全然だし」

「了解。じゃ、二人はこっちなね」

「……んー?」

俺、やるって言っただっけっかなあ?

伊勢崎は構わず手を引いてるし、空氣的にもうやる雰囲気なんです。

「おお! ついに番長がおいでなすったぞ!」

「新城ー! わたしの仇をとってー! モノクロームちゃんに勝っちゃってー!」

「モノクロームさんのアンドロイドパワーが上か! 番長の漢パワーが上か! ついに決まるのか!」

「明音! あかねほら! 二人が腕相撲するんだって!」

「お! 実況必要そう? じゃあやっちゃおうかな!」

「番長! これで勝てば名実共に学園で一番力持ちになれますよ!」

「モノクロームちゃん！ その無表情フェイスからどれだけのパワーが溢れ出てくるんだい!？」

熊田から仇討ちを頼まれて、春宮は櫻井を呼んで、男子達がいつも通り騒ぎ出した。なんなんだろうか、このクラスの結束力。

熊田が倒れていた机に誘導され、それを挟んで対面に立つモノクロ。
近くに櫻井が立つ。

「レディイイイス、アアアアン、ジエントルメエエエン!!」

「「イエアー!!」」

「さあ遂に！ 遂にやってまいりました！ このクラス、いやさ学園で一番の力持ちを決める戦い！ 腕相撲大会の決勝戦です！」

すごいマイクパフォーマンスだ。マイク無いのに。

「赤コーナー！ あまねく悪をその手で制圧してきた男の中の男！ 言わずと知れた、

だが言わずにはいられない！ 学園最強！ 聖櫻学園番長・新城一也選手！

「うおおおお！ 番長ー！！」

「一回でいい！ 番長に思いつきり殴られてみたい！」

「右手に番長！ 左手に番長！ 合体！！ これぞ！！ 究・極・番・長！！！！」

訳が分からないよ。

「しかし！ 彼女の力もまた未知数！！ 奇跡が生み出した人工美少女！！ 喧嘩は負けても力は負けないぞ！！ 青コーナー！ 謎多きアンドロイド・ミス・モノクローム選手！！」

「モノクロームたんキタ——（。A。）——！！」

「モノちゃんこつち向いてエー！！」

「モノクロームちゃん！ 俺だーッ！ 結婚してくれーッ！！」

これもうアイドル人気じゃね？

「ふむ。みなさん、熱狂、していらっしやいますね」

「熱狂つつか、もう発狂だよこれ……」

意味違わないかもしれないけど。

言いながらお互い肘を机に置き、右手を握り合う。引つ張りの力を加えるため、左手はお互いの机の左端を掴む。

握る力を込め始めたお互いの右手に、そつと手が添えられ、抑えられる。
春宮の手だった。

「じゃ、二人共。準備は良い？」

「はい。いつでも」

「万端だぜ」

「」「ゴクリ……」「」

机にいる三人以外から唾を飲み込む音が聞こえる。

春宮が手に力を込め始めた。

「レディイイ……」

二人の手に緊張が走る。

「ゴー!!」

手が離れたと同時に、始まった。

「さあ始まりました決勝戦！ お互いに一步も譲らないスタート！ 瞬殺劇はなかったようです!!」

力を込めたタイミングも、込められた力も互角。
どちらの腕も傾くことはなかった。

「これは、拮抗しているのか!?! 新城選手とモノクローム選手！ 組手は新城選手の完全勝利とのことでしたが、腕力は互角だと言うのか!?!」

「ば、番長パワーとアンドロイドパワーが互角だつて!？」

「これはどうだ!? 番長と張り合う人間の文明がすごいと言うべきか!? 人間の文明と張り合う番長がすごいと言うべきか!？」

「まどろっこしい! どつちもすげえでいいだろ!!」

「すごいね! 白熱した闘いだよ!」

「でも、組手だとモノクロームさんは手も足も出なかつたんでしょ? 腕力が互角なのに、そんなことあるの?」

「あるよ。新城の闘いは、元々ある力に人間の武闘技術を込めたものなんだ。如何にモノクロームちゃんの力が強くても、闘いが上手いわけじゃない。逆に言えば、そこを考へなければ互角でもおかしくないんだよ」

(熊田が解説役とか珍しいこと起きてるけど)

でもこれ、別に全力じゃないんだよなあ。

モノクロを馬鹿にしてるわけじゃない。

ただ、もし俺が全力を出して、モノクロがそれに耐えられず瞬殺となれば、彼女の腕が折れることだつて有り得るのだ。そうなつてもモノクロはパーツを変えれば済むと

か言うだろうが、そういう問題ではないので。俺の心が罪悪感で押し潰されるので。だから、適度に。

始まりは倒すのではなく、倒されないように腕に力を込めるのだ。

結果、お互いの腕は開始位置から動くことなく、瞬殺劇は無くなった。

後はここから、徐々に力を強めて、ゆっくり倒していく——

「おお!? 動き出したぞお!? 新城選手! 押しています! 少しずつ、しかし確実に! モノクローム選手の腕を倒していきます!!」

「ぎ、来た来た! やつちやえ新城! そのままいつちやえ!」

「うわわ。ど、どつちを応援しよ?」

「頑張れモノクロームさん! まだ試合は終わってないよ!」

「番長ううう! 遂に番長が文明に完全勝利を果たすところに立ち会えるんですねえええ!!」

「ま、まだだ! モノちゃんは負けてない! ああでも、番長にも負けてほしくない!」
「大丈夫だよモノクロームちゃん!! 腕相撲に負けたって君は可愛いよ!!」

ギャラリーがすごい邪魔。集中させてほしい。力加減間違えないように。

「ふむ。中々、やりますね」

いつぞやで言ったセリフを、モノクロームが言う。

しかし、いつぞやと同じく俺が優勢になっていき、腕がもう少しで倒れる位置へと――

「では、本気で、いきます」

「……は？」

「おっとお!!? 今にも負けるかと思われた刹那! モノクローム選手からまさかの本気宣言! 今までは手加減をしていたというのかあ!!?」

「わ、わたし達にまで手加減したまま勝ったってこと!?!」

「本気のモノクロームさん……。一体どれだけの力が」

騒ぎ出す周りだけど、ちょっと待って。

モノクロの本気って、もしかして

俺の目を見て口角を上げるモノクロ。

「あなたには、使っても問題ないと、判断、致しました」

「そりゃ光栄だけど！ 認められて嬉しいんだけど！」

一般人には危険が及ぶような隠し玉をここで使っちゃいます!?

「なんと！ モノクローム選手、本当の本気を隠していたとのこと!! しかしどうだ新城選手！ これにも耐える!!」

一気に負け寸前まで持っていたが、しかし屈する俺ではない。

急激な変化に驚いてここまで倒されているが、持ち直せない程ではないのだから。

事実、お互いの腕が震えながらも、さつきと同じ速度で位置が開始の時点に戻されていく。

中心に持ち直し、また拮抗が始まった。

今度はさつき程余裕はないが、ちゃんと力加減を間違えないでいられる。

「新城選手！ あそこから持ち直したぞお！」

「これで一回ずつ寸前まで！ 恐らく次に倒し始めた方が勝ちだよ！」

「番長ー！ モノクロームちゃん！ どっちも頑張ってくれー！」

「すごい熱気だね！ 私も負けないぞー！」

「いっけえー！ そこだー！ 倒してしまえー！」

「おやあ。なんだかすごいことになっていきますねー」

南田までギャラリィに混じってきた。

ん？ 南田？

あれ？ なんか忘れてるような――

バキイツ！！

破壊音が俺達の腕の下で響き。

机が真つ二つに割れた。

「あ」

二人の間抜けな声。

お互いの左手には、それぞれ机の片割れが。

「「「「あ」」」」

ギヤラリー達まで間抜けな声を上げていた。

「……………」

——俺達が力を込めていたのは、握り合った腕だけではない。

力を加えるために、反対の腕で台座を掴み、引つ張る。

そうして引つ張り合った、リミッターを解除したモノクロと、それと並ぶ俺の力。

薄い鉄と木で出来た机が、耐えられる筈がなかった。

「……………」

「……………」

「「「……………」」」」

「さういえば。

さつき南田に占い雑誌で、張り合い過ぎるのは駄目って言われてたなあ。

桐山にも忠告されたけど、まさかこんな形で張り合うなんて思ってたし……。

「な、何があったんですかこれ……」

戻ってきていた加賀美が尋ねてくる。

「……モノクロ」

「はい。なんで、しょうか？」

「今回の事で得られた教訓は、何だと思う？」

「教訓、ですか？」

「人は失敗しないなんてできないものだ。だが、失敗したあと、次に失敗しないように気を付けることは出来る。教訓として記憶に刻むことだな」

「ふむ。記憶に刻む、と」

「俺は失敗した。だから、教訓を記憶に刻む」

「成程。それは、一体、どういったものでしょう？」

「『遊びは真剣でも程々に』だ」

「わかりました。私も、それを教訓と、しましょう」

「では、記憶に刻むための作業をしましょうか」

「あ、月白先生」

この後滅茶苦茶説教された。

文緒とエレナと小瑠璃による小さなコスプレ撮影会

私——村上文緒は、頼まれ事を断れませんか。

所謂、押しが弱いと言いますか。

嫌なことを嫌とは言えず、流されるままに引き受けてしまい、後になって後悔するという経験を過去何度もしてきました。

(流石に悪意のあることであれば断れるのですけど……)

ただ、私に頼み事をする人は、みなさん悪気ない方ばかりです。

恥ずかしい思いも、苦勞した事も沢山あります。

けれどそれも、私を想ってくれていたたり、イベントを盛り上げたいがため。そんな思いを裏切るようなことも、悪いと思ってしまうのです。

それに——後になって、引き受けてよかったと思える事も、無い訳じゃありませんでした。

最初こそ嫌で嫌で仕方なくても、みなさんと一緒に頑張った事で、一人じゃ得難い大切な思い出を手に入れたことも、確かにありました。

だから、私に出来ることであれば、頑張ろうって、そう思えます。

思えますが――

「ねえねえ文緒ちゃん」

「? はい。どうかしましたか?」

「ちよつとねえ、お願いがあるのお」

「……………な、なんでしよう、か?」

「小瑠璃ちゃんかねえ? 新作の衣装が出来たからあ、文緒ちゃんに是非着てほし

いって言ってたのお」

「と、時谷ときたにさんが、ですか…………?」

「とつても可愛い服だったからあ、手芸部で撮影会したいなーって」

「撮影、するんですか…………?」

「ああ。もちろん私が撮影するわよ? 文緒ちゃんのベストショット、他の人に任せ

られないもの〜♪」

「あの、いえ。そういう問題ではなくてですね…………」

「文緒ちゃんが良ければ今からでも。ねえ〜?」

「も、望月さん……。その……」

「文緒ちゃんの可愛いところ、見たいなあ〜?」

「ですから、その……」

「ねえ〜? 文緒ちゃん」

「……………」

「文緒ちゃんっ。お願い〜い。ねえ〜?」

「……………はい」

「やったあー♪ 文緒ちゃん愛してるう〜♥」

また流されてしまいました。

——この人の気持ちは、善意と悪意。どちらに分類すべきか最近悩んでいます。

「あ、そうそう」

「はい?」

放課後。私と望月さんは部室棟を歩いていました。

タイミングが良いのか悪いのか、今日は図書委員の当番ではありませんでしたし、望月さんも私を撮りたくて居ても立っても居られないようで、誘われてすぐに手芸部へと向かっています。

……望月さんも、自分に正直なのであって、悪気はないのだとは思いますが。

私にとって一番のお友達とはいえ、困った人です。

「今日ねえ、新城くんも一緒に撮るのお」

「……え？　新城君が、ですか？」

首から下げたカメラを手に持ちながら私の前を歩く望月さんは、「そうなのよお」と言っただけに応えます。

「小瑠璃ちゃんが、今日の衣装は文緒ちゃんと新城くんのセットで見たいんだってえ」

「そうなんですか……」

「私はあ、文緒ちゃんの単独ショーにしたかったんだけどねえ」

望月さんはそう言いますが、私は少し胸を撫で下ろしていました。

新城一也君。

入学して僅か一年余りで、全校生徒の人気の的になった男の子で。

聖櫻学園の番長の名に恥じぬ、人並み外れた身体能力と誰にも負けない喧嘩強さを持ち。

その人好きから様々な人のトラブル解決に尽力し。

(私が、ちよつとだけ自分を好きになれた、切っ掛けをくれた人)

彼にも見られてしまうと考えると、恥ずかしさが増してしまいますが。

同時に、衣装に着替えて撮影されるのが私だけでない。彼もいるのだという、心強さも感じます。

学園のイベントで彼も普通見掛けない衣装に着替えていましたが、私のように縮こまってしまっていたのを見た記憶はありません。

かといってそういう催しに望月さんのような方ほど積極的というわけではありません。所謂ノリが良いというものでしょう。

物怖じしない所を含めた彼の強さは、私の憧れでもあります。

彼のように自分に誇りを持って生きられるのであれば、どんなに素敵なことでしょう。

(でも、新城君とセットの衣装？ 一体どういったものなのでしょう……)

階段を上り切り、昇降口を出ます。

手芸部へと向かう廊下で、肩から足首までロープで簀巻きにされた新城君を載せた台車を、時谷さんが押していました。

「ええっ!!?」

「おお！ エレナじゃないか。早速文緒を連れてきてくれたのか？」

「もちろんよお〜♪ 文緒ちゃんの写真のためならあ、私はいつでも迅速だものお〜♥」

「ちよ！ ちよつと望月さん!? なんで時谷さんと普通に挨拶しているんですか!? 新

城君が大変なことになってるんですよ!？」

「ん? ああ。そういえば文緒は、一也と手芸部に来るのは初めてだったな」

「大丈夫よお文緒ちゃん。新城くんは、小瑠璃ちゃんに連れてこられる時は大体あんな感じだからあゝ」

「大体こんな感じなんですか!？」

とても人に対してしていい扱いだとは思えません!？」

驚きに彩られてるとはいえ、放っておくわけにはいきません。急いで新城君の載せられた台車に近付き、彼を縛るロープを解きにかかります。

それほどきつく締められている訳ではなかったので、苦戦することなく結び目は解かれ、程なくして彼は自由の身となりました。

「ああ、村上先輩でしたか。わざわざすみませんでした」

「いえ、それは構いませんが……。どうしてこんなことに」

「まあその、縄抜けくらは造作でもないんですけどね」

彼はふっと、達観したような表情で言います。

「下手に抵抗して、ワイヤーで手足を縛られた後にロープで亀甲縛りされるよりは、マシかなって……」

「されたことあるんですか!?! 亀甲縛り!」

——彼はもう少し、女性に厳しくしてもいいんじゃないかと思いました。

「さ、入ってくれたまえ」

「ちわーつす。……あれ? 優木ゆうきは? とうか、部員ぶいんが誰もいませんね」

「ああ。今日は手芸部の部活動は休みでな。苗なえも他の部員も出払で払いっているんだ」

「それで、個人的な撮影会のために部室を貸し切ったんですか」

「なんだ? 苗なえがいた方が良かったか?」

「そうですね……。柔らかいなりに、ストッパーは一人でも多い方がいいかなとは思いますが」

ロープだけを載せた台車を押す時谷さんに先導されて、私達四人は手芸部へと足を踏み入れます。

あんな目にあつたにも関わらず、まるで気にしていない風の新城君は、器が大きいのか慣れてしまつてゐるのか。

部室では、色とりどりの布や糸が乱雑に机に置かれ、衣装は棚に仕舞われていたりハングラックに掛けられていたり、あるいは積み上げられていたりしていました。鮮やかであつたり煌びやかであつたり落ち着いた色であつたりで、目が疲れてしまいそうです。

聖櫻学園は行事の多い学園ですが、その時の衣装はこの手芸部が手掛けてゐるのだとか。

数多くの生徒だけでなく、先生方の衣装も用意されてゐることがあります。そのためか、手芸部はかなりの負担を担つてゐます。

その手芸部の中でも部長である時谷さんは、手芸において非常に優秀な手際を持つていて、その発言力は学園でトップに立つと言われているそうです。

彼女の、一部では姫と呼ばれる程の強引な性格も合わさり、彼女に頭が上がり、彼女の着せ替え人形とされる生徒が数多くいると聞いています。

新城君はそういうつた事情とは関係なく、ただただ彼の大好きと時谷さんの強引さに押

されて着せ替えに付き合っているのだと思いますが………まさかあのようなことをされているとは。

「小瑠璃ちゃん小瑠璃ちゃんっ♪ 早く早くっ♪ 早く撮影を始めましょうよっ♪」

大変ウキウキした様子で、望月さんが時谷さんを急かします。

「まあそう急くな。まず、二人にはこれに着替えてもらおうでしょう」

そう言つて、時谷さんは机に置いてあつた袋を二つ手に取り、私と新城君に受け取るよう差し出します。

一見して中身が窺えないようになっていている手提げ袋ではありましたが、押し付けられるかのようなそれを受け取ると、確かに服一式分の重量を感じます。

「き、着替えるんです、よね」

「心配するな。うちには着衣室が四つもあるんだ」

にこここ笑って時谷さんは部室の奥にあるカーテンが仕切られたロッカーのような小部屋を指差しますが、そういう問題ではありません。

「……ここまで来たんですしグチグチ言ったりしませんけどね」

諦めたように新城君は手提げ袋の中から、衣装を詰めた袋を取り出します。

黒を基調とした何かのようですが、畳まれ袋に詰められた状態では、どのような衣装なのかわかりません。

「その前にちよつといいですか?」

「もうなにいく? 私は早く、文緒ちゃんの本ストショットを撮りたいんだけどおく?」

「すぐに済みますって。とりあえず、望月先輩はその椅子に座ってもらえますか?」

「? (こ)おう?」

素直に部室の椅子に座る望月さん。

「んで」

と、新城君は言つて。

台車に載つていた、新城君を縛つていたロープを手に取り、
瞬く間に望月さんを縛り上げました。

「……………え？」

さっきのような簧巻きではなく、腕や足、胴体をそれぞれ椅子と固定するような縛り方で、望月さんは椅子と一体化させられました。

縛り上げた本人は、作業を終えて埃を払うように手をパンパンと叩いています。

「これでよし、と」

「な、なにがよしのよお〜！」

「おお……。私もそれなりに縛り上げは手慣れているつもりだが、君はあつという間だったな」

「小瑠璃ちゃんは感心してないでえ〜！ これ解いてよお〜！」

「あ、あの。どうしてこのようなことを…………？」

「いや。だってこうでもしないとこの人、村上先輩が着替えてる所を盗撮したりしそうですし」

「……………考えてみたらそうですね」

「ソ、ソナコトシナイワヨォー」

声が裏返っていました。

そんなことする人の反応です。

「俺が着替え終わったら解いてあげますんで、しばらくは大人しくしてください」

「ま、待ってえ〜！ 文緒ちゃんが！ 文緒ちゃんが目と鼻の先で着替えるのにい！

私にそれをお預けしろって言うのお〜!？」

「エレナ。体育やらで着替える時に文緒と一緒になんだから、お前は飽きる程見てるだろう〜！」

「飽きないのお〜！ 文緒ちゃんのお着替えシーンは、何度見たって飽きが来ないのお〜！ だから、だからあ〜！」

「じゃ、さつさと着替えちやいますか」

「そうですね……。望月さん、縛られてるのはお辛いでしょうけど、少しの辛抱ですから

ね」

「やくん♥ やっぱり文緒ちゃんは、私の天使——でもやっぱりこれ解いてえく!!」

ガタガタと椅子を揺らす望月さんに軽く手を振って、私と新城君はそれぞれの着衣室に入っついてきました。

望月さんが縄抜けをして、私の着替えを撮りに来るといったことも起きず。

制服を脱ぎ、手提げ袋から衣装が詰まれた袋を取り出し、袋を破いて、中にあった衣装に着替えましたが。

(……………メイド服、ですよね。これは)

着衣室に備え付けられた壁一面の姿見を通して、自分の姿を見ます。

丈の長い黒のロングドレス。

白いエプロン。

そして、白いフリルのカチューシャ。

……確か、ヴィクトリアンメイドと呼ばれていましたね。

メイド服の中では古いタイプの、シンプルさを特徴とした恰好だそうです。

奇抜だったり露出の激しい衣装でなくて、少し安心しました。

(で、でもやっぱり……。人前に出るのは、緊張しますね……)

学園のイベントで、大勢の人の前に出るよりは落ち着いていられますけれど、緊張を消せるわけではありませんでした。

撮影会なので望月さんのフィルムに収められてしまうでしょうし、何より普段の服装と違うというだけで、目立ってしまうのを恐れてしまいます。

それに、男性である新城君の目もありますから……。

『はい。解きましたよー』

『はあく。ようやく解けたわあ。もうっ！ どうしてこうも私を信用してくれないのか

しらあっ?』

『どの口が言うんだか……。それにしても一也、中々似合っているじゃないか！ やは

り私の見立ては間違つていなかったようだな!』

『そりやどうも。これとセットなら大丈夫だと思えますけど、先輩にエグイ衣装渡してないでしょうね?』

『心配性だな。そんな衣装を着せたら、君とのバランスが悪くなってしまうだろう?』
『普段からそういう衣装をやめて差し上げろってことなんですけど……』

新城君はもう着替え終わっているようでした。どうやら彼も、今回はそれほど奇抜な格好をしているわけではないようです。

私の心配をしてくれるのは嬉しいと思いますが……、それで諫める時谷さんではありませんし、それを断れる私でもありませんでした。

このメイド服とセット、ですか。

一体彼は、どのような衣装を着ているのでしょうか。

その好奇心を、縮こまる背中を押す言い訳にして、私は着衣室のカーテンを開きます。

「き、着替えました……」

「あ、終わりました——」

「え、ええたった今——」

彼がこちらを向いて。
絶句しました。

「キヤーツ!! メイド! メイドちゃんの文緒ちゃんだわあ〜♥」
「おお! 似合っているじゃないか! 流星は私だな!」

彼の後ろでお二人が騒いでいましたが、私はそれを遠い世界のように感じていました。

目の前の、彼。

新城君のその姿に、目を奪われていたのですから。

(し、執事服……)

漆黒とさえ言える黒の燕尾服。

同系色の、首元でクロスされたリボンタイ。

新城君の肩幅に広がる、白のワイシャツ。

胸元のポケットから覗く、純白のハンカチ。

大きな手を包む、白い手袋。

そして、その長い脚に纏った、燕尾服と同じ黒のスーツズボン。

執事服は、スーツやタキシードなどの境界が曖昧ではありますが、彼のその衣装は一目でそれだと分かります。

「わあ……」

絶句が解けると、思わず感嘆の声が出てしまいます。

黒と白のみで構成されたその執事服は、新城君の黒髪と体格にとっても良く似合っていました。

落ち着いた雰囲気を漂わせるその出で立ちには、彼の大人な部分を前面に押し出しているように。

もし、このような執事に仕えられていたとしたら、守られる喜びを惜しみなく感じられることでしょう。

「あ、あの」

「む、村上先輩っ」

「え？ は、はいっ」

何か言わねば、と思いを上げましたが、彼の声に遮られてしまいました。

心なしか、興奮気味です。

今闘牛のように鼻息荒くカメラのシャッターボタンを連打している望月さんには遠く及びませんが。

「一回こう……くるっと回ってくれませんか？」

「は、はい？ こう、ですか？」

くるっと回りました。

片足を軸に三百六十度回転です。

ロングスカートがふわりと浮かびますが、ブーツがちらりと見える程度で留まり、一回転し終えてまたふわりと元の位置に落ち着きます。

ふらつかなかったことに心の中で小さくガッツポーズをしながら、彼の方へ向き直し

ます。

「ほわー……」

「？」

なんだか幸せそうな顔をしていました。

どうしたのでしょうか？

「ほら。見惚れているだけじゃなくて、ちゃんと言葉にしないとだぞ？ どうだ？ 感

想は」

「え？ い、いいですよそんな……新城君に比べれば、こんなの」

「……いえ。言わせてもらいます」

何を言われるのか不安で彼の言及を避けようとはしますが、緩んだ顔を元に戻した彼に遮られてしまいました。

照れ臭そうにしながらも、新城君は言います。

「ものすつごく！ 可愛いです」

「~~~~~っ！」

「可愛いのもそうなんですけど、可愛いだけじゃなくて。村上先輩の可愛さと美人さの両立を、古き良きメイド服が更に引き立てていると言いますか」

「はわ。はわ。はわ」

「もし、こんなメイドに仕えてもらってたら、日々の疲れが帰ってくる度癒されると思いますよ」

「う、あ。そ、その」

まるで、私が彼に対して思ったことの、反芻であるかのような。

そんな賞賛の嵐に、顔に熱が籠っていくのが自分でもわかります。

恥ずかしくて仕方がないのに、それ以上に嬉しいと思う気持ちが込み上がってきて。

両手で口元を隠す仕草が、恥ずかしさを隠すためなのか、にやけてしまいそうな口角を抑えるためなのか。

(で、でも、新城君だって恥ずかしい、ですよね……?)

彼の顔は赤みを帯びていました。

軟派な男性でない彼がこうして女性を褒めるといふのは、勇気のいる事だと思えます。

それでもこうして、新城君は気持ちいを吐露してくれました。

「……っ、っ」

ならば、私もそれに応えなければなりません。

つかえそうになる言葉を、勢いに乗せて吐き出します。

「新によう君もっ、素敵だと思えますっ」

噛みました。

「……………」

先程までとは明らかに違うタイプの熱が顔に籠っていくのがわかります。新城君の顔も赤みが消え、どうしたらいいかと困っているようでした。

……私の、馬鹿。どうしてこういう時にちゃんと呂律が回らないんですか。

「……漢字の部首みたいな名前前で呼ばんでください。俺の名前は新城です」

やんわりと訂正されてしまいました。

うう。折角彼が褒めてくれたのに、これじゃ台無し——あれ？ あ！ こ、この流れて、この前オススメされたライトノベルの……。

「し、失礼。嘸みました」

「違う。わざとだ……」

「かみまみた」

「わざとじゃないっ!？」

「神谷いた？」

「そんなホイホイ会える人じゃないよ!？」

ついオリジナルのネタが口をついて出てしまいました。新城君はピッタリ合わせてくれました。

やりました。これでなんとか誤魔化せて

「嘸んじやった文緒ちゃん、かあゝわあゝいいゝいいゝ♡」

ませんねこれは。

場が落ち着いた所で、撮影会が始まりました。

私一人。代わって新城君。代わって私。新城君。私。新城君。二人一緒に。そしてまた私と入れ替わり立ち替わり撮られていきます。

望月さん、新城君一人の時に明らかにカメラの連写速度とテンションが落ちていました。素敵ですのに。

「ふむ。そろそろアクセントをつけたいところだな」

部室の椅子に座って、撮影の様子を眺める時谷さんが言います。

「ポーズをつけてみてくれ。動いて破けるようでは、衣装としては成り立たないからな」
「ポ、ポーズ、ですか……」

「ああ。なるべく衣装に合わせたポーズだとなおいいな」

「とは言いますが、執事らしいポーズってそうパツと浮かばないんですが」
「ど、どうしたらいいでしょうか……?」

「文緒ちゃん文緒ちゃんっ。まずはあ、スカートの両端を持って、お辞儀してみてくださいな
いかしらあ?」

「こう、ですか?」

「ああん! 違う違ううう! もうちよつと前頭筋に力を入れてえ! 大頬骨筋はやや
緩めえ! 鼻根筋と広頸筋はもつとキレッキレにい!」

「細かすぎて何も伝わってこないよ!」

正直新城君と同意見でしたが、とにかく表情筋を動かして望月さんの要望通りの表情

を模索していきます。

幾度かの試行錯誤の末、どうやらお気に召す表情が見つかったようです。

「うん、いい！ キテる！ キテる！ 文緒ちゃんのメイドポーズキテるわあ!! そつかそつかあ、リアルではそうゆう表情もするのねえ。うんうん♪ 私の妄想力に更に磨きがかかるわよお。 ありがとう文緒ちゃん！」

「そ、それは良かったですけど、ちゃんと新城君も撮ってあげてください……」

「ああああっその顔もイイ♥」

「いや、ですから……」

「今の顔もなしではない!!」

結局どの顔でいればいいのでしょうか。

「……俺、着替えてもいいですか?」

「それは私が困る! そうだな……。折角一緒に撮っているんだ。文緒と一緒に動いてもらうのもいいかもな」

「動くって。どうするんです?」

「まずは、文緒の手を取ってもらおうか。エスコートするようにどうぞ？」

「はあ。まあそれくらいなら。失礼」

「え？ あ」

瞬く間に左手を彼の右手に取られ、私の胸元の高さまで掬い上げられました。

……新城君は意識しているのか分かりませんが、その立ち振る舞いは頭から足先までピシツとしていて、さながら本物の執事のようなものでした。手を取る所作一つとっても、これから共にダンスを踊るのではないかと思わせるものです。

(で、でも……こういうのは、お姫様の立場の方がやるべきでは……)

ああ、でも。メイドと執事の秘密の舞踏会というのも、素敵かも——

(だ、駄目ですってば！ そういうのは考えないように、です！)

「文緒ちゃんが百面相してるう〜。どれも可愛くていいわあ♥」

「中々様になつてるじゃないか。それじゃあ、次は軽く社交ダンスを。出来るか？」

「軽くって、一般人が要求されて気軽に出来るもんじゃないですからね……？ まあ出

来なくはないんですが」

「よし。それじゃあやつてみてくれたまえ」

「それはいいですけど。……村上先輩？」

「ふえ？ あ！ は、はいっ」

い、いけません。話を全く聞いていませんでした。

見れば、彼は心配そうな顔で私を見下ろしています。

「大丈夫ですか？ 駄目そうならここでストップ掛けますけど」

「だ、大丈夫です！ 心配、いらないますから」

「そうですか？ それじゃあ、また失礼」

「え？」

取られていた左手が、私の肩の高さで彼の右手に添え置く形で握らされ。

空いていた右手を彼の肩に掛けられ。

そして、新城君の左手が私の背に回されて。

(こ、これって)

「力を抜いて」

その言葉を皮切りに、彼と私のダンスが始まりました。

「わ、わわ」

おっかなびつくり。そんなステップを踏んでいた私でしたが、彼の言う通り徐々に力を抜いていきます。

それだけで、彼が導くままにダンスを踊っていました。

彼が前に出れば、私は後ろに下がり。

彼が引けば、私は引かれ。

彼が回れば、私も合わせて回り。

決して広くはない手芸部部屋の空きスペースで行われる、小さな小さな舞踏会。

曲は何もなくても、頭の中にメロディが響いてくるような錯覚さえ覚えます。

(……す、す……)

本来こういつたダンスでは、女性からもアクションを起こすものだそうです。

ですが、運動音痴でダンス経験も皆無な私にそのようなことは出来ませんでした。

彼にリードされるばかりの、一方的なダンス。それが、ちつとも嫌ではありません。

むしろ、なんだか——

(楽しい……)

自然と笑みが零れてしまいます。

撮られている恥ずかしさも。新城君に悪いと思う心の咎めも無い訳ではありませんでしたが。

衣装によつて齎された別世界観と、彼の柔らかなリードが、私に高揚感を与えてくれて。

——そんな私を見てなのか、彼は柔和に微笑んでいました。

「ん？」

ダンスを終え、望月さんに抱き付かれていると、時谷さんが疑問声を上げました。

「文緒」

「はい。何か？」

「服のサイズ、合わなかったのか？」

「え!？」

「いや、気が付いたんだがな？ 首後ろにある結び目が、思ったより短めだったのでな」

「い、いえ！ そのようなことは！」

「?」「」

新城君と時谷さんが小首を傾げますが、こればかりは言えません。

特に、男性である新城君に聞かれようものなら——

「むうくん……う？」

望月さんが私から離れたかと思うと、唐突に両手をチヨキにして、指を合わせて菱形を作ります。

「^{スコリフ}診断！」

「トナカイドクターかあんたは」

新城君のツツコミも無視して、望月さんが菱形を通して私を見ます。

「ふむふむ……」と口に出しては角度を微妙に変えて観察をして——あれ？
なんだか嫌な予感が。

そういうえば、思い返すと望月さんの特技って。

「うん！ わかったわあ！」

「ちよ、ちよつと望月さん——」

「文緒ちゃんつ、ちよつと太っちゃったわね!？」

なんてことを。

「「え?」」

「き、聞かないで! 聞かないでください!」

「間違いないわあ! そういえば文緒ちゃん、この前身体測定の数値を頑なに隠してくれなかったらしい。ウエストが増えてたのが知られなくなかったのねえ?」

「わー! わー! わー!」

叫んで声を掻き消そうとしても、既に聞こえてしまったことは消せません。
な、なんでこういう時にデリカシーが無いんですか!?

「「……………あー」」

「も、望月さん！ そういったことは秘密にしてください！ 二人共、何を言えればいいのか困ってるじゃないですか!!」

「やあくん。文緒ちゃんが怒ったあゝ」

「怒りますよ！ 私だつて怒りますよ！」

「いや、その、なんだ！ そういえばだな一也！」

「うえっ!? な、なんですか!」

「君もなんだか腰回りがキツそうだぞ!? まさか、君ともあろう者が太ってしまったの

かな!」 はっはっは!」

「え、いや、これはですね」

「え? そうなんですか?」

それは驚きです。

新城君は日々のトレーニングを欠かさないと聞いていますし、私のように運動不足ではないと思っていました。

「ええ? 私は女の子のスリーサイズじゃないと見切れないけど、太ってるようには見えないわよお?」

「いや！ 確かにベルトが想定していたより穴一つ分緩んでいる！」

「どこまで想定してんですかあなた！」

「全く！ キツイならキツイと言ってくればいいのに！ 衣装合わせなんだからその辺りのことは言って貰わないと困るぞ?!」

「穴一つ分でキツイ云々とか言うと思います普通?!」

「どれ！ どの辺りが合わなかったかな?!」

「ちよ！ 触れんでくださいってば！」

なんだか無理に盛り上げようとしているような……。

豪快に笑いながら時谷さんは首を横に振る新城君へと近づき。

その身体に大胆にも触れたところで。

固まってしまいました。

……ん？

「ど、どうしましたか？」

急に黙ってしまった時谷さんに声を掛けますが、彼女は聞こえていないのか、新城君のお腹だけでなく、腕や足、胸板にも触れていきます。

新城君は、どうしてか頭を抱えています。

「小瑠璃ちゃん。新城君太ってたの〜？」

「……あ、ああ。太っていたというか、太くなっていた」

「[?]」

一体その、何が違うのでしょうか——

「……………筋肉が」

「……………」

「あー」

……ああ。そういうことですか。

そうですね。お腹に詰まっているのは、脂肪だけじゃあ、ありませんよね……。

「ま、全く！ 私に断りなくビルドアップしてしまうなんて！ ちゃんと逐一報告してくれないと困るぞ!？」

「無理にフオローしようとしなくていいです……」

砂漠のように荒んだ気分になってきました。

「大丈夫よお文緒ちゃん」

元凶である望月さんがまた抱き付いてきます。

何が大丈夫だと言うのでしょうか。

少なくとも私の精神衛生は大丈夫とは真逆ですが。

「お腹も大きくなっちゃったけどお、その分おっぱいとお尻も——」
「びやああああああ!!!」

—— 思い出は、綺麗なばかりではない。
そう思い知った一日となりました。

にゅーろん★くりいむそふとの枕談義

私——かぜまちはるか風町陽歌は、寝不足だった。

「うう〜ん……」

特に思い当たる原因があるわけじゃないんだけど、なんだか眠れない。

横になっても。座っても。勿論立っても眠れない。

目を瞑つても瞼の裏を見るだけだなぁあって。視線はどこに置いておけばいいんだろう。上を見ればいいのかな。下を見ればいいのかな。右を見ればいいのかな。左を見ればいいのかな。

あと呼吸はどうするんだっけ。鼻でするんだっけ。口でするんだっけ。鼻で吸って口で吐くんだっけ。口で吸って鼻で吐くんだっけ。

手って組んだ方が良くないんだっけ。横に置いた方が良くないんだっけ。枕の位置ってどこだっけ。うつ伏せだっけ。仰向けだっけ。人ってどこから生まれてどこに向かっていくんだっけ。宇宙の向こう側ってどんな風になってるんだっけ。

眠ろうとしたらそんなことをぐるぐる考えちゃってたりするんだよねえ。

……うん。そんな小難しいこと考えながら眠れる訳無いのは分かってるんだけど。

「というわけなんですけど、どうしたらいいでしょうか？」

「そうですね……」

安眠に関して一家言ある（と新城くんに聞いた）正岡先輩に保健室で聞いてみると、先輩は少しだけ唸って、やがて応えてくれた。

「枕を変えてみる、というのはどうでしょう？」

「枕、ですか？」

「寝不足の原因には様々あるので……。枕が合わないというのも、その一つだったりするんですよ」

「枕、ねえ」

軽音部の部室に戻ってみんなに正岡先輩に聞いたことを話すと、ナギーこと黒川風子くろかわなぎこが興味あるのかないのかわかない声で呟いて、ドクペを飲んでいく。

私達軽音部、にゅーろん★くりいむそふとは、今はお菓子を広げてまったり中です。私、ナギー、董すみれ、桃子ちゃん、それとくるみちゃんが新城くんの膝に乗って、グルーミングされています。くるみちゃんはいつものサイドアップテールを下して、なんだか別の女の子みたいです。

……羨ましくないよ？ 前にみんなでやつてもらったことあるけど、あれすごい恥ずかしかつたからね？

新城くん対女の子専用必殺技・グルーミング。相手は死ぬ。恥ずか死ぬ。ただし甘えんぼには効かない。みたいなの？

「枕が合わないって、実感あるだがや？」

董がポツキーを口でぽきぽき折りながら言う。
私もそれに倣いながら応える。

「正岡先輩が言うには、実感として出る場合と出ない場合があるんだって。どっちにしても影響はあるんだけど」

「ふーん……。でも、新しく買い替えるよりも、他の方法を試してからの方がいいんじゃない？」

「うん。だから他の方法も聞いてみたんだ。でも、枕もそろそろ替え時かなって」

「どうしたがや？ ジュースでも零したんかのう？」

「そうじゃないよっ。ただ結構昔から使ってるものだから、傷んできちやつてるってだけ」

「傷んできちやつた、ですか？ わたしのは子供の頃から使ってますけど、そういうの良く分からないです」

「お前は愛着湧いてるのが一番ってだけじゃね？」

「桃子ちゃんは物を大事にする子でつすから」

「あやや……。そうかもしれないです」

照れてる桃子ちゃん。

桃子ちゃんはとつても純粹な子で、にゅーろんのマスコット扱いされている。そんな子が顔を赤らめて両手でプリッツを啄む姿は、同じ女の子の私でも思わず抱き締めたく

なるくらい可愛いんだ。私でもそうなるんだから、男の子の新城くんの胸中はどうなのやら——いや、今はくるみちゃんグルーミングに集中だね。

「でも、わたしに合う枕って何かなあ……」

「そればかりは、実際に枕に寝てみるしかないだろうねえ」

「陽歌ちゃん先輩は、どういう枕が好きなんですか？」

「うーん。ふわふわっていうか、柔らかいのかな？ 今の枕も柔らかいんだけどね」

「ふわふわ、がやか？ でもその柔らかい枕が合わないんだがや」

「そうなんだよね。この際に硬い枕を……でも寝心地悪いかもなあ」

「お店だと、枕は柔らかいのが一番とされてまつすからね」

「……硬いだろうにえらく寝心地良さそうなのなら、知ってるけど」

「え？ ほんとに？」

「ああ。これ見てて思い出した」

そう言ってナギーは、くるみちゃんについて視線を向ける。

「？ わたし？」

「くるみじゃないよ。あ、いや。これってのはくるみも含まれてんだけど」
「？」

「キミだよキミ。新城」

「はあ？」

名指しされた新城くんは、くるみちゃんのグルーミングを終えて、いつものサイドアップテールに戻してあげているところだった。

……枕？ 新城くんが？ 新城くんの持つてる枕がってことかな？

くるみちゃんの髪にシユシユを巻き付けて、新城くんはくるみちゃんを膝から降ろす。

「何の話をされてんだ俺は」

「とぼけなくてもいいよ。随分ぐっすり眠らせてたじゃないか」

「あや？ 眠らせてたんですか？」

「誰をだがや？」

「いや、俺に聞かれても」

みよしなおお
「見吉奈央。鈴木河凜乃」

「……あー」

「[[「?」]]」

二人の同級生の名前が出てくると、新城くんは頭を抱えちゃった。知らない、という割には、心当たりがあるような反応だった。

「どうしたんですか？」

「いやね。私も通りがかっただけなんだけど、この前昼休みにその二人が新城のことを枕にしたもんでさ」

「ええっ!? せ、先輩は枕さんだったんですか!？」

「物の例えをストレートに受け取るんじゃないやありません」

桃子ちゃんの天然に呆れた様子を見せながら、弁明? を始める新城くん。

「俺も起きた時驚いたもんだよ。芝生でぐっすり寝てたら、二人が傍で寝てんだから」

「ん? 二人を寝かしつけたんじゃないのかい?」

「あいつらを昼に外で寝かしたら放課後まで起きないのが分かかって、何で俺がわざわざ

ざ寝かすんだよ」

「だろうね。まあそんなわけで二人が新城と一緒に寝てたんだよ」

「ほうほう。それで、枕にしてたつてのはなんだがや？」

董が身を乗り出さんばかりに興味津々だった。気持ちは分からなくもないけど。

「傍で寝てたつていうかね。見吉さんは腕枕、鈴河さんは腹枕でそれぞれ新城に頭を預けて寝てたのさ」

「腕枕に腹枕でつすか!？」

「ほうほう！ そんなことになってたがや!？」

「筋肉ダルマの新城なんだから、どこもかしこも硬いだろうに。えらく気持ち良さそうな寝顔だったね」

「大将に至つては俺の顔に乗っかってるもんだから、寝苦しくてしよーがなかったよ……」

「それは想像すると結構シユールだね……」

見吉さんはいつもの甘えたなんだろうけど、鈴河さんは本当に芝生にちょうど良さそ

うな枕が落ちてたからくらしいの気持ちなんだろうなあ。

片腕に見吉さん。お腹に鈴河さん。顔に猫の大将さん。二人はともかく、もふもふの大将さんが顔に乗ってるのは呼吸が辛そう。

ていうか筋肉ダルマって。

確かに新城くんはムキムキだけど、そこまで言われる程膨張した筋肉はついてないと思っよ。

「でも、先輩と一緒にいると安心しちゃうのは分かる気がしちゃいます」

「でつすでつす。膝に乗ってるだけでも、頼もしさが伝わってくるっていうか」

「そりやどーもだけだよ。しかし枕としてはどうなんだろうな？ さっきも言ったように枕は柔らかい方がいいだろうに」

「安心感か……。まあでも、それも安眠には重要な要素かもしれないね」

「うーん、そうかも。怖かったりで不安な所だから眠れなくなっただけっていうのは、よく聞く話だし」

「逆に安心さえすればよく眠れるってのも短絡的なような……」

「……よし！ それなら！」

董がポツキーをぼつきり折って、立ち上がる。

「これからみんなで検証してみるがや！」

「……………ん？」

あれ？　なんか既視感^{デジャヴ}。

「余計なこと言わなきやよかった……」

ナギーが新城くんの膝の上で嘆いていたけど、時既に遅しだった。

「どうだがやナギー？　新城の膝枕の感触は」

「羞恥心でそれどころじゃないんだけど……」

「こうなるんならトツプバターなんざ引き受けなきゃよかったろうに……」

「どーせやることになるんだし、さつきと済ませたいタイプなんだよわたしは」

「嫌がることないって凧子ちゃん。思ってたより良いでっす」

胡坐をかいた形の新城くんの膝で、ナギーとは反対側（髪型の関係で右側）に寝そべるくるみちゃんは、言葉通りご満悦。マーキングでもするみたいに頭をうりうりしているくらいです。

なんでこうなったかを三行でまとめると。

董が言い出したことに桃子ちゃんどくるみちゃんもノツちやつて。

過去の惨状が思い起こされた私達三人は反対したけれど。

甘えんぼ二人の視線に押されて、結局引き受けました。

董は散々恥かいたことをもう忘れちゃったのかな……。

「いや、別に嫌ってわけでもないよ。たださ……、こういうのわたしには似合わないし」

「そんなことないですよ凧子ちゃん先輩！ とつても可愛いと思います！」

「やめてあげて。追い打ちやめてあげて」

ナギーは可愛いとか女の子らしいとか言われると、すごいダメージになるから。

いや、私も可愛いと思うけどね？

でもただでさえこの状況でナギーが苦手な褒め方すると、後でどんな仕返しができるやら。

「えっと……。確か三分ずつだったよね？」

「そうなのう。くるみもノリノリだがや。もうちよい伸ばしてもいいかものう」

「勘弁してよ……。これ精神的にキツツイんだから」

「奇遇だな。割と俺もだよ」

「効果は如何程だがや？」

「安眠効果はバツチリでつす！」

「その割には逆にテンション上がってるけど」

「くう」

「寝た!？」

流石に狸寝入りだったみたいで、三分経ったことを知らせるとちよつと名残惜しそう

にのそのそと起きた。

癒された感じのくるみちゃん、部室の隅でヴィシヤス（ナギーが飼ってるハムスター）といじけた様子で遊ぶナギーが、なんだか対照的。

「……違う。わたしはこんなじゃない……。もつとこう、ヘヴィデスメタルなパンク
ロッカーこそが本性……」

いやいや、ギャップがあつて良いと思うよ？

「さて、わたし達の番ですわね」

「ほら。さつさと寝転ぶがや」

「はいはい。言われんでも寝転びますよつと」

部室の畳の上にごろんと寝転がる新城くん。

ちなみに、ナギーとくるみちゃんが膝枕。董が腹枕。桃子ちゃんが腕枕と検証して
いつて、本命である私が一番寝心地良さそうなのを選ぶという流れ。殆ど自動的に私一
人が最後を飾ることになりました……。

新城くんは腕も足も投げ出して大の字になる。

「それじゃあ、お邪魔しますね〜」

「お邪魔されまーす」

「ごろん」

よもぎだ
「蓬田勢い強い」

後転でもするみたいな董にそう言うけれど、大してダメージはないようだ。

桃子ちゃんと董が、それぞれ腕枕と腹枕に頭を預ける。

「……………」

「どう？ 董」

「むーん……………」

「？ 難しい顔だね。どうしたの？」

「どうしたんです？」

「いやあ、なんとというか……。枕にはええんじやが、安眠用とは違う、とかの」

「……………なんか変な表現だな」

「まずもって枕にしては高いがや。首が不自然に曲がるがや」

「お前がちっちゃいからではなく？」

「うるさいがや」

「んー……でも、枕にはいいんだよね？」

「そうなんじゃが、眠れる感じじゃなく………あ」

「あ？」

「そうがやこれだがや。こうするのが正しい姿だがや」

「正しい姿って、スマホ弄ってるだけでっす」

「こうして、寝転んでスマホ弄るのがちょうどいい感じだがや」

「う、ん？ 分かるよーな分からないよーな……」

「だらけられて、しかし眠くならず。絶妙なバランスを保ってるがや」

「……とりあえず快眠向きじゃないと」

「そこを選んでぐっすり眠ってたんだねえ、鈴河さん……。桃子ちゃんは、どう？」

「……………」

「桃子ちゃん？」

「……すう」

「……寝てる!?!?!」

狸寝入りじゃなくて本当に寝てる！

ちよつと目を離しただけで寝たよこの子！

「ま、まだ20秒経ってないでつす」

「おつそろしいがや……。ただ腕に寝転んだだけでのび太くんクラスの睡眠速度を手に入れてしまっているがや……」

「いや、朝比奈限定な気も……。しないな」

「そこはしないんだ……」

確かに見吉さんとかだったら寝転んだ瞬間に夢の世界に旅立ちそうだけど。

そのまま三分経ったけれど、結局桃子ちゃんは起きることなく、董がスマホを弄り続けて終わった。

董が新城くんのお腹から起き上がり、桃子ちゃんは起こさないように細心の注意を払って腕を抜き取る。

「うにゅう……」

「モモちゃん、ぐっすり寝てる〜」

「腕がなくなつて寂しげだがや。新城、くれてやるがや」

「くれてやれつて何？ 腕をぶつた切つて朝比奈の枕にしろつてこと？」

「えつと。次は私、だよね……」

……桃子ちゃんがこうなつた以上、選択肢は一つしか無いようなものだけだ。

「じゃ、じゃあ、腕枕。……いいかな？」

「……いいも何も、そういう検証だしな」

「おお。これを見て敢えて踏み込むがや？」

「ええつ？ だつて、一番寝心地良さそうなのを選ぶつてことだよね？」

「まあそうなんだがのう」

「そ、それじゃあ。お邪魔しまーす……」

「朝比奈といい、なんだその挨拶」

寝転んで待つ新城くん。私もその横に座つて、寝転ぶ準備に入る。

……うわあ。恥ずかしいなあ。

多分カッパルの人達でもそうそうしないことだよ。桃子ちゃんはあっさりやったけど。

「ぐ、ごろーにや」

「進化した！」

さつき桃子ちゃんが寝転んだ腕とは反対の腕に寝転んだ。

「……………」

「……………風町ー？」

「……………」

「黙っちゃったでっす」

「ハル、寝てないがや？」

「どうだこれは。目を瞑ってるけど顔が険しいから、判定微妙なんだけど」

—— やっぱり恥ずかしいよお、これ。

新城くんの顔見れないし、胸はうるさいくらいに響いてるし、頭がぐるぐるして沸騰

しそくだよお。

(……でも、遅しいなあ)

頭の下の新城くんの腕に触れる。

私やみんなの腕とは全然違う感触に、男の子なんだなあ、なんて思ったりして。確かに、硬いは硬いけど、ちよつとだけ弾力があつて、なんだか嫌な硬さじゃない。

……あ。少し落ち着いてきたかも。

そうなると、腕に密着させた耳から、鼓動を感じられるようになる。

とくん。とくん。って。

一定のペースで鳴るその音が、私の心を徐々に落ち着かせてくれた。

けど、逆に気になりだすのが手だった。

所在無さげな両手が、置き場所を求めていて。

「ん。顔が和らいできたな」

「あ、あのね」

「? どうした?」

「……もうちよつと。そつちに寄つても、いいかな?」

「お、おう」

「ありがとう」

ほんの少し彼の方に体を寄せて、脇と腰の間ぐらいにある服を両手で摘まんだ。

……あ。鼓動がちよつと早くなった。

新城くんも緊張してるのかな? なんだか可愛いなあ。

「お、押せ押せなハルになってるのう……。これも安眠効果なのかの」

「新城先輩、底が知れないでっす……」

「何の底だよ何の。風町? そろそろ三分経つと思うが……」

「……くう」

意識の外でそんな会話を聞きながら、私は久しぶりに夢の世界に入り浸った。

目を覚ましたのは下校時間前だった。

「うあー……」

夢の世界から帰還を果たした私は、寝る前の自分を思い出して部室の隅で頭を抱えていた。

今までの寝不足が嘘かのように熟睡出来たのは良いんだけど。良いんだけど。

（い、意識がほとんど飛んでたからって、あんなことしちゃうなんて……っ！）
「成程ねえ。そんなことがあったわけだ」

私の後ろで、寝てる間に復活してたナギーが言う。

「検証結果はあれだのう。新城枕が一番危険なのは、腕枕ということだがや」

「新城枕ってなんだよ。危険ってなんだよ」

「それは、乙女のヒミツってやつで」

「でも先輩の腕枕、とっても寝心地良かったです。またしてほしいなあ」

「危険とやらに自ら飛び込もうとしてんのがいるけど」

「モモにはノーダメージなんだよ。こういう子だから」

「はいはい。ちょこつとだけ異議があるでつす」

「むむ？　なんだがや？　最高評議会の可決に異議を申し立てるがや？」

「えらくこじんまりしてんな最高評議会」

「陽歌ちゃんは、先輩の服をちよつとだけ摘まんでました」

「ほうほう」

「そうだのう。それが？」

「そうしたら糸が切れたようにすぐ寝入ってしまったのでつす。つまり、一番の安眠効果は先輩の胴体にあるのでは？」

「胴体のう。けど腹枕は、あたしが調べた通りの結果だっただがや」

「そうじゃないのでつす。枕は頭の下にあるとは限らないのでつす」

「あやや？　どういうこと？」

「ほんの少し摘まむだけで驚きの安眠効果。それに抱き付こうものなら、想像を絶するものになると思われまっす」

「……抱き枕にするのが一番つてことかい？」

「その通りでつす！」

「な、なんだがやとー!!?」

「しかもその場合腕枕とセット! どんな寝不足も立ちどころに解消されること請け合いでつす!!」

「お前等さつきから俺の事安眠商品かなにかだと思ってない?」

穴に入って埋まりたい気分だったけど、いつまでもそうしてるわけにもいかないの
で、立ち上がって鞆を持った。

「そ、それじゃあ。帰ろっか」

「お。もういいのか?」

「う、うん……」

うわあ。しばらく新城さんと顔合わせられなさそう……。

「……ごめんね。私、こんな時間まで寝ちやつてたし。腕痺れちやつたでしょ?」

「いやその辺は別に構わんけど。痺れてないし。……で、買い替える枕のイメージは固
まったんだろ?」

「え？」

「え？　つてお前。新しく買う枕はどんなのがいいかを決めるための検証だろ？」

「……あ……」

「全員忘れてたんかい!!!」

その後、みんなで家具売りの枕を見繕う事になった。

値は張ったけど、選んだのは抱き枕。それも頭もカバーできるタイプ。

新しい寝具を手に入れて、その日から私の寝不足は解消された。

円岡燕の打ち砕かれる出会い

僕——円岡燕にとって、「強さ」は忌むべきものだつた。

強い奴はいつだつて、僕を害するから。

小柄な僕をチビと呼び、非力な僕を虐げ、一人の僕を数で囲つて。

僕がどんな目に合おうと、誰もが目を背ける。

傷だらけになろうと、痣だらけになろうと、泥に塗れようと、自分には関係ないからと、巻き込まれたくないからと目を背ける。

誰も助けてはくれない僕が、唯一身を守る手段は……お金しかなかった。

親から半ば騙し取るような形で、僕は奴等の要求する金額を用意するしかなかったのである。

(いつから僕は、逆らう事すらしなくなったのだろうか)

(いつから僕は、奴等のためなんかは親を騙すことに罪悪感すら感じなくなつていった

のだらう)

幸いと言うのはなんだが、親から貰う金額は家に影響を及ぼすようなものではなかった。奴等からの要求が低いわけではない。だが親は、富豪とまではいかなくとも奴等の遊ぶ金くらいは用意できてしまう、稼いでいる大人だった。

そうして金銭を渡しても、奴等は僕への暴力を止めない。

素直に渡したつて奴等はムカついてるなんて理不尽な理由で殴ってくるのに、僕は用意するのを止められないでいる。持つてこなければこなければで、更に暴力がエスカレートするからだ。

だから、強い奴は嫌いなんだ。

聖櫻学園の入学初日、帰り道の商店街の路地裏で、違う高校に行つた奴等三人に日常的な暴力をまたも振るわれていた時まで、ずっとそう思っていた。

思っていたんだ。

でも、それは間違いだった。

「ん？」

何の前触れもなく現れた同級生。

後に聖櫻学園近隣にその名を轟かせ、僕の「兄貴」となる、新城一也というたった一人の男と出会い、僕は知ることとなる。

奴等はただ徒党を組み、数で「力を得て」いただけで。

本当の「強さ」を持った絶対的な『暴』の前には、そんなもの弱いのと何も変わらぬのだと。

僕は本当に、何もかも弱かったのだと。

「……………ああ?」

不良三人の内一人が、突如現れた僕と同じ制服を着た大柄の男を睨む。狭く、人目に付かない、誰かが通ることもない路地裏だ。そんな所に現れば不審に思うのは当然だろうけど、そいつのそれは明らかに不機嫌なそれだった。どうせ、「お楽しみ」に水を差すようなことをされたから、なんだろう。

「何見てんだよお前。……見世モンじゃねえぞ?」

言外にさつさと消えろと、そいつは言っていた。

僕は——何も言わなかった。

口の中どころか全身が痛んで喋るのさえ辛いのもあったけれど、それ以上にもうどうでもよかつたのだ。

普通に考えれば「逃げて」なり「助けて」なり言う場面なんだろうけれど。どうせ言われずとも逃げるだろうし、どうせ言っても助けてなんてくれないんだから。

事実、ずっとそうされてきた。今回はきつと違うなんて希望、ずっと前に捨てていた。なのに今回は違った。

「こんな場所で見世物もくそもねえだろ。あーあー、こんなになっちゃまって」

その言葉に、睨んだ男も、僕を蹴り続けていた二人も呆気にとられた。もちろん僕もだ。

その人は、三人に囲まれる位置にいた僕の所へと、普通に歩いて何の躊躇も見せず踏み込み、地面に倒れ伏していた僕を立ち上がらせた。

汚れを払うように、僕の制服をパツパツと叩く。

「あ。お前よく見たらうちの制服じゃん。入学初日で制服ズタボロじゃねーか」

なんなんだ、この人は。

初対面で、しかも同級生だとたった今気付いたのに、なんで首を突っ込もうとするんだ？

状況が分かっていないのか？

今この三人は、不機嫌どころか怒りさえ込み上げているというのに。

「……んー。折れてる感じはなさそうだな。まあでも、大事を取って一応病院行つとくか」

僕の身体をぼんぼんと触って、彼はそう言った。

何をやっているんだ、と言いたかった。

それも、痛みに押されて引っ込んでしまった。

彼は、不穏な気配をもともせず、三人の方へと向き直り。

「じゃ、俺こいつ連れてくから。お前等も気は済んだろ？　じゃ」

「——ふつつぎけん馬鹿が!!」

さつき睨んでいた、彼の右にいた男が拳を振りかぶる。

ああ、もう。余計なことするから。

こうなることは目に見え——

ガゴンツ

「……え」

重く響く音は、目の前の彼からではなかった。

いや、そもそもこんな音。殴られて響くような音じゃない。だというのに、僕の目に映ったその結果は、間違いなく拳から響いたものだった。

信じられないだろうが、言おう。

拳を振りかぶった男が、その拳を振り下ろしたと思つたら、後方5m高さ2mの空中を飛んでいた。

「……………は？」

遅れて出てきたその声は、不良二人のものだった。

仲間が飛んでいる方向を見上げ、その行く末を見守る。

飛んだ男は、狭いながらも長い路地裏で放物線を描いて、高さ3mの最高点から落ちていき、地面に接触した点からも何度かバウンドし、やがてそれも収まって、大の字になつて倒れた。

「……………こんなことで一々騒ぎ立てるのも嫌だから、見逃してやろうとでも思つたけどさ」

それを行った、右腕を横に伸ばした姿勢で立っている彼は言う。

「やっぱり痛い目見ないとわかんないよな。お前等みたいのは」

「——う、うおお！」

左にいた男が、同じように拳を振りかざした。

けど、彼はそれを見もせず、頭を狙ってきたその拳を背中を逸らして躲す。そして、そのまま左足を上へと垂直に突き出し、そいつの顎を蹴り上げた。

先程のように派手に飛びはしなかったけれど、確かにそいつの体は浮き、すぐに地面に着地したその姿に、意識は感じられなかった。足からすぐ膝、そこから胴体丸ごと地面に倒れ伏す。

「ひ、ひい——」

仲間二人が目の前で瞬く間にやられ、残った一人は戦意喪失。威勢などどこかへ飛んで行き、腰が抜けて尻餅をつく——

ことさえ許されなかった。

振り上げた左足は、そのままそいつの頭上へと振り下ろされる。大上段からの、踵落とし。不良の頭はその足に持っていかれ、足と頭の位置関係が逆転した。地面とキスし、遅れて足が地面と再び触れ合う。

「……………」

その一連の流れを、僕は彼の後ろで呆然と見ていた。

訪れた静寂。

僕を虐げていた暴力が、目の前の、たった一人の、わずか三撃の暴力で沈黙していた。現実離れた光景の中で、彼はポケットからスマホを取り出し、何回かタップして、どこかへとコールを掛ける。電話が繋がるのを待つ音が鳴る中、彼は僕へと向き直る。

「ほら、行くぞ」

「……ええはい。そこに三人程倒れていたのを見ました。自分はあと一人怪我した人。ええ。彼は一番傷が酷いので、直接病院へ。……いえ、意識はちゃんとありますし、自分でも歩けるそうです。他三人はただ気絶してるだけのようでしたから。それじゃあ、お願いします」

彼は救急車を呼んでいるようだった。指定した場所を聞く限り、どうやらあの三人用に三台呼んでいるらしい。

気絶させた本人が救急車を呼ぶのもおかしい話だけれど、僕からしてみれば非は完全に向こうにあるし。それでもわざわざ呼んでくれる辺り、あの三人は彼に感謝して然るべきだろう。

いや、まず感謝しなければならぬのは僕なのだが。

通話を切り、スマホをポケットに仕舞って僕の前を歩くその大きな背中に声を掛ける。

「……あ、あの」

身体の痛みは、時間が経って大分マシになっていた。

口の中が切れていてやっぱり喋るのには痛みが伴うけれど、我慢できない程ではない。

「その、ありがとうございます。助けてもらって……」

「…………お前さー」

表通りを歩きながら、彼は僕の方に顔だけを向ける。

「ああいう連中にや絡まれる前に逃げろよな。たまたま俺が通りがかったからいいようなものの、そうでなかったらずっとサンドバッグだったぞ」

「え、ええつと…………」

そういう彼はああいう連中に絡まれるどころか、絡まりにいったわけだけれど、あんなにも強いのであれば世間一般の常識は通用しないのだろう。

相手が三人ぼっちだからだとか、そんなレベルの話じゃない。

例えるなら不良漫画のキャラクターがファンタジーバトルの世界のキャラクターに喧嘩を売ったかのような、まるで次元の違う争いだった。

「…………僕、足が遅いから。逃げたつてすぐに捕まるだけです」

善意なのだろう彼の注意到、僕はそう応えた。

そうとしか、応えられない。

「それに向こうは僕の事を知ってますし。万が一逃げられたって、日を改めて余計に怒ってきますよ」

「……ん？　すると何か？　今回が初めてとかじゃなくて、定期的に？」

「え、ええ。はい」

「……はあ」

心底不愉快そうな顔をして、彼は溜息をつく。

多分、いじめだとかそういうのが嫌いなタイプなのだろう。見てるだけでなく、聞くだけでも怒りが込み上げてくるくらいに。

そう考えるときっきのは、もしかしたらあれでもかなり我慢しながら、話していたのかも知れない。

「こんだけ痛めつけて、金まで奪って、それも定期的だとか。ほんつとどうしようもねえ奴等だな」

「……え？　僕、お金を盗られたこと、言ってますんよね？」

「ん？ ああ。これだろ？」

そう言つて、彼はその手に諭吉を二枚分取り出した。

つまり二万円。

……二万円。

「え!? そ、それって!？」

「財布持つてんのに無造作にポケットに突っ込んでたから、まあ盗られたものだろうと思つて」

返す。と言つて、諭吉二枚を僕に手渡す。

い、いつの間に抜き取つたんだろうか。すぐ後ろにいて、全然気付かなかつた。

「あ、ありがとうございます。重ね重ね」

手渡された諭吉二枚を受け取つて。

僕は聞きたかつたことを聞くことにした。

「……あの、聞いてもいいですか？」

「ん？」

「……どうして、助けてくれたんですか？」

僕は、助けてほしいなんて言わなかった。

助けてほしいような視線も向けなかった。

助けてほしいって、思いさえしなかった。

諦めてたから。

どうせ打ち壊される希望を持つのは、辛かったから。

ずっと。ずっと。

「僕なんか助けたって、損はあっても得はないのに」
「ほっとけなかったから」

即答されてしまった。

「……………」

「納得いかない？　じゃあ逆に聞くけどよ」

病院へと続く道の中途にある、短い階段を上りながら、彼は言う。

「お前は、『強い』ってどういうことだと思う？」

「え？」

「『強い』ってどういうことだと思う？」

「いえ、聞こえなかったわけではなく」

『強い』。

強さ。

……さつきまでの僕だったら、忌むべきものだっていう答えがあったけど。

あの光景を見た以上、その答えは打ち砕かれたものだ。

「ご、ごめんなさい。あの……僕なりに持論があつたんですけど」

「俺は素晴らしいことだと思うよ。強いこと自体は」

「？」

「頭が良い。金がある。権力がある。世の中にはいろんな『力』があつて、『力』を持つてる奴はそれだけ選択に幅を持つことが出来るもんだ」

「幅……」

それは、そうだろう。

知力があれば、いじめられないように、立ち回ることが出来る。
財力があれば、奴等より強い人を雇つて身を守ることが出来る。
権力があれば、わざわざ雇わずとも守られるようになるだろう。

そして、暴力があれば。

自らの手で、奴等を返り討ちにだつて出来た筈だ。

「……そう、ですね。そうだと思います」

「けど、言つちまえばそんだけ」

「ええ……」

自分で素晴らしいことだつて言いながら、すぐそれを否定するようなことを……。

いや、「強いこと自体は」って言ってた時点ですか。
階段を上り切った先で、曲がり角を曲がる。

「お前はさ。自分より強い奴は、みんな良い奴だって思うか？」
「つ。いえ、それは……」

思わない。

むしろ僕にとっては、みんな悪い奴だって言う方が頷けるくらいだ。
僕をいじめてくる奴等も、それを見て見ぬフリする人達も。

僕より強いくせに。

僕より弱い奴なんていないくせに。

(でも、この人は)

僕が会ってきた誰よりも、強かった。
誰よりも強くて、良い人だった。

「やること次第なんだよ」

答えを聞かずとも了解したように、彼は続ける。

「俺は強い。が、どれだけ力があっても、やることがいじめなんじゃあいつらと大差ない」

「……………」

「あんな奴等みたいにも、見て見ぬフリするようなダセエ奴にもなりたくない。理由としちやそんだけだ」

さてと。と言って、彼は視線を横へと向ける。

病院だった。

「着いたわけだが、痛むところ増えてたりしない？」

「あ、いえ。それは大丈夫です」

「そーかい。親御さんには電話しとく？」

「いえ、それもちよつと……。あの」

「ん？ どした？」

「そういえば、お名前聞いてなかったなと思って……。僕は、円岡燕です」

「円岡、ね。新城一也だ。まあよろしく」

「は、はい！」

握手を求められ、僕は咄嗟に握り返したけれど。

僕はこの時、その前の話で頭を占めていた。

彼はきつと正しい人なんだろう。

でもそれは、強い人間の意見で。

僕のような弱い人間は、そんな正しい意見を彼のように貫くことは出来ない。生意気にも僕は、彼に反発するようなことを考えていたんだ。

これが、新城一也と円岡燕の出会い。

聖櫻学園最強の番長と呼ばれ、慕われる所以となった彼の『暴』と生来のお人好しを、彼が学園に入学してから最初に目の当たりにした少年の話だ。

知る由もない。

ただの一般論だと思っていた、新城一也の「ダセエ奴になりたくない」という言葉に、どれだけの想いが込められているか。

想いが、信念が、誇りが。

夢が込められているかなど、彼は知る由もない。

これから一年経った今でも、彼は知る由もない。

放送部の第一回・番長ラジオ

「はあーいつ。本日もお昼の校内放送の時間がやってまいりました！ 今日の担当は私、二年の櫻井明音がお送りいたしますーす！」

「今日のつつーか今日もだろ」

「おーつとご紹介の前にツツコミが入ってしまいました！ 早速ゲストのご紹介です！

聖櫻学園で知らぬ者なし！ 喧嘩番長・新城一也さんでーすっ」

「はいはい。新城一也くんでー……つてうおお！ 地鳴りが！ 地鳴りがここまでー！」

「うわっ！ ほ、放送部は防音設備なのに、それでもここまで……！ 生徒の盛り上がりかすごいことになっています！」

「……あ、収まった。たく、過剰反応が過ぎるぞうちの学園」

「あはは……。さて！ 気を取り直して、放送を進めていきましょう！」

「はあ………」

「おやおやおあ？ 駄目ですよーそんな暗い顔してちゃー！ もっと元気よく元気よくー！」

「ラジオなんだから顔なんざ見えねーつつの。で？ 呼ばれたはいいけど、具体的に何やるか聞いてねーんだよな俺。駄弁つてりゃいいのか？」

「駄弁りはまた今度ね。えー。今日行われるのは、第一回！ 番長ラジオ！」

「おい櫻井」

「このコーナーでは、リスナーであるみなさんからお便りを頂き、その内容について番長さんである新城さんとお話していきます」

「無視すんな！ つていうか第一回つて何!? 次回もあるのこのコーナー!？」

「人気がなかったら打ち切る予定だけど、まあ君だからねー」

「待て待て待て待て。俺これ一回きりのつもりで出てただけど！ 櫻井がどーしてもつて言うから！」

「それでは、最初のお便りです」

「コミュ放棄！ ラジオでいとも容易く行われるえげつない行為！」

「略してRD4C！」

「やかましいわ！」

「えーつと、ラジオネーム、匿名希望さんから。『こんにちは。毎日お昼の放送聞かせてもらっています。今日は番長に相談があります』」

「うわ、ぬるつと始めやがった……。はいはい。で？ 何の相談？」

「『番長。僕は踏み殺してしまいました』」

「待っていきなりハードすぎる」

「『ゴキブリを』」

「足を洗え!!」

「『以来、トイレを開けたらじようじという声と共に奴等が現れるのではないかと思うと、僕は夜しか眠れません。どうしたらいいでしょうか?』」

「夜眠れたら十分だろうが! しかもなんで火星のゴキブリに繋がるんだよ! お前の足についたゴキブリの体液を目印に仇を取りに来るとでも思ってたのか!?!」

「はい。お食事中に向かないお便りでしたね。失礼しました」

「こういうのは放送前に避けとけや……」

「とも知ちゃんに君へのお便りを仕分けてもらったんだけどな……」

「おい押井おしいこら。目線逸らしてんじゃねーよ」

「で、では次のお便りです! ラジオネーム、トムとジェリーさんから。『番長さん櫻井さん、こんにちはー』。はい、こんにちはー」

「こんちわー」

「『早速ですが相談です』」

「相談ね。出だしからあんなだったから正直気が進まんけど」

「『コスプレのいい案が出てきません』」

「ほらやっぱり」

「『今度のコスプレは番長に着せようと思っっていますが、中々これと言ったものがないので、きません』」

「俺に着せようとしてるって時点で大分人絞られるけどいいの？ トムとジェリーさん本人バレしちゃうってない？」

「『そこで、お二人の意見をお聞かせいただきたい！』とのことですが、どうでしょうか？」

「どうでしょうかって、着せられる本人に聞く？」

「ま、まあ本人の意見が聞きたいってことだと思っようよ？ 直接だと躲されるからとか」

「コスプレねえ……。まあ別に嫌なわけじゃないんだけどさ？ 結構俺もノリ良く着てるし」

「そもそもこの学園だと、コスプレしたことない人の方が少ないかもね」

「手芸部の人達はよくあんだだけの衣装をキッチリ用意できるもんだよ」

「部長の時谷先輩は、手芸になると動きが三倍の速さになるんだって」

「なにそれトランザム？」

「で、どんなコスプレがいいの？」

「逆に聞きたいよ。俺にどんなコスプレを求めてんの？」

「えー？ うーん。男の子のコスプレでしょー……あ、執事服とか？」

「すまん。それももうやった」

「え？ やった？」

「ちなみにその話を聞いたクロエ先輩は『ワタシもコスプレしてみまシタ！ シツジデスヨー♪』とか言って羊の着ぐるみを着てきた」

「え？ 羊？」

「モコモコしすぎて教室のドアに挟まったのは、流石に腹を抱えた」

「うわっ。なにそれ見たい」

「俺がああ恰好をしたとどうして思ったんだろう。あの人の思考回路は未だに分かん」

「クロエ先輩には申し訳ないけど同意……。でも言われたらなんだかんだけだな、君は」

「つつてもお前、見たいか？ 俺がモコモコに包まれてる姿」

「……………」

「……………」

「……………需要はあると思うよ！」

「とりあえずお前に無いのはわかった」

「じ、じゃあー……スーツ姿はどう？ 高校生だと着る機会無いと思うよ？」

「執事服が駄目ならスーツってのはどうかと思うけど、それも結構頻繁に着るんだよな……」

「そ、そんなに着せられてるの？」

「いや。スーツについてはうちの生徒が関与してたりはしない」

「んー……？ あ、家庭の事情ってこと？」

「まあそんなとこだ」

「不知火さんも、家じゃほとんど着物だそうだし。君もそんなとこかな？」

「俺の場合はほぼ戦闘服みたいなもんだけどな」

「何やってるの!？」

「でも俺の所まで来る前に終わってることが多いです」

「来るって何が!？ 終わってるって何が!？」

「汚れた時は大変だぜー？ 中々落ちないから。血」

「絶対物騒なことやってるよねえ!？」

「そんなわけで、スーツはコスプレ感ないんだよ」

「どうしよう。詳細を物凄く知りたい気もするけど、踏み込んではいけない領域だとも

思う……」

「言つとくけど、クリーンなお仕事だから。クリーンクリーンだから」

「血が飛び交うクリーンなお仕事って何……?」

「とか言うけど、俺の日常って結構飛び交うよ? 喧嘩になって鼻血くらい当たり前に出さすし」

「あ、そうだった」

「お蔭で先月入ったクリーニング屋の店員と顔馴染み」

「通い過ぎだよ」

「去年はあまりにも頻繁に汚れるもんだから、制服四着ぐらい買ってもらったよ」

「アニメキャラみたいなきり返し!」

「もうやめようぜコスプレの話。脱線すぎで時間取り過ぎる」

「最後大雑把に投げるなあ……。というわけで、トムとジェリーさん。私達ではお力になれないようです。ごめんなさい」

「まああれだ。個人撮影に留めるならギリ腹まで出してやるから」

「それを最初に言つてえ!!」

「で、次のお便りは?」

「……うん。もういいや。それじゃあ次のお便りね。ラジオネーム、打倒熊! さんか

ら。『押忍！ 大山真由里おおやままゆりツス！』

「ラジオネーム考えといて実名晒すおバカ！」

「『自分、もつと強くなりたいツス！ 先輩みたいに強くなりたいツス！ どうしたらいいツスか!?!』」

「もうこいつ特徴的過ぎて実名晒すまでもなく本人バレだよ」

「口が軽い所、手紙にも出るんだね。それで、強くなりたいとのことですが、どうでしょう？」

「と言つても、俺の環境つてものっそい特殊だからなあ」

「うーん。何か秘訣とかない？ 普段からしてることとか」

「秘訣か。まああれだ。それだけつてわけでもないが、やっぱ体は資本だから。トレーニングは日々欠かさずやつてるよ」

「トレーニング、かあ。でも、新城君つて結構漫画とか小説とか読むよね？ 時間配分は

どうしてるの？」

「いや、同時並行」

「へ？」

「所謂ながらトレーニングつてやつだな」

「ながらトレーニング……あ！ 本を読みながらトレーニングしてるってこと？」

「そゆこと」

「成程ねー。でも、それってちゃんと効果あるの?」

「あれこれ我慢してトレーニングに集中って方が色々妨げになるみたいだな。街歩いてると、音楽プレーヤーかけながら走ってる奴見かけるだろ?」

「ふむふむ」

「意識を散らして走っていると、自分が多少無理をしても気付かなくなるってのもあつて。鍛えるための筋肉への負担つてのが掛けやすいわけだよ」

「そうだったんだねー。本を読むつてなると、スクワットしながら?」

「いや、片手の人差し指で逆立ちして腕立てしながら」

「雑技団!? そこに至るまでが長いよ!」

「で、足の上にはCDプレーヤーを置いて再生」

「普通に音楽プレーヤー使おう!」

「重量40kg」

「重!!」

「片足ずつで別の音楽を掛ける」

「総重量80kgつてもうなんか普通を語るには程遠い所にいるよ!」

「自分を普通と思ったことはあんまないなー。特殊能力を持ちながら『俺はどこにでも

いる普通の男子高校生』なんて言うラノベの主人公じゃあるまいし」

「ああそれそれ。漫画でもよく見かけるけど、『強いて挙げるなら』っていう風に言いながらすごいものを持つてくるの多いけど、あれ何なんだろうね」

「あれも王道つちや王道なんだろうけどなあ。で、まあ技術的なことも語って分かるもんでもないから、やっぱ体で覚えるしかないと思うよ」

「稽古ってこと？」

「燕や狼丞にもたまーに俺が稽古つけてやってるしな。気が向いたら、って感じ」

「わかりました！ 打倒熊さん。番長は24時間365日いつでも受けて立つそうですので、是非稽古つけてもらってくださいー！」

「そこまで言つてないよ!？」

「それでは最後のお便りです。時間も時間ですからね」

「ようやく終わりか。たった3つが無駄に長く感じたわ」

「ラジオネーム、嘘をつき過ぎたシンデレラさんから」

「何その狼に食べられそうな名前」

「『新城先輩。櫻井先輩。こんにちはあ』こんにちはー」

「こんにちわー」

「『聞きたいことがあるんですけど、新城先輩って動物は好きですかあ?』」

「動物？」

「『犬はアリなのかっていうのとお、ペットにするなら何がいいか。聞いてみたいですよ』だって」

「動物ねえ……。好きか嫌いかで言えば、まあ好きな方かなー」

「嫌いそうないメージはないもんね」

「ただうちの母親がなあ……」

「え？ どうしたの？ お母さん、動物嫌い？」

「動物一つーか、動物園っていう施設が嫌いなんだよ」

「うっそ！ なんでなんで？」

「にがーい経験があつたらしくてさあ。なんでも、親父との初デートで動物園をチョイスしたらしいんだけど」

「うんうん。生まれた時からってわけじゃないんだね」

「その頃は動物で盛り上がれるくらいには好きだったらしいんだけどな？ 親父がなんか買ってくるとかで離れた時に、周りの動物達が色々投げつけてきたらしくて」

「うーわ……………」

「親父が帰ってくる頃には、それはもう悲惨なことになっててさあ……。以来、動物園には寄り付かないようになったから、俺に親子で動物園に行った記憶皆無なんだよね」

「折角の初デートで気合入れてただろうに……不憫だね」

「ほんつとにな……。で、犬か。まあ普通にアリだな」

「アリ、と。世の中では犬派猫派っていうけど、新城君はどうなの？」

「んー。どっちもいい派。犬には犬の、猫には猫の良さがあるからな」

「そっか。私はどっちかって言うと、猫派かなー？ 犬も可愛いと思うんだけど、怖いのもいるんだよね」

「猟犬とかの類だろ？ ああいうのってさ、躡けるまではそりや大変だろうけど、それさえクリアしちゃえば飼ってる人にとって頼もしい存在なんだそうだけ？」

「うん。でも、そうじゃない人には良く吠えるし……。あ、飼ってるといえば。ペットはどうなの？ 何が良い？」

「飼うって言ってもなんだよなあ。うちには既にペット的サムシングがいるし」

「サムシングって。ペットみたいな何かがあるってこと？」

「何かって言うか……寄生虫？ いや、寄生獣か」

「右手に何か宿ってるの!？」

「あれ作中だと人間の事指してるそうだけ。パラサイト側の政治家が言ってただけだよ」

「人間だったんだよね、確か」

「叫び出すまでは絶対パラサイトだと思ってたのになあ……。あとあれだ。親戚が動物にめちゃんこ好かれやすい性質で、動物的癒しを求めるならそいつに会いにいけばいいから、あんまペットを飼う気が起きん」

「うーん……。でも、自分のペットだからこそ可愛いっていうのもあると思うな。自分の子が一番かわいいって言うか」

「それは否定せんが。かといって進んで飼うほどでもないかなあつて」

「新城君のお母さんも嫌がるだろうしね……。同居人が飼いたいって言ったら、反対しない？」

「しないなー。ちゃんと世話するって約束しといて俺に任せつきりにするってのは、流石にムカつくけどさあ」

「私は経験ないけど、分かる気がする——あ、もう時間だ」

「ん。キリは良かったし、こんなもんか」

「はあーい！ 以上、第一回番長ラジオでした！ みなさん楽しんでもらえましたか？」

「ねえこれほんとに続けるの？ 第二回もやるつもりなの？」

「それではまたお会いしましょう！ シューネクストタイム」

♪ 猫ふんじやった ♪

「EDの選曲うううう!!!」

聖櫻番長の見回る保育園

今日は保育園に来ていた。

かと言って保育園の先生のバイトをしているわけではない。

聖櫻学園のイベントの一環。保育士の職業体験である。

学園の提携である近所の保育園にて、一日先生として働き、園児達と遊んであげるという趣旨だった。

提携している保育園は複数あるので、それぞれに生徒達が分かれ、俺もその内の一つである保育園に来てるわけだが。

「はい、それじゃ私がオルガンを弾くので、それに合わせて皆で元気よく歌ってね」

「はあーいつ」

「うん。良いお返事だよお。それじゃ、さんはいつ」

「らー♪」「らー♪」「らー♪」

「……あらあ、ばらばら……。よし、皆もう一回！ はい、で歌うんだよ」

「はあーいつ」

「さん、はいっ」

「「らー♪」」

(うん。こっちは大丈夫そうだな)

部屋の窓から覗いた風町担当のぼら組は、順風満帆だった。

俺は担当する組が無い、いわば遊撃隊のような先生だ。組を見回り、上手くいっていない組にフォローを入れる役である。あるが、正直俺如きのフォローが必要になる組があるのだろうか。

しかしあつらえたように保育士が似合うな、風町。

音楽関係もここでは強みになるだろうし、元々の性格からそういう雰囲気醸し出ているというか。単に子供好きなだけでは出せない統制を感じる。

一緒に担当してる白鳥も上手く歌えてない園児に優しく指導してやれてるし、心配無用のようだ。

(さて、こうなると別の組の様子を見に行った方がいいかな)

ばら組から離れ、廊下を歩く。

隣のすみれ組は……あの人がいるからこつち以上に心配はないと思うが。まあとりあえず見ていくか。

扉の窓から覗く。

「浅見^{あさみ}せんせーっ！ あっそぼー！」

「はーい。何して遊ぶ？」

「せんせーっ。ごほんよんでー？」

「あ、ごめんね。ご本は後でいいかな？ その代わり、一緒に遊びましょう？」

「せんせー好きー！ けっこんしよー！」

「大人になったら、考えてあげるね」

おーおー。浅見先輩、引っ張りだこになつてら——

「………まだ、まだ落としてないね」

「さて、どうかな……もう私は落としてるかも」

「なんの遊びをしてんだあんたら！」

すみれ組に突入。

子供達、子供達と遊んでいた浅見先輩、そして椅子に座った玉井先輩たまい、その後ろでハンカチを持っていた九重先輩ここのえ、がビックリした様子でこちらに注目した。

その拍子なのか、九重先輩の手からハンカチが落ちる。

振り向いてそれを見届ける玉井先輩。

「あ、チェック成功」

「ああ、ドロップ失敗かあ。それじゃあ次は麗美れみの番ね」

「続けるな！ 浅見先輩が子供達の相手を一手に引き受けてるじゃんか！」

「び、びつくりしたあ。新城君だったんだ」

「つーか何の遊び!?! 何の勝負!?!」

「ハンカチ落としたよ」

「混ぜろ！ 子供を！」

何のために来てんだここに！

「つーか浅見先輩。子供の相手もいいですけど、注意くらいはしましょうよ……」
「うん、まあそうなんだけど……。あまりにも真剣にやってたから、声掛けづらくて……」

最初は子供達もやってたんだけどね、とフオローする浅見先輩。
それがどうして椅子を持ち出して一対一の対決になってるんだ。
飽きちゃったの？ 子供が飽きちゃったのに続けちゃったの？

「カズもやる？ ルールはね」

「やらないからいいです。みんなでやる何かをやりましょうよ。子供達を入れて」

「じゃあゴルフ」

「フィールド広過ぎ」

「ビリヤード」

「持ち込むもの多過ぎ」

「……バレーボール？」

「体格差あり過ぎ」

「もうカズが決めてよ。そう言うんなら」

「いつものを否定されたからって拗ねんでください」

子供の前で子供みたいな……。

「トランプでもやりますか？　ちようど持つてきてるんで」

そう言つて懐からトランプの束を取り出す。

遊撃先生は、こういう遊びのアイテムをいくつか持たされている。トランプとかの小物に限るが、園児達がバラバラにして放置してしまいそうなものは避けた、据え置き物には無い遊び道具をチョイスしているのだ。

「まあ園児達が出来るものに限られますけど」

「そうね。みんなー、トランプで出来る遊びあるかなー？」

「ばばぬきー！」

「しちならべー！」

「しんけいすいじやくー！」

「大体出来そうね。それじゃ、浅見さんも一緒にやろつか？」

「ええ。新城君、準備してくれる？」

「いいですよー。ババ抜きからにしますね」

そうしてすみれ組＋4人のトランプ大会が行われる運びとなった。

・ババ抜き

「いっちぬっけっぴ！」

「にー」

「三抜けつと」

「あはは……。人数多いから、一回が終わるのが早いね。四抜け」

「ごー!」「ろくー!」「なな!」「はちー!」……

「で、俺と玉井先輩か」

「ぐぬぬー……三回連続ビリはやだ! さあ! どっちがババかわかるか!」

「ふむ……」

「あつ……」

「……」

「おお……」

「わっかりやす」

「ああんっ!」

「抜けー」

「もおく、どうして勝てないのおく……」

「前にも言ったけど、麗巳はわかりやすいんだって。すーぐ顔に出るし」

・七並べ

「……麗巳、あなた持つてるでしょ」

「な、なんであたし!？」

「とぼけないで! そんなに手札持つててここにないわけでしょ!」

「いやあたしも出せてないだけだから! ここで止められてるだけだから!」

「おねえさんたち、しんけんだねー」

「なんだかんだで、どっちも熱中しちゃうタイプなのよね。……君達も持つてないんだ

よね?」

「んーん」

「誰が持つてるのかしら……ハートの8」

「もう誰でもいいから出してほしいところですけどね……」↑持つてる

・神経衰弱

「「「……………」」」

「おにいさん弱いねー」↑4枚

「幼さ故の鋭い言葉!」↑0枚

「駆け引き絡みは結構強いのに、記憶力勝負になるとボロボロなのよねえ……」↑8枚

「人の顔と名前はすぐ覚えるのに、不思議なもんだねえ」↑6枚

「ど、どんまいどんまい！ 次は上手くやれるから！」↑12枚

「五回中五回ともその台詞聞かされましたあ！ ていうか俺に回ってくる頃には狙ったように覚えたカード全部持ってかれてるんですけど！ 新手のいじめ!?!」

「言い訳を始めたわよ」

「情けない情けない」

「結構辛辣ですね！」

「よーし！ それじゃあ次は、大富豪でもやろつか！」

「だいふごー?」

「わかんないか。ま、やりながら覚えよつか」

「はーい」

そうしてゲームをいくつかやっていく内、先輩方もちやんと子供の面倒を見れるようになっていた。

子供と言えど勝負相手になると見たのか、勝負事好きな玉井先輩から闘志が見られ

る。

そんな二人を見てか、浅見先輩がくすりと笑う。

「良かった。ちゃんと楽しめてるみたい」

「やっぱり一人で相手するのはきつかったですか？」

「ん……………ホント言うかね」

やっぱりか。

笑ってはいんだけど、困ってる風でもあったと思つたら。

「だから、君が来てくれて助かったかな」

「もう大丈夫ですか？」

「ええ。ありがとうね。ここはもう大丈夫だから」

「そうですか。では、また何かあれば」

「頼りにさせてもらうね? ……ほらみんな。お兄さんにまたねしようね?」

「またねー!」

「またあそんでねー!」

「またねー、よわいおにいさん」

「おっと調子に乗るなよ」

先輩三人の輪の中に混じる園児達に手を振り返して、すみれ組を後にした。

もう一つ隣のひまわり組は心配しかなかったので、ノータイムで突入した。

「おかえりなさいませえく、あ・な・た♥」

幼妻に出迎えられた。

「……甘利^{あまり}。何してんの？」

「ああ、駄目ですよお。先輩は今、甘利の旦那様なんですから」

「旦那様？」

「わく、お兄ちゃんだー」

「おん？」

甘利の小さい体の上から後ろを見る。

うさぎがいた。

ではなくうさぎを頭に乗せた長谷川はせがわがいた。

「おかえりなさ〜い。ピョン太と一緒に待つてたよ〜」

「……………」

「混乱してるようだな。無理もない…………」

「おお、不知火しらぬい」

長谷川の発言に疑問符を浮かべていると、ちびっ子に囲まれるちびっ子…………じゃなくて不知火から声がかかった。

園児達御用達のテーブルの前で正座している。

「今、子供達とおままごとをしていてな。その内来るだろうと、君が父親役に任命されていたんだ」

「……ああ、それで」

「いすずちゃん！ きみ、じゃなくておにいちゃんでしょー！」

「ばばー、おなかすいたー。はやくごはんにしよー？」

周りの園児達から不満の声。

「……全く。何で私が子供役なんだ……。しかも君の妹役だと？ 納得いかん……」

不知火がぶつくさ文句言ってる。

ん？

「あれ？ 俺が父親役なのに、子供の妹？」

「ああ。長谷川さんと不知火先輩は、子供達の叔母。先輩の歳の離れた妹さんなんです

よお」

「離れ過ぎイ!!」

まだ幼い妹達と妻と大勢の息子娘を扶養してる設定なのか俺！

一家の大黒柱にしても支えるもの多くない!?

「ところで旦那様あ。ご飯になさいますか？ お風呂になさいますか？ そ・れ・と・もお♪」

「……子供達がお腹空かしてるみたいだし、ご飯にしようか」

「かしこまりましたよお♪」

ばたばたと歩く甘利。

………甘利は鼻屑目なしでも美少女だし、シチュエーションも男の憧れなんだけども。

でも甘利だからなあ……。

期待0なのに不安ばかりが膨らんで、これっぽっちもワクワクドキドキしない。ハラハラドキドキはするのに。

「そういえば、旦那様あ？」

そうやって甘利は、掛けてあった男物のYシャツをその手に取る。

そして口紅を取り出し。

胸ポケット辺りに何やら描き込んで。

口紅を仕舞い。

それを俺の方へと見せつけた。

「洗濯していたら見つけたんですけどお……。これ、一体なんなんでしょうねえ……。？」

「君が今描いたキスマークですけどお!!？」

アイエエエエ！ シュラバ!? シュラバナンデ!?

「いえ。甘利は旦那様を信じていますよお？ ですから、これについてもきちんと説明して頂ければ、甘利は何もしませんからあ……。フヒヒ」

「表情と笑い声が絶対何かする人のそれなんだよ！ 問答無用じゃん！ 俺が何を言っても言い訳にしかないじゃん！」

「言い訳……？　つまり、浮気を認めるといふ事ですかあ？」

「例え玩具でも包丁を持ち出すな！　つかおままごとに家庭の惨劇を持ち出すな！　どんなりアル思考だそれ！」

いきなりぶつこんできやがったよこいつ！　園児達に血を見せたいの!?　スプラッターの衝動はどこにいても抑えることが出来ないの!?

「もう。甘利に内緒で女の子に手を出すのは禁止ですって、何度も言っているじゃないですかあ」

「だから手え出してねえつつの」

「えんじょうじ円城寺さんー？　ご飯は出来ましたかあ？」

「はい。ただいま」

「わー！　ごはんだー！」

「おいしそー」

「ぱー。ままー。はやくはやくー」

「それでは、いただきましようかあ♥」

「……ん？　あ、ああ」

勝手に始まったと思ったら、勝手に終わった。

甘利の修羅場は神出鬼没らしい。

園児達が囲むテーブルへ向かうと、そこには所狭しと並べられた玩具の料理達が。

白飯。味噌汁。ハンバーグ。ピーマン。人参。

……甘利が妻役にしては、やたらまともなレパートリーだな。

「お待たせ致しました。どうぞお召し上がりくださいませ」

そう言って、円城寺はキッチンらしき台に玩具の包丁を置き、ペこりと頭を下げる。その背にはベビーキヤリーが備え付けられ、女の子の人形が一体背負われていた。

「赤ん坊の面倒見てるのか。円城寺は……二人より大きい妹つてところか？」

「いえ、違いますよ。円城寺さんは、甘利とも旦那様とも血縁関係にありません」

「んー？ じゃあ……家政婦さん？」

「愛人です」

「……………は？」

「小菊こぎくは新城様の愛人で、この子は私と新城様の子供という設定でございます」
「設定に狂気を感じる!!」

この妻と愛人を同居させるってどんな神経してる父親なんだ俺?!

こんなん絶対毎日修羅場なんですけど?! それとも何?! 甘利の前での浮気なら許してもらえるの?! それはそれで怖いんですけど?!

「フヒヒヒヒ♪ 血みどろ待ったなしの家族構成……。甘利、ゾクゾクしちゃいますぅ♡」

「全員普通に子供達の一人でもいいじゃん! 妹でもいいじゃん! 何でややこしくして愛憎劇繰り広げようとしてんの?!」

「ところで、愛人とは一体どういったものでございましょう? 新城様には甘利さんという奥様がいらつしやいますのに」

「わからないままやってたのお前?! 逆にすごいな!」

「ああ、駄目だよピヨン太。お兄ちゃん、弟のピヨン太はこっちで食べるから、抱えてきて〜」

「うさぎの弟までいるし!」

あーもう滅茶苦茶だよ。

とりあえず弟のピョン太を抱え、テーブルを囲む俺達とは別に餌（本物）を食べる位置に置く。

席に戻り、手を合わせた。

「いただきますーす」

「いったただつきまーす！ ほら、いすずちゃんも！」

「ぐう……い、いただきますーす。もぐもぐ……」

「……………」

不知火はいつも以上に子供っぽい声色でいただきますしていた。顔は口角を上げて引き攣っている。

「ぐ、ぐはんおいしいねーっ？ あのね、いすず、ハンバーグ大好きー……………」

不憫！

「そ、そつかそつかー。いやー。円城寺の料理は絶品だなー」

「そ、そのようなことは……。はう」

「旦那様あ？ ハンバーグは円城寺さんと甘利で作ったんですよお？ じよおくずにお肉をグツチャグチャにしてからこねこねしたんです。褒めてください♪」

「い、いやあ。いい嫁を貰えて幸せ者だなあ」

そのハンバーグ、人肉混ざってたりしないよな？

おままごとで、玩具のハンバーグで心の底から良かった。

子供達と一緒に、白飯をスプーンで掬って、食べる動作をする。

一也。パパ。大人になっても箸を扱えないようである。

「ねえママー」

不意に、園児の一人が甘利に呼びかける。

「ママは、パパのことをすきっ！」

「ええ。好きですよお」

甘利は笑顔でそう答える。

甘利は笑顔でこう続ける。

「ホルマリン漬けにして、その体を永久に観察していたいくらいに♥」

「ねえ代わって!? 不知火が俺の嫁になって!」

「ば、馬鹿な事大声で言うな! わわ私とて、子供役には不満があるし……その、なんだ……」

「あ。甘利は愛人でも構いませんよお? 円城寺さん、先輩の奥さんになります?」

「そ、それは些か……心の準備が」

「あー。ピョン太ー、残しちや駄目だよー?」

長谷川だけが、喧騒から遠く離れていた。

あの後もしばらくおままごとは続いたが。

不知火が俺へのお兄ちゃん呼びに耐え切れず、昭和の親父さながら、叫びながらテールを引つ繰り返してしまったので、別の遊びをしようということになった。

その際、遊撃先生の俺はひまわり組から退出。

不知火が恨みがましい目で見てきていたが、甘利がいる以上、俺にはあの組をどうすることも出来なかったのだ。

気絶させる以外にあいつの暴走を止められる術があるなら、どうか教えてほしい。

(次のたんぼぼ組は……優木、竜ヶ崎、小日向、千代浦先輩が担当だっけか)

ああ見えて竜ヶ崎は面倒見が良いし、他の三人も子供の評価は高そうだから、ある意味浅見先輩率いるすみれ組より安心は出来るが。

問題は、竜ヶ崎が千代浦先輩とトラブル起こしてないかなんだよなあ。

どっちも初対面で上手くコミュニケーション取れるタイプじゃないし、プライドもわりかし高めだから口喧嘩に発展しているかもしれない。流石に子供の前で手を出すようなことはしないだろうし、優木と小日向には理解があるからストッパーにはなるだろうけれど、一応見ておいた方が良さそう。

たんぼぼ組の前の廊下に到着する。
さてさて。どうなってるやらと。

「せんせーあそんでー!」

「ふええ。髪引つ張らないでー……」

「おいお前等! 先生が困ってるだろ!? 遊びてえなら遊んでやつから、乱暴すんな
「はーい」

「うん。素直でよろしい。ちゃんと先生にごめんなさいして」

「……ごめんなさい」

「う、ううん。大丈夫だから、もうしないだね? ……竜ヶ崎さん。千代浦先輩。ありが
とうございます」

「別にいいのよ。困ったときはお互い様」

「たく。最近のガキは……。お前もこういう時はビシツと言わねえとよお」

「ご、ごめんなさいく……」

「いや、謝られることでもねえけどよ……」

「……ふふ」

「な、なんだよ……」

「いやね。なんだかそういう物言い、新城に似てるな、と思つて」

「せ、先輩に？　そうか……？」

「そう思わない？」

「ええつと……あ、そうですね。新城先輩も、おんなじこと言つてたような気がします」
「好きな人の癖は似るつて言うけど、それかしらね？」

「ばっ!?!　そ、そんなんじゃねえよ!　そりゃあ先輩のことは尊敬してつけど、そういう女々しいのとは違うからな!?!　本気だかんな!?!」

「はいはい。そういうことにしときましよう」

この短時間で既に弄り方を心得てらつしやる。

弄りネタに使われる俺も若干恥ずかしいが、友好的な関係を築けていると思えば良い傾向だろう。

こうすると俺が出ていく必要も――

「あれえ〜先輩？　扉の前でどうしたんですかあ？」

「お」

見つけた。

教室側からではなく、廊下側で背後からの声である。振り向くと、そこにはエプロンを装着した小日向の姿が。

腕いっぱいフルーツを抱えていたが、大して驚きはない。

「様子を見に来たんだが、心配は杞憂に終わりそうだしな。そろそろ組をもう一周見て回ろうかと思って」

「ええ〜？ そんな、たんぼぼ組にも寄って行つてください。みんな喜びますよ〜」

「そうかあ？」

「そうですよ〜」

そうは言うが、仲良くやつてるみたいだし。

しかし次の言葉を待たず、小日向は扉を開けてみんなに呼びかける。

「みんな〜。新城先生が来てくれましたよ〜」

「わ〜い」

「だれ〜？」

「あ！ せ、先輩！ お疲れ様っス！」

「こんにちは、先輩」

「ああ、来たのね。どうかした？」

「こんにちはー。いや、様子見に来ただけのつもりでしたけどね……」

見ると、教室の中ではぬいぐるみや折り紙が所々に置かれていた。

クマ。ゾウ。うさぎ。キリン。ライオン。猫と、ぬいぐるみも折り紙も種類豊富に作られている。

ぬいぐるみは短時間で出来そうな簡単なものばかりだったが、折り紙の中でよれよれだったりしてしまっているのとは相まってシャキンとしてるのは、千代浦先輩の作品だろう。

中でも一際異彩を放つのが大きく翼を広げた竜の折り紙なのだが……え？ あれ折ったの？

「あ、あの……」

「ん？」

「……もしかしてっスけど、さっきの聞いてたっスか？」

「俺の物言いが移ってたこと？」

「い、いや！ それはっスね！」

「尊敬はしてるけどそういうんじゃない、だろ？ 聞いてた聞いてた」

「ほっ。なら良かったっス」

「女の子としてそれもどうなの……？」

そうは言うがな先輩。

さて、この分だと俺の持つてるアイテムも大して役に立ちそうにないが、どうしたも
のか。

「まあでも、いちごと一緒ならちようどよかったわ。君も参加する？」

「はい？ 参加ですか？」

「おえかき」

「おえかき……って、じゃあ小日向。そのためにフルーツ持ってきてたのか？」

「はい。フルーツをモデルにして、みんなでおえかきしようって」

「いちごは、いちごも持ってきてたから、みんなでいちごを食べるのもいいかなって思っ
たんですよ」

「成程ねー」

いちごがいちごを持ってきていちごを食べるって。
紛らわしい。

文脈からして、どのいちごが小日向でどのいちごが果物のいちごなのかくらいわかるが、曲解されたらヤバイ意味になりそう。

「先輩もどうぞ。いちごを食べてくださいい」

「……おう」

わざとかこの子。

心の汚れ具合のチェックですか？

園児達にも配っていた果物のいちごを受け取り、口に放り込む。

甘くてジューシーな味が口いっぱいに広がった。

「えー。でもおえかき苦手なんですけど、俺」

「そうなんスか？ でも、アタシも人に見せられるレベルじゃないし、気にしなくても」

「いや、お前の言うのとは多分レベルが違うと思うよ。俺のは」

「そう言わずにね。この子達も、一人でも多い方が楽しいでしょうし」

「おにーさんもしよーよー」

「ねーねー」

「あ、あの。私からもお願いします。先輩の絵、見てみたいです」

「期待持つ方向で言われても……」

いちごを頬張り終えた優木からまでもお願いされてしまう。

まあ、可愛い後輩と園児がこう言うんだ。ガツカリされても責任は持てんが、参加してやらない理由は無いだろう。

「わかったよ」

「えへへ。じゃあ先輩、これをどうぞ」

「サンキュ」

「竜ヶ崎さんも」

「おう」

優木から手渡される紙と色鉛筆一式。

園児達は自分で用意したクレヨンを使うようだった。

真ん中のテーブルにフルーツが置かれ、それを取り囲むように座る俺達。

「さて、描くとしましょうか」

「桃さん、林檎さん、オレンジさん、パイナップルさん♪」

「……………」

美術部二人は絵具とキャンパス立てまで用意していた。

本格的過ぎてちよつと引く。

数十分後。

「おお。やつぱり格が違いますね、千代浦先輩は」

「そういう君は相変わらず手抜きとしか思えない出来だよね……」

とりあえず出来る限りは描き上げた俺は、千代浦先輩の経過を見に来ていた。

まだ描いている途中ではあったが、やはりというか流石というか、美術部の貫録を見せつけられた気分だ。

それに比べ、俺の絵は……。

真面目に描きはしたんだけどなあ……。

「なーんか林檎のこの、緩やかな曲線が描けないんですよ」
「だからといってこんな角張った林檎、私初めて見たわ……」

六角形の林檎が出来上がったと思うだろうか。
違う。

正方形の林檎が俺の紙に描かれていたのだ。

どんな風に握ればこんな形になるんだか。

丸の一つもまともに描けない俺である。

「塗りもはみ出してゐるし、線はよれよれだし、色遣いもひどいものだし、園児達でもまだマシに描ける子がいるんじゃないの？」

滅多打ちだった。

顔を集中的に竹刀でバシバシ叩かれてゐるような言葉の嵐である。

いや、まあ批判されるのは目に見えてたんですけどね？

「大概の人は練習したらどうにかなるものだけど、君のこれは」

「はい。もういいです。十分です」

退却した。

新城一也、敵前逃亡である。

いや、敵じゃないけどね？ 先生だけどね？

先輩に背を向けたが、尻目に見ると自分の絵に戻っていた。絵のことになると人が変わったように集中するよなあ……。芸術家肌というか。

さて、他はどうなってるかな、と。

園児達が園児達らしい絵を描いているのを横目に、とりあえず竜ヶ崎の所へ。

「ぬぐぐ……」

(苦戦してるなあ)

それだけ真面目に取り組んでるといふ証なんだろうが。

どれどれっと……。

えらく棘が伸びたパイナップルらしきものが描かれていた。

(なにこれ釘バット?)

人のこと言えた義理じゃないが、これは中々。

へたと比べて身がなんか異様に長い。

「あ、先輩。中々上手くないかないつスよね」

「うん。どう上手くいってないかはわかってやれないけど、上手くない気持ちにはわかるよ……」

「どうしたらこうなるのかって聞かれると、どうにかなったらこうなったとしか言えない。」

「先輩はどうっすか？」

「こんなんだよ」

竜ヶ崎に俺の絵を見せた。

「……………」

「……………」

「ぜ、前衛的っスね！」

「かえって傷付く！」

「ああ！ すいやせん……」

「分かってたからいいよ……」

その言葉が聞こえているのか聞こえていないのか、竜ヶ崎は落ち込んでしまった。自分の美術センスより、俺を不用意に傷つける発言をしてしまった方が問題だったらしい。

指摘は千代浦先輩にガッツリ受けたし、そもそもそれくらいで根に持つほど傷付くメンタルでもないんだが。

しかし言っても無駄な様子だ。仕方ないので、小日向の方へと向かう。

フルーツに並々ならぬ情熱を注ぐ小日向であるが、今回はどうなってるだろうか。誰から見ても楽し気に、キャンパスに絵具を塗る小日向の後ろから、覗いてみる。

「♪〜」

「……やっぱすげえな」

「あ、先輩。ありがとうございます〜」

描き慣れている、とでも言えればいいのか。

それぞれのフルーツを全体像から細部に至るまで丁寧に描かれている。

質感、匂い、重量、その他諸々を絵で表現せんばかりの絵画であった。

千代浦先輩が万遍なく上手く描ける人間であれば、小日向は果物特化。他で負けてもフルーツへの愛は負けていないことの証左であると言えよう。

「先輩は描き終わったんですね。私も、この桃さんと背景で出来上がりますよ」
「うん。まあこれと比べるべき代物じゃねえけどな……」

高低差で言えば、小日向は月、俺はマントル辺りが妥当。

「苗ちゃんのはどうなってますか？」

「優木か。そういうえばあいつの絵、ぬいぐるみの設計図でくらいしか見たことないな」

「可愛い絵が出来てると思えますよ。是非見ていつてあげてください」

「そうすつか」

「ではでは」

パレットにはピンク系統の絵具がある。これから桃の塗りに入るのだろうか。

これ以上邪魔しちや悪いので、小日向から離れ、優木の所へと向かうことにした。

(可愛い絵、ねえ……)

設計図だと見た目を裏切って精巧だったりする優木だが、絵だとどんな画風なのやら。

園児達に混じってカメレオンのように同化している優木を発見。

一生懸命に描いているのか、近づく俺に気付かない優木の背後から絵を覗き見する。

デフォルメ絵の果物の被り物を被った俺達が描かれていた。

(かわええっ!!!)

咄嗟に口を押さえて飛び出かけた言葉を封じた。

でも幼い！ ある意味この場の誰よりも幼い絵が出来上がってますよ優木さん!!

時谷先輩がいなくてよかった……あの人がいと一緒に描かれていたら、感極まって泣

くかもしれん。

「んしょ……うんしょ………」

なおも懸命に、笑った顔の俺が被った蜜柑の被り物に色を付けていく優木。家族の絵を描いている娘を見た父親の気持ちを、この年で味わった気分になった。

総合成績発表。

1位、小日向 (フルーツの画力トップ)

2位、優木 (画力は先輩に劣るが、可愛らしさで多くの票を集めた)

3位、千代浦先輩 (普通に画力が評価された)

俺と竜ヶ崎は、仲良くワースト2だった。

真尋と芽以の視線と壁ドン

「あれ?」

「あ、芽^{めい}以^いちゃん」

私——^{もりその}森園芽以は、図書室に来ていました。

今日は友達の真^{まこと}琴^{こと}ちゃんと宿題を進めるために図書室で待ち合わせていたのだけど、掃除当番だから先に行つて待つててもらつて。

細かい所が気になつてお掃除に時間が掛かっちゃったから、終わつてすぐにこつちに来たんだけど。

当の真琴ちゃんは、漫画を熱心に読んでいるようでした。

傍らには積まれた漫画。

……宿題は?

「お掃除お疲れ様ー」

「うん。それはありがとうだけど……。なにかな? それ」

「え？ 芽以ちゃんこれ知らない？」

「知ってるよ。漫画だよね？」

「いやそうじゃなくて」

うーん、とちよつと唸って。

「このタイトルの漫画のこと、知らないの？ ってことだよ」

「タイトル？ えつと……」

言われて、漫画の表紙に書かれている文字を読んでみる。

『おおかみさんと後輩ちゃん』

ちつとも目にしたことのないタイトルだった。絵柄も見たことがない。

ちよつと悪そうな男の人と、比べると小柄な女の子のツーショットが表紙だけれど。

「ごめんね、見たことないかも。どういうお話なの？」

「そっかー。これね。意地悪でSっ気の強いけど、カッコよくて優しい先輩と、ちつちやくて可愛い後輩の女の子が恋に落ちちやうお話なの」

「S?」

「……………」

頭を抱える真琴ちゃん。

Sってなんだろう。

服のサイズのことかな？

でもそれだと「け」っていうのと繋がらないし。

「と、とにかく！　すごくどきどきする少女漫画なんだー」

「へえー……………」

そう言われると気になってきます。

宿題もそんなに多くないし、ちよつとくらいならいいかな…………。

真琴ちゃんが積んでいる漫画の一つを手取る。

「…………あ！　でも芽以ちゃんには」

とりあえず中間くらいのページを開きます。

『(うううう)としてほしいの?』

上半身裸の男の人が、上着が肌蹴て下着姿の女の子に迫っていました。

「ひあああああああああああああああああああああああ!!!」

図書室っていう大声禁止の場所でも憚らず、自分でも驚くほどの声が出てきた。

火傷しそうな熱い物に触れたみたいに手が引っ込んで、その場から飛び立つみたい
に離脱。近くの本棚に身を隠します。

宙に放った漫画が、遅れてテーブルに落ちました。

「な、なにやな、なににやんななな、なんてものを読んでるの真琴ちゃん!!?」

「ああもう！　そういう反応するからまだ早いって言おうとしたのに!!」

「と、図書館なんだよ!?　学校なんだよ!!　たくさんの人がいる中でそんなえつちな本読んでるなんて!!　見損なつたよ真琴ちゃん!!」

「そのえつちな本、この図書室にあつたものだからね!?　つていうかえつちじゃないから!!　えつちに見えるところそんなにないから!!」

「嘘だよそんなの！　たまたま開いたページでそんなシーンが出てくるわけないもん!!」

「芽以ちゃんのたまたまが不運過ぎただけだよ!」

「お、お祓い……………！　お祓いしなくちゃ……………!」

「待つて待つて!　ていうかそのお祓いの棒いつも持ち歩いてるの!?!」

真琴ちゃんは、あくまでそれがえつちな本ではないと言い張ります。

取り出した大幣おおぬきを構かまえつつも、こわくなーいこわくなーいと訴える真琴ちゃんに、少しずつ少しずつ近寄る。

ちらりと、さつきの漫画がテーブルに置いてあるのが見える。

うう……………、怖いよ秋穂あきほお姉ちゃん……………。でも秋穂お姉ちゃんもこういうの駄目そうだし……………。

「……そんなふるふる震える程こういうの駄目なの？」

「だ、だって、お母さんが、こういうのはもっと大人になってからって……」

「お母さんが、かあ。でも、高校生にもなったならこれぐらい普通だよ」

「こ、これが、普通なの……？」

「……まあ、ほんとのほんとにえっちなのは、私もちよつと勇気でないけど」

ほんのり赤くなる真琴ちゃんの頬。

「と、とにかく。これがえっちだと思うのは芽以ちゃんに耐性が無いからだよ。序盤の方から慣らしていこ？」

「だ、大丈夫だよね？」

「大丈夫大丈夫。さつき見たところだって、大分関係が進んでからのことだし」

逆に言えば関係が大分進むとああいうことになるっていうことなんだけど……。

とはいえ、真琴ちゃんが熱心に薦めてくれるのを拒絶するのも悪いと思い、とりあえず最初の方から一緒に読むことにしました。

「視線を感じるの」

俺——新城一也の目の前で、夏目真尋なつめまひろは言う。

「そりゃあ、俺が目の前にいるからな」

「今現在じゃなくて最近の話」

それぐらいわかってよ、と言わんばかりに溜息をつく夏目。

まあ分かってて言ったんだが。

俺達は図書室のテーブル席にて、テーブルを挟んで座っていた。

別に昨日以前の約束ではないが、授業が終わって暇になった俺。さて、今日はどこに遊びに行こうかと考えていたところで、夏目からの相談事との連絡を受け、こうし

て図書室へとやってきたのだ。夏目の相談事となると、まあ小説云々だろうと思つていたが、当てが外れたようだ。

さつき森園と終の声が聞こえた気がしたが、気にしないことにした。

夏目の手元にはノートパソコン。

こっちはウルトラ気になる。

「ずっとつてわけじゃないんだけど、授業が終わつた後とか、お昼を食べてる時とか、放課後とか。不定期にどこからか、誰かが見てるような感覚があるの。放課後が一番な」

「ふむ。授業中でないという事は、少なくともクラスメイトではないのか」

「だと……思う」

「振り返ったり、追いかけてたりして姿を見たとか、そういうのはないか？」

「まあ、振り返りはしたかな。すぐ身を隠したみたいだから見てはいないし、……追いかけるのも、ちよつと」

「なるなる」

確かに、下手に追いかけて力技に出られたら、インドアの夏目に勝ち目があるかは疑

問だ。

相手が悪質なストーカーだった場合、ではあるが。

正体不明な以上、用心するに越したことは無い。

「それで、視線はいつから？」

「んー……。3日くらい前になると思う」

「3日ね。視線以外でその日や、その日から変わったこととかはある？」

「……特に無い、かな。視線は感じるけど、それだけ」

「ちなみにシャッター音は？」

「してないから、多分望月先輩じゃないと思う」

ふむ。そうなると不審者やらでもなさそうか。

ここでの経験上、ああいう奴等は隙を窺ってすぐ行動するタイプばかりだし、目立ちたがりが多いから夏目より先に周りの人間が発見するだろう。隠密するタイプだとしても、異変に気付いてるのが校内に情報の網を張っている新聞部を置いて、夏目だけというのをおかしな話だ。3日もあって校舎内に侵入している校外の人間を察知できない新聞部ではないだろう。

そうになると、うちの生徒内に夏目をストーリーカーしてる人間がいるわけだが。

「心当たりがまるで浮かばねえ……」

「やっぱりそう?」

男子は除外していい。

何故かって、俺と夏目が友達だから。

どうやら俺と親しい女子は男子達の中でカップリング扱いされ、事ある度に掲示板やらなんやらで燃料となっているらしく、俺のカップリング相手の女子は聖櫻学園男子共の間で不可侵の存在になっているとのこと。無論例外としてその枠からはみ出る男子もいるかもしれないが、うちの男子共の検挙率を考えれば不審者以上に無いだろう。

俺の知り合い以外でもレベル高い女子はいるし、割合女子の方が生徒数が多いわけだから、俺と親しい女子じゃなくても彼女は作れる（実際音楽室に出没するキューピッドの働きのお陰で、カップル成立している奴等は結構いると聞く）からというのが理屈らしいが……、それでいいのか男子達。

噂を聞いて掲示板を見てみたこともあつたが、熱意がやばかったのでそれつきりにしている。

ちなみにR18妄想スレなるものもまとめページにあったけど、開く勇気が出なかった。

「わたしとしても何かした覚えはないから、心当たりを探ろうにも」

「落とした小説を届けようと思うけど、内容がかなりプライベートだから人目につくところ返すのは忍ばれる……って線は？」

「っ!!」

はっとした夏目は、自分の鞆を取り出し、物凄い勢いで漁りだした。何秒かで探り終わったのか、若干息切れしながらこちらに向き直る。

「だ、大丈夫……。そつちの……線もない、みたい……」

「……りよーかい」

そんな大事なモンなのに3日も前に失くしたかどうかを確認しないと分からないのか……。

「こーいうとこ無防備だよなあ。」

「で、お前は俺にどうしてほしいわけ？」

聞けることは聞いたので、本題に入ることにする。

「うん。わたしとしては、協力してその人を捕まえて、問い詰めたいかなって」

「問い詰めるねえ。先生方には報告しない方向で？」

「場合によつてはそうする必要もあるかもしれないと思うけど……、正体が掴めない以上は大事にしない方がいいと思つて」

それもそうだろう。

ストーキングが確かだとして、それが声が掛けられないだけの善意ある行為なら、下手に事を大きくすれば申し訳なきまで大きくなるだけだ。

まずはそれを見極めなければならぬ。

最悪夏目の勘違いだという線もあるわけだし。

「今までは視線を感じても野放しにしてたけど、今回は新城君がいるから。ちゃんと捕

まえて話を聞こうと思うんだけど……」

「おっけ。じゃあ俺は捕まえる係な」

「……うん、ありがと。それじゃ作戦だけど……」

『俺の物になれよ』

「なんていうか……」

真琴ちゃんと漫画を読み進めて数分。

主人公の男の人とはまた別な人に女の子が迫られてるシーンを見ながら、私は正直な感想を述べます。

「女の子を物扱いしてる人が多いね」

「……………」

無言で読み続ける真琴ちゃん。

「いきなり迫ってきてるところもなんだか怖くて、女の子が萎縮しちやいそうだよ」
「……………」

なおも無言で読み耽る真琴ちゃん。

「こういう人が実際にいるかは分からないけど、こういうのでドキドキする人って」
「いないことは……ないんじゃないかな？」
「え」

沈黙を保っていた真琴ちゃんからの言葉。
漫画で顔を少し隠しながら。

「わ、私は、そのー……」

「その……なに？」

「こう、物扱いっていうか……所有されたいって気持ち？」

「気持ち、が？」

「……なくはないかなって」

「うえええええ!!」

本日2度目。

「ま、真琴ちゃん!!? 真琴ちゃんだよね!!? 偽物だったりしないよね!!?」

「え!!? 他の誰かに見える!!?」

「本人なら目を覚まして! こんな無理矢理迫ってくる人に物扱いされるなんて、怖いに決まってるもん!」

「いや、そのー……流石に無理矢理っていうのは怖いと思うけど」

「うんうん！」

「……でも、ちよつと強引に食べられちゃうっていうのはいいかなって」

「……………」

顔が林檎みたいに赤くなっちゃって、可愛いなどは思うけど。

え？

所有されたい？

強引が良い？

食べられたい？

あ、あわわわわわわ……。

「……芽ちゃんにはない？　そういうの」

「な、ないよそんなの……私、真琴ちゃんが全然わからない……」

「うーん……」

パラパラとページを捲る真琴ちゃん。

やがて目的のページに辿り着いたのか、こっちに紙面を向けてくる。

「ごういうのとか！ ドキドキするよね!？」

「……」

急にウキウキして主人公に女の人が壁を背に迫られてるシーンを見せられましたけど。

ドキドキはしません。

ハラハラはします。

「……よくわかんない」

「えーっ。巷で噂の壁ドンなんだけどなー……」

「カベドン？」

なんだろうそれは。

カビゴンさんの進化形かな？

「確かになんとも思っていない人からやられたら怖いかもしれないけど、相手にもよると思うんだよね。女の子はこういうの、憧れる人多いんじゃないかなーって」

「そういうものなの……？ 私がおかしいのかな……？」

「いいなー……」

うつとりした表情で、真琴ちゃんはそのシーンを食い入るように見つめます。

「私も、新城先輩にこういうのされたら……」

「……………」

真琴ちゃんは、新城先輩のことが大好きです。

恋しています。

一年生の生徒に先輩のことが広く知れ渡った事件のとき、遠くからその姿を見ただけで恋に落ちた。所謂一目惚れだったと真琴ちゃんは言っています。

あれ以来先輩を慕う人がすごく増えたのは知っていますけど、真琴ちゃんほど好印象を植え付けられた人はいないでしょう。

(確かに先輩は、すごい人だと思うけど……)

私もあの時とは違うけど、それ以前から先輩を知っていました。

その時も、あの時と遜色なくらい衝撃的な出来事だったと思います。

頼り甲斐があつて、優しくて、強い人だと思えます。

でも、真琴ちゃんのそれは一線を画していると言いますか。

先輩として慕っている私と比べるまでもないと言わんばかりです。

「私の残りの人生、先輩に捧げますって宣言しちゃいそう……」

「……………」

これが恋する女の子というものなんでしょうか。

私にはわかりません。

「わ、私……宿題に役立ちそうな本、持ってくるね……」

どこか遠くに見える真琴ちゃんから更に遠ざかるように、私は本棚へと向かいまし

た。

「視線を感じたら、わたしが大声で新城君を呼ぶから。それまではわたしと離れて行動してて」

というのが夏目の作戦らしい。

「この生徒で新城君のことを知らない人はいないし。一緒にいるのを見られたら、早々に退却しちゃうだろうから」

「まあいいけどさ。視線を感じたらすぐに対応できるだろうし、一緒にいてもいいんじゃないねーの？」

「すぐに視線が外れたら例の人かどうかわからなくなるでしょ？　しばらくしても視線

が外れないようだったら当たり。そうでなかったら外れてくらしいか情報がないんだから」

「……まあそうだな」

「というわけだから、本棚でも待機してて。なるべくわたしと一緒に視界に入らないような位置がいいな」

この密会している場面を見られていない前提の作戦ではあったが、幸い一緒にいるときにそれらしき視線を感じることはなかった。

今日都合よく現れてくるかという不安もあるが、三日間連続なんだ。四日目に援軍要請とフェイントがブッキングするとは考えづらいだろう。例え現れなくとも、日を改めて再挑戦すればいい。

そんなわけで、俺は夏目と共に視界に入らないよう、近くの本棚で時間を潰すことにした。

何かあれば夏目が俺を呼ぶため、声自体は良く聞こえる位置にいることにする。まあ、このワンフロアにいれば、大声はどこでも届くだろう。

しかし、不審者ではない。うちの生徒ではあるが、男子でもなければ望月先輩でもないとなると、夏目をストーリーカーする人間は女子生徒に限られてくるわけだが、そんな人

間いるんだろうか。

夏目の親友である春宮なら、女子にも人気あるし、納得できる余地はある。……いや、もしや将を射んと欲すればまず馬を射よの精神で、春宮に声を掛ける前に夏目に声を掛けて、その繋がりですら春宮と仲良くなるうって魂胆か？

うーむ。

もしくは、夏目の小説を読んで感動した子が、夏目とお近づきになりたいと機を窺っているの見るべきか。

そつちも有り得るか。

そもそも男子を除いて考えるのは早計過ぎたか？

夏目に恋心を寄せるのも十分有り得るが、うちの男子共が掲示板の燃料として俺の知り合いが普段どう過ごしているのかを観察しているのは、それ以上に有り得る話だ（一度見た時そんな話をしていたような気もする）。

それならそれで鉄拳制裁だろうが……うむむ。

「お」

などと考えていると。

本棚の前で見知った顔を見つけた。

「森園。なんか探し物か？」

「ぴゃっ!？」

ビクツと肩を跳ね上げる森園。

「せ、先輩。こ………こんにちは」

「……………」

なんかビクビクしてて怯える小動物みたいなんです。

俺、なんかしたっけかなあ……。

「……………邪魔したようなら離れるけども」

「い、いえ。邪魔だなんて、そんなことないです。先輩は何も悪くないです」

「あ、そう」

先輩はって、じゃあ誰が悪いのかって話だが、まあ俺がなんかやらかしたわけじゃないなら良しとしよう。

しかし、なんか様子が変だな。さつき終と大声で会話してたことが原因か？

見損なつたとかえつちじやないとか、何やら言い合つてたようだけでも。

呼吸を整えて、身体の震えを抑える森園。

「先輩は、どうして図書館に？」

「まあ色々あつてな。そういう森園は探し物か？」

「あ、はい。でも、探そうと思つたら本棚の本の並びがぐちゃぐちゃになつてるのが気になつちやつて」

「で、お掃除か。わざわざ片付けなくても委員の人がやつてくれるだろうに」

「いえ、私が好きでやつていることです。委員の方達も、これで少しでも楽になつてくれるなら、良いかなつて思うんです」

「まあお前ならそう言うよな」

……整理し始めたのはついさっきのようで、まだまだ並びが乱雑な本が随分とある。

森園の身長だといちいち台に乗らないといけないところもあるし、そうなると balan

スを崩して怪我をするかもしれないな。

終じやあるまいし確実にずっこけるとは思わんが、危なっかしいのもまた事実だし。どーせ待機中は暇だし。

「んじゃ、低いところはよろしく。俺は高いところやるから」

「え？」

「まーでも、俺も俺で用事があるから、そっちのお声が掛かるまでになるけどな」

「そ、そんな！ 先輩の手を借りるわけには……」

「いーんだよ。お前と同じお節介。つか、ほつといて怪我された方が迷惑だし」

「け、怪我つて。真琴ちゃんじゃないんですから」

友達に対する認識がひどいもんだが、それだけひどいのだ。あいつのドジっぷりは。

「そんじやーぼちぼち始めますか」

「あ……。もう、先輩つてば」

うーん。悪いことしちゃったかなあ。

せつかく芽以ちゃんが宿題を一緒にやってくれるのに、肝心の私が漫画に熱中して
ちや駄目だよ、やっぱり。

苦手なジャンルを押し付けちゃったみたいだし、そろそろいい加減にしないとかな。

「とにかく漫画は元の場所に戻しに行かないと」

積んだ漫画を両手に抱えて持つ。と、ちよつと上側が安定しなくてバランスを崩しそ
うになった。

うむむ……これだとどこかで転んじやうかも。

もう少し高かったら顎を乗せて安定させられるかもしれないけど……。

……………。

のしつと胸を乗せてみる。

(あ、安定した)

胸も支えられて、これ結構楽かも。

んふふ。これなら足を引っかけない限りは落とさなくて済むね。

周りのみんなに迷惑をかけちゃうドジだけど、私だって学習するんだからね。

誰にもとまなく胸を張って、漫画を入れてた本棚へと向かう。

「えっと、確かこつちだったよね……？」

さつき芽ちゃんが姿を消していった本棚の一つ前の本棚。そこが目的の場所だった。
た。

ここで問題発生。

元に合ったところが、私の身長じゃ届かないところでした。

「わー……」

そういうえば、取るときに本をばら撒いちゃったんだったよね……。……。

周りの人の手伝いもあつてなんとか片付けられたけど、流石に二の舞は……。

「……………」

とにかく、慎重にやらないと。

申し訳ないけど床に漫画を置かせてもらって、台を持ってくる。

頑張ろう。

頑張つて、一つずつ、ばら撒いちゃわないように。

これは……あそこで、これはそっちか。

うし。まあ大体こんなもんだろう。

「こっちは終わったけど、そっちはどうだ？」

「はい。こちらもあと中段が少しあるだけです。ありがとうございます」
「どういたしまして。しっかし……」

恙なく終わりそうな本棚の整理。

残りワンスペースのみとなると邪魔になるだけなので、少し下がって森園を見守る。

「まだお呼び出しが掛かないとは。中々現れないのか、夏目が感じ取れてないだけか
……」

「夏目先輩？ 何かあったんで」

すか、と言おうとしたのか、森園が振り向いたところで。

「わわわああああ!!!」

という慌てた声が聞こえて。

柀の声だと認識した瞬間に。
前の本棚が倒れ始めた。

「っ!! 森園！」

「え？」

森園は自分の危険に気付いていない。

俺の方を見て、本棚が視界の背後に回ったからだ。

避ける、というには遅すぎる。

森園を抱えて投げるにも、本棚は大きいし、何よりそれで怪我をする。

落ちてくる本を捌こうにも、それじゃあ倒れる本棚を支えられない。

決断は早かった。

森園の頭上を掠めるように、本棚に腕頭打ちを叩き込む。

「ふえ!?!」

勿論、それで落ちてくる本が全部止まるわけではない。

しかし森園の頭上に落ちてくる分だけは止められるだろう。

右腕で押さえた分。そこから上は俺が覆い被さるように防ぐ。

いくつかの本が頭と背中にぶつかる。

だがまあ、俺が身長高いのと、痛みに慣れてるのもあって、大した痛みは無かった。

見下ろす森園には見る限り被害が及んでいないので、とりあえずは胸を撫で下ろした。

「……………お」

降り注ぐ本の雨が止んだ。

折角並べ直した本はバラバラになってしまったが、人的被害は無くて良かった。

「ったく」

本棚の向こうに呼びかける。

呆れかえった声だったろう。

「お前のドジも直んねえな終」

「うえええ!? せ、先輩ですか!!? ごめんなさいく!! 私ったらまたく!」

「わかったわかった。とりあえず、そっちの安全確保したらこっちに回ってこい」
「は、はい!! ただいま!」

本棚の向こう側で、バタバタと大急ぎで動く様子。

まあ、ドーセ気を付けたところでドーにもならんのだろうけど。
本棚を立て直す。

「森園? もう終わったけど、怪我ないか?」

「……………」

「……………森園?」

「……………お」

「お?」

「お祓いです!!!」

「何故!?!」

「せ、先輩も私も今すぐお祓いするべきです! 邪念が渦巻いています!!」

「え、なに!? 人助けしてて何で渦巻くような事例が発生するの!?! ていうかお前もかよー!」

「滝に打たれましょう!! それか、瞑想で邪念を追い払ってしまいましょう!! さあ! うちの神社で!!」

「いやいやいやいやいや!! 神様に顔向けできないようなことしてないから! さつき
の今なら尚更!!」

なんてやっていると。

「だ、大丈夫ですか!?!」

加賀美が現れ。

「新城君！ そつちに行つたよ!!」

その後ろから夏目が現れた。

……………ん？

「……………え」

森園と柗はどうやら宿題を片付けるために図書室に集まっていたようだ。

あの後、唐突に現れた加賀美と夏目にも手伝ってもらい、五人＋周りの生徒達に手伝ってもらい、散らかした本を本棚に戻していた。

終わった後は、一年二人は宿題に。俺と夏目と加賀美とで、後回しにしていた話をするという運びに。

テーブル席で夏目と加賀美が向き合い、俺は対角線の横に座る形である。

「……それで」

重苦しくなった空気の中、夏目が声を上げる。

「加賀美さんはあそこで何をしてたの？」

「……その」

「三日前から、わたしに対する視線を感じてて。今日は新城君と一緒にその視線の主を捕まえようと思ったんだけど」

「……う」

「どうして加賀美さんは、わたしが感じた視線の先にいたの？」

「……」

問い詰める夏目の視線に、何も答えられない加賀美。

夏目の奴は、たまに口調が厳しい、というか毒を吐くことがある。大概は照れ隠しのそれなのだが、ある程度でも相手に敵意がある場合にもこうなる。つまりストーリーカー犯

だと思われる加賀美に、敵意とまでは言わずとも警戒心を抱いているわけだ。まあそれはそうだろうと思うが。

しかし、加賀美が現れた事で、事ここに至り、俺はようやく心当たりを思い出していた。

問題はそれをどこまで隠して伝えられるかだが……。

「どうするかは事情次第。でも、黙ってたなら何も分からないんです」

「……………」

なおも加賀美は押し黙る。

アドリブが弱いこいつだ。今自分の中で回答を必死に整理してて、それでも答えが出てこない、といったところだろう。そもそもこの場で加賀美が何を言ったところで夏目の信頼を勝ち取れるかも疑問だ。

……はあ、仕方ないか。

「……………ねえ、加賀美さ」

「加賀美、もう隠しても仕方ねえだろ？」

突如横から割り込んできた俺に視線が集中する。

どちらも驚きといった様子。

「……新城君。心当たり、あったの？」

「まあーついさつき、つーか加賀美を見て思い出した感じだけだよ。そういえば加賀美が夏目と話したいとか言ってたんだよ」

「わたしと？　加賀美さんが？」

「……………」

加賀美はあわあわと声にならない慌て方をしているが、口出しはしない、出来ないよ
うだ。

俺の口からあの秘密を漏らしてしまわないかと気が気でないのだろう。というか、もう完全に告白すると思われる流れだと思ってるに違いない。

構わず続ける。

「ああ。何時実行に移すかも知らなかったし、俺を通すなりするかと思ったが、まさかこ

うなるとは思わなくてな」

「……なんで今まで話しかけてこなかったの？ それに、テニス部の加賀美さんと文芸部のわたしに、話したいことなんてあるとは思えないけど」

「えっと、その……」

何か言おうとするが、結局何も言えない加賀美。

構わず続ける。

「部活的にはそうだろうが、加賀美の場合は個人的趣味の方で話があるんだよ」

「趣味？」

「……………」

俯いて、手をぎゅつと握る加賀美。

構わず続ける。

「お話作りに興味があるんだとき。媒体をどうするかは決めてないらしいが」

「っ!!」

ぱつと顔を上げて俺を見る加賀美。

こつち見んな。

「そつちは今後決めていく方針で。まずは描きたい話を作るコツとかなんとかで、夏目の話を聞きたいなーって、何時だったかに漏らしてた」

「……そうなの？」

「は、はい！ そうなんです！」

つい、と夏目の視線が加賀美に移ると、加賀美は焦ったように肯定する。

「夏目さんは文芸部だから詳しくお話を聞きたいと思つてたんですけど、あまり人には言いたくないことでしたから……。話しかけるタイミングが、掴めなくて」

「それは、どうして？」

「そ、それは……」

「創作してるなんて知れたら周りの奴が見せてーってなるじゃん。お前も作者ならわかるだろ？」

「ああ、そっか……。そういう事情だったんだ。……あれ？　でも新城君は知ってたよね？」

「まあちよつと偶発的なアレでな……。そこはお前と同じだよ」

「……苦労したんだね」

「は、はあ……？」

本人の迂闊で秘密が俺に知られてしまったという点では、共通項のある二人だった。納得した様子の子の夏目に、加賀美は頭を下げる。

「追い掛け回してしまって、ごめんなさい。でも、悪気があったわけじゃないんです」「そういう事情なら、まあ……」

ちよつとバツが悪そうな夏目。

キツく言い過ぎたことの反省だろうか。あの段階じゃ、当然の対応だろうとは思うけども。

……まあこんなものか。仲介人としては上々の出来だろう。

「……正直、言えることなんてないと思うけど。それでもいい?」
「もちろんです! よろしくお願いします!」

その後、夏目は自分が創作をしている時の心情、癖などについて話し、加賀美もそれを熱心に聞いていた。

ちなみに俺は横で聞いてるだけ。

加賀美がボロを出しそうになったらフォロー入れたりしたが、まあそれだけである。

「新城君」

「ん?」

「……ありがと。秘密にしてくれて、助かっちゃった」

「どいたま」

その夜。

「そお〜つと。そお〜つと……」

「芽以」

「はうあつ!」

「……? お風呂先に入るか聞きに来たんだが、どうしたんだ? そんなに大声を上げて……『おおかみさんと後輩ちゃん?』」

「あ、こ、これは、その……」

「珍しいな。芽以が漫画をかうなんて」

「あ、ううん。その……図書室から借りた本で」

「ふむ……。見覚えのないタイトルだね。一体どういう話なんだ?」
「だ、だめだよ! 秋穂お姉ちゃんには、その、早いと思うから!!」

「……私で早かったら、芽以にはもっと早いと思うんだけど」

「と、とにかくだめなの!」

「……まあ、そういうなら」

「あ、お風呂なら私、後にするから! それじゃあお休みなさい!」

「あ、芽以！ ……行ってしまったか。何だったのだろう」
こうして。

森園芽以は『ちよつと強引が良い』を覚えた。

美知留と春瑚の花壇とファミレス

「戸村さん戸村さん」

「はえ？ どしました橘センセ」

「聞いたよ？ 新城君と爛れた関係になつてゐるって」

「ええっ!？」

「本来なら反省文を提出してもらうところだけど、今回は花壇の草むしりで大目に見てあげます」

「ちよつとちよつと！ なんでするか爛れた関係つて!？」

「新聞部の人に聞いたことだけど……え？ もしかして間違つてた？」

「間違つてますよ！ そんな証拠もないことに振り回されるなんて……」

「ご、ごめんね。ただのガセだったんだ……」

「そうですよ！ あたしとカズくんの関係なんて」

「せいぜい同じお風呂に入つて、同じ服を着て、同じ所で寝てるくらいです！」
「爛れてる爛れてる！」

「ていうことがあつて、私達で草むしりつてわけなのサー」
「何もかもお前のせいじゃねえか」

確かに同じ風呂に順番に入つて、服を強奪されて同じ服を着て、同じ床で雑魚寝はしたが。

言葉の欠陥製品かよ。

そんなわけで俺達二人は花壇で草むしりをしていた。

園芸部が育てている植物は、この花壇と畑、室内物の三つの場所に分かれている。普

通に考えたら有り得ないスペース占拠率だが、花も食物も育てて提供している園芸部の功績を考えれば納得できるだろう。その割には夢前以外の園芸部をあまり見かけないが、出席率が悪いのか夢前が頻繁に現れ過ぎているだけなのか。

名目上は園芸部である夢前ゆめさきのお手伝いなのだが、しかしその実態は体罰である。戸村の言葉も誤解を与えるものであったものの、ガセを流した新聞部も大概だ。

おのれ。これだからマスコミは。頼もしい癖に、敵味方どちらであつても面倒事を運びやがって。

一緒に遊んだ姫島と東雲の名前まで出さない辺りが特にいやらしい。
雑草を引き抜く。

「なんつーか、説明下手だよなお前」

「何を失礼な！ 私ほど言葉使いに長けたコスプレイヤーはいないですのことよ!」

「ほほう、言うじゃないかトムトム」

「なにせ檻迎したら檻が出てくるからね」

「そつちの言葉使い？」

「遺言で月落とすし」

「それ俺が壊しに行かなきゃいけないの？」

流石に無理だし、死ぬわ。

ちなみに現在夢前は戸村とは反対の俺の隣で、ぽやぽやと雑草を抜いていた。

客観的構図としては仲良しオタクと単独の夢前である。

いや別に仲間外れにしてるわけじゃないんだけどね。ただ会話が盛り上がるにあたって、夢前はどうしても置いてけぼりです。

雑草を引き抜く。

「刀で空母を両断するし」

「続けんのかよ」

「何が狙いつて聞かれたら、受け狙いつて答えるしね」

「陰険院さんの！ これできるき言彦くん対策うう!!」

「やったあみんなずつこけて莫迦受けだね。やっぱり死にたての故人を冒涇した不謹慎ギヤグは鉄板だなあ」

一字一句丸暗記だった。

陰険さん好き過ぎ。

雑草を引き抜く。

「それにしても、あれの技名は微妙なのばかりだったよねー。そもそも技が少ないっちなや少ないんだけども」

「二つ名や能力名はワールド全開だったんだけどな。とても七花八裂を生み出した作者とは思えん」

「あれもあれで、他の技さ……」

「錆白兵をダイジェストで終わらしたのは許してない。未だに」

「予告の詐欺白兵さんかー」

「『お！ 断片だけでも見れるのか!?!』と原作読んだ人に思わせて、結局かませ忍軍三人が最強にやられる話だったし。ひどいっいたらありやしねえよ」

まああつちの最強も結構お気に入りなだけだな。

雑草を引き抜——いたところで、隣の夢前から「先輩方々」と声がかかる。

「お手伝いに来てくれて、ありがとうございます。今日は、わたしだけじゃ大変な作業をするつもりだったので」

「遅っ!!」

伝説的に遅っ!!

オタク二人の色濃い会話についていけなかった——筈がない。

俺達が来た経緯を話す前は、黙って作業してたからだ。

沈黙に耐え切れず戸村が話し始めたのだから、少し間をおいてからだった。夢前の話すタイミングくらいあった。

俺達二人が来たときも雑草を抜きながらとはいえちやんと返事はしたし、どの草をむしるのかを聞けばここの周辺とも頼まれたのだ。今まで俺達の存在に気付かなかつたなんてこともない。

つまり、たつた今思い立ったから言ったに過ぎないのだ。

思考速度遅——遅くない？

「春瑚^{はるこ}みん、大変な作業って、私達はなにをするの？」

花壇の草むしりを粗方片付けた後、戸村が言う。

言いつけられた作業は草むしりだけだったが、一人じゃ大変だという作業があるならそつちも手伝ってしまおうか。

「お昼も済ませちゃったし、授業が終わるまでなら手伝えるよん」

「おいこら。手伝いにかこつけてサボろうとすな」

「え〜つと〜」

夢前は考え込む。

「うーんと〜」

考え込む。

「ん〜」

考え込む。

考え込む。

考え込む。

「うゝ」

「日が暮れるわ!!」

足に蟻が上ってくるのに気付かないくらい考え込まれてもだよ!!

花壇作業をするためであるう長靴を蟻が上ってきているという傍から見ただけで割とホラーな状況。それに気づいても「わゝ」としか言わない夢前の代わりに、長靴を越えて膝まで上り詰めてきた蟻を戸村と一緒に払ってやる。夢前は照れるでもなく「ありがとうございますゝ」と言うだけだった。

「とりあえず、何をしたいのかから言ってくれ。役割分担はそれから考えるから」

「はいゝ。ではではゝ、土の入れ替えをしたいので、お願いしてもいいでしょうかゝ?」

「土の入れ替えかゝ。よし! カズくん! 君に決めた!」

「さては手伝う気もさらさらねーな？」

まあ力仕事なら俺の出番だけど。

草むしりで大分よれよれな戸村に叱咤激励を送り、二人は芽が出たばかりの苗を一時的に掘り出していく。その間に、俺は倉庫から手押し車を引き出し、土袋を破いて積んでいく。土袋は一つだけなのでそのまま運んでもよかったが、帰りには入れ替える土を運ぶので手押し車は必要だ。ドーセ持つていくなら行きで持つていっても変わらない。

ゴロゴロ転がし、二人の元へ着く。

流石に後輩と二人でいて自分だけサボるのは気が引けたらしく、せつせと苗を掘り出している戸村。手押し車を置き、二人の作業に合流する。

三人でやると意外と早く終わった。

「ではでは、土を入れ替えましょ〜」

「頑張れカズくん！ 略して頑くん！」

「いちいち癪に障るなお前のスタンス」

スコップを使い、花壇の土を横に除ける。二人は作業の邪魔にならぬ位置で座って休

憩。一人掘っていく俺。

「えっさ。ほいさ」

「ん？　なんか穴掘ってる」

「ふう。ほぼ完成したぞう。戸村美知留用落とし穴」

「な、なんだって!？」

「ぐつきよりといい汗かいた」

「なんか嫌な汗だね」

「まったく戸村の奴。コスプレイヤーで有名になった途端、スター気取りで調子こいてるからな」

「こいてないよ失礼な!」

「この五メートルの穴で懲らしめてやる!」

「ご、ごご、五メートル!？」

「竹槍も仕込んだしー」

「殺す気か!」

「ひいふうみい……。よし、ちゃんとトムトムの歳の数だけあるな」

「お誕生日ケーキか!」

「こんなの刺さったらさすがの戸村の『おあまー』とか叫んで死んじやいそうだな」

「そんな変な叫び声上げないよ!!」

「まあー死なないまでも、激怒は必至だな。……あ、そうだ。トムトムがめっちゃ怒った

時のために、ツナ入れとこ」

「それであたしの機嫌が直るの!?!」

「ツナが大好き、トムトムミッチー」

「大好きじゃないよ!」

「上手く蓋してと……。うん。ここだけ全然土の色が違うけど、まあ戸村なら落ちるだろう」

「落ちるかあ!!」

「一週間かけて掘ったんだ。絶対見事に落ちてもらうぞお」

「? 掘ったのは今の筈では?」

そんな感じでギャグ日和ごっこ『番長一週間』を一部お送りした。

続きはwebで。

ふざけている内に土の入れ替えが終わったので、今度はさつき掘り出した苗を植えなおす作業だ。

黒いカップのような小さい植木鉢に避難させていた苗達を、三人で手分けして植えていく。

「な～えを植えま～しよ～♪」

「み～ずをあげま～しよ～♪」

「す～くす～く、すこやかに～♪」

「おおきくな～れ～♪」

「素敵なお歌ですね～。お二人の即興ですか～？」

いいえ。ゲーム内音楽です。

掘り出した時も結構な数だと思っていたが、これもまた三人でやると早めに終わった。

「ふいー。終わったー」

「お疲れ様ですー。とっても、とっても助かりました～」

「あつはは。まあたまにはこうやって汗かくのもいいかもねー」

「いっつもバイトかコスプレ作るかのワーカーホリックが何か言ってます」

「にやにをー！ お金が出るならあたしもっと働きますねん！」

「そういう問題？」

「お金ですかー。部費から出るでしょうか？」

「お前も本気で払おうとすんな」

ある意味ボランティア精神から縁遠い奴だった。

しつかし、なんだな。

これを一人でやろうと考えると、昼休み中に終わるような作業でないとわかる。

作業量もそうだが、夢前の筋力や作業速度では、諸々の作業自体ももっと遅くなっていただろう。俺達が体罰を受けていたからいいものを、そうでなければ放課後になっても終わるかかわからない。

……他の園芸部を頼るなりすりゃいいのに。

「春瑚みんさー、いつもこれを一人でやってるの？」

「？ いえー。いつも、というわけではありませんよ？」

「その割には他の部員をあまり見かけねえけど」

「んー。……多分なのですけど、あまりお花に興味が無いのだと思います」

夢前はなんでもない風に言う。

いつものことだとも言うように。

「園芸部は歴史の古い部活ですけれど、今では人気がないものですから。成績があまりよくなって、帰宅部というだけでは評価が悪いから、在籍だけでも、と言っておられました」

「幽霊部員ってやつか」

「……先輩なのに、ちゃんと働いてる春瑚みんなに向かって言ったんだね。辛くない？」

「いえいえ」

心配そうな顔を向ける戸村にぱくと笑う夢前。

「わたしのは、ほとんど趣味の延長線のようなものです。お楽しみを独り占めしてしまつて、申し訳ないくらいです」

「ううっ！　なんて、なんて良い子！　よっし！　そんな春瑚みんなには……」

戸村は上着のポケットから何かを取り出す。紙のような何かだと思って見てみると

「これあげる！ ファミレスのサービス券！ デザートのパフェが半額！ 今ならお買い得ですよ！」

「わく。ありがとうございます〜」

「へえ。先輩らしいところあるじゃん」

「いつらつしやいませ〜♪ 何をお召し上がりになりますか〜？」
「そうだね。まずは俺の感心から返してもらおうかな」

放課後。

早速サービス券対象のファミレスに向かうと、戸村が制服のエプロンに身を包み、営業スマイル全開で働いていた。

「君の感心はもうどこにもいないんだ。君も夢から覚めて、現実と向き合う時なんだ」

「健気な後輩に感動してサービス券をあげる先輩なんてどこにもいなくて、バイト先の売り上げ貢献に付き合わされた二人がいるだけなんだね。悲しい現実だよ」

「いやいや。サービス券に関しては何か言われる筋合いはないよ。……おおつ、…そうか…。これこそが、無償の愛……!!! ってやつだよ」

「種の頂点、女王の域にまで到達したのか。人類にとってあまりにも危険な『愛』なのか」
「ていうかカズくんまで来たんだ。春瑚みんだけにサービス券あげたのに」

「わたし、ファミレスに来た経験があまりなかったの。先輩に案内していただいたのですよ」

「貰ったはいいけど場所が分かんないっつーからな。まあついでだしと思つたわけだよ」

「そつかそつか。それじゃーご注文を、どうぞ!」

「水で」

「頼まないんかい!!」

ルネッサンス！ とおちやらけたところで、戸村は注文受けの電子盤らしきものを取り出す。

このファミレスは初めて来たが、しかし制服のエプロンドレス似合うなあ。この前行った（連れていかれた）メイド喫茶で働いてた時に比べても大人しめな制服とはいえ、他のバイトの子より堂々としているのがわかる。

流石、有名コスプレイヤー・トムトムミッチーと自他共に呼ばれているだけはある。何着ても映える奴だ。

「ではでは。わたしは頂いたこのチケットで、こちらのストロベリーパフェを」

「はいはい。ストロベリーパフェ一つ。ねえ旦那、水なんてケチくさいこと言わないで、何か頼んでよ旦那。あたしに投資すると思つてさ」

「俺がこのファミレスのレジ箱にいくらくれてやろうとお前の時給はビタ一文上がりはしねえ」

「悲しいこと言うなよ!! みんな真面目に働いてたら給料が上がる夢を見てるんだよお!! なんならチップでくれても!」

「それもうお小遣いあげてるだけじゃん!」

「ねえお兄さくん？ お小遣いちようだしい。代わりにイ・イ・コ・ト♥してあげるからあ〜」

「援交か！」

いたいけな後輩の前で洒落にならないボケかましてんじやねえ!!

「大体投資つてなんだよ。お前に投資したら何が返つてくんの？」

「そりやあれだよ。君に着せる衣装が完成するんだよ」

「すごいね。話してるだけでどんどん注文する気が失せてくる」

「ああ！ あたしの株価が大暴落！」

「買う価値があれば買い時なのになあ……」

「なんでさ!?! 衣装だよ!?! 君の衣装のためにあたしが毎日色んなところでバイトして

！ 疲れた体に鞭打つて布をチクチク！ 閉じかける目をこすってチクチク！ 朝起

きてもチクチク！ 休みの日にもチクチク！ チクチクチクチクしてるとつていうのに

！ カズ君はそれを応援もしてくれないの!?!」

「良心の呵責と他の客からの視線のいたたまれなさで責める方向に持っていくな!! ありがた迷惑させてるだけのくせに!!」

「およろしくおよろしく」

大変ムカつく感じで泣き真似始めやがった。

ああ、もう。

「じゃあこのトロピカルパフェトリフルエックスを」

「うちで一番高いパフェじゃーん！ カズ君愛してるー♥」

「やつすい愛だなーおい」

戸村美知留の愛：1500円（税込み）。

どこのの蝸牛の迷子だったら、ファミマで298円で買える愛だが、5倍価格でも安っぽく思えた。

セットでパフェも付いてくるし。

「ではではく少々お待ちを」

そう言って戸村は店の奥へと消えていった。

基本的にホールは女子、厨房は男子で固めるのがこのファミレスのようだが、戸村はホールでの接客も厨房での調理もレベルが高いので、そのどちらも臨機応変に対応しているらしい。他の飲食店のバイトでも似たような状況ではあるが、「大変だけど、その分給料も弾んでくれるからね」と語っていた。

それもこれもコスプレと、漫画、ゲーム、その他諸々のオタグッズのためなんだよな。オタクは金が掛かるもんだが、あいつ程時間も金も掛けてるのはレアだろうなあ。趣味に生きるという言葉を体現したかのような存在だ。

「お二人は〜」

「ん?」

「とても、仲が良いんですね〜」

「んー」

対面の席で見てた夢前にそう言われる。

……まあ確かに。

交流関係はかなり広い俺だが、戸村含む数人に至っては「仲が良すぎて気持ち悪い」とか耳にしたことあるくらいだしな。

「善吉と不知火か！」なんて二人して突っ込んだのも懐かしい記憶だ。
男女なのに話が合い過ぎて、当の俺でさえたまに怖くなる。

「わたしは、お話しするのがゆつくりなので。お二人のように……えつと」
「テンポ良く」

「テンポ良くおしゃべりできないので、お二人が羨ましくなります」

「お前がテンポ良く喋るのも今更想像できんけどな……」

「お二人のように仲良くなれば、わたしも先輩とあんなおしゃべりができるのでし
うか？」

厨房の方を見て、こてんと首を傾げる夢前。

「……そりゃ、戸村みたいになれば戸村みたいなやり取りは出来るだろうけど」

「はい」

「でもそれとこれとは別物だろ」

夢前は羨ましい、と言うが、正直俺はあまり夢前にそうなってほしいとは思わない。

戸村はオタク関連の話で気兼ねなくマシンガントーク出来る友達だけれど。求めているものが違うのだ。

昼に考え込んだ時は怒ってしまったが、夢前と話してる中の、ゆったりした時間だつて俺は気に入ってる。

俺にとつちや、どいつとのどんな時間も、捨てがたい時間なのだ。

「お前がああなりたいてってどーしても思うなら協力しないでもないけどさ。ほら。別に俺達みたくでもなくても、お前だって不知火と仲良いだろ」

「ん〜。そうですね〜。五十鈴ちゃんとは、子供の頃からの付き合いですから〜」

「ゆっくりとしか話せないって、俺はそういうゆっくりしたのも好きだからよ。仲良くなれないなんてことないだろ」

「……………そうですね〜」

「……………ん?」

なんかいつもとは違うテンポの遅れ方したような…………?

なんてやっていると。

「おっ待たせしました〜♪」

戸村がパフエ2つを盆に乗せてやってきた。

「ストロベリーパフエとトロピカルパフエトリプルエックスでーすつて、どしたの春瑚みん？ なんか背景がほわほわしてるけど」

「え？ なんか見えんのお前」

「いえいえ〜。なんでもないですよ〜」

テーブルに配られたパフエ。

目の前に置かれたストロベリーパフエから、クリーム部分をほんの少しと、ソースがかかった苺をスプーンで掬い上げ、夢前は頬張る。

「甘くて、とろとろにとけちゃいそうですね〜」

幸せ満開の笑顔が、そこに咲いていた。

円岡燕の歩み出す一步
—前編—

聖櫻学園入学から二日目。

「あ、兄貴」

僕は、食堂でその姿を見つけた。

「こんにちは。お食事中でしたか？」

「……………」

「？」

兄貴は天井を食べていた手を止めて、こちらをじつと見ているが、何も言おうとはしない。

どうしたのだろう。

「前、失礼しますね」

「いやそれは別にいいけどよ……」

「ありがとうございます」

許可をもらって、僕は持っていたトレイを兄貴とは対面に置き、席に座った。メニューは白米、味噌汁、鯖の塩焼き、紙パックのコーヒー牛乳。食事の挨拶をして、白米から食べにかかる。

「この学食、結構おいしいですよね。兄貴もそう思いませんか？」

「………聞き間違いかと思って流してただけど」

「？ はい」

「その、兄貴って何？」

「え？ 間違っていましたか？」

「間違ってるかどうかで言えば、全部間違ってるけど」

「ん……。でも、尊敬する男の事は兄貴と呼ぶものだと思ってたんですけど」

「いやいや。どこの不良漫画に影響された知識で語ってんだよ。第一尊敬で。昨日一回

助けただけじゃねえか」

「だけなんかじゃありません！」

「おう!?!」

僕は。

兄貴が、だけと言う事で、救われたんだ。

たった一人でも、僕を助けてくれる人がいてくれるんだって。

兄貴のように、気高く強い、光り輝く存在が。

真つ暗に見えた、何も見えないこの世界にもいるんだって、知れたから。

「僕は、兄貴みたいになりたい！ 強くなりたい！ あんな奴等に負けない男になりたいんです！」

「わかった！ わあかったから！ とりあえず落ち着け！」
「あ」

兄貴にそう言われて周りを見ると、学食にいたたくさんの人がこつちに注目していた。

それもそうだろう。僕は勢いに任せて、立ち上がって大声を上げていたのだから。居た堪れなさを抱えながら、縮こまるように席に座りなおす僕。

「と、とにかく。兄貴がしてくれたことは、僕にとってすごく大きなことだったんです」
「……さいですか」

「なので、僕はこれから兄貴に付いて行こうと思ってるんです」
「付いて行くってお前」

「勿論邪魔はしません。あ、新しい飲み物買ってきましょうか？」
「パシリ根性全開じゃねえか」

いけない。人と仲良くなる方法が分からない。

「えと……あ。僕の事は燕って呼んでくれませんか？僕は兄貴なのに、兄貴が苗字つて変だと思えますから」

「変なのはお前そのものだよ」

あと。と言う兄貴。

「俺は男を名前で呼ぶのは俺が認めた奴だけって決めてんだ」

「悪いけど、俺はまだお前を認めたわけじゃないから」

……まあそれはそうだろう。

そういう主義は初めて聞いたけれど、昨日不良にサンドバッグにされてただけの男を認めるなんて、僕が兄貴の立場でもしない。

僕だったら助けも出来ないだろうし。

でも、悲観することは無い。

名前で呼んでもらえる時がくれば、それは認めてもらえた時だってことなんだから。

「わかりました！ 僕、頑張りますから！」

「……まあいいけどさ。頑張るって具体的にどうするんだ？」

「あう」

痛い所を突かれてしまった。

確かに、小さくて弱い僕がどうしたら兄貴みたいに強くてカッコイイ男になれるかなんて、ちつとも見当がつかない。

「そ、それはその……兄貴が普段していることを実践して……つていうか」
「そんなこつたらうと思つたよ」

「うう……」

「………しゃあねえ。ちつとは面倒見てやることにしてやるか」

「あ、ありがとうございます！ では、まずどうしたらいいでしょうか!？」
「そうだな。とりあえず」

いつの間にか食べ終えていた天井を置いて、兄貴は続ける。

「履歴書の用意だな」

「………へ？」

「やあ！ よく来てくれたね！ 待っていたよ！」

翌日土曜日。

僕と兄貴は、とあるイベント会場のスタッフ用通用口を通ったところで歓迎を受けていた。

「木戸^{きど}さんから話は聞いているよ。さき、入ってくれたまえ」

「すみません。前日になって急にバイトだなんて」

「いやいや。人数が少なくて困ることはあっても、多くて困ることなんてないからね。あるとしたら人件費くらいかな？ はっはっは」

なんだか、すごい陽気な人だなあ。

アルバイト、それも昨日急に申し込んだ高校生相手に接するにしてみれば、随分と機嫌がいいみたいだった。

そんなに人数が欲しかったのかな？

兄貴が木戸さんっていう人の紹介で、このバイトに急遽入れてもらったそうだけど、
一体どういうコネを持っているんだろう。

「それで、この子が？」

「ええ。昨日言った円岡ってやつです」

「ま、円岡燕です！ 本日はば、よ、よろしくく、く、おおお願いしまままま」

「分かりやすく緊張してんな」

「ふむ……」

スタッフの人は、僕の顔、身体をじっくり見る。

先程の朗らかな表情から一転、真剣な顔つきだった。

「円岡くん、だったね？」

「は、はい！」

「……馬鹿にする気はないが、君の体格ではうちのバイトは厳しいかもしれない」

……兄貴が手引きしたバイトは、所謂警備員の仕事だった。

このイベント会場では、大手プロダクションからデビューしたての高校生アイドルを含めたアイドル達がライブを行う。

お客さんの規模自体は小さいながら、プロダクションもその警備会社も大手であることから、万が一のことさえ起こらないよう厳戒態勢で警備するのだそうだ。その警備の一部が、僕達だ。

それも、アイドルの楽屋からステージに上がるまで。つまりアイドルに一番近い警備なのだ。

主演ではないものの、アイドルの一人の安全の最終関門を、僕達が担うのである。

「警備体制を事前に連絡した通りにしたのは、君達がアイドルと歳の近い高校生だから。それも理由としては確かにあるが、一番の理由はこの子がいるからだ」

そう言つてつい、と兄貴に視線を向けるスタッフさん。

……訂正。

機嫌が良かったのは、人数が欲しかったからじゃない。

兄貴の実力が知れ渡っていたから。

確かに兄貴が一番近くの警備に入ってくれるならば、いくらか気楽に仕事に取り組み

るといふものだ。

僕は、戦力にならなくてもいい。

「この子がいるなら心配いらないと思うが、しかしこんな仕事だ。その場合の手当は出すが、怪我しても恨み言は聞かない。それでもやるかい？」

少し物怖じしたのも確かだけれど。

でも、兄貴がいる以上、心配することなんて何も無いだろう。

僕はその姿を目に焼き付けなければ。兄貴みたいになるために。

「……やります！ やらせてください！」

「うむ、いい返事だ。悪かったね。試すようなことを言つて」

朗らかな表情に戻り、僕の肩にぼんとその手を置くスタッフさん。

「分からないことがあれば、周りのスタッフに聞いてくれていい。彼にも、警護のコツを聞くといいよ」

「は、はい！」

「では、私は失礼するよ。先にアイドルと顔合わせしておくといい」

そう言つて去つていくスタッフさん。

「……良い人でしたね。僕、勝手にこういう力仕事つて怖い人ばかりだと思つてました」

「……………」

「？ 兄貴？」

「……いや、なんでもねえよ。地図はさつき貰つたから、とりあえず楽屋に行つてみよう
ぜ」

「あ、はい」

何か思うところがあるような顔をしていたけど、なんだつたらう。

先導するその背中を、僕は慌てて追いかけた。

——うわ、また緊張してきた。

僕達二人は今、件の警護対象であるアイドルの、楽屋の前に立っている。

歩く間にアイドルのプロデューサーと名乗る人に合流し、支給された制服に着替え、イベントスタッフの名札を掲げて、この楽屋に来るまで、色々な話を聞いた。見た目以上に硬い肉体を持つ兄貴に、自分の持つ男性アイドルグループを育ててほしいとかなんとか。僕には無縁の話だったので聞き流していたけれど。

それより、これからアイドルと顔合わせする僕達だ。

元々アイドルとは無縁な人生だったのに、いきなり現役高校生アイドルを相手に話せるわけなんてない。歳が近いなんていうけど、だからこそ違う世界の人間っていう感じが拭えないですよ。

「まあそう固くなるなよ」

だというのに、兄貴は平常運転だった。

僕みたいに緊張してないし、かといって舞い上がってるわけでもない。

こういうの慣れてるんだらうか。大物とか有名人とかに会うの。

「相手はアイドルつつつても同い年だぞ？ 別に面接つてわけでもなし、むしろ堅苦しい方が向こうも気い遣うことになるし。仕事だから敬語は外せんが、ガクブルされたら対応に困るから」

「そ、そうですよね……」

「相手に言われるようなら直すくらいはの気持ちでやればいいさ。駄目っぽかったら言うし」

そう言つて兄貴は、ドアの前に立つ。

そのまま叩くのかと思つたけれど、僕が落ち着くのを待つてくれた。息を整えて落ち着きを取り戻した僕を見届け、兄貴はノックをする。

失礼します、と声を揃えて、僕達は部屋に入った。

（現役高校生アイドル……一体どんな人が——）

「あ。お、おはよう、いざいます……」

黒髪ツインテールで衣装に身を包んだ女の子が。
大根をおろしていた。

(……………ん?)

俯いて目の前の光景から視線を外した。

……なにか、ものすごくミスマッチなものを見たような。

隣に立つ兄貴からも、戸惑いの気配が感じられる。

いや、まあでも気のせいだよな？

当のアイドルっぽい女の子が、大根丸々一本を手作業でおろしてたように見えたけど、そんな光景存在するわけないものね。

やだなあ。幻覚を見ちやうなんて。昨日の怪我が後を引いてたのかな？

改めて、目の前を見た。

「……………」

「あの……………なにか？」

……………外見は成程。とても可愛らしい女の子だと言える。

艶のある黒髪や、触れれば折れてしまいそうな華奢な身体、守ってあげたくなるような繊細な空気の纏い方は、まさしく女の子。

アイドルに疎い僕でも、この子は高水準のアイドルだと思える。

けれど、その手に持つ大根は、その外見の美しさを吹き飛ばしておお余りあるインパクトがあった。

反対の手には大根おろし器が持たれており、既に随分な量がおろされている。

……………見れば見る程ミスマッチ。なんの儀式なんだろう。

「……………えー。挨拶が遅れました。私は新城一也。こちらが円岡燕です」

混乱から復帰したらしい兄貴が、自己紹介を述べる。

「今日のイベントでは、こちらの二人で貴方の警護に就かせていただきます」

「あ、はい。その……よろしくお願いします」

「よ、よろしくお願いします……。あの、貴方がアイドルの」

「ましろとうこ真白透子、です」

そう言つて、大根をテーブルに置いた後、僕等にぺこりと頭を下げる彼女。

おお。礼儀正しい。

「……あの。失礼ですが、お二人の歳はいくつになりますか？」

「え？ ええつと、15歳です」

「ええ。私達二人共、ついこの間高校一年生になつたばかりで」

「じゃあ、同じ年なんですね。えつと、ですね。出来たら、気楽に話してほしい、です」

「……え」

気楽について、ため口で話せつてこと？

いや、無理無理そんなの！ 女の子、ましてや現役アイドルにだなんて！

僕、女の子と話したことなんてそんなになんてすけど!?!

「あんまりかしこまられると、こつちも逆に緊張しちやつて……。スタッフさんがいるところでは仕方ないですけど。同年代なら、普通に話してくれた方が楽ですから……」

「あ、そう？　じゃあそうするわ」

順応早い！

「でもそれだと雇った側だけが敬語っていうおかしなことになるし、そつちも普通に話してくれていいんだぞ？」

「……ど、努力します」

アイドル相手にぐいぐい行ってる！　流石兄貴！

「それで聞きたいんだけど、その、テーブルの大根、なに？」

　　それで僕も聞きたかったことズバツと聞きますね！

「ああ、これは」

「うん。これは？」

「大根おろし、です」

「……………」

見ればわかる、という言葉在必死に口の中に閉じ込めた。
兄貴も同じだったろう。

「イベントの前とか、歌う前だとか。緊張してしまう時は、いつもこうして、大根をおろしてるんです。こうしてる時は、結構落ち着くんですよ」

「へ、へえ……。ぎ、斬新なりラックス法、ですね……」

「大根おろしはなんにでも合いますし、そのままでも食べられますから。とてもいい料理ですよね」

「へ、へえ……………」

大根おろしは僕の家ではそうそう食卓に並ばないし、そのまま食べようとは思わないし、そもそも調味料の一種っていう認識なんですけれど。

「……あの、兄貴」

彼女には聞こえないように、隣の兄貴に呼びかける。

「なんだか……すごく変な子ですね。大根おろしに情熱をかけてるのが、一目で分かっちゃう人っていうか……。もしかして、アイドルに良くあるっていう、キャラ作りつてやつですか？」

「いや。ざっと聞いた限りでは正統派のアイドルとして売り出してる、筈、なんだが……。多分だけど、これ素だぞ」

「素って、え？ この大根おろしがですか？」

「まあ人の好みにとやかく言うつもりはないけど、な……。量が行き過ぎてる以外は、ゲテモノってわけでもないし……」

「あの量の大根おろしは最早ゲテモノでは……？」

最早どんぶり一個分に積みあがった大根おろし。

目の前の可憐な少女が生み出したとは思えないその量を見る度に、非現実的な世界に迷いこんでしまった錯覚を覚える。逆に。

しかも脇には醤油や刻みネギもセットされている。

「? どうかしましたか?」

「いい、いえいえ! なんでもありません!」

「……そうですか。おろラーならこれくらいは当たり前なのですけど、どこかおかしいのかと思いました」

「おろラーつてなに!? 初めて聞いた!」

「え? 身近にいませんか? おろラー」

「目の前にいるお前が初だよ!」

マヨラー的なあれなんだろうか。

ちなみに僕は軽度のケチャラー。

「……それで、あの」

緊張した面持ちで、真白さんは僕達に言う。

「今日は、ありがとうございます。私なんかの警護のために、わざわざ来て頂いて……」
「……？」

なんか、というのが引つ掛かった。

僕のような凡人以下の人間が言うならともかく、真白さんのようなアイドルという選ばれた職業に就ける人から、そんな単語が出てきたことに違和感を覚えた。

謙虚ではなく、心の底から自分を卑下しているような。

そんな自虐的な響きを覚えた。

(……なんだろう。大根おろしのことを恥じてる感じじゃないし)

とはいえ、僕ごときが入り込んでいい領域ではないだろう。

自分の事さえ碌に面倒を見れないのに、他人の悩みまで解決なんて出来る筈が無い。悩み、と言えるかさえ分らない。

「い、いえ、その、お仕事ですから。僕達もお金を貰っている立場なので」

無難な言葉を返し、僕はひとまずそれに安心する。

良かった。兄貴とさっきのスタッフさんのお蔭で、ちゃんと喋れてる。

横に立つ兄貴が真白さんに何を思っているか、何も思っていないのかは窺い知れないけど、僕に何か合図やらなにやらを送らない以上、問題はないようだ。

タメ口は無理ですけどね。

ていうか、この場だと兄貴以外無理っぽい。

言い出しつぺの真白さんに至っては、一番礼儀正しいくらい。

「お仕事、お仕事……そうですね」

「？」

「お金を貰っている立場なんだから、私も頑張らないと……」

……あれ？ もしかして僕、失敗した？

兄貴が何も言わないから問題はないって思ってたんだけど、余計な重圧へプレッシャー〜与えちゃいましたか？

「あ、あの。こっちは大丈夫ですから、持ち場に戻ってくださって結構です。今日は、よ

ろしくお願いしますね」

——うわああああ！ 失敗した！ これ絶対失敗したよ！ 遠回しに出ていけつて言われちゃったよ！

ぼ、僕はともかく、兄貴にまで汚名を被せるわけにはいかない！ なんとかフオローしないと！

でも、でもなんて言えば!? こんな時、兄貴なら！

「ま、まし」

「よろしく。じゃ円岡、とつとと持ち場に着くぞ」

「うえ?!」

頭をむんずと掴まれて、ひよいつと持ち上げられる。そのまま兄貴は、真白さんに背を向けてしまった。

「扉の前で突っ立ってるつもりだから、なんかあつたら呼べよー」

「はい。わかりました」

そう言つて僕達は部屋に真白さんを残し、廊下に出る。

「あ、あのう……」

「……気を遣うのは結構」

パツと手を離され、僕は地面に着地する。

軽く持ち上げられたけれど、頭の痛みは全く無かった。兄貴は力加減が上手いようです。

怒られる、と思つて顔を上げると、怒っているよりは呆れているような顔だった。

「ただ、テンパった頭で焦つてフォローしようたつて、フォローにならんだろ」

「うう……」

「一回時間置いとけ。あの大根おろしでホントにリラックスするかしらんし」

兄貴にそう言われ、僕は警護の傍ら、後で真白さんに掛けるフォローの言葉を考えることにした。

警護の最終関門とか仰々しい立場だけれど、実際ここまで辿り着く不審者なんてそう
そういないだろう、と思っていた。

全然そんなことなかった。

「ましろんはどこじゃあああ!?!」

「マルチアーティストの凱旋よろ!!」

「アイドル狩りだあ! アイドル達を俺の前に並べよ!! 端から順番に十分間舐める
!」

「ワシはお戯れの達人ぞ。ワッツハツハ!」

「ステージに立つのは一人で十分なんだ! 舞台上で比較対象なんか作ってたって、アイ
ドルに一途なファンが興奮するだけなんだよ!!」

「複数の派閥を同じステージ内に居合わせることでファン同士の競争心を煽るべきだ!

「何故それが理解出来ない!?!」

ていうか来過ぎだった。

真白さんを狙う人、アイドル全員に手を出そうとする人、アイドル達を押し退けてステージに上がろうとする人、ファン同士の諍いをここまで持つてくる人。様々な変人が、楽屋前に立つ僕等を押し退けようとしていく。

スタツフの人が言うには、警備会社の人は精鋭揃いだけど、そのほとんどがアイドル楽屋前に待機する面々。他は警備会社の新人さんだったり、芸能事務所からのスタツフさんだったりするのだそう。精鋭の人も一つの楽屋に対して二人、三人で警備に当たる。

「本来アルバイトが警備する位置ではないが、兄貴は一人で楽屋一つ守るくらい余裕綽々と判断され、今回ステージに立つアイドルの中でも、熱狂的なファンの多い方だ」という真白さんの楽屋前に配置されたのだそう。

僕という足手纏いと一緒でも。

余裕綽々と判断されたのだ。

「うわ、わわわ、わあ!!」

最初は僕も、警備員らしく身体を張ってその暴走を止めようとした。

しかし僕の小さな身体は、鍛え上げられたわけでもないただの変人達の突撃を抑えられず。

「どけえい！」

「うぐあつ」

ドンッと押されただけで、僕の身体は簡単に壁に叩きつけられる。

ずるずると体が崩れながら、不審者の成り行きを見ていることしか出来ない。

その僕の様子を見て満足そうに笑い、楽屋へと突入——

「はい、通行止めです」

しようとした不審者が、足払いで簡単に地面に転がり。

続く踵落として、行動の余地を断たれた。

「げきゅっ」

蛙が地面に叩きつけられたかのような、潰れた声が一瞬間こえ、不審者は意識を手放す。

それを見届けたら、手足を縛って邪魔にならない場所に放置。スタッフさんが回収に来るのを待つことになる。

……残るような怪我はさせないと言うけど、あれほんとに大丈夫なのか？

「……君、大丈夫かい？」

「だ、大丈夫、です」

とはいえ、怪我をしているのは僕も同じだった。

兄貴と違って向こうは気を遣わない以上、僕の方は遣る怪我かもしれない。

回収に来たスタッフさん。入り口であつた陽気な人が心配そうな声を掛けてくる程、目に見えて僕はズタボロなのだろう。

……兄貴は、僕を助けようとはしない。

扉の左右に立ち、それぞれ片側を守る僕達。兄貴は自分が立つ方から現れる不審者達

を撃退し、僕の方から現れる不審者達には、僕が倒されて部屋に押し入ろうとしてから対処する。僕が倒されるまで、兄貴は何もしなかった。

（甘えるなど、そう言いたいんだろうか）

僕を助けるために不良三人に押し入った兄貴が、意地悪で助けないとはいえない。

多分、見透かされてたんだと思う。

この仕事での意思確認をスタッフさんにされたとき、兄貴に頼れば僕は何もしなくてもいいと。そんなことを考えてたのが分かってしまったのだと。

そうでなければ、最初からこのつもりだったのだろう。

僕を鍛えると言ってくれた兄貴が、僕の仕事を横取りしてしまえば何にもならないのだから。

「……………」

かと言って、僕にどうしろと言うのだろう。

一般人にさえどうすることも出来ない僕が、倒される以外の何かに期待されているの

だろうか。

それとも、この苦痛に耐えるのが目的なのか。それなら得意だ。僕がどれだけの苦痛に耐えてきたと——

(……耐えてきた、なんて言えるのかな)

耐えてきたというより、諦めてきたが正しい。

諦めて。

諦めて諦めて諦めて。

諦めて諦めて諦めて諦めて諦めて。

その先に、何もなかった。

耐えてきたなんて、そこに何かあつて初めて意味があるものだ。

諦めて、失つて、空っぽになった僕が、拾われただけだ。

そんなことがわかっただけで、何か変わるわけでもなく。

僕は弾き飛ばされ、倒されて、その尻拭いを兄貴がする。その繰り返しだった。

鍛えられた実感があるのは、意識を失った不審者を縛り付ける速度くらいで、どんど

ん自分が嫌になつてくる。

「もうすぐ、本番です」

不審者の波が落ち着いた頃、スタッフさんが呼びに来た。

ここからは真白さんが移動。ボディガードの僕等もそれに合わせて移動するのだけだ。

「円岡」

「……………」

「おい円岡」

「え、は、はいっ」

「…………お前、一回顔洗ってこい」

「…………え？」

言い渡された言葉に、固まる。

「あ、あの……どうして」

「そんな状態見られたら、真白にどんな重圧かかるかわかったもんじゃねえだろ。ついでにしばらく休んでいいから、汚れくらいは落とすとけ」

「うあ」

そうだ。ボディガードの僕がこんなに傷付いてたら、真白さんがまたステージに余計な物持ち込んじゃう。

自分の事ばかりで、そんなことにも気付かないなんて。

「すみません。出来るだけ早く戻ってきますから」

「ほいほい」

事前に聞いていたお手洗いの場所に向かって駆け出す。

「……何やってるんだ、僕は」

円岡燕の歩み出す一步 ―中編―

「もう始まつてるみたいだ。急がないと」

お手洗いで出来るだけ身綺麗にして、急いでステージの方へと向かう。

スタッフ専用ではない道を通ってもお客さんの人達が全く見当たらないこと、設置されたスピーカーから歌声が流れていることから、既にステージは始まっていることが容易に想像ついた。今回行うライブは複数のアイドルが順番に歌う形式で、真白さんは最後から三番目に歌うので、ステージに上がるまでの時間的余裕はある。けれど、兄貴のお言葉に甘えて、休んでるわけにもいかないだろう。

僕が足手纏いなのはわかってる。

だからって分不相応だと何もせず突っ立てた所で、何も変わらないのもわかってる。

「……………どうしたらいいんだろう」

ふと、足が止まる。

今すぐ僕が強くなるなんてのは無理な話だ。

この仕事をやり遂げるためには、弱い僕が弱いままに、乗り越えなければならぬ。倒されるばかりで兄貴に尻拭いさせるだけじゃ、仕事したなんて言えないだろう。

弱いなりに、僕がやれること。

そんなこと、あるのだろうか。兄貴の中には、答えがあるのだろうか。力がなければ出来ることは限られてくると言った兄貴の中に。

「……………そうだ。真白さんにも、なんて言うか決めておかないと」

僕の余計な一言のせいでプレッシャーを与えてしまったのだから、僕がそれを払ってしまわなければならない。

こんなことに模範解答があるとは思えないけど、答えを見つけないければ、でなければ僕は、兄貴だけじゃなく真白さんにまで迷惑をかけることになる。

でも、なんて言えればいいんだろう。

なんて言えば、真白さんはプレッシャーなくステージに臨めるだろう。

答えの出ない悩みを抱えながら、僕はステージに歩き出す。

僕の居ぬ間に真白さんがステージに上がってしまったのは、元も子もない。

僕がいけない方がいいんじゃないかと、悩みと同じくらいの思いを持ちながら。

ステージは大きくもなく小さくもなく中くらいで、あれほど熱狂的なファンがいるアイドルが複数人で開催するとは思えない規模だった。

ステージ横の観客からは見えない位置にアイドル達、勿論真白さんと兄貴も控えていた。今アイドル個人個人についているボディガードは一人ずつのようで、他の面々は客席側についている警備員と合流している。僕達は例外として客席側に合流しなくてもいいことになっている。

僕がステージ脇に到着した頃に、真白さんの前のアイドルの歌が始まる。一人一人のアイドルの持ち時間は10分程。つまり、残り10分で真白さんの歌が始まるのだ。

さて、二人は————いた。

「お待たせしました」

「おー。おかおか」

「……………」

ひらひらと手を振る兄貴。

真白さんからの返答はない。

ただただ、今歌っているアイドルのステージと、それを見て、聞いて、熱く盛り上がるお客さんに視線が注がれている。大根おろしによるリラックスは果たされなかつたようだ。

「……………で、どうよ?」

「……………正直自信は無いんですけど、僕なりにまとめてきました」

「ん。じゃあ言ってみろ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あ、あのうち」

ゆっくり深呼吸して、僕は真白さんに話し掛けた。

「僕がさつき言ったことですけど、気にしないでください。その、僕お仕事って初めてですから、何の説得力もありませんし、真白さんなりの仕事に対する考えを大事にしてください」

「……私なりの考え、ですか」

ようやく真白さんから反応が返ってくる。その視線は未だステージに注がれていたけど、話は聞き取れているようだ。話を続ける僕。

「僕は真白さんについて何も知りませんが、きっと大丈夫です」

「……」

「プロデューサーの人は、新人の中でも特に歌声が綺麗なアイドルだって言っていましたから、だから」

「歌えればいい、ってことじゃないんですよ」

「……え？」

肩越しに振り返り、ほんの少しだけこちらに目を向ける真白さんは、微笑んでみせた。僕が見て分かるくらい、無理して作ったものだった。

「確かに、プロデューサーも先生も、身近な人は私の歌を褒めてくれます」

「じ、じゃあ……」

「でも、レッスンの中じゃ自己完結じゃないですか」

真白さんが左手で掴む右腕は、微かに震えている。

「私が歌える、踊れる。それは、見てるお客さんが満足してる、ということにはなりません。満足できる結果が、目に見えなくて、自分で決められないんです。……そんなの当たり前なんですけどね。これなら、学校のテストの方が気楽だったかなあ」

「……………真白さん」

「……………ステージに立つのが怖いなんて、おかしいですよ。アイドルなのに」

そう呟く真白さんは、自虐的な笑みを浮かべる。

それはいけない。そう思っても、僕にはそれを止める言葉が見つからない。

「失敗することが怖いわけじゃ、ない。恥をかくことが怖いわけでも、ない」

「……………」

「せっかく、せっかく期待してくれていた人達の、その期待に応えられずに、失望させて……」

真白さんが言う、期待をかけてくれる人達というのは、きつとお客さんだけではないだろう。

このステージを作ったスタッフさん。仲間かライバルか分からずとも、互いに高め合う同じアイドル。もしかしたら僕達までも、その中に入っているかもしれない。

「なのに、私が慰められることが、一番辛いんです」

それは紛れもない本心だった。

僕だったら、失敗することは怖いし、恥をかくことだって怖い。

緊張でどうしようもなくなるし、不安でいっぱいになるし、まともに動けるとは思えなかった。

対して、真白さんはどこまでも他人の心配だ。期待している人達を想って、無理な笑顔を浮かべて、腕を震わせている。

立派だった。

ずっと自分の事だけだった、僕とは比べられる筈も無い。ステージは佳境に入る。

真白さんの出番が近付く。

黙った僕を尻目に、真白さんは自分を抱くように、右手でも左腕を掴もうと手を伸ばす。

「だから、必死にやらないと——」

「必死にやって、どうすんだ？」

真白さんの右手が、止まった。

次いで、驚いたように振り返る。

僕も驚愕して、バツとその声の主を見た。

視線の先は、今まで一言も発さなかつた兄貴。

「ど、どうするって……」

「必死にやれば、いつも以上の歌が歌えるか？　いつも以上に踊れるか？　まあそれを否定する気はねえよ。俺も似たような経験はあるし。でもな」

兄貴は呆れたような顔で、真白さんの顔を指差す。

「どれだけスゲエパフォーマンスされようが、そんな顔でステージに上がる奴見て、楽しめなんかしねえよ」

「……………っ！」

言われ、真白さんは自分の頬を両手で挟むように触れる。

どんな顔をしているのか、客観的に示唆されたからだろうか。

兄貴は続けた。

「まるでこんなステージ来たくなかった。ファンの人に会いたくなんてなかった。そんな風に見えるぜ？」

「ち、違……………そんなこと」

「ないだろ。じゃあ何を怖がることがある。それに、客席にいるあいっらは敵じゃない。味方だ。お前の歌を聞きたくて、踊りを見たくて、顔が見たくて、遠路はるばる金払ってやってきた、お前のファンだ」

「……そのみんなが、失望したら」

「期待持たれようが、お前は今のお前の力を出し切るしかねえだろ。それ以上にやることつつつたら、一つだけだ」

ステージを指差し、兄貴は言う。

「楽しんで来い」

「「……………え？」」

僕まで間拔けな声を出してしまった。

「精一杯楽しんで来い。それこそ必死に、無我夢中になつて楽しんで来い。あそこの狂喜乱舞してる客共をそんなもんかつて嘲笑うかの如く、お前のステージを楽しんで来い」

「た、楽しんで来いって、そんな無責任な……」

「良く考えてみるよ。ステージに立つアイドルが、心から楽しそうな笑顔を浮かべて、その一つの精一杯のパフォーマンスと、自分達への嘘偽りない感謝を届けられて………失望するような奴がいるか？」

「それは……いないですね」

答えたのは僕だった。

確かに、そんな人種は、このステージに足を運ばないだろう。

「お前は、キャラ作りでもなんでもない、心からファンを想う気持ちがある。ファンを想って、思い悩む事が出来る。だったら、正直でいればいいんだよ」

「正直で……」

「それでも、期待に応えられなくて失望されたと思ったなら——」

真つ直ぐなその視線に、僕も、真白さんも引き込まれそうになる。

それだけ、その言葉と眼には力があると思わされた。

これが本当に「強い」という事なら、僕はこれまでの人生で「強さ」を持った人間に

出会っていなかったことになる。

「笑ってやるよ」

「……笑、つて？」

「お前が背中を丸めた姿を指差して、げらげら笑ってやんよ。惨めさ際立つ感じだな」

「あ、兄貴？ それは如何なものかと……」

「慰められるのが辛いつて言ってるんだ。だったら、こっちも正直な反応してやんのが良い」

「そんで、と言う。」

「お前が楽しんで、笑ってステージを降りてきたら、最高だったって言ってやるさ」

「……そう言われた時の真白さんの表情を、どう表現すればいいだろう。」

「驚きに満ちたような、喜びに満ちたような、その他の様々な感情にも満ちているような。」

「少なくとも、悪い感情が表れたものではないと思った。」

「……………いいのかな？」

眩くような、真白さんの声。

「ここまでずっと変わらなかつた敬語が、取れていた。

「私も、楽しんでもいいのかな？」

「いい。俺が許可する」

腕の震えが止まった。

「みんなの声に、ただ喜んで、笑顔で返してもいいのかな……………」

「むしろそうして欲しくてどいつもこいつも来てんだろ。存分にやれ」

表情の強張りが、緩んだ。

「……………うん。それならちよつとだけ、出来る気がする」

「だったら、行ってこい」

一度目を閉じ、深呼吸して。

「——行ってきます!!」

ステージが終わり、先のアイドルへと入れ替わる。

真白さんは、一步を踏み出す。

それは、この短い間に見てきた真白さんのどんな歩みよりも、力強かった。

——駄目だなあ、僕は。

視線の先、観客席はこれまでのステージと勝るとも劣らない盛り上がりだった。

誰も彼も真白さんのステージに不満を持たないような顔は見られない。それは他の人は勿論、話を聞いただけの僕でも予測できていたことだ。

ただ、ステージ上は違った。

視線をステージに戻す。

そこには笑顔があつた。

アイドルという職業柄、歌って踊って笑うなんて当たり前だろうとは、僕も思う。けれど、今真白さんがその顔に浮かべるそれは、ステージのライトさえ霞むような光輝くようなそれは、きつとこれまでにない魅力を生み出しているのだろう。今まで彼女の活躍を目にしてきたアイドルにも、プロデューサーにも、スタツフさんにも、予測できなかったことだったことだろう。その呆けた、見惚れた顔が物語っている。

ちらりと、この驚きの光景を作り上げた隣人を窺う。

笑つてる。

これには、真白さんのステージ以上に驚かされた。

出会つてからというものの、僕はこの人の笑つた顔を見たことがない。

まずもつて過ぎた時間が一日ちよつとだからというのもあるけれど、今まで浮かべた表情は大半が呆れた顔、後は驚いた顔と、怒つた顔がちよつと。さっきの強さが表れた顔を何と表現すればいいかは分からないけど、それらが僕が見てきた兄貴の表情だ。

それだけ言うただ無愛想な人だと思ふけれど、その実、厳しくも暖かな心の持ち主であることは、この短い時間の中でも疑いようがない。しかし、あまりに他の表情を見せた様子が無いから、余程の事が無い限り笑わないのだと思つていた。あるいは、今ステージにいる真白さんの様子が、この人にとつて余程の事なのか。

彼が浮かべているのは、楽しいものを見つけたかのように愉快気に歪む口元と、親が子を見守るような優しい気な目元と、なんだかちぐはぐな印象を受ける笑みだった。

その表情に兄貴の人間性を垣間見た。そんな気がした。

これまで浮かべた表情にも嘘は無いと思ふけれど、本質と云えばいいだろうか。

「どう思うよ」

不意に、そんな兄貴から声が掛かった。

「うえ？ な、何がでしょう？」

「真白だよ真白。あのステージ見て、どう思う？」

言われ、ステージに視線を戻す。

その先、真白さんの歌は観客の声を意に介さないかの如く響いてくる。その顔は、兄貴に言われたように、一心不乱に楽しんでるようだった。

無論、僕でも知っているような有名なアイドルと比べてしまえば、技術の粗のようなものが目につかないこともない。僕でさえそう思うのだから、その道のプロにしてみればまだまだといったところだろう。

しかし、だ。

今の彼女にはそれさえも、眩しいのだ。

美点も欠点も呑み込んで、光に変えたような輝き。

「——— 凄い、ですね」

「お前はさ」

「……？」

「いちいち俺と比べて、落ち込んでるのが目に見えてんだよ」
「うぐ」

凶星を的確に突かれた。

でもなんで急に？

「……それと真白さんになんの関係が？」

「今のあいつはスゲエだろ？」

「え、ええ……」

「じゃあ、何を俺の凄さに拘る必要がある？」

「……………」

兄貴の凄さに拘る？

確かに兄貴は凄いだらう。

最初に出会って見せた理不尽をもつともしない暴力に限らず、人間性や、本質の強さ。きつとこれからも凄い所が出てくるに違いない。

僕もその凄さに少しでも近付こうと——

(あ)

近付こうと、どうしてた？

必死に頼み込んで、その姿を間近で見て。

自分が出来ないことをあつさりやってのける兄貴を見て、落ち込んで、兄貴と同じことが出来るようになりたいと、拘こつていた。

「……拘こつてたんですね。僕」

「そうだな」

真白さんを見てみる。

彼女は、凄い。そう心から思う。

アイドルになれただけでも凄い。なのに、それに満足せず、見に来てくれる人の事を考え、精一杯頑張ろうとする姿も。

今、ステージで輝く姿も。

例えそれが、明日になれば消えてしまうような、一夜限りの魔法だとしても。

「真白も凄いんだと、俺だけじゃない凄さを認められるんなら、お前だって認められるはずだ」

「……何を、ですか？」

「俺にはまだ見えない、お前の凄こい所」

「僕の……」

僕の、凄さ。

「どうしたって、お前は俺にはなれないし、それは俺も同じだ。今あそこにいるあいつに
したって、誰かになんてなれやしない」

あるんだろうか、僕に。

胸を張れる、何かが。

「それでもなれるんだよ。最高の自分になら」

真白さんが、ステージを駆け下りてくる。

永遠のような、あつという間のような時間の中、彼女の歌が終わっていた。

「おう、お疲れさん」

「……お疲れ様でした」

「はあ……ふう……はい。あの」

「ん？ どうした？」

「ど、どうでしたか？」

何故だかこちらを窺うように尋ねる真白さん。

僕と兄貴は顔を見合わせ——にんまり笑って言った。

「超最高だった（でした）！」

真白さん——今更だが、芸名でCOTTOと呼ばれているそうだ。なのに本名を知っ

てた侵入者……恐ろしや——のステージが終わり、その後も恙なくイベントは進み、無事終了の運びとなる。

ステージが終わり、真白さんを控室に届け、侵入者が何故かステージ前の倍の数くらい来た後、僕等は僕等に割り当てられた控室に戻った。

そして、入り口で挨拶したスタッフさんに呼ばれた。

「二人共、お疲れ。いやあ今日は大漁だったね」

「あ、お疲れ様です」

「お疲れ様です」

侵入者とはいえ、客相手に大漁とは。

警備員の客は雇い主だから、それに害するのは客じゃないと意識が徹底されているんだろうか。

「うむ。雇い主を自宅に送り届けるまでが我々《剣警護》の仕事だが、君達のシフトはここまでだ。よって、給料を渡しておこうと思つてな。現金手渡しで良かったかな？」

「ええ。俺はともかく、こつちの円岡は自分の口座持つてないもんで。これを機に作ら

せてもいいんですけど」

「そうしてくれたまえ。うちはいつでも人手を歓迎しているからね。口座がある方が面倒がなくて助かる」

「……今後も参加する前提で語ってますね」

「もちろん君が良ければだがね。次回以降は書類も必要ないだろう。なんなら、卒業後の就職についてもうちは優遇させてもらおうよ？」

「どれだけ人手が欲しいんですか……？」

警備員なんて地味な仕事だから、人気がないと思うなかれ。

さつきちよこつと調べてみたらこの剣警護、なんと全国の地方に最低三つは支部を持つ、日本最大の警備会社なのだ。

僕達の親世代が設立したという若い会社でありながら、支部の一つ一つがその地域の安心と信頼を勝ち取り、それに応えてきた。中でも本部と、最近支部長に昇格したという若手が治めるN o. 2の支部に至っては、この国の重鎮を始め、諸外国の大統領や外交官、果ては王族までもを警護している。「なにその漫画の世界……」みたいな感想が浮かぶスーパー警護会社なのだ。

ちなみに、僕達のこの仕事はそのN o. 2支部預かりのものだとその時に知った。

世界を股にかける剣警護 No. 2 支部がアイドルの警護をしてるのに驚けばいいのか、その剣警護を雇えるような真白さんの事務所に驚愕すればいいのか、そんな警護会社が気軽にバイトを雇う所に突っ込めばいいのか、その警護会社のバイト情報を普通に知ってたっていうか普通にコネ持ってた兄貴を問い詰めればいいのか、僕には判断つかない。

ていうか、その支部長に昇格した若手って、「木戸さん」だったような……？

謎は深まるばかりだ。

「わざわざ僕に声を掛けなくても、十分優秀な人材は集まると思うんですけど」

「その優秀な人材に声を掛けているつもりだがねえ」

「……お世辞ですよね？」

「いいや？ 私も長いことこの仕事に就いているが、君程我慢強い子も最近では中々いないからね。身体は作ればいいが、心はそうそう鍛えられるものでもなし。うちでは新人ベテラン関係なく鍛えることに重きを置いているから、今の体格だとか気にすることはないよっ。」

「はあ」

「信じてないねえ。まあいいだろう。とにかく、これが君の分だ」

そうやって茶封筒を手渡してくるスタッフさん。

「ありがとうございます」

受け取る僕。

確認してくれたまえ、という言葉に従って、封筒を開き、金額を確認する。

……考えてみれば、僕の人生で初めて自分で稼いだお金なんだな。

そう思うと、紙幣と硬貨しか入っていないこの茶封筒が、重く感じられ——って、あれ？

「あの」

「うむ？」

「……事前に聞いていた給料と手当を総合しても、このお金と計算が合いません」

「少なかったかい？」

「多いんです」

具体的には、諭吉先生が一名程。

「ふむ、そうか」

「はい、多いです」

「多い分には問題ない。受け取りたまえ」

「……………え？」

「ボーナスだよ。君の働きに対するね」

「ちよ、ちよつと待つてください！ 僕達の所は他より多かつたと聞いてますけど、それは全部兄貴の働きで——」

「何を言うんだい。君も後半の動きは良かったじゃないか」

「」

「上背の低さを利用して相手を転がす。確かに、新城君がいてこそ發揮される足止めだが、随分やりやすくなったろう？」

「そうっすね。転んだ奴に踵落とすだけの簡単なお仕事でしたし」
「そういうことだが、納得したかい？」

……あの後、僕はとにかく倒されないようにと必死で、相手の下に潜り込もうと試行錯誤した。

最初の内はそりゃあそのまま床に叩き伏せられたけれど、段々と足にしがみつけるようになり、転ばせられるようになった。

「おーい、円岡くん？」

「なに？ どしたん？」

僕一人でなんとかできるならそれに越したことはないけれど、それについては諦めた。だから、せめて倒せる兄貴の力にと思ったんだ。

これぐらい出来なきや、連れてこられた意味がない。そう思つて。

でも、こんな……こんなの……。

「ん、んんっ!? どどどうした!? 何故泣くんさい!? もしかして少なかったか!? 君

の怪我に対してその手当では足りなかったか!？」

「今の話の流れでどうしてそうなる……」

いつの間にか涙が出て、余計な心配をさせてしまったようだ。
慌てて涙を拭う。

「ご、ごめんなさい。これは嬉し涙ですから、問題ないです」

「そ、そうか。ならいいんだが」

この人、この現場を管理してるみたいだし、剣警護でも結構偉い人だと思うんだけど、これで務まってるんだろうか。

仕事の時は切り替わるタイプだと思うけれども。

「色々……本当にたくさんさんの事をありがとうございました。バイトの身でしたけど、感謝しきれません」

「ふむ。気にすることは無い。この仕事で何かを得たというなら、それは君の力だ。愚昧な輩は、何をやっても上達しないからね」

お疲れ様と、最後にそう言って貰い、僕はこの会場を後にした。

円岡燕の歩み出す一步 —後編—

水が降り注がれる。

そして僕は目覚めた。

「がぼっ!? げぼっ、げぼっ!? ぶはあっ!」

な、なんだ!?

なんで僕、水を掛けられて……!? ど、どこだここ!?

頭を振って水を払い、周りの光景を注視する。

まず視界に入った地面だが、建物のようなコンクリートでありながら、罅割れた面が多かった。床に所々瓦礫が落ちており、見るからに廃棄された建物だというのが分かる。

地面と接している足がいくつもあつて視線を上げると、こちらを見下ろし、見下す視線と目が合った。

ソフトモヒカンの髪型で、染め上げられた金髪。耳どころか鼻、唇にまでピアスをつ

けた男だ。人相も、とても僕とは同じ人間とは思えない程悪い。服装に至ってはやたらギラついていて、銀のアクセサリーがジャラジャラと鳴り、鬨體が散りばめられている不吉極まりない。その手には、引つ繰り返したような形で持たれたバケツ。

僕の苦手とする、不良そのもの。

少し観察していると、腹を蹴られた。

「がっ!？」

「よお。ようやくお目覚めかよ」

「ぐぐ……ああ」

蹴りと、背に合った壁との激突で、腹と背中に痛みが走り、霞がかつていた頭が冴え始める。

僕は、あの後……一体どうして………？

確か僕は、真白さんの護衛のアルバイトが終わった後、兄貴と駅前で解散し、貰ったアルバイト代を大事に懐にしまって、帰り道を歩いてた筈だ。その時は空が赤くなり始めた頃だったけど、今窓……があつたであろう吹き抜けと、天井に空いた大きな穴から見える空は、夕暮れと夜の境目といった、いわゆる逢魔が時だった。時間にして、二、三

時間程眠っていたようだ。

お金の使い道を考えながら歩いている記憶が、途中で途切れていた。意識して思い出そうと努力していると、最後の最後に痛み、蘇り、合わせて後頭部に痛みが。今打ったわけでもないのに走ったその痛みに、僕は後ろから殴られ、気を失っていたと気付く。

「おはよー。まーどかくうん？」

「っ!？」

この……声、は……………。

自分でも遅く感じる動きで視線をそちらに向けると、そこには一昨日僕を袋叩きにしていた男の一人がいた。兄貴に最初に殴り飛ばされた男で、あの三人組のリーダー的存在だ。鼻はガーゼで覆われていて見えない。

一緒にいた取り巻きの二人は見当たらない。だが、僕を最初に蹴った男と、その男を含めて、その部屋には十人程のガラの悪い男達がいた。

誰も彼も、僕を見てニヤついた笑みを浮かべている。

その顔を見て僕は、身体が震え始める。

あの顔だ……。

弱い僕をいたぶって、悦になるあの顔。

人間ではなく、玩具を見るような目で見ながら、いつもいつも僕は殴られ、蹴られるのだ。

「一昨日ぶりだなあ？ あんときはあのクソ野郎のせいで台無しになったからよお、三日分のストレス発散に来たわ」

「……本当にこんな奴を助けに来たのがいたのか？」

「そうツスよアニキ。信じらんないと思うツスけど、俺等三人あいつにやられちまって、よお!!」

「ぎゃつ!!」

サッカーボールみたいに喉を蹴られる。

「かつ……!! ……あ、つ……!!」

「おらあつ!!」

「つ!!」

腹を踏み潰すように、足が押し込まれる。

「……っ！ うげえええ!! ゲボツ!! ゲホツ！」

「ギャハハハ!! きつたねえ！ こいつ吐きやがったぜ!」

込み上げてきた嘔吐感を抑えきれず、その場で吐瀉物をぶちまけてしまった。

周りから嘲笑が響く。

痛い、痛い痛い痛い!

痛い痛い痛い痛い痛い痛い!

「ああそれとあれだ。またあいつが助けに来るとか考えない方がいいぜえ？ あいつの
ところには、前の二人と十数人が行ったから、よ！」

「ぎいっ!」

「ここは俺等が根城にしてる五階建ての廃ビルでなあ。下の連中はただいるだけだが、
ここと合わせてぎつと五十人はいんだよ。行った奴等で殺すには十分だろうが、そこを
切り抜けてこのビルに来れても、ここにカッコよく来れる可能性は0だ。分かるか？」

0だよ0」

「ぐ、うう……」

「ここにいるうちのアニキは、そんな奴等を纏めてるお人で、中学じやボクシングで名の知れてた男だったんだよ。ま、人を殴れても蹴れねえのが不満で辞めちまったみてえだけだよ」

「うるせえよ」

ぐりぐりと。

ぐりぐりぐりぐりと、頭を踏み躪られ、目から涙が溢れてくる。

……また、なのか。

兄貴に救われて、強くなろうと決意して、兄貴と違う凄さも目に出ることが出来て、僕を認めてくれる人も出来て。

なのに。

なのに、結局僕はまた、こんな風に――。

「……ん？　なんだそれ？」

「！」

懐から、茶封筒が零れていた。

急いで懐に仕舞いなおすが、その際ジャラ、と小銭が中でぶつかかる音がしてしまう。

「……おいおい。それもしかして金か？　もしかして、俺達に貢ぐために頑張つて働いて稼いじやつたんですかー？」

「……………」

「プッ！　ぎゃーっはっはっはっは！！　マジか!?　マジかこいつ!?　貧弱クソチビまどかきゆんの癖に、アルバイトなんかしちやつてんのかよ!?　ヤベエ！　超ウケる!!　馬鹿の健気な頑張り超ウケるんだけど！　ぎゃはははははは!!」

「「「はははははははははははははははははは!!」」」

酷く耳障りな笑い声。

涙が止まらない。

耳に響く声が金切り音より不快で、塞いでしまいたくなる。

悔しくて悔しくて、抱え込む両手に爪が食い込んで、血が出てきた。

「……あー笑った笑った。流石まどかくん。俺等を笑わせてくれる天才だぜ」

「おい。せつかく稼いできたんだから、貰ってやれよ。ここに連れてきたんだから分け前寄越せよ?」

「ばあか。ここはアニキに献上だろうが。アニキ、最近女で遊んでつから、おこぼれ貰えつかもだぜ」

「本人を前にしてそういう話してんじゃねえよ」

「ま、どつちにしろさつさと寄越せや」

目の前の男が言う。

厭らしい笑みを浮かべて、伸ばしてくる手が、とても恐ろしかった。

「……………」

ここでこの茶封筒を差し出せば、楽になれるだろうか。

楽にはなれないだろう。

そこに理由を求めるのは、こいつらには無理だろうから。

ただ、これ以上の暴力を振るわれないのは、今までの経験から確かだと思った。

もう暴力を振るわれぬという意味ではなく、今より酷い暴力を振るわれぬというだけだ。

(もう、いいじゃないか)

希望があるとすれば兄貴の存在だ。

けれど、流石に五十を超えるような人数相手に勝てるわけがない。

兄貴の元に向かったという十数人なら勝てるかもしれないが、その後ここにきて、僕を助けてくれるような大立ち回りなんて、してくれないのだ。

出来る出来ない以前に、僕にはその価値がないのだから。

(……結局、今日の内には兄貴に名前でも呼んでもらえなかったなあ)

それは、僕を認めていないということだ。

そう、兄貴が言ったことだ。

そんな男のために、ここを突き止めて来てくれる？

五十人以上を敵に回して？

そんな子供向けアニメに出てくるような展開を望めるものか。

(もう、いいや)

何時の時代も所詮は弱肉強食。

強い人間は奪い、弱い人間は奪われる。

だから、僕は奪われる。

奪われ、黜られ、果てには命まで搾取されるのだろう。

だから、もういい。

『あんな奴等みたいにも、見て見ぬフリするようなダセエ奴にもなりたくない。理由としちやそんだけだ』

希望を諦めてしまえば、絶望はもう生まれない。

希望があるから、それを裏切る絶望があるのだから。

『なのに、私が慰められることが、一番辛いです』

僕には、他人に気を遣えなんかしない。

自分の事だつて、何も出来やしないのだから。

『この仕事で何かを得たというなら、それは君の力だ。愚昧な輩は、何をやっても上達しないからね』

何かを得ても、すぐに失つてしまえば、何の意味もない。

人生がマイナスの僕が、プラスになろうとするなんて、思い上がりも甚だしかった。

もういい。

もういいんだ。

もういいから、全て諦めてしまおう。

茶封筒を手渡そうと、懐から取り——

『それでもなれるんだよ。最高の自分になら』

「……………い、嫌だ」

「あ？」

「嫌だって言ったんだ!!」

喉が燃えるように熱くて痛い。

頭がガンガンして痛い。

腹からまた吐瀉物が出そうな程痛い。

それでも、言った。

叫んだ。

「これは！　これは僕がつ、僕が稼いだお金だ!!」

懐の茶封筒を抱え、丸まる。

守るように、いや。

守る。

どれだけ痛めつけられても、これだけは。

「……あー」

そいつは、酷くつまらなそうに溜息を吐いた。

「だったらなんだ、よ!!」

「っ!!」

背中を蹴られる痛み。

呻き声は、上げない。

「弱え癖に粋がつてんじゃねえよクソチビが!! お前は大人しく、俺等の財布になつてりゃいいんだよ!!」

「っ！ うっ!!」

蹴られる。

踏まれる。

口から血が出てきた。

それでも、抱え込む。

「……チツ。おい、お前等もやつちまえ」

「はいよー」

「アニキの言う事じゃしやあねえなー」

「あー気が進まねえなーマジ進まねえわー」

「心にもねえこと言うなーお前」

体を蹴ってくる足が増えた。

下から搦り上げるような蹴りもきて、転がされる。

痛い！ 痛い！ 痛い！

それでも、それでも。

それでも、守るんだ。

これはただのお金じゃないんだ。

(僕を認めてくれた人がいた、証なんだ！)

円岡燕を含む彼等は、およそ常識的な判断を下したと言えるだろう。

そこに来るだけでも十数人。

円岡燕がいる廃ビルには五十人。

一般的な学生より暴力的な世界を生きてきた不良生徒達がそれだけの数が集まっていると分かれば、誰だつて近寄ろうとなどしない。

助けるのも、たつた三日の付き合いの人間だ。

これが見目麗しい美少女であればまだ良い格好したいという下心で助けに行きたいなどは思つても、円岡燕は童顔とはいえ男。そこにロマンスを期待するような下心が生

まれる筈もない。

だから、助けは来ないのだ。

常識的に考えれば。

円岡は、不良達は、甘く見ていた。

彼を目の当たりにしておいて、ナメていたと言える。

五十人を超える人数に勝てる筈がないと。

たった三日の付き合いの人間を助ける筈がないと。

理不尽に晒された人を助けることに下心を持ち込むような男だと。

新城一也の『暴』を。

ナメていたのだ。

不意に、発信音。

「……………あ？」

周りの男達からアニキと呼ばれたソフトモヒカンの男は、その音に首を傾げた。

目の前には、ズタボロな身体で、息も絶え絶えで、吐瀉物も血も撒き散らして、瞳も虚ろで、それでもその茶封筒を抱え込む、小さな童顔の少年。

その少年のズボンの背面ポケットから、携帯のコール音が鳴っていたのだ。

「おい」

「へい」

近くにいた男の一人に取りに行かせる。

少年は、その茶封筒以外を守る気力がないのか、あっさりとそのポケットの中から携帯を取り出された。

案の定と言えればいいのか、そこにはバイブ機能で小刻みに揺れ、この場に似つかわしくない音を鳴らす携帯が。

「……………」

正直、ここでそのまま携帯を踏み抜いてもいいのだが。しかしそれはやめて、持ってきた男から乱暴に携帯を受け取る。ディスプレイには、『兄貴』という文字が輝いていた。

(兄貴、ねえ)

十中八九、一昨日三人やられたという男のことだろう。向かわせた奴等から逃げのびたか、それとも……………
口角が上がるのを抑えながら、通話に出る。

「……………もしもし」

『おれ、かずやさん。いま廃ビルの正面入り口前にいるよ』
通話が切れた。

同時に、自分達のいる部屋。いや、建物全体が揺れた。

「へあ!?! な、なんだあ!?!」

「じ、地震か!?! 崩れるのかこの廃ビル!」

「馬鹿! 地震であんな音出るわけねえだろ!?!」

「じゃあなんだよ!?! 爆弾でも放り込まれたってのか!?!」

一斉に騒ぎ始める下っ端連中。

その揺れと音の発生源は、廃ビルの一階からだった。

無論、地震でも、ましてや爆弾が放り投げられた訳でもない。

いや、放り投げられたというのは正しかった。

爆弾ではなく人間だが。

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

彼等より下の方、一階から声が聞こえる。

しかし、吹き抜けの多い廃ビルといえど、五階にいる彼等に一階の音が明瞭に届く筈も無く、その上その声は二十秒程で止んでしまった。

再び静まり返る部屋。

そして、再び着信音。

「……………」

爛々と輝くそのディスプレイには、『兄貴』の文字。

先程より躊躇った様子でありながらも、通話に出た。

『おれ、かずやさん。いま二階の部屋の前にいるよ』

通話が切れる。

そして、下の方から声がし始めた。

「あ————お——」

ひ——「——や——

か——れ——

ほんの少し明瞭になったとはいえ、その内容が聞き取れる程ではない。しかし、彼等には分かった。

これは恐怖と、断末魔の声なのだ。

同じく数十秒で声は止み、三度の着信音。

躊躇う事さえ許されないような気がして、すぐに通話に出る。

『おれ、かずやさん。いま三階の部屋の前にいるよ』

通話が切れる。

声が聞こえてくる。

「——なん——化——

「——な——

——しよお！—— こん——

——やめ—— くれえ！——

「「「あああああぎやあああああああああああ
!!!!!!
「「「

窓の方から、絶叫と骨が砕けた音が響いた。

近くにいた男が窓から顔を出して見ると、地上でのた打ち回る男が四人いた。

自分達のグループのメンバーだった。

「な、なんだよ。一体何が来てるってんだ……う？」

誰かが、そう言った。

分かってるのだ。『誰が』来てるのかは。

自分達を知る中でこんな芸当が出来るような人間はいない。そうなれば、敵対するグループではないことは明白だ。

その上でここに来る、自分達と敵対するといえ、自分達が搾取してきた側の人間と、それに連なる人間。

そして、今この場にいるそれは、少年ただ一人。

その関係者で、その携帯に『兄貴』と書かれるような人物は、一人しかいない。しかし。

その一人は、自分達と同じ『人間』なのか？

声が止み、着信音。

通話に出る。

『おれ、かずやさん。いま四階の部屋の前にいるよ』

通話が切れた。

そして、声が聞こえる。

自分達の踏んでいる床のすぐ下の階ともあつて、声が明瞭に聞こえた。

「な、なんなんだよお!! こい、あ、ぎいいい!!」 「やめろお! やめてくれえ!

ひいひいああああ!!」

「来るな来るな来るな来るな来ぎゃあああああ!!!?」 「う、腕がああああ俺のおおお

!!!

「聞いてねえ！ 聞いてねえよこんなのがいるなんてええええ!!」「だ、誰か、助け……
！ ば、化物おお!!」

恐怖に彩られ、狂い叫ぶ男の声。どれもこれも聞き覚えのある、グループの声だった。

——この廃ビルは、階段を登るためだけの通路と、大部屋一つで各階が成り立っている。

一階の正面入り口が大部屋に直接繋がってるのを除き、階段だけで階を登れる構造だ。わざわざ大部屋に立ち寄らずとも、一階さえ通れば、直接ここに来れる筈なのだ。

しかし、その『何か』は各階の大部屋全てに立ち寄っている。

それは、探し人がいるから、虱潰しに探しているだけなのか。

それとも——この廃ビルにいる自分達全員を五体満足で帰すつもりがないからなのか。

今五階にいる彼等には、後者の方がより現実的だった。

声が止み、着信音。

男達の目には一様に恐怖が浮かんでいる。

汗は滝のように流れ、恐怖で顔は引き攣り、歯はカチカチと鳴り、寒くはない筈なのに、悪寒で体が震えて止まらなかつた。

「……………上等だよ」

しかし、アニキと呼ばれただけはある。ソフトモヒカンの男だけはそう嘯いて、震えている指を操り。

通話に出た。

『おれ、かずやさん。いま五階の部屋の前にいるよ』

全員の視線が、扉に向く。

その扉は、未だ開く様子は見せない。

しばらく待っても音を立てようとしない錆びた扉を、尚微かな息遣いと共に見つめ続ける中、少年の一番近くにいる、鼻をガーゼで覆った男が叫びを上げた。

「く、来るなら来やがれ!! こいつと同じように、袋叩きに——」

「おれ、かずやさん。いまお前の後ろにいるよ」

急に。

いた。

たった今叫びを上げた、ガーゼの男の背後に、誰の目に止まることなく。

新城一也が、存在した。

「へあ」

ガーゼの男の、間の抜けたような声。

続く声は、狂乱の声だっただろう。

しかしそれを上げることはなかった。

一也がすかさずその右足を跳ね上げる『金的』を行つたからだ。

——『金的』とは、睾丸に痛みを与えることで悶絶させる、対男性禁じ手の技である。

空手では下段蹴りとも呼ばれ、その技を喰らえば、どれだけ体を鍛えてきた男でも、鍛えることの出来ないその部位への攻撃に、痛みを感じずにはいられないだろう。

そこは、痛覚神経が数多く存在している上に、いわば『筋肉に覆われない内臓』とも呼べる、目と並ぶ人体の弱点だからである。

だがあくまで、睾丸に痛みを与えて悶絶させるのが通常だ。

一也の『金的』が通常である筈もないのだが。

まず、睾丸が両方とも潰れ、男としての機能を失った。

次に骨盤が砕け、歩くことが出来なくなった。

それだけでもガーゼの男の人生に取り返しつかないダメージを与えたにも関わらず、一也の金的は男の身体をそのまま天井へと飛ばす。

「か、
!!!!!!」

天井と顔が真正面に激突した彼は、叫び声を上げる間もなく気を失った。

辜丸が潰れ、骨盤が砕けた痛みが襲い掛かる前に気絶できたと言えば、不幸中の幸いかと思うかもしれない。しかし追いついた打ちのように、その顔は天井との激突によって、元から平均より下だった見た目が、更に醜く歪み、不細工としか呼べないような顔になってしまった。天井と顔から激突したにも関わらず首の骨が折れなかったのは、一也の死ぬべき程度・の絶妙な手加減によって齎された結果だったが、勿論優しさなんかでは無い。命までは奪わないが、今となっては彼等がこの後頑張つて生きられるかにまで、気を遣うつもりはサラサラ無いからだ。

そこにいる全員が声に気付き、振り向く。その間に生まれた惨事である。

天井とバウンドして床に落ちていく男への関心は既になく、一也は後ろにいる燕にちらりと顔を向け、何事か呟いた後、すぐに向き直り、言う。

「二人」

一也はそこで止まらない。

すぐ近くにいた男の目の前に現れたと認識した瞬間、裏拳によつて顔面の全てが砕かれた。

前歯の全てが折れ、鼻骨を砕き、頭蓋骨の前面に罅が行き渡る。

「二人」

顔面を砕かれた男が倒れる前に、既に一也は次の行動に移っていた。

並んでいた二人の間に現れ、その顔を掴み、そのまま窓に放り投げたのだ。

彼からの直接攻撃によるダメージは無いが、ここは五階だ。足からならともかく、放り投げられ背中を打つように投げ出されれば死は免れない。が、投げ出されて落ちる場所を一也は把握済みだった。その場所にはきちんとクッションが備え付けられている。先に放り投げておいた数人の上という形だが。

骨が碎ける音が暗くなり始めた夜空に響く。

人間のクッションが衝撃を完全に逃がしてくれる筈も無く、下敷きになった連中は勿論、投げられた二人も体のあちこちで粉碎骨折を起こした。

「三人、四人、五人」

彼等が落ちていく頃には、更に一人。ボディブローを受け、吐瀉物を撒き散らし、悶絶する男が一人出来上がっていた。

ボディブローと言ってもその威力は一般のそれではなく、胴体に存在する内臓全体にダメージが行き渡った上で、背骨が外れて立つことが出来なくなるおまけつきである。

「六人」

右のローキックで、両膝が砕かれた。

「七人」

追加でもう一人、窓から放り投げられた。

「八人」

顎の骨を外した。

「九人」

その男を残る二人の内、一人に投げ、激突。壁とサンドイッチさせた。
潰れたような音が鳴った。

そして、ソフトモヒカンの男だけが残る。

「どうだ?」

ここでようやく足を止め、一也はその男に声を掛けた。

その目が、笑みが、とても恐ろしい。

蛇に睨まれた蛙でさえ、ここまでの恐怖は感じないだろうと男は思う。

「俺は、スゲエだろ?」

「……笑えねえ」

元々このグループのリーダーを務めるこの男は、強者を求める性質だ。中学までのボクシングを辞めたのも、ガーズの男が言っていた蹴ることが出来ないというのも理由の一つであるが、大本の理由は『ルールで縛られた試合じゃ燃えない』からだった。だから、彼はこの汚れた世界に入ったのだ。

とにかく人を殴った。

その内徒党を組んでくる奴等がいたが、全員ぶちのめした。

勝手に背中に付き纏う柄の悪い連中が出来てからは、違うグループの、それを纏める強い奴が喧嘩を吹っかけてくるようになった。

殴り続け、蹴り続け、そして彼の下には一大勢力が出来上がっていた。

人を殴る以外には悪いことを積極的にする人間ではなかったが、献上される金は受け取ったし、すり寄ってくる女は気に入りに次第抱くような欲望に弱い人間でもあった。自分が気に入らないと思えば先程のように部下に命令して人を痛めつけさせるようになってしまえば、もう目も当てられない。

しかし、彼はこれだけのことをしていようが、自分は許されると思っていた。何故なら、強いから。

自分だけでなく、その下の勢力を使えば、自分に敵う人間など存在しないと本気で思っていた。

だからこそ、周りの人間は自分の行動を許すしかないのだと。

(けどよお)

「これは、どうしようもねえだろ……」

強者を求めてはいたが、誰がこんな化物を連れて来いと言ったのか。

昔からのスタイルであるボクシングを基本とした構え——両拳を顔の前で構え、膝を僅かに折り曲げた前傾姿勢——をとるものの、果たしてこれが何の気休めになるだろう。

今までの一連の行動、部屋にいた部下をぶちのめした行為を、男は燕から一番離れた位置で見っていた。

見ていたが、見えなかった。

彼が今こうして立ち止まるまで、男は終ぞ部下を攻撃した瞬間の姿しか見えなかった

のである。

勿論、一也は瞬間移動だとか空間転移だとかを扱う魔法使いなどではない。

最初にガーゼの男の背後に現れたのだから、最後の通話の後、普通に階段を登り、天井の吹き抜けの中で一番燕に近い吹き抜けから、この五階に降り立ち、着地した場所がガーゼの男の背後だったというだけの話だ。ここまでの道中で廃ビルの壊れ具合が深刻なのは分かっていたが、一也もまさか本当に背後に立てるような吹き抜けが都合よくあるとは思っていなかった。無かったら無かったで窓から現れるなりするつもりだったので、大した問題ではないのだが。

では何故、男は一也の動きが見えなかったのか。

単純な話だ。

速過ぎるのだ。

速過ぎるし、早過ぎた。

一人を倒してから次の一人に到達するまでの速度も、止まった状態から最高速度に至るまでも、その逆の最高速度からブレーキで止まるまでも、男に知覚できるような速度ではなかったのだ。

「……一応聞くが、なんで今の流れで俺もぶちのめさなかった？」

男には知る由もないが、彼のそれは『無拍子』と呼ばれる、れつきとした武術の一つだ。

短距離走で例えてみよう。

スタートダッシュを決めてから、全身の筋肉で速度を上げていき、最高速度に到達するまでの時間。これは走者には極めて重要視されるポイントであり、これが短ければ短い程、タイムに大幅な差が生まれるのだ。だからこそ、短距離走者は反復練習によって、この時間を短くしようと努力する。

無拍子は、その到達点と言うべき技術だ。

動き始めてから、一拍置くことさえない刹那に、最高速度に達する。その動きは、常人の目では消えたようにさえ見えるのだ。

無論、武術としては存在してしようと、それを使える人間になど出会えるものではない。ましてや一也のように、連続で、『走る』という行為だけでなく、『殴る』『蹴る』と、全身の各所で無拍子を行うという怪物染みた所行を容易く行う人間ともなれば、絶望的とさえ言える。それこそ生息地も知らされずに全世界を飛び回って絶滅危惧種の生物を捕獲して来いと言われる方が、まだ希望がある程だ。

目の前で行われた蹂躪の中で、どれだけ武闘家達が感動して頭を垂れてしまいたくないような武術が秘められているのか。その男は知る筈も無く、ただこの恐怖を誤魔化すために、その理由を問うた。

その疑問の声に、一也は驚く程あっさりと応える。

「いやなに。リーダーっぽいお前には、特別刻み込んでもらいたいと思つてな」

恐怖を、だろう。

確かに、自分の部下達は恐怖を最大限に感じる暇もなく、痛みに打ち震えるか、氣をやられるのみだった。

その惨状を目の当たりにし、これから自分もそうなるのであろうと思えば、内心穏やかではいられなかった。自分でも良く震えがこの程度で収まっているものだと感じる。

恐怖であれば、既に刻まれてる最中だ。

「……物騒な台詞だなあおい。とてもヒーローの言う言葉とは思えねえぜ」

「お前、何か勘違いしてないか」

「?」

「物語のヒーローってのは、アフターケアを怠るもんなんだよ。なんせあいつらの中じゃ、救った奴も倒した奴も既に終わった事で、実際物語の中ではそいつ等は終わるんだから」

周りの絶叫や呻き声の雑音をもともせず、一也の声は男の耳に良く響いた。

「けど、現実じゃそうはいかない。救った奴は救われた後も辛い現実と戦うし、倒した奴は傷を治して同じことをしようとする。それを防ごうともせず、見向きもしないまま他の人間を救って倒してヘラヘラ笑ってる奴を、俺は格好いいとは思わんよ」

「……その防ぐ方法ってのが、恐怖だと?」

「悪いことをしようとするればその恐怖が襲い掛かる。それが抑止力つてもんだ」

今回はただのカツアゲだと思って、俺がそれを怠っちゃったからこうなったけどな。と、一也は自嘲気味に言う。

乾いた笑いしか出てこない。

彼の言う通り、最初の時点で、一也が最初に燕が虐められる現場を目撃した時点で、そ

ここにいた三人に消えない恐怖を刻み込めば、こうしてグループ総出で報復に出ることもなかった。そうすれば、燕がまた痛めつけられることもなかった筈だ。

こうしてグループが壊滅させられる事も。

男は今更ながら苦々しく思う。こんな化物がここに来てしまうような事態を引き起こした三人組に乗せられてしまった事を。久々に強者と戦えるかもしれないなどと軽く考えていた、自分の浅はかさを。

一也が一步踏み出す。

「というわけで、言われずとももう悪党染みた事はしないように恐怖刻んだと思うから、トドメにぶちのめすぞ」

「……馬鹿言え。それで、はいそうですかと大人しくぶちのめされる程——」

男は、恐怖に震える身体に鞭打って、一也に向かって行った。

その身体に拳を届かせようと、振りかぶる。

「諦め良く出来てねえんだよっ!!」

「まあそうだろうね」

それが、男が最後に聞いた一也の言葉だった。

男は結果から言えば、その拳を振り抜いていた。

しかしそこに一也の姿は無く、代わりに男の顔面には一也の拳がカウンターで突き刺さったのだ。

そして、そこで終わらない。

一也は前進した反動で仰向けに浮き上がる男の身体を、拳を叩きつける形で後頭部から地面に落とした。

ゴガンツ!! という音と共に、廃ビル五階の床が崩れた。

元々床には吹き抜けや罅が無数にあつたが、衝撃の亀裂によつてそれらが全て繋がる。一也と男を中心にして床は脆くも崩れ去り、五階に存在した人間は、直下の四階の床へ落ちていった。

ただ唯一。

円岡燕が寝転がる部分だけが壁と繋がったまま無事だったのは、単なる偶然だろう。

街に蔓延る不良グループの一大勢力の一つ、『金色の鷲』ゴールドイーグルは、この日を以って壊滅した。この惨劇の跡を後日目撃したのは彼等と協力体制を敷いていたグループの一人であり、その男が恐怖に塗れながらも救急車を呼んだことで、その全員が病院に搬送された。命に別状があるような者は一人として存在していなかったが、逆にそれが不思議な程痛ましい傷跡を肉体と精神に残されていて、その後心穏やかに人生を過ごせた者も、一人として存在しなかった。

彼等が壊滅していた廃ビルは、その界限で『鷲の墓標』と呼ばれ、以後誰も近寄ることとは無かったという。

これを引き起こした犯人について、誰も証言しようとはしなかった。

誰かがそれを聞き出そうとすると、ある者は口を噤み、ある者は涙ながらに震え、あ

る者は虚空を見つめてひたすら呟くように謝り続けて、ある者は狂ったように暴れ始めた。

ただ一人、彼等のリーダーだった男だけは、一言だけ証言したという。「龍に喰われた」と。

『もう大丈夫だ』

その言葉を聞いて、心から安心した。
優しい声だった。

呟くような小さい声で、僕の意識も朦朧として、なのに何故だかその言葉は、僕の耳にしつかりと届いたのだ。

そして、僕は意識を手放したのだ。

「……はいはい。またかよまたですかまた呑んでくれですかよ。んで、場所は？」

ぼんやりと、目を開き始める。

近視の人ってこんな視界なのかな？ などと考える中、映った視界には自分をいたぶる男達の姿は無かった。

代わりに、一人の男が何やら立ったまま携帯で通話している姿が映る。

『喫茶コスモス』う？　なんで喫茶店で酔っ払ってんだよ。ワインか？　ワインを浴びるように飲んだらそうなったのか？」

「……………兄貴？」

「ん？　おお、目が覚めたか。ちよい待ってろよ。……………ああはいはい。店長とその孫娘のウエイトレスさんが気に入ったとかそういうのいいから」

その人が、僕の敬愛し、憧れである兄貴だと、ハッキリしてきた声と姿を認識して、惚けたような声が出た。

思わず出してしまったのだが、その声一つで喉が痛み、霞がかった頭が覚醒した。

「っ！………っ？」

辺りを見回すと、そこは近所の公園だった。

どうやら僕はベンチに寝かされていて、兄貴はその前で誰かとの電話に出ていたようだ。随分気安いというか、乱暴な言葉遣いだけど、相手は誰だろう？

空を見上げれば、満天の星空が広がっていた。

全身が痛んで碌に動けないから所在無さげにそれを見上げていたけれど、どうしてだか、今日はとても綺麗に思えた。

「あーわかったわかった。委細承知したから、そこで待つてろよアホ親父」

どうやら電話の相手は父親だったらしい。

兄貴は呆れた溜息を吐きながら、通話を切る。

僕は、痛む喉に鞭打って、その背中に声を掛けた。

「あ、あの……」

「俺……確か、言ったよな。ああいうのに出くわしたら、すぐに逃げろって」

言葉に詰まる。

確かに、言われていた。

後ろからの不意打ちで気絶して、あの場に連れていかれたとはいえ、また自分の厄介事に兄貴を巻き込んでしまったのだ。そもそも浮かれて注意散漫になっていなければ不意打ちを受ける事だつて無かつたかもしれないのに、だ。

「それが、三日も経たない内にま―た捕まって、前以上の人数に囲まれて……。奪われる筈の金を、守り通した」

——もう、ダメだ。僕は……。

兄貴は、こちらを振り向き。

笑つて。

言つた。

「やるじゃん、燕」

—— 僕はもう、一生この人に魅せられたままだと思う。

その後、救急車で病院に搬送された僕は、連絡を受けて駆けつけてきた両親に全てを打ち明けた。

いじめられていた事。

いじめの過程で、お金を騙し取っていた事。

もうそのいじめは終わった事。

そして、尊敬する兄貴が出来た事。

父さんも母さんも、僕のために、怒り、泣いてくれた。

ずっと、ほとぼりが冷めるまでは黙っていようと思つていた僕だけけど、それでも今この時、打ち明ける事にしたのだ。

人生最初のバイト代は、両親にあげたいと思つたから。

マイナスのどん底から、兄貴に掬い上げてもらつて。

僕はようやく、0から一歩歩み出せた。

それは、最高の自分になるための、確かな一歩だった。

真白透子の溜息の多い転校初日

「はあ……」

私は教室のドアを前にして溜息をついていた。

今日の私は、転校生。

クラスで形成されたグループ、空気を乱す外来種。それが私である。

これから私が入ろうとしている二年A組にどんな人がいるかは分からないけれど、一人だけ違う制服を着てる私が馴染む事はないだろう。

まず、第一印象から浮く。

転校生という色眼鏡が付いている以上、今更な話だけど。

「はあ……」

また溜息が出てくる。

それがいけないとは、分かってる。

そもそもこうして転校してきたのは、偏に私の我儘なんだから。

前の学校が嫌だった訳じゃない。

ただ、こうして転校する切っ掛けとなった理由と天秤に掛けて、留まりたいと思える程好きでもなかっただけ。

仲のいい友達も、同じ志を持った部活仲間も、教え合う先輩後輩も、私にはいなかったから。

立つ鳥が跡を濁さないような手間を掛ける事もなく、私はこうして聖櫻学園へとやってきたのだ。

「それでは、転校生を紹介しましょう。真白さん。入ってください」

「は、はいっ」

担任の鳴海調先生なるみしらべの声が教室から聞こえ、上擦った声が出てしまった。

そのことにまた少し気落ちしたけれど、持ち直して、教室に入るべく扉に手を掛け、開ける。

『……………』

全員の注目が集まるのが分かる。

一様に感じられる好奇の視線。視線。視線。

何度同じようなことを経験しても、大人数の前に出て注目されるのは、慣れない。そんな自分に溜息をつきたくなるけれど、今は心の中に留めておく。

そして、教壇の隣に辿り着いた私は、背中に視線を受けながら黒板に『真白透子』と書き、改めてクラスのみんなに向き直った。

「ま、真白透子です。私の家の都合で、こちらに越してきました。よろしくお願ひします」

私は、真白透子。

芸名『COTO』。

アイドルであることを隠し、今日から聖櫻学園で生きていく。

(はあ……)

HRの代わりに転校生と交流する時間と相まって、私は心の中で溜息をついていた。目の前に、私に話しかけてきた人がいるからだ。ペンとメモ帳をその手に持って。

「それじゃあ、聞かせてもらえるかな？」

「えつと……」

「二年生の五月という中途半端な時期にやってきた謎の美少女転校生！ そんなスクールの匂いがプンプンする人を放っておくなんて出来ないからね！ 新聞部の名に懸けて!!」

懸ける程の価値は無いと思うんですけど……。

今、私は転校生に用意されていた席に座り、その周囲を何人かの女子生徒に囲まれて

いる。

遠巻きに様子を見ようという気はさらさらないようだった。

友好的なのは有難いけれど、こうぐいぐい来られると根が小心者の私は縮こまるだけなんですけれど……。

……友好的、つていうのも違うかな。

新聞部というなら、ただ話のネタが欲しいだけなのかも。

「まず、当たり障りのない所から」

私を囲む人達の代表なのか、新聞部を名乗る眼鏡をかけた女子生徒、南條クミコさんがペンを構える。

「誕生日と血液型、教えてくれる？」

「は、はい。誕生日は、12月24日。血液型はA型です」

「ふむふむ。クリスマススイブが誕生日とは、良いのやら悪いのやら……」

そういうことを本人の前で言うのはどうなんだろう……。

私は、誕生日とクリスマスが続くから嬉しい。

サンタさんを信じてた頃は、二日で欲しい物が立て続けに貰えたからね。

「転校してきたって言うけど、家の都合なんだって？」

「……………はい」

「あー、その、詳しくは言わなくていいよ。どこから来たかは、どうかな？」

「だいいちあすま第一東女学院です」

「あーあそこの。そういえば今着てる制服もそんな感じだったね？」

「これは……………まだこっちの制服が出来てないので」

「ふーん……………。随分急な決定だったんだね」

家の都合というのは、半分は嘘だ。

そうなった原因、切っ掛けは確かに家の都合だけど、最後の決断は私。転校しなくてもいいものを、私が転校したいと願いだした。

「綺麗な髪してるねー。どういう手入れしてるの？ あ、でもここちよつと伸びてるね。カットしようか？」

「君、部活をどうするか決めてないなら、ロボット研究会なんてどうかね？ 助手くんもたまには来てくれるんだが、安定した人手が欲しくてね」

「ねね！ この指輪花柄のボタンみたいだよね！ 押していい!? 押していい!」

「お近付きの印にこれ、どうぞアルヨ！ 出来立てホヤホヤだから、ほっぺた落ちないようにするヨ！」

「お主、それなりに身のこなしが上手いと見える。それがしと共に忍道を極めぬか?」

「待て前田。^{まあだ}彼女は自分と共に軍の心得について学ばせるべきだ」

「ああ、はいはい。一度に聞いても混乱するだけだから」

今忍者と軍人混ざってませんでした……?」

疑問に思いつつも、^{リーチエンエン}李春燕さんという、中国人の留学生さんに貰った肉まんをもふも

ふと頬張る。

美味しい。

「それで他には……」

その後、幾つか他愛のない質問をされ（スリーサイズとかは黙秘した）、一時間目の授

業が始まる直前になって私はようやく解放された。

集まっていた人達が離れ、少し気が抜ける。

「ふう……」

「お疲れ様です」

「あ、どうも。ええつと……」

「あ、私は上条るいですよ。今日から隣同士、よろしくお願いしますね」

右隣の席に座る黒髪を腰まで伸ばした女子生徒、上条さんが労ってくれる。

真面目そうだけど、友好的な人だ。

微笑みを浮かべてくれるその人に、私も出来るだけ微笑み返す。

「よろしく願います」

「さつき見ての通り、この学校って変わった人が多いので。困ったことがあれば言ってください」

「いえ。転校してきた私に話しかけてくれる、良い人達だと思いますよ?」

「そ、そうですか……」

ちよつと引き攣り気味の上条さん。

なんだろう。私も変わった人だと思われたのかな？

それとももつと変わった人がこの学校にいますか？

芸能界では変わった人なんていくらでもいるから、悪い人じゃなければ私は気にしないけど。

「て、転校してきたばかりで分からないことが多いでしょうし、後で校内を案内しますか？」

「ありがとうございます。でも、校内のことはこの前の休日に先生に案内してもらったので、後は慣れるだけですから大丈夫です」

「そうなんですか」

「ああでも、一つ聞いてもいいですか？」

「はい。なんででしょう？」

「番長ファンクラブ二年A組、点呼！ 1！」

「2!」

「3!」

「4!」「5!」「6!」「7——」

「よし全員いるな。では、何か報告がある者は挙手を」

「はい!」

「12番! 報告を」

「先日、妖精枠の一年生、夢前氏と共にファミレスでパフェを食べている番長を発見致しました」

『おおっ!』

「ふむ。して、どのような様子であった?」

「はい。とても仲の良さそうな雰囲気、パフェのあげっこなどもしておられました。こちらがその写真でした」

「うっはあ! 番長のちよい照れ顔も激レアだが、妖精スマイルニコニコ三割増しもたまんねえなおい!」

「これが番長。パワーか……」

「あ! バイトガールの戸村氏も映ってるぞ! 超ニヤついてらっしゃる!」

「この写真のデータを、ファンクラブとして贈呈いたします」

「よろしい、評価に加えておこう。次の総合評価会を楽しみにしておけ」
「ありがとうございます！」

「では、他に報告は——」

「あの人が言う番長さんって、どんな人なんですか？」
「……………」

教えてくれなかった。

お昼休み。

お昼ご飯の前に、私は一人職員室へ向かう。

教頭先生にお昼休みに一度顔を出すように言われているからだ。と言ってもちよつとした報告みたいなもので、転校生である私がクラスや学校に対する不安や懸念があれば聞いておきたいという程度のものだそう。

それで、教室から職員室へ向かって廊下を歩いている最中なのだけれど。

(番長さんの情報しか入ってこない……)

廊下で話す人達(主に男の子)から聞こえてくる話題は、番長さんで持ちきりだった。

曰く、番長さんは滅茶苦茶強いとか。

曰く、番長さんは友達や身内にはすごく優しい人だとか。

曰く、付近の不良生徒は番長さんを恐れて悪いこと出来ないとか。

曰く、番長さんは男アイドルみたいななよつとした美形じゃなくて、ハンサム系のイケメンだとか。

曰く、番長さんは女の子にモテモテだとか。

曰く、男子生徒は悉く番長さんの舎弟だとか。

曰く、舎弟内の階級は最早ステータスだとか。

曰く、ところでCOTOの最新シングル聞いたか？ だとか。

曰く、ああ聞いた聞いた。買ったの昨日だけ。それが？ だとか。

曰く、俺は発売初日に買いに行つたんだが、その店で番長を見掛けたんだよ！ だとか。

曰く、マジで!? ラッキーボーイだなお前！ だとか。

一度私の話が出てきたと思つて、動揺が身体に出てビクツとなつたけど、結局番長さんの話だった。

それにしても、どうしてこう、歩いてく中で番長さんの話をしていない所がないくらい話題に挙げられるんだらう。ここまで行くと、まるで私に話を聞かせるために示し合わせてるのかと勘繰りしてしまう。流星にないだらうけど。

人が見当たらない渡り廊下に出て、一息つく。

「ふう……」

番長さん……か。

そう聞いた私のイメージは、染めた金髪とかピアスとか、そういう不良系のおつかない感じだけど、ここの人達から聞かされる人物像は、むしろ学園のアイドルに対する

それだった。一部宗教染みたものを感じるところがあるけれど、まあアイドルにもああいうファンはいるしね。

一体どうして番長なんて不良イメージが先行する呼び名が付けられているんだろう。噂通り良い人なのであれば、ちゃんと名前が良いイメージの呼び名を浸透させてあげればいいのに。

と思っていると。

「じー」

「……？」

目の前に女子生徒の人が現れた。

大きなリボンをかチューシヤのように付けた、おでこが良く見える髪型の人で、胸元のリボンやスカートを見るに三年生の先輩だった。

首を傾げるように上半身を傾げて、つぶらな瞳を目一杯広げて、こちらを下からじつと見てくる。

「じー」

「……あの、なんででしょうか？」

「……ねえ、キミ」

「は、はい」

「もしかして、アイドルだったりする？」

心臓が飛び出るかと思った。

「えー！ ぜ、全全全然しよんなこと、にやーですよ？」

「うーん。そっかあ〜」

「そうですそうです。私がアイドルとか、あるわけないに決まって御座いますよ」

「そっかそっかあ。ごめんね急に」

自分でも怪しき満点の誤魔化しだと思ったけど、どうやら誤魔化されてくれたようでした。

その人は、身体を直立に戻して笑う。

「アイルンのアイドルセンサーにビビビッと来ちゃったから、本物のアイドルなのかと

思っちゃった☆」

すみませんがそれ当たってるんですよ。

「でもでもお、アイルンのアイドル情報網を以てしても、キミのこと思い出せないからねえ。アイルンのアイドルセンサーが誤作動起こしちゃったみたい」

「そ、そうなんですか……」

「あー！ キミが可愛くない訳じゃないよ!? むしろ、アイドルになれるくらい可愛いって、アイルン思うなあ〜♪」

そういつて貰えるのは嬉しいけれど、私がCOTOだつて気付かないんだ……。

プライベートの情報はなるべく隠してるとはいえ、姿自体は髪型変えたくらいでそんな変わつてない筈、なんだけど……。

バレなくて安心した反面、アイドルとしてはちよつと複雑な気持ちだった。

「それにしても、キミは？ うちの制服じゃないみたいだけど……」

「あ、はい。これは、前の学校の制服で、私は転校生なんです。名前は、真白透子と言い

ます」

「真白ちゃんか。これからよろしくね？」

「それで……あなたは？」

「あたし？ あたしは一色愛瑠^{いっしきあいる}！ アイロン^{アイロン}って呼んでね☆」

キラツとお星様が飛んでくる横ピース付きの自己紹介。

「転校生ってことは、まだ部活入ってないんだよね？ もし良かったら、アイドル研究会をよろしくね♪」

「は、はあ……」

アイドル業があるので部活は入らないつもりだけど、言葉を濁しておくことにした。手を振りながら去っていく一色先輩を、手を振り返しながら見送——あ、柱にぶつかった。

ぶつけた頭を押さえながら笑って舌を出す一色先輩。可愛く誤魔化そうとしてるけど、目尻に光るものが見えたから多分結構痛かったんだね。

改めて職員室へ向かう。

この聖櫻学園は広いので、何度か道を忘れそうになって立ち止まったけど、なんとか辿り着いた。

扉を開ける。

「……失礼します」

「良く来ましたね、真白さん」

「教頭先生」

中で待っていたのは、藤堂静子とうどうしずこ教頭先生一人だった。

切れ長の美人という言葉が良く似合う女性教師で、威厳がオーラとなって溢れるような気品を感じる。けれどその実、転校生の私に真摯に接してくれるので、見た目より穏やかな人なのだと思う。

先生の前にあるテーブルの上には、一つのサボテン。

会った時にも持っていたので聞いてみたら、「昔サボテンに似ていると言われたので、それ以来愛着を持ってしまっ」と返された。

意味はまだ分かってない。

「どうですか？ 我が校は」

「……まだ、どうとも言えないです。クラスメイトのみんなとかは、明るい人達だと思いますけれど」

「そうですか……。ですが、焦ることはありません。私はこの学園のことを素晴らしい場所だと断言出来ます。後はそれを知っていけばいいのです」

表情はあまり変わらないながらもそう言う教頭先生を見るに、それだけこの学校に自信を持てるのだろう。

うん。良い所はまだ良くわからないけど、少なくとも悪い所じゃないとは思うかな。

「しかし、あなたも大変でしょう。学業をこなしながらアイドル活動。それも学園の皆には秘密で、とは」

「……………いえ。スケジュール管理は、私が両立出来るように事務所が調節してくれますから」

「……そうでしたね。けれど、両立が苦しい時や、他にも何か辛いことがあれば、相談に乗りますよ」

「ありがとうございます。でも、大丈夫ですよ。流石に部活は出来ませんが、余裕を持つ

て調節してくれていますから」

そういえばと、気になっていたことを聞くことにした。

「ところで、噂を耳にしたのですけど」

「なんででしょうか？」

「その……皆さんが言う番長さんって、一体どういう人なんですか？」

「ああ。彼の事ですか」

「……彼」

親し気な呼び方だ。

先生方にも人気があるのかもしれない。

「不安に思う事はありませんよ。彼は我が校に安全を提供してくれる存在ですから、あなたに害を及ぼすことはないでしょう」

「そうでしたか……安心しました」

「敵に回さなければ」

敵に回したら危険ってことですよねぇ!?

「冗談です。確かに彼は敵に容赦しません、女性に、それもあなたのように品行方正な人に手を出すような愚者ではないですよ」

教頭先生はそう言うけれど、私としては触れるな危険の爆発物の存在を知らされた気分だった。

どうしよう……不安な気持ちがあつあつと……。

「はあー……………」

今度は長めの溜息が出た。

現在、私はお昼ご飯のために食堂に来ていた。

お昼と一緒に約束した人はいないので、一人だ。相席？ 無理です。

ゴリゴリゴリゴリ

「私、この学校で上手くやっていけるのかなあ……」

目の前に置いた料理を見下ろして呟くけれど、応える人はいない。

食堂の設備はとても良いもので、価格は低コストでありながら食欲をそそられるメニューだった。

学園の生徒は多くいると聞いているのにも関わらず、私一人が団体用のテーブルに座る贅沢をしても席が余るほどの広さ。購買やお弁当でお昼を済ませている人もここに来るまでに何人か見かけたけれど、それにしてもだ。

ゴリゴリゴリゴリ

いや、それはともかく、この学校だ。

噂の番長さんは、敵に回さなければ何の問題もない、安全な存在だとは聞いたけれど、私がそれに当てはまらないとは限らないのだから。

むしろ、転校生という異物である私は、敵認定されやすいまでである。

本人からの何かが無いとしても、人気ぶりを見るに、全校生徒を敵に回すも同然に思

える。

そうなれば、私に居場所はなくなる。

元々人付き合いの苦手な私に、そうならないために上手く渡りをつけられる気がしない。

……駄目だ。考えれば考える程、自信がなくなっていく……。

(せっかく、少しでも胸を張っていけるようになったと思っただけ……)
ゴリゴリゴリゴリ

——あれから、もう一年と一か月かあ……。

特別大きなライブじゃなかった。

初めてステージに立つわけでもなかった。

いつも通り、始まりから終わりまで緊張しっぱなしのライブになる——筈だった。

『お前が楽しんで、笑ってステージを降りてきたら、最高だったって言ってやるさ』

その日は、最高のライブになった。

あの時、私は確かに変わった。

その言葉が、姿が、強さが。

シンデレラの魔法がかかったみたいに、私を変えてくれたんだ。

(あれから一度も、あの時以上に歌えたことはない)

成長は、したと思う。

あの人が言ってくれた言葉は今でも覚えているし、それを胸にステージに立っている。お客さんも、以前よりは盛り上がりつつくれるようになった。

それでも、どこか物足りない。

あの時以上のパフォーマンズが、どうしても出来ない。

何が違ってるんだろう。

それとも——本当にシンデレラの魔法だったのか。

「……………は」

もう一度溜息が出てきそうになる。
そんな時だった。

「あれ？ 真白じゃん」

そう、声を掛けられた。

「……………え？」

「んー、制服が違う……………ってことは、噂の転校生ってお前かよ。男子共が騒ぎ立てるから
何事かと思つたら」

「し、新城……………くん？」

テーブルの傍に立つその姿は、私がさつきまで思い出していた人のそれだった。

雰囲気の前より柔らかい気がするけれど、確かに、二度と会えないだろうと思っ
た人だ。

話だけは剣警護の人に聞いていた。

新城一也くん。

「な、なんでここに……？」

「なんでもなにも、俺この学校に通ってるからな」

「嘘……すごい偶然だね」

「俺からしたらお前の方がすごい偶然な感じだけだな。なんだって転校生がアイ」

「うわわわわわ！」

慌ててその口を両手で塞いだ。

あ、危なかったあ！ 転校初日から身バレするところだった！

新城くんは私が勢いよく身を乗り出してその口を塞いだにも関わらず、その手に持っ
たお盆も食器も揺らすことなく、冷静に喋る。

「……………本業は秘密か。りよーかい」

「話が早くて助かるよ……ありがとうね」

「いや、俺も似たような所あるしな」

手で塞いでるのに喋っているのでもちよつと擦りたいけど、なんとか秘匿に成功し、安堵した。

「それにしても、よく私のこと覚えてたね？」

「その大根おろしのインパクトを忘れろって方が割と無理あるが……」

そう言つて新城くんは私の目の前に置かれたマイ大根と大根おろしを指差すけれど、はて、何か印象に残る事だろうか。

おろラーたるもの、マイ大根を鞆に入れて食事の場でおろすのは当然なんだけどな。

「お前の方こそ、良く俺のこと覚えてたな。会つたのつて、一年くらい前に一回きりだろ？」

「それは、まあ……そうだよ」

私の方こそ、忘れろっという方が無理だ。

新城くん本人にとつては何気ないことだったかもしれないけど、私にとつては大きな転換点になったのだから。

あれだけの恩を受けてすっかり忘れられるほど、恩知らずなつもりはない。

「にしても、スムーズに敬語使わなくなってきたな」

「……あ。ご、ごめんなさい。つい……」

「いや、俺の方から敬語はいらんと言ったんだから、悪いわけないだろ……」

「う……ごめん」

「素の方が好感持てるしな」

「……そっか」

なんてやっている、そこに掛けられるもう一つの声。

「あれ？ 兄貴……と真白さん!?! どうしてここに!?!」

小柄でアホ毛が特徴的な男子生徒が私達の傍に現れた。

この人は、あの時新城くんと一緒にいた——

「お前も聞いてるだろ？ 噂の転校生。それが真白なんだと」

「はあく。すごい偶然もあつたものですね」

「お前とおんなじ感想だったよ真白も」

「……………」

これが一文字も思い出せない時の絶望感……………」

「なに……………鈴……………さと……………や、山村……………くん……………？」

「おいカスリもしてねえぞ」

「ああいいですいいです。兄貴の影響力を考えたら、一緒にいた僕如き覚えてなくて当然ですから」

台詞以外の全てが明るくて、逆に申し訳なきで胸が一杯だ。

なんだったつけ……。新城くんの隣で、私を励まそうとしてくれていたのは覚えてるんだけど……。

新城くんに心酔してた感じがあったけど、それも強まってるような気はする。

「改めまして、円岡燕です。一年とちよつとぶりですね」

「円岡さん、円岡さん……。はい、覚えました。今度は忘れませんから」

「燕には相変わらず敬語のままなのね……」

「えー、いいですよ僕は。無理に自然体になろうとしても、嬉しくないですし」

あれ。昔はつつかえつつかえだったのに、今はスムーズな話し方なんだな。

この人も、新城くんの影響で何か変わったのかな。

ていうか名前はちつとも思い出せなかったのに、様子や雰囲気は思い出せる私って……。

そうして二度目の自己紹介を済ませていると、また新たに掛けられる声が。

「んお？ 誰っすかその女」

「びいっ!？」

ものつすごい低い声の大柄で金髪オールバックな人の登場に、私の口から悲鳴が上がった。

制服の上からでもわかる筋肉の塊のような体に、明らかに喧嘩慣れした雰囲気。

まさか……まさか、この人が……。

学園で噂の、番長——

「おいこら狼丞。初対面の奴を怖がらせんなっていつも言ってるだろうがよ」

「ぬぐ……すんませんツス」

「んうー、如何ともしがたいよね。その姿と声だと。とりあえず、普段から裏声心掛けてみたら?」

「いやそれだとただの変な奴だろ」

「外見も相まって怪しさ五倍だわ……」

——さん、つてあれ？

「悪かったな、あー、その……名前、なんつーんだ？」

「え、は、はい……真白、透子、です」

「真白、か。俺は杜ノ川狼丞つーんだ。よろしく」

「あ、はい。あの……」

「あん？」

「あなたが噂の番長さん……じゃ、ないんです、か？」

「は？」

「ひっ」

「おい」

「……スンマセン」

威圧感溢れる杜ノ川さんが、いつの間にか私の対面でお昼を食べている新城くんの一
言で子犬のように萎む。

えっと、何？ この力関係。

「その……この学校には、周りの人達が悪さ出来なくなるくらいに強い、番長さんがいるって、噂で聞いたんですけど……」

「兄貴の事ですね」

「兄貴の事だな」

「……兄貴？」

「不本意ながら俺です」

「……え？」

二人は新城くんに視線を向け、示し合わせたように頷き合い。

それを受けた新城くんは、皮肉気に笑って言った。

「……え？」

「新城くんが、番長さん？」

「まあ、そういう反応になるよなあ……」

「でも真白さん。兄貴は、あの剣警護の人達にも信頼されて、警護のバイトも重要なポジションに任されてたじゃないですか。他にも色々逸話がありますけど、それだけでも信じられるに足ると思いますよ？」

「は？ んだそれ。俺聞いたことねえぞ？」

「あ、言つてなかつたっけ？」

「……………確かに、剣警護の職員さん達の、新城くんの評価が『どのくらいヤバイかという、マジでヤバイ』になつてたつて聞くけど」

「そんなアバウトな評価されてるのか俺…………」

私も正直ピンとこなかつたけどね。

とはいえ日本最大の警護会社、その上層部までも含まれた職員さん達の個人に対する評価がそれというだけで、その異質さが伺えるだろう。

そもそも、私が所属する大手芸能事務所、リョウマプロダクションが、突然現れたバイトの人に所属アイドルの警護を任せられるというのも、考えてみればおかしな話だ。

余程剣警護からの信頼が厚いのだろう。

それも、コネ云々より、実力を評価されている風だ。

でもまさか、この学園でも番長として人気を得ているなんて…………。

「まあそんなわけだし。俺この学園じゃ融通利く方だから、困ったことがあつたら相談してくれていいぞ」

「い、いいの……?」

「いちいち確認とんなくてもいいっつーの」

「むしろ兄貴が融通利かせられない所の方が少ないですからね」

「人手が足りないことも起こりえねえしな」

不敵に笑う新城くんに、太鼓判を押す円岡さんと杜ノ川さん。

(……良かったあ)

噂が本当かどうか、なんて悩みは持つ必要はない。

もしも噂程の人氣がなかったとしても、この三人が味方になってくれるのだから。

これ以上ない程の心強い味方を、転校初日から得られ——

『紹介が終わったようなので、これより我々の紹介に入らせて頂きましょうか!!』

「うえ!!」

「……………この声は」

食堂に響き渡るような声が、出所が分からない響き方で聞こえてきた。驚く私を尻目に、私達のテーブルのすぐ傍に着地する三人の男子生徒。

あれ?! 今どこから!?

「一番長傘下最高幹部三人衆、ここに見参!!」

「出たな三バカ共!」

新城くん三バカと呼ばれた三人は、ネクタイの色からして一年生、二年生、三年生と学年で一人ずつ……………え、先輩もいるの?

理解不能な展開の中、こちらの二人は普通に応対する。

「おう三人衆か。今日はどうした?」

「サー! 我が校に新参の学生が現れたと聞きまして、こうして挨拶に来た次第でありますサー!」

「そっかあ。あ、一応真白さんは前から兄貴と知り合いだから、逸話語りは程々にね」

「御心配には及びませんよ円岡殿。前回の反省を活かして、じっくり時間をかけて新城様の素晴らしさを理解していただく方針に切り替えましたから」

「なに普通に会話を進めてんだお前ら!! 帰れ! 今すぐ家に帰るか土に還れ!」

「えつと……あなた達は?」

「よくぞ聞いてくれた! 俺達は番長ファンクラブの中でも、筆頭舎弟たるお二人に次ぐ幹部——」

一度そこで言葉を切り、三人それぞれが無駄に洗練された無駄のない無駄な動きをしつつ、最終的に背後から霊が出てきそうなポーズで止まり、ドツヤアアア!! という音が聞こえてきそうな顔で、二年生、三年生、一年生の順番で言う。

「番長正統派ファンクラブ会長・佐和江干支!」

「新城様広告司令官・宇宙炎赫」

「ボス直轄特務部隊隊長・燃熱繁!!」

……三人揃ってすごい名前だ。

佐和江さんの普通っぽい苗字が、逆に異彩を放っている。

「俺は主に番長に讃える活動をしてる！　ここの近くにある商店街は俺と会員達の領域だから、そこ関連は任せてくれ!!」

「私は新聞部副部長として新城様の偉業を広く知らしめています。学園内で新城様に有益な情報は私の元を集まると考えてください」

「そして俺と隊員達は番長の活動を直接的に手助けしている！　格闘技を中心に運動系の部活連中はこの隊に所属してるんですけど!」

どうしよう。聞いてる限りのスペックはすごいのに、内容が内容だから全然頭に入っていない。

「この通り番長の傘下は人材揃いだから、存分に頼ってくれたまえ」

——だ、大丈夫だよ、ね？　私、心強い味方を得た、んだよ、ね……？

目の前には、まだドヤ顔をやめない三人。

そして周りを見回すと、この光景に違和感を覚えなないどころか、「番長の頼みとあら

ば、俺達もいつでも動けるぜ！」とでも言わんばかりの不敵な笑顔を浮かべた男子生徒が辺り一面にいた。

……私、敵に回したくはないなあとは思ってたけど、この味方の数は過剰じゃないかなあ。

あまりに熱気に溢れたその中心で、私は溜息を一つ吐いた。

「はあ……」

期せずして、その溜息は目の前の新城くんと重なるのであった。

日本文化研究会のユーリヤ一日バイト見学

「ふむむむむむ……」

「オヤ？ ユーリヤサンではないデスカ」

「あ、クロエさん」

「どうかしたのデスカ？ もろこし焼いた顔をしていましたヨ」

「思い悩んだ顔ならしていたと思いますが……少々困ったことが」

「ホホウ、困ったことデスカ？」

「はい……。先日行った横須賀旅行、覚えていますか？」

「モチノロン・ウィーズリーデス！ あの時はトテモ楽しかったデスネ！」

「その時に衝動買いしてしまって、実は私、今お金がないのです」

「ナント！ そ、それではユーリヤさんはこれから、貧しく苦しい思いをすること……アウウ」

「あ、いえ、生活に困るという程ではないんですよ？ ただ、お小遣いとして使えるお金がないというだけです」

「そうだったのデスカ。とんだハヤブサデシタヨ……」

「ハヤブサ？ ……それで、欲しいものがあるわけではないのですけれど、普段使いのお金は持つておきたいと思ったのです。なので、短期間のバイトをしてみようかと」

「ナルホドオー！ 働かざる者、食う寝る遊ぶということデスネ。どのようなアルバイトをなさるのデスカ？」

「今それに困っていたのです……」

「フム……、スコージ見せてもらってもよろしいでしょうか？」

「はい、どうぞ」

「フムフム……フムムムムムムムム」

「悩みますよね？ アルバイトに対する知識がないので、どれがいいものなのか判断できなくて……」

「ワタシにはムツカシイ問題デス……ハッ！ ソウデス！ こういう時は、鉄人の知恵を借りマシヨ！」

「……それはもしかして、先人の知恵でしょうか？」

「ソウデス先人の知恵デス！」

「ハラシヨー！ そのような方がいるんですね！ それで、どなたでしょうか？」

「こういう時、お決まりの台詞があると聞きマシタ」

「?」

『助けてトムえもん』デス!」

『今日は帰れそうにないんで、飯は適当による。すまんね(´|_|)ー☆』

というムカつくLINEがアホ親父から届いたので、今日の夕飯は自分で調達することに。

「さてさて、どうしたもんか」

思案に暮れながら俺——新城一也は、放課後で生徒の数がまばらになった学園の廊下を歩く。

どしよつかない。弁当買って家で一人きりで食うのもあれだしな。

上条家にお世話になりに行こつかなー。
あー、でも今日は向こうも外食なんだっけ。

「お、新城」

「ん？」

「よっす」

声を掛けられた方を向くと、栢嶋先輩かやしまがいた。

いつも通りその腰まで伸びる水色の長髪を靡かせて、廊下の壁に背を預けている。

……丸っこい字で『はくちょう』と書かれたTシャツを着て。

「……………今日はなんすかそれ」

「ああ、これ？」

だぼだぼしているTシャツを摘まみ、先輩は言う。

「今日はクロエの体験入部に付き合うことになってさ……………。これから着替えたクロエと

バレエ部見学に行くところなんだよ」

「それで『はくちょう』……」

「自信作」

フフン、とドヤ顔された。

相変わらずダツセエなそのシャツ……。

見た目は切れ長美人なお人なのに、こういうところあるから残念さが拭えない。

「にしても、よくもまあバレエなんてアグレッシブな部活の見学に付いて行こうと思いましたがね。先輩の事だから、部室でゆったりするもんだと」

「ああ、うん。別に運動はしないしね。クロエが慣れない回転してる所を隅で観察するさ」

「あ、この人ホントに見学だけするつもりだ」

「新城の言う通り部室でゆったりしたかったけど……やる気満点のクロエを振り解くよりはこの方が疲れないかなって」

わかるわ。

すげなく断ろうとすると子犬みたいにしゅん、つてなるからなあの人。

向こうはポジティブに切り替えするんだけど、その顔が目に焼き付いてこっちが切り替えるのにすげーエネルギーいるの。

それにしても、着替えねえ……………。

……あの人、過去の体験入部でまともな格好してた記憶がないんだけど。

なんてことを考えていると。

「乙女^{おとめ}サーン！ と、Oh！ 一也サン、コンニチワー♪」

廊下の先からクロエ先輩が現れた。

——アヒルパンツとセットのバレエ服を着て。

「よし、着替えましょうかクロエ先輩」

「？ ノンノン。これからバレエ部の体験入部に向かうノデ、着替えるわけにはいきま

せんヨ?」

「いいえ、着替えましょう先輩」

「これはバレエをする上での正装なのデス。これぐらいしないと失礼にあたるというもののデスヨ!」

「着替えてください」

「イエ、デスからこれはバレエ部の正装で、美知留サンも折角用意してくださったノデ」

「着替えるオオオツ!!」

「ホワツ?!?!」

着替えさせた。

せめて制服以外を、と訳の分からない懇願をされたので、とりあえず栢島先輩のダサ

文字Tシャツを着て、二人はお揃いの格好で並ぶこととなる。

で、暇だったので俺はその背を追って、バレエ部の部室に辿り着いた。

のだが。

「え、ユーリヤさん？ 今日はいないけど？」

バレエ部唯一の知り合い、ユーリヤが不在だった。

「いないって……どうしたの？ 風邪？」

「いいえ？ なんでも、今日は所用があるとかで休むって言ってた」

「所用ねえ……」

バレエ部の部長さんと栢嶋先輩が話している中、俺とクロエ先輩はバレエの練習服に身を包んだバレエ部の面々を見渡すが、やはりそこに見知った顔はいない。精々が「あ、あの子ユーリヤとよく話してる子だ」くらいだ。

バレエ部に入る面々に熱心でない子はそうそういないのだが、ユーリヤはその中でも特に熱心に練習に励んでいる部員だ。

適当な理由で休むとは思えんが、果たして何が――

「ハッ！ しまったのデスヨ！」

「なんですか意味ありげに」

「ユーリヤさんは、今日はアルバイトの日だと言っているマシタ！」

「アルバイト？」

あれ？ あいつん家、小遣い制って言ってなかったけ？

いや海外で銀行越しだから、小遣い一つか仕送りか。どうでもいいか。

「なんでまたアルバイトですか？ なんか欲しい物でも？」

「イエ、この前の旅行でチョツキンと絆創膏を切ったノデ、普段使いの分を持っておきたいと言っているマシタ」

「傷口に貼るにはちよつと長かったのかな？」

「この前の旅行で貯金が底をついたので、普段使いの分を持っておきたいと言っていたらしい。」

「短期のアルバイトをしようと話して、アルバイトと言えば美知留サン！ という事で、

相談したのが一昨日の夜デシタ。それで、今日がアルバイト初日だそうデス」

「成程……。確かにいくつも掛け持ちしてるトムトムですし、その内の一つにヘルプ入ってくれるなら歓迎でしょうね」

クロエ先輩とユーリヤは学園の寮で暮らしているので、ルームメイトとはいかないが、集合リビングみたいところで一緒に夕飯食べたたり寛いだりすることはあるそう
だ。

留学生仲間ということもあって仲良くやっているので、多分寛いでいる時にそういう話題が出たとかその辺だろう。

ふむ。アルバイトか。

それも、戸村の推薦……………。

なんで後者の単語でこんなにも不安になるんだろう。

「どういところで働くって言っていました？」

「ウーム……………た、し、か……………ラーメン屋と言ってマシタ」

「ラーメン屋」

「ラーメン屋『キリマンジャロ』デス！」

「どっち出してんの!？」

「あー横から失礼」

部長さんと話してた栢嶋先輩がこちらに戻ってきた。

「どうするクロエ？ ユーリヤちゃん、いないみたいだけど。出直す？」

「……イイエ。体験と言えど今日のワタシはバレエ部。友達がいなくらいで、この気持ちは曲げません」

「そっか。じゃあ私は予定通り見てることにするよ」

「ハイ！ 是非ワタシのガチヨウの舞を見ていただくサイー！」

「ダサそっ！」

ツツコミを入れた所で、俺も一つ考える。

ラーメン屋か。

夕飯はそこにすっかな。様子見るついでに。

「で、ついてくるんですね」

「モチノロン・ウィーズリーデスヨ！」

「ナメクジの次はモチを喰らったのか」

「ま、私ももう食ってくるって連絡しちゃったし」

クロエ先輩がバレエ部でガチョウの舞らしきものを披露する様子を大爆笑（本人基準）していた栢嶋先輩と鑑賞した後、俺達はラーメン屋『キリマンジャロ』に向かっていった。

一応Googleマップには載っている店なので、スマホに表示された地図を見ながら三人並んで歩く。Google先生流石つす。

「ところで、その『キリマンジャロ』って、どういうお店なの？」

「さあ？ ネットに載ってるのは場所だけで、メニューもなにもないですからね」

「ワタシも、ユーリヤサンからはラーメン屋だとしか聞いてないデスヨ」

「となると開けてみるまで分からないお弁当箱みたいなものなわけね。さーて、なにが出てくるやら……」

「店名からしてイロモノ感溢れてますがねえ……、と。ここらへんみたいですね」

入り組んだ路地を抜け、それらしき暖簾が掛けられた店の前に到着した。

『麒麟萬蛇露』。

不良の巣窟かな？

「あれか」

「あれかな？」

「あれデスカネー？」

「いやまだあれとは」

「あれかも」

麒麟萬……めんどくせえ。キリマンジャロは、寂れたところに小さくポツンとある、

汚くもなければ小綺麗でもない程度の様相だ。商店街から外れたすぐのところ、小ぢんまりとした店である。

漫画でよくある一軒のラーメン屋さんのイメージそのままと考えていい（暖簾にある店名以外は）。

しかし、それに似合わないと言うか、あるいはこれも漫画のようと言えいいのか。

その小ぢんまりとした店には、長蛇の列が出来ていた。

どれだけ長いかって、店の入り口から最後尾が見えないくらいである。

「さて、ここで問題です」

「？ ハイ」

「なんですか」

「本日私達はユーリヤちゃんのアルバイト姿を見に来ました」

「そうっすね」

「楽しみデスネ〜♪」

「ユーリヤちゃんは今日、バイト初日です」

「ユーリヤサンの初た」

「言わせねえよ？」

「場所は、商店街外れの普通のラーメン店です」

「隠れた名店、でしょうか？」

「隠れる程外れたわけじゃないですけど……」

「そんな場所にあるお店が、ロシア系銀髪美少女がバイトを始めたとはいえ、果たして初日からこうも長蛇の列が出来るでしょうか？ それも、放課後になってから3時間も立っていないのに」

「ユーリヤサンの、焼却能力！ スッゴイのデスネ？」

「焼き払ってどうする」

なんだか限りなく嫌な予感がした。

かと言って列を抜かして店に入るわけにはいかんし……仕方ない。長丁場になるが、この長蛇の列に並ぶとするか。

「俺は並ぼうかと思いますが、二人はどうします？」

「正直たるいけど……ここまで来ちゃったしねえ……」

「決まりデスネ！ 突撃！ となりのトトロデス!!」

「あーるーこー♪ あーるーこー♪ じゃねーよ」

とりあえず列を辿って、最後尾を指すとするか――

「ん？　もしかして番長くんじゃないか？」

「なに？　あ、本当だ！　この前はどうもな番長さんよ！」

「番長さんもここに食べに来たの？」

「そういや、噂のあの子も番長ちゃんのガールフレンドだったっけな？」

「それなら私は、番長さんに先をお譲りしよう。先日娘を車から助けていただいた礼だ」

「俺はクロエちゃんが可愛いから譲る！」

「キ、キサマ！　なら俺も乙女ちゃん萌えだから譲ったるわい！」

「……………」

「Oh！　メルシー！　ニッポンのミナサンは、トテモ優しいのデスネ！」

瞬く間に顔パスで通ってしまった。

うちの学校の連中といい、なんなのこの連携。

「ヘイラツシャイ！」

「生首ウエルカム!!」

店に入ると、高めのカウンターの上を首から上が見えるように、トムトムミツチーがスライドしてきた。

「そして帽子高っ！　どんだけ偉ぶってんだお前！」

「ふふん！　最早あたしのこの店での発言力は神に等しいのさ!!」

「バイトなのに店長超えてんの!?!」

「漫才はいいから早く座りたいんだけど」

「美知留サン、コンニチワー！」

カウンター奥にいる、キッチン担当であろう戸村と挨拶？ を交わす。

戸村のコック帽は天井に届かんばかりの高さを無駄に誇っていた。あれ絶対邪魔。

「あ、皆さんいらつしやいませ。三名様ですね？」

「お、ユーリヤ——」

話していると、件のユーリヤが案内に来た。

——下のヒラヒラがめっちゃミニないチャイナ服を着て。

「ユーリヤサン！ トテモ可愛いデスヨ！」

「スパシーバ。ちよつと、恥ずかしいですけどね」

「……噂の原因はこれか」

「……こりやあ人も集まる筈だわ」

「あ」

「「??」」

「三名様アルネ？」

「李を参考にしてわざわざ胡散臭い中国感を出すな」

あいつはあいつで中国人はこうあるべきだという先入観に囚われてるようだが。

ロシア人であるユーリヤとチャイナ服の組み合わせは、要素をごちゃ混ぜにして力おすな感じだ。しかし美少女ぶりは如何なく発揮されているため、むしろそれがいいと言わんばかりにユーリヤの魅力を前面に押し出している。……まあ一番客の目を引き付けて止まないのは、際どいチャイナ服から伸びている白い生足なんだろうけれど。

多分ユーリヤのこの姿がSNSやらでアップされるなりして話題を呼び、店前の長蛇の列を生み出したのだろう。

問題はこれを着せ、更にSNSでアップした犯人だが……。

「戸村、お前だろ」

「え？ なにが？ ユーリヤちゃんに特別制服だつて言つて着せて、ツイッターに拡散したのはあたしだけど？」

「往生際良いな!？」

詳しく聞かれてもいないのに大暴露しやがった。
罪悪感0の証左だ。

「それでは、ご案内しますね」

「おう……って、先輩ちやつかり座ってるし」

そしてメニューを見ながらだらけてるし。

壁際から並んで三つのカウンター席が空いてるので、壁から栢嶋先輩・クロ工先輩・俺の順で並んで座る。

さて、何を頼むかなと考えたところで、ストント。

何故かユーリヤが椅子を持ってきて、俺とクロ工先輩の後ろに座った。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あの」

「！はい！」

「待ち方が健気すぎるわ!!」

ちよつと呼びかけたら満面の笑みを返された。

「後ろに座んな気になるだろーが！」

「お客さん、そいつあ恋だぜ」

「プレッシャーだよ!!」

つーかボケかますとか余裕あるな、キッチンもホールも。

栢嶋先輩はだらけてツツコミ放棄してるし。クロエ先輩は熱心にメニュー読んでるし。

ここは俺が相手するしかないのか。

「……ユーリヤ、なんかオススメとかあるか？」

「えーつと、なんでしたっけ？ 豚の汁？」

「オススメの豚骨くらい覚えとけよ。んじゃそれで」

「かしこまりました」

「サイズは選べるか？」

「並盛り、中盛り、普通盛り。三つのサイズからお選びいただけますよ」

「どれもパツとしない量だろ!!」

「麺の硬さは如何なさいますか？」

「……かためで」

「え!? 茹でなくていいって!？」

「今日のお前めんどくせーな!!」

好き勝手やり過ぎだろこの店!

店名からしてもうやっっちゃった感あるけれども!

「……栢嶋先輩はどうします？」

「あー、じゃあ私はしょうゆラーメン。やわめの」

「かしこまりました。クロエさんはどうしますか？」

「ソレデワー」

何故かキリっとした顔つきで、クロエ先輩は言う。

「メンカタカラメヤサイダブルニンニクアブラマシマシ」

「アンタさつきまで何見てたんだよ」

「申し訳ありません。本日は裏メニューの曜日ではないので……」

「いややってんのかい!!」

普通に味噌ラーメンになった。

チャーシュー二枚増しで。

注文を聞き終えたユーリヤーは、空いたテーブルの片付けに向かう。

（やだなあ……このままの調子でいくとラーメンの方もロクなモンじゃなかったりしそうなんだけど）

壁際の先輩は既に自分の仕事は終わったとばかりにだらだらして口を噤んでるし。

「せっかく暗記で覚えたラーメン店での呪文デシタノニ………」

こつちの先輩はボケの宝庫だし。

なんて考えていると、遂にそのラーメンがカウンターから差し出される。

「ハイお待ち」

「おお」

普通のラーメンだった。

ていうか……かなり美味そう。

豚骨の濃厚な匂いに加え、ラーメンの具の並びと配色のバランスの良さ。白いスープからちらりと覗く、てかてかと光る麺。

ネギや海苔、メンマの量は多過ぎず、少な過ぎずの絶妙な配分。なるともゆで卵も一番美味そうに見える位置に置かれ、汁が滴るチャーシューを見れば、思わず生唾を飲み込む。

「やるじゃんか、めっちゃ美味そうだぞ」

「スパシーバ！ お褒めの言葉、嬉しいです」

「ふふくん。なんてたって、あたしの渾身の力作だかんね！」

「スゴイデスネー、見てるだけで鼻水が止まらないデスヨ」

「花粉症ならマスクしましょうか」

「うー。……美味そうなのはいいけど、食べ切れるかな……」

先輩二人にもラーメンが行き渡る。

いやー。不安だったけど、この店結構な穴場スポットじゃないか。

まだ食べてないけど、これは結構期待できそう。

戻ってきていたユーリヤは、メニューを回収すると、何かを持ってきて俺達の前にそれぞれ置いた。

「？」

「それでは」

置かれたそれを確認する。

——華が添えられた、豚の顔写真だった。

「ごゆつくりどうぞ」

「遺影添えんな!!!」

今日一の声が出た。

「食い辛いわこんなん!! 何で食品の加工前の姿を見ながら食事させようとしてんだよ!?!」

「当店では、いただきますの重みを大切にするために、具材の生前の姿を写真にしてお客様の前に添える、という決まりがございます」

「さつきから店内の麺を啜る音に勢いが無いのはそういうことか!!」

「いいから食ってみなよ! 美味しいから!!」

「うわ!! マジで美味え!!」

「1200円だ!!」

「結構するな!?!」

「それと、こちらもどうぞ」

ユーリヤは俺達の前にコップと、黒い液体が入ったピッチャーを差し出す。

「当店ではお水の代わりに、コーヒーの『キリマンジャロ』を無料提供しております」
「究極のミスマッチ!!」

「お疲れー、ユーリヤちゃん」

私——ユーリヤ・ヴャルコワに、戸村さんが話しかけてきます。

本日のバイトは終了いたしました。

戸村さんと同じ時間で上がり？ となりますので、一緒に帰る約束をしております。

「どうだった？ 初バイトは」

「とても大変でした……。店員の方は、いつもこんな思いをしていらしたんですね」

実際に、今日の私はダメダメでした。

注文を間違えることもあれば、お皿を落としてしまったり、テーブルの拭き忘れなどもありました。

「お店の人もお客さんも優しく、私を労ってくれましたが、失敗は失敗です。でも……。」

「でも、美味しいと、そう言われた時はとても嬉しかったです」

私が作ったわけじゃないのに。

お店の味が褒められて。

お客さんが笑顔になってくれて。

「今ならわかります。これが、奉仕の心、なんですネ」

「うむうむ！ ユーリヤちゃんは良い子だね。……これはメイドの素質あるかも

………
「？」

す。
小声だったので何を言っていたのか聞こえませんでした。褒められるのは嬉しいで

「あ、でも……今日の制服はちよつと、恥ずかしいので……」

「そっかー。んじゃあ、それについてちやあたしも考えとくんぞ」

「スパシーバ！」

何故だか問題解決になつてない気がしましたが、気のせいでしょう。

戸村さんはそういえば、と言つて、私に茶封筒を渡してきます。

「これ、店長から。今日の分のお給料ね」

「お、お給料ですか。ハラショー……」

これが、お給料……。

私が、生まれて初めて、お仕事で稼いだお金……。

茶封筒の中身はそれほど大きなお金ではありませんでしたが。

「それじゃ、またよろしくね！」

「……はい！」

何故だかその茶封筒は、特別重たい気がしました。

「……………食い過ぎた」

「乙女サン、クロッキードスカ？ お水飲みマスカ？」

「非情に惜しい感じだけど、それは短いスケッチです」

帰り際、栢嶋先輩をおぶって帰ることになった。

め
っ
ち
ゃ
軽
い
こ
の
人
。

不知火五十鈴と猫と勉強と虹と（前編）

人間にせよ動物にせよ、生き物を捨てる、というのは無責任なことだ。

育てるのに金も手間も掛かる存在で、経済的、精神的な理由で育てる事が出来ないこと諦めるのは仕方ない。理想と現実が食い違った結果もあるだろう。しかしそれならそれで、人間ならば孤児院に、動物ならば動物保護団体なりペットショップなりのきちんとした施設に出せばいいのだ。

その施設が本当にきちんとした施設なのかを見極めることは難しいだろうが、山奥や道端に捨てるよりは幾らか建設的だろう。良心的な人間が現れるなんて都合のいいことを考えて、遠回しにその生物を殺すような真似をするよりは。

まあ、それも見つけなければどうにでも出来る立場の俺だから言うので、本人達にはやんごとなき事情があるのかもしれない。別に知りたいたとも思わないが。

頭が良い方ではない——少なくとも学業には上手く働いた試しがない——俺は、同学年の不知火五十鈴がその小さな体で抱えて持ってきた、上の開けた段ボールの中身

を見下ろして、そんな益体もないことを考えた。

「今失礼なことを考えなかったか？」

「別に。ただ、捨てる人あれば拾う人あり、なんてそんな格言を思い出しただけだよ」

その中身には、にゃーにゃーと頻りに鳴く五匹の子猫がいた。

勿論不知火がそんな無責任な人間だという話ではなく、むしろ子猫達、或いは捨てた人間にとって都合よく現れた良心的な人間だという話で。

しかし、ならば自分が飼う、というわけにもいかないのです、こうして学校に持ってきたというわけだ。

その段ボール（子猫入り）は、今は櫻井の手に預けられている。

覗き込むC組女子達。

みゃー にゃー

にゃう

「かわいいなあ〜」

「本当だにゃ〜」

「見吉さんまで猫になってるけど?」

「ありゃ?」

「どこで拾ってきたの?」

「拾ったのは私じゃなくて不知火さんなんだけど、道端に捨てられてたから持ってきたの」

「そうなんだあ。可哀想にね」

「明音ちゃんが飼うの?」

「出来ればそうしたいけど、うちのマンションペット禁止なんだよねえ……」

問われ、一つずつ丁寧に答えていく櫻井。

その背後に迫る影。

……なんて言うては物騒だが、普通に月白先生である。

「……櫻井さん」

「あ、先生。おはようございます」

「おはようございます。それはなんですか？」

「にゃんこズです」

「見ればわかります。何故子猫を学校に持ってきているのかと聞いているのです」

「えっと、貰ってくれる人がいないか、聞いてみようと思って……」

飼えないなら里親を探そう。というわけだ。

本人が飼えるならそれに越したことはないだろうが、その辺の折り合いをつけないから捨てる人も出てくる。

世の中、可愛いだけじゃやっていけないのだ。

世知は辛い。

「むむ………」

……拾った後もこうして様子を窺いに来る奴もいるから、捨てたものでもないが。

不知火は2—Cの生徒ではないので、教室外から二人が話し合う様子を眺めている。なにもそんな壁から顔を出すようにでなくてもいいと思うが、そこはまあ気分的な問題だろう。

そしてその不知火と壁を挟んで隣に寄りかかる俺。

平均より高い背の俺から見下ろすように、艶やかな黒髪の頭頂部に語り掛ける。

「何気に好感触。これなら飼いたいって奴も出るかもな」

「だといいな……。きみの家はどうか？」

「うちは無理だな」

「無理か」

「無理」

経済的な面ではなく、世話をかけてやれる人間がいなという意味で。

お袋は外国に飛んで、年に数回、少し長めの休みをもぎ取って帰ってくるくらいだから論外。親父も立て込んでたら何日も留守なんてざらにある。俺も学校があるし、たまに仕事があつて夜になつても帰つてこない日がある。

留守にする間は隣の上条家に頼る手もあるが……それなら最初から上条家に飼わせ

た方がいい。

「と言つても、親戚のあいつなら五匹まとめて引き取つても全然問題ないが」

「そうなのか？ なら」

「ただあんまりおススメしないな」

「……何故だ？」

「………先住民の動物達がな」

「そんなにいるのか？ きみの、親戚の家には」

「お前が考へてる数の30倍はいるし、お前が考へてる5000倍は物騒だよ、あそこは。

子猫を放り込んだりしたら、子猫も生きた心地がしないだろ」

その数と種類を思い出し、少し遠い目をする。

「………とても預けたくはないな」

「まーあいつに預けりやそれも心配ないんだらうけど、それでもおススメしねえな」

「なにか問題があるのか？」

「あいつの家が遠い」

ギリギリ県外には出ていないけど、最寄りの駅から車でなら通えるという、交通不便な場所に住んでいる。

ぶつちやけ山奥である。

そんな所でなければあの動物達の群れを飼えないのも確かだが、そんな理由で住んでる訳でもない。

まあこれはべらべら喋ることもないだろう。

問題は、学校が終わった後に立ち寄れる距離ではないということだ。

「誰かに飼われた後も会いに行きたいなら、物理的な距離の問題でおススメしないな」
「……………」

そう言われて。

頬を朱に染めて、ぷい、と顔を明後日の方向に逸らす不知火が、なんだかいじらしく思えたので。

衝動に任せて頭を優しく柔らかく撫でた。

全然痛くない正拳突きを腹にもらった。

子猫達はとりあえず先生が職員室で預かり、その後動物病院に一時的に預ける事となった。

新しい飼い主が見つかるまで、という条件付きである。

……鈴河と大将率いる猫の軍勢に加えるという選択肢もあるが、除外した。いやだつて、放り込んで群れから追い出されたらどうすんのかって話だし。

飼い主が現れなければ施設に預けるといふ話も出たが、その前に俺の親戚のあいつの話が出たので、最終手段として用意することとした。おススメしないと言ったが、施設に預けるよりはまだ会いに行ける余地があるからだ。

まああくまで最終手段。その前に貰い手が見つかればそれでいいのである。

あいつの超能力的な動物愛を鑑みれば、最初からそうするのが一番子猫達の為にも思えるが……エゴを通すことにした。

拾った不知火が、飼えなくても、たまには顔を見たいだろう。そんな些細なエゴ。

「……………きみは、本当……………そういう所だぞ」

それを月白先生に伝えたら、隣の不知火にそう言われた。

顔を耳まで真っ赤にして、若干睨まれながら。

何故だろう。

あとどういう所だろう。

子猫達を抱えて話を聞いていた月白先生も何故か呆れた視線を向けてきたが、俺はますます首を傾げるばかりだ。

「……………」

にやー にやー

みやー みやー

にー

「……うふ、生徒たちよりは手が掛からないかも……」

「……………」

「いつそ私が引き取るというのも……、でも責任の無いことは出来ないし……。かといつて新城君のいとこに預けるとそうそう会えないって話だし……」

「……………」

「それにしても、本当に可愛い。ああ、生徒達もこれぐらい素直で大人しかつたらなあ……………」

「……………」

「？ お腹が空いているのかしら？ 食べるものは私のお弁当しかないのだけれど」

「人間が食うものを不用意に与えるとお腹壊すこともあるそうなので止めといた方がいいですよ。ただでさえ子猫なんだからロクに噛む力もないとのことぞ」

「!!??」

「これ、いとこからの忠告。それと猫達への差し入れです」

「し、新城君!!? いつからそこに!?!」

「素直じゃなくて大人しくなくて可愛げのない、手の掛かる生徒ですみません」

「そそそそんなこと言っていないわよ!?!」

「その反応は言ったようなものですけど……。まーとにかく、ほれ猫共。存分に食らうがいい」

みやあ みやー にゃあー みー

「……コホン。ええつと、その餌はどこから?」

「例のいとこにラインで話したら、超特急で持ってこられたんですよ。ちようど連絡役が近くにいたんで、その人に買いに行かせて」

「そうなの……見ず知らずの猫の為にそんなことを」

「見ず知らずの猫の為にこんなことする奴だから、動物達からも愛されるんでしょね。……衰弱してる可能性があるとかで予備のおやつも渡されたんで、今日一日の間催促されるようならあげてほしいって」

「……分かったわ。……いとこさん、良い人なのね」

「何かあったら祐天寺先生並みの怖さで怒るので、そのつもりで」

「……………肝に銘じておくわ」

時は変わって、昼休み。

早速櫻井が募集の放送をかけていた。

『ハーイ！ 本日も、お昼の放送の時間です！ 今日も二年C組櫻井明音が担当させて頂きます！ 本日のゲストは！ 5匹の子猫ちゃん！』

にゃーん

『たちでーす！』

『みんな可愛いにゃー』

『この子猫ちゃん達を引き取ってくださる方、募集中です。一匹でも、五匹一緒でも、にゃんこちゃんを飼いたいという方は放送室まで来てくださいね。よろしくお願います！』

そして、ゲストの子猫を交えたトークが始まる。

放送の私物化と思うだろうか？

いやいや、先生にはちゃんと許可をとったものだろうし。

子猫のこともあるので、今日は食堂で不知火と向かい合って昼食。メニューは日替わり定食（揚げ物メイン）だ。

……今日のはつて言うのと、女子ととつかえひつかえ遊んでるみたいだな。

普段の生活を思い返すとあながち間違つてないのが悲しいところだ。

「見に行くんだろ？」

「……ま、まあそうだな。子猫の飼い主がどんな人物になるか、気になるところではある……」

昼になつても俺と目を合わせようとしない不知火。

というか、席に着いたところで何故かそわそわし出してる。

トイレか？　なんて聞いたら雷が落ちるのは幼馴染で身に染みているので、多分違ふと考える。男と二人で飯食つてるからつてのは……どうだろう。不知火が俺相手に？　と思うが。

不知火の昼飯は漆塗りの重箱。こいつの胃袋に収まるのかと疑う容量だが、中身のメニューは大きさに比べて重くないものばかりなので、不知火一人でも食い切れるそう

だ。

「お前が素直に心配だなんだって言うのは珍しいよな。どんだけ過保護なんだか」

重箱にはてらてらに光る黒豆があった。

ひよい、ぱく。

「拾った訳でもないのに気に掛けているきみに言われたくはないが……つておおい！

私の黒豆を勝手に食うんじゃない!!」

「あれだな。子供が出来たらべつたりな母親になるタイプだなお前は」

「ぶはっ!!」

吹き出す不知火。

「あ、あほか————っ!!? 異性相手に子供だなんだと軽々しく口にするな————っ

!!」

「そんなオーバーリアクションせんでも」

ひょい、ぱく。

「だから私の黒豆を勝手に食うなーっ！」

「いいじゃん、減るもんでもないし」

「減ったわ！ きつちり豆二つ分！」

「ケチケチするなよ不知火。お前にはたくさんのおかずがあるじゃないか」

「ケチとはなんだ！ きさまがその気なら私もこうだ!!」

「ああっ！ 楽しみにとっておいた一本しかないエビフライが!？」

まあそんな感じで戯れながら昼飯を終え、不知火と放送室前へ。

「ちようど五人だねー」

子猫達を抱える櫻井と押井の対面には、言葉通り五人が並んでいた。

我等が2-Cクラス委員長、八束由紀恵

リスのような髪型をした路上パフォーマー、相楽エミ。

ファッションモデルをこなす眠り姫、見吉奈央。

左右非対称の髪色を持つ美容師、新垣雛菜。

柔道女子、熊田一葉。

「……なんかあたしだけ雑な紹介された気がする！」

女の第六感って、標準装備なのだろうか。

「あ、ダーリン」

こちらに気付いた見吉が、たったつと両腕を広げて駆け寄ってくる。それを前に、俺は隣の不知火を持ち上げて、間に立たせた。

「不知火バリア―」

「は？」

呆ける不知火に委細構わず突撃してきた見吉。

「ぬぼあ!？」

不知火が抱擁の餌食となる。

身長差の関係で不知火の頭が見吉の胸辺り。その豊満な果実に頭が埋もれさせられる形になった。

狙っていた標的ではないにしても抱き心地がいいのか、不知火の後頭部をよしよしする見吉。息が出来ないのか手足をバタつかせる不知火。その組み合わせの頭上越しに、俺は残る四人に語り掛ける。

「子猫を飼いたい五人、でいいんだよな？」

「うん、そうだよ」

「やっぱり、飼ってみてもいいかなって。……不知火さんのそれは大丈夫なの？」

「猫、飼ってみたかったんだよねー」

「私も。猫ちゃんコスで撮影した事があってー」

それと猫を飼うことにどんな関係が……。

「それ、猫を飼う理由にはなっていないわよ……」

委員長も同じことを思ったらしく、呆れた声。

満足したのか抱擁から解放された不知火は、咳き込んでから涙目でこつちを睨みつけた。

「……おい」

「まー、この面子なら心配ないか。一部ちゃんと世話できるか分からんが」

「ねえ、なんでこつち見るの？ あたし信用ない？」

「おいきさま」

「聞くけど、猫の飼い方とか分ってるか？」

「いや、それは……調べればいいかなって」

「そんなとこだよな。基本はそれでいいとして、困ったことがあつたら俺からいいとこに聞いとくから」

「せいっ！」

脚を蹴られた。

蹴つた方の不知火が悶絶した。

馬鹿め。わざわざ弁慶の泣き所で脚の一番固いところを蹴るからそうなるんだ。

「……弄ばれてる」

「失礼なことを言うな。これは俺なりの愛で方だ」

「だとしたら随分意地の悪い愛で方だけど……」

勿論俺とて人は選ぶ。誰彼構わずこうする訳じゃない。

不知火は特別なのだ。

まあ不知火だけにこうするという訳でもないんだが。

なんだか俺の知られざる（？）嗜虐性が発露されているようだが、今はそんなこといいだろう。

「で、誰がどいつを引き取るんだ？」

「そうねえ——」

「ちよつと待ちなさい！」

その時。

普段にない機敏さで月白先生が現れ、制止してきた。

「せ、先生？」

「あなた達、ご家族の方に許可は取ったの？」

「「「「あつ」」」」

口元を覆う五人。

どうやら全員取っていなかったらしい。

「子猫といえど、一つの命です。無責任に飼うことは許しません。まずはご家族と話を付けて、それからです」

「そうだぞ。子猫に何かあっていところのあいつに怒られるのは俺なんだから」

「新城くんはどっちの味方なのさー」

「今この時は猫の味方だ」

あと不知火、と。

未だ悶絶する少女を横目で見ながら、心の中だけで呟いた。

翌日。

「今度の中間テストで平均点以上を取ってこい、か……」

昨日に引き続き、昼飯を不知火と向かい合って食べる。

俺は日替わり定食だが、今日の不知火は割とありふれた弁当箱。昨日の重箱は祖母の

手作りらしく、今日は母の手作り弁当らしい。

茶色成分多めな辺り、いかにも主婦っぽいメニューだった。

「二、三人くらいはそう上手くいかないだろうとは思っていたが……」

「まさか五人とも条件つきとはねえ」

昨日よりも量が減ったにも関わらず、不知火の食事は遅々として進まない。先行きが不安だと食にも影響するのだろう。

三日後に控えた中間テスト。

子猫を飼う条件として委員長除く四人に言い渡されたのは、その全科目の点数が平均を上回ることだった。

まるで示し合わせたかのように同じ条件を言い渡されるとは、流石に予想だにできなかった。

ちなみに元から成績上位の委員長はOKを貰ったが、一匹のみという条件。

「……実際どうなんだ？ 君から見ても、あの五人の成績は」

「新垣なら同じクラスのお前の方が詳しいだろ？」

「ふむ……。彼女は良くも悪くも普通、といった所だったと思う。平均の少し下ぐらいだったか？ 頑張れば届かないということもないだろう」

「そつか。じゃあ心配なのはあの三人か。相楽はあの通りアホの子だし、熊田も見吉も、いいんちよの言葉を借りて言えば『底辺、どん底、最下層！』と来たもんだ」

最下位はどこぞの寄生獣がキープしてるものの、どんぐりの背比べだろう。科目が悉く平均に届かない俺が偉そうなこと言えた立場でもないが。

く、悔しくないし？ 卒業後の進路は決まってるようなもんだから、勉強なんか出来なくても全然困らないし？

……なんて言ったら方々で雷が落ちるので言わないけど。

「昼休みになったら放送室に向かったみたいだから、頑張つて勉強しようって気になったんだろうけど。念の為に俺の方でも別の奴に当たってみるかね」

「……なあ、新城」

「ん？」

食事中だが、箸を一度置いて不知火は言う。

「この学園で貰い手が見つからなくても、君のいとこに預ければ安心だと言うなら、私はそれでいいと思ってる」

「？」

「私が子猫の顔を見たいと思うエゴを、君が慮って通そうとしてくれるのは……その、嬉しいとは思おう」

「いつになく素直だな、不知火にしては珍しい」

「茶化すな！ ……しかし、元はと言えば私が拾った子猫達で、飼うにしても探すにしても私が責任を取るべきなんだ。……それなのに、飼うことも探すことも、私は他人に任せきりだ」

「……………」

つまらないことで悩んでいたようなので、食事を再開することにした。

本当、こいつと来たら。

「そんな私のエゴで猫達の先行きを不安にさせるのは、忍びないというか……」

俯きながら語る不知火に、俺は。

「アホ」

切つて捨てた。

「な、あ、アホとはなんだ!? 私はこれでも真剣に」

「そんなアホなことを真剣に考えるからアホだってんだよ。学年一桁の成績が全く活かされてないな」

「なあっ!? お、おま」

憤慨して抗議しようとする不知火。

その口に。

「まぐっ!?!」

不知火の弁当にあつたカボチャ煮を突っ込んだ。

「まぐつ、ぐむう……」

「お前が猫を拾ったことに責任があるなら、貰い手を探すって言い出した櫻井にも、探し出す責任がある。お節介を焼くって決めた俺にもな」

ちゅぽん、と不知火の口から箸を抜き出す。

頬杖をついて、人の口に箸を差し込んで、行儀の悪い俺である。

「頼まれてもいないのにやったこと。それなのに罪悪感持たれたら、櫻井ならこう思うだろうな。『余計なお世話だったかな』って」

「……………」

「俺は『それでもいいや』って割り切ってる方だけだな」

「余計なお世話なんて、そんなことはないぞ」

「なら、持つのは感謝の念にしてくれ」

「……………うむ、そうだな」

不知火は微笑んで、言う。

「感謝するぞ、新城」

「ちゃんと貫い手が見つかってから言ってくれそういうの」

食事を再開して白米を——不知火に箸を強奪された。

俺でも目を見張る程のスピードで箸が拭かれた。

不知火五十鈴と猫と勉強と虹と（後編）

ああは言ったものの、中間テストが近付いて余裕がないのは俺も同じだ。

将来的に成績が必要な訳ではない。

親が成績至上主義な訳でもない。

ただ、幼馴染がうるさいのだ。

「はい、これ今回のテスト範囲ね」

「……………」

俺の部屋にずかずか上がり込んできたしめじもと、い姫島と、その後ろからやってきていた件の幼馴染ことるい。後者が持ってきた紙の束を見て、前者と共に遠い目をする。

俺と一緒にゲームをする気満々だったしめじは完全に絶句していた。ここに来た時点で予想出来ただろうに、学習しない奴だ。

俺は予想出来たので心構えはしてたし、シヨックも少なめだ。傷は浅めだ。いや、予想はしてたけど間違いであってほしいなーとか思ってた訳ではなかったけど。

現実是非情である。

「だっ！」

擬音を発しながら逃走を計るしめじ。

当然扉側に立っていたるいがそんなのを許す筈がなく、流れるような動きで関節を決めつつ床に押し倒してしまった。子供の頃から俺の幼馴染をやつてたまに護身術を学んでいた影響か、一般人でも底辺の底辺であるしめじに抗う術などない。

「どうして逃げるんですか」

「いやじゃ〜！　なんでわしが勉強なんてせねばならんのじゃー!?!」

往生際悪くじたばたと暴れるしめじだが、その動きにもびくともしない。

俺には窓からの逃走ルートがあるが、逃げてても無駄なので逃げない。逃げられないのではなく、逃げたところで帰ってきた時には同じ量、いや更に増やされて待ち構えているのだから。

テスト勉強から逃げる為なんて理由で泊めてくれる友達にも心当たりが無い。

例外もあるにはあるが、そこに泊まると追ってくる。

「……じゃあしめじまさん、逆に聞きますけど」

「その呼び方やめーや」

「なんで中間テスト前なのにゲームなんて持ち込んで一也君の部屋に上がり込んでるんですか？」

「テスト前であろうとなんだろうと、何時如何なる時でもゲームに人生を捧げる！ そして普通に赤点を取る！ それがあたし、姫島木乃子だからさ!!」

「……………」

るいの目はそれはもう、とても可哀想な物を見る目だった。

「……もういいです」

「そうか。じゃああたしは」

「言い訳は聞きません。ここで勉強していつてください」

「なんでじゃ!?!」

「なんでもです。一也君も、ちよつと成績下がったら補習受ける事になるギリギリな所

にいるんだから、これからきっちり勉強するの」

「毎度ご迷惑をお掛けしますね……」

そう。それが俺が逃げられないもう一つの理由。

他所は知らないが、この学校では赤点を取った成績下位者に補習を受けさせる制度があるのだ。

一科目でも取ればその科目で課題が、二つ以上の科目で取ればその数だけ倍増。それもサボったら更に倍。サボった日数でどんどん倍になっていく恐ろしいシステムである。

このしめじは常習犯なので最早慣れっこかもしれないが、そんなアホを間近で見ているので「こうはなりたくないな……」という気持ちがある。

一年の頃は俺もちよくちよく赤点になってちよくちよく受けていたが、これが本当に辛い。どれだけ辛いかって、一科目で俺が全速で逃げ出したくなるくらいだ。ていうか逃げた。次の日に淡々と倍に増やされたので最初の一回で終わったけど。

それに比べれば我が幼馴染様のなんとお優しいことか。

テーブルの上に勉強道具を広げ、勉強する体勢に入る。勉強は辛い所業だが、あの補習の日々を思えば幾分は楽なものなのだ。

「それじゃあ、始めるわよ。しめじもさんも用意して……って道具がないだろうからこれ使って」

「あーやだやだ。補習で幼馴染との貴重な時間が奪われるのが嫌だからって、あたしを巻き込むなよなー。そもそも補習なんぞあってもなくても、このすけこまはふらふらどっか行つてどっかでフラグ立ててくるに決まってるだろーに」

「は、はあ!!? そ、そそそそんなじゃないですから!! そんなじゃないから!! 勘違いしないでよ!!?」

「そうだな。こいつは後で俺に泣きつかれるのが嫌だから、前もって勉強させてるだけだぞ」

「その言い草もなんなの!?!」

「はいはい。鈍感ボケごちでーす」

そんな感じで俺達のテスト前の勉強が始まる。

「……で、なんだって？」

「えーと……」

翌日。

教室で猫を飼いたい組の進捗の方を聞いて、聞き間違いかと思つて再度聞き直す俺に、櫻井は言葉を濁す。

代わりに答えたのは委員長。

「昨日図書室で中間テストに向けて勉強会を開催したところ、熊田さんは部活の後輩に指導。相楽さんは路上パフォーマンス。見吉さんは撮影。新田さんは家の理容店のお手伝いで欠席ですって」

「何やってんだあのアホ共は……」

机に突つ伏す。

ほとほと呆れるとはこの事か。

昨日の決意表明はなんだったのか。

「俺でさえ、このお・れでさえ、三日前のこの時期は試験勉強させら^てるつてのに、あいつらと来たら」

「今どんな読み方してた？ ……でも確かに、元々成績が振るわない人達なのに、勉強会

までポイコツトされたら望みが薄いわ。どうしたものかしら……」

「でも、諸々事情があるのはしょうがないし……」

「そういうんじゃないと思うけど」

断ることが出来たとしても引き受けたのは、やはりテスト勉強の優先順位を下げてしまったからだろう。

人間、やらなければいけないとわかっていても、やりたくないことは後回しにしがちだ。それで大体やらないまま、しつぺ返しを食らう羽目になる。

「今回ばかりは力になれそうにないし、いいんちよにどーにかこーにかしてもらうしかねーなーって他力本願だったわけだが」

「安心して。勉強面であなたを頼りにすることはないから」

「あら辛辣」

まあ俺でも俺を頼りにはすまい。

頭の良い知り合いに頼むにせよ、テスト前に他人の面倒を見てとは中々言えないし。かく言う俺は幼馴染頼り。

プライドの欠片もない。

「今日明日はちゃんと参加してくれるといいのだけれど……」

猫の行方が気掛かりなのは確かだが、俺も他人の事を心配していられる立場ではない。
い。

俺もまた、中間テストに向けて勉強しなければならぬアホなのだ。

赤点を取って補習を受けるのはご勘弁だからな。言うなれば、これまで勉強してこな

かったツケを払っているところだ。

……まあ、そんな真面目ちゃんだったら補習が嫌で勉強することもないんだろーが。

「ほんと、地頭は悪くはないのよね」

「そらどうも」

「良くもないけど」

「そらすまんね」

俺の解いた問題集を赤ペンで採点したるいは、そのように結論する。

ペケの方が割合多めだが、そこはご愛嬌ということにしておこう。しておきたい。

ちなみにもいるいの方は言うまでもなく日常のお勉強をしている真面目ちゃんなので、こうして俺の勉強を手伝って頂いても何ら差し支えないようだ。

「ところで、今更だけどしめじさんは？」

「当たり前だけど逃げた」

「当たり前だけどって……」

どうやら今回も自分の生き様を貫くと決めたようだ。

るいの指導を受けていれば万が一にも補習回避は出来たかもしれないのに、それでも逃げるか。生き様そのものとはともかく、そのひたむきさは見習う所も……やっぱりないな。あいつから何かを学ぼうとしたら、駄目人間が感染してしまう気がする。

「……まあ、あたしもその方がいいけどさ」

「そうだな。俺もあいつがブー垂れてるのを聞きながらは集中欠ける」

「ああもう！　なんで鈍い癖に耳聡いの君は!？」

耳が良いことを怒られた。

理不尽だろ？　これ俺達の平常運転。

さて、俺もるいの尽力のお陰で赤点、ひいては補習回避を免れるだろうという所まで

来ている。きっとあいつらも先の愚行を反省し、委員長にしごかれていることだろう。そう思つて櫻井に聞いてみたが――

「ダメでした」

「なんでや」

関西弁になつた。

詳しく聞くと、どうやら一昨日の事情がグレートアップして奴等に襲い掛かつてきたとのこと。

グレートアップする方もあれだが、学習して断るつもりもないのかあいつらは。

「不知火にはほんつとに悪いけど、これじゃあもううちのいとこに預けた方がいいんじゃないや……」

「私もそんな気がしてきたわ……」

「あ、諦めちゃだめだよ！ テストは明日！ まだ一日あるんだから！」

「参加するかしら？」

「……………」

「黙っちゃったよ」

「こらもうダメかしらんね。」

「こうなったら……」

なんて弱音を吐くわけにもいかないのだろう。委員長的に。座っていた席から立ち上がり、気合を入れるように宣言する。

「一夜漬け大会よ！」

その夜。

「終わった——！」

自室で諸手を挙げて喝采する俺がいた。

そう。終わったのだ。

復習も含めたるいのドリルが！

「長く、辛い戦いだった……。何度背を向けて逃げ出したくなかったかも覚えてないが……俺は、やり遂げたんだ……。！」

「本番は明日からだけどね」

仰向けに倒れた。

「背を向けて逃げ出してしまいたい……」

「なんで勉強に関してはそのんなに弱気なの……」

事件にはすぐに首を突っ込む癖に、もう……。と呟く彼女。

そんなもの、人間には向き不向きがあるというだけだ。俺の人間パラメータは、およ

そ学生として優秀には割り振られていない。

早々に逃げ出した菌類は遊びに極振りし過ぎだ。

低スコアは嫌なのでゲーム力に極振りしたいと思います、つてか。俺の場合は、弱いのは嫌なので戦闘力に極振りしたいと思います、になりますか？

思考が脱線した。

何にせよテスト前の勉強はこれで終わりだ。

「もう一生勉強なんてしたくない」

「それ、毎回言ってる」

「まあ結局するんだけどな……」

内申点欲しさはないが、補習嫌さはある。あと菌類と一緒にされたくないという気持ちも。

るいは俺のドリルを精査し終え、テーブルの上に整理し、言う。

「……うん。これで赤点は取らないでしょ。平均点は微妙、つてところだけど」

「平均点といや、あつちはどうなってるかねえ」

「……気になる?」

「そりやあな」

るいには例の猫ズについての詳細を知られている。

より正確には、俺が勉強中に挙動不審だった所を見咎められ、ペラペラ喋った（隠すようなことでもないし）。

彼女も彼女で猫をどうにかしてやりたいという思いもあるようだが、飼うのはもちろん、飼う組の勉強を見ることについても力にはなれないそうだ。主に俺の指導に集中したいという理由で。

「でも、向こうは委員長長さんが頑張ってくれてるでしょう? きつと。心配するあまり君が補習になったら、それこそ怒られちゃうじゃない」

「俺も俺で、頑張るしかあるまいな。明日から」

座りっぱなしで固まった筋肉を、軽くストレッチしてほぐす。

「さて、と。一段落着いたし」

「?」

「風呂にでも行くか」

「ほあっ!?!」

ババつと身体を抱いて後退るるい。

「バツ、ババツ、ババババババツカじゃないの!!? バツツツカじゃないの!!? 子供の頃は一緒に入ったとかそんなのいつまで言ってるつもりなの私達もう大人なんだからそんな恥ずかしい真似出来るわけじゃないでしょ一也君は私に対して羞恥心が薄過ぎるのよそれに私今あんまり可愛い下着じゃないしそもそも」

「うん、銭湯に行こうかって話だから」

「あと一緒に入ろうとも言っていないぞ」

机にあった教科書ノート文房具を手当たり次第投げられた。
今回俺に非はないので全部キャッチ。

俺に非はないのに拗ねられたので、一人で行くことに。

解せぬ。

今日は夜通し雨なので、傘を持って外に出る。

ま、道中に不知火家が近くにあつた筈だから、帰り際に様子でも見に行くか。そう思つて芙来田^{ふきた}が番台の銭湯にやつてたんだが……。

「……なんでいるし」

「聞かないで……」

悲壮感と羞恥を漂わせる顔で、銭湯で貸し出している湯浴み着に身を包んだ委員長は俯く。

その後ろには、同じく湯浴み着の猫飼いたい組＋不知火＋櫻井＋キノコ。

今夜は。深夜とは言わないまでも、遅い時間なのは間違いない。一夜漬けをすると意

気込んでいた連中が来る時間だろうか？

「あれか？ 俺と同じで一段落したから来た的な」

「違うのよ……勉強前の準備の筈だったのよ……」

三角座りを始めてしまった委員長から聞いたところ（聞かないでと言っていたのに自分から語りだした）、最初は合コンのような自己紹介（今更）に始まり、夕飯の支度に全員が取り掛かり始め、コンビニに買い出しに行ったかと思えばそこで30分を潰して、帰り際雨に遭遇し、濡れた服を乾燥機に突っ込み、冷えた体を温める為、今に至るとのこと。

うーん。典型的な何かと口実をつけて勉強やりたくない症候群。

やはりこの数相手の教師兼監督役を一人にさせるのは酷だったか。

「気持ち分かるからあんま強く言えんけどさあ、お前らさあ、ほんとにさあ」

「ああ、だーりんが呆れてものも言えないって顔してるよお」

「だ、大丈夫だから！ これからお風呂入ってリラックスしたらちゃんと一夜漬けするから！」

「リラックスが必要なほど疲れたのか……？」

重ねて言うが気持ちは分かるけど。

「ま、何のかんの言っても俺が力になれることはないし、頑張れとしか言えないんだけどな」

俺はリラックス必要だから、ちやつちやか入ってしまうか。

じゃ、と俺はクールに男湯へと去っていこうと歩く。

後ろについてくる見吉とキノコ。

「待ちなさい」

三角座りから立ち上がり、ガッシと二人の肩を掴む委員長。
俺がツツコミを入れるよりも早い、迅速過ぎる動きだった。

「あなた達、何をしているの？」

「え〜？　だーりんの背中を流してあげようかなーって〜」

「あたしはこいつに髪でも洗わせようかと」

「はい、じゃあ櫻井さんはそっち持ってー」

「はーい」

「不知火さんはそっちで」

「うむ」

「あ〜〜〜」

三人に引き摺られていく二人を見て、なんとなく、ドナドナの曲が頭に流れてきた。

「……サラダバー」

女湯の暖簾をくぐっていく女子達を見送り、俺も男湯に入ってしまった。

銭湯に入ってる間のことなど、特に描写することもないので（女湯の姦しい声が聞こえてきたことも、描写する必要なんかない。セクハラになるので）、割愛する。

ドーせるいるいはまだぷりぷり怒ってるだろうし、夜遅い時間なのでテスト勉強ズを不知火の家まで送っていくことにした。

銭湯でビニール傘を何本か買って、二人一組に分かれて相合傘で向かう。

俺の隣には見吉がいた。

というか腕に引っ付いていた。

「にゅふふ。充電充電」

「何を貯めてんだ何を……」

最初はキノコを脇に抱えて運んでいこうかと思ったが、委員長が「甘やかし過ぎ」というので、歩きとなった。

そしてキノコは委員長とペアでキリキリ歩かされて、見吉は本人の強い希望で俺とペア。

これはこれで甘やかしている気がする。

「ダーリンと触れ合って、パワー充電して、わたしの活動時間は少しずつ回復されていくのでーす」

「そんな電池みたいなシステムなんだ……」

「いや、そんな構造で出来てる訳ないでしょ。モノクロームさんじゃあるまいし」

「へー、新城くんパワー……」

「相楽さんや。そんな不思議パワーが万人共通だと思ってるよな？」

興味あり気な相楽に釘を刺しておく。

これ以上引つ付かれても、傘のスペース的にはみ出て結局濡れるし。

あと心臓に悪い。ただでさえモデル体型で、出る所がしっかり出てくる見吉がくつついてるのに。いや、平坦ならバッチ来いって訳でもないが。豊満だと当たる面積多いだけで、どっちにしても感触があると意識せざるを得ないので。

「ところで、新城君は勉強進んでるの？」

「んー？ まあとりあえずここまではやろうぜってノルマは達成したかな。明日に響くし、帰ったらそのまま寝るつもり」

「そう……私達はこれから寝ずに勉強する予定だけれどね……」

「なんかもう、帰ってそのまま勉強って雰囲気じゃないけど……」

別にこのまま勉強せずとも委員長や不知火は問題なく高順位になれるだろうが、残りの面子はそうじゃないだろう。

今から勉強始めたとしても、明日からのテストは絶望的。

これじゃあさっさとあいつに連絡して、猫達を引き取ってもらうのがいいのかもな……。

不知火にああ言った手前、こんな格好つかない結果に終わると気分は良くないが——

「そんな顔をするな、新城」

「ん？」

そう言ったのは、意外にも不知火。

「まだテストまでには時間があり、始まってすらいない。終わるまではちゃんと面倒を

見るさ」

「……へー」

「な、なんだ？」

「いや、なんでも」

不知火からそんな言葉が聞けるとは、思っていなかっただけ。

まあ、諦めたらそこで試合終了というしな。

当事者でないとやけど、始まってすらいらない試合で投げちまうのも格好悪いか。

「ここはあれだ。目標達成したら新城がご褒美つてのはどうだ？ モチベーション的に」

「おい菌類。余計な提案をするんじゃない」

「あ、じゃあわたし、ダーリンとデートしたーい♡」

「じゃああたし、新城と試合！ 本気の！」

「え、いいの？ じゃあわたし、今度大道芸でアシやってほしいんだけど」

「じゃあ私、君の次のカットを予約させてもらおうかな。私好みに」

「それじゃあ私は……」

「ご褒美前提で話を進めんなや！」

「そもそもあなた達のご褒美は別にあるでしょーが！」

そんなバカ騒ぎをしてる内に、不知火家に到着し。

部屋は空いているから泊まっていくか？ という不知火の提案を丁重にお断って、俺は帰路に着いた。

いや、今晚帰ってくる親父が、鍵持って行ってないのよね。

そして、遂に迎えたテスト期間。

初日の朝は、虹がかかっていた。

「ふふふ……」

テスト期間が終わり、成績発表から一夜明け、私こと不知火五十鈴は上機嫌に中庭を歩いていた。

猫達——桔梗。アザミ。エリカ。ナデシコ。ダリアの五匹——は、恙なくあの五人に引き取ってもらえた。

あの夜の一夜漬けの甲斐あって、全員が平均点を超えることが出来た……とはいかなかったが、成績の向上は確かに見られたので、猫を飼う許可が出たそうだ。

普段勉強しない人間が勉強をすると効果が目に見えるとは言うが、これで一安心となったのだ。

私が拾ったあの五つの命が、飼いたいと言ってくれる者に飼われて、本当に良かった。

(これも、あの四人の親御達を説得してくれた月白先生のお陰だな。それと……新城も)

四人も揃ってあんな条件を出されていた事に違和感を覚えたが、本当は四家揃って動

物を飼うことに反対していたのだそうさ。

それを、子供達が飼ってもいいかを聞くのに先回りして、月白先生が電話でどうにかこうにか説得していたと。

その条件として、四人が学年の平均点以上を取る——という名目で、成績を向上させる事。

親達も目に余っていた学業で頑張りを見せられるならば、と。なんとか折れてくれたのだそうさ。

四つもの家に電話で説得してみせるなど、生半可な事ではなかったろうに。月白先生も猫の事を案じてくれたのだな。

何故私を知っているかと言えば、動物病院に預けていた猫達を先生から手渡された時に、本人の口から聞かされたからだ。

そういう手柄みたいな事は口に出さないタイプだと思っていたので、不思議に思っただけの辺りを聞いてみると。

『……電話口で、両親を説得したのは私だけけれど、私一人で説得した訳じゃないから。根気良く頼み込むくらいしかしてなかった所で、横で新城君が何か条件をつけるのはど

うかつてアドバイスしてくれたの。どこもテストの点数が上がったらってなったら、冷や汗かいてたけど』

『新城が……』

『そういう氣遣いを当たり前にする子だから、あなただけでも知っておいた方がいいと思っただのよ』

（あの男もあの男で、猫の為に動いていて、私の相談にも乗ってくれて。そういうのをおくびにも出さんで）

本当に、ズルい奴だ。

もし彼女等が失敗しても、彼の親戚とやらに託す道もちゃんと用意していて。楽な道であろうその選択を、私の為と言って皆を信じ、選ばなかったのだ。

まあその信じる気持ちも揺らいでいたのは確かのようにだが……、投げ出す事はしなかった。

そのお陰で、こうして最良の結果を得られたのだから、あいつにも感謝せねばなるまい。

（とは言っても、あの男の事だ。感謝を形にしても、素直には受け取らんだろうし……）
「難しい所だな……む？」

考え事をしながら歩いていると、噂をすれば影。新城がベンチで横になって寝ているのを見つけた。

そして、その横に膝立ちになって顔を覗き込んでいる女生徒の姿も。

（誰だ？ ……リボンの色からして、後輩のようだが）

「……さん。寝てる？」

ううむ。この距離では何を言っているのか詳しく聴き取れんな……。

向こうはこちらに気付いていないようなので、とりあえず木陰に隠れて様子を窺う。

……いや、何をしている私。

普通に声を掛けるなり、通り過ぎるなりすればいいだろうに。

「ふふ。テストとそのお勉強で疲れちゃった？ 苦手な事するとしんどいもんねえ」

一年にしては二年の新城相手に敬語も無しで、随分と親しいようだ。新城は変わらずぐうぐうと眠っている。後輩の方はその寝顔を見て、にこにここと笑っている。

まるでお気に入り入りのペットが日向ぼっこしているのを眺めている飼い主のようなその構図が、十数秒程続くと。後輩の方から動きがあった。

「頑張ったご褒美♪」

と言つて。

眠りこける新城の頬に。
口付けを落としたのだ。

——なん……だと……!!?

あまりの出来事に、口をあめぐりとさせ、思考と身体が固まる私。

件の後輩は顔を離しても起きる様子の無い新城を確認して、満足気な顔を見ると、そのまま鼻歌を口ずさんで去って行った。

残されたのは、固まった私と、呑気に寝息を立てる新城。

（……………）、「褒美？　褒美と言ったのか？」

あの後輩と新城がどういう関係かは知らんが、今時はテスト勉強のご褒美に、その……ほ、頬にキスするのが、当たり前なのか……………？

いや、流石にそれは有り得んだろ!?　いくら私が友達少ないからって、それくらい分かるからな!　……誰がぼっちだ!

いやでも、しかし……………。じゅ、重要なのはそこではなくて…………。いや、それもそれで重要ではあるんだが…………。

「……………き、きみでも……………やっぱり、ああいうのが、嬉しい……………のか？」

ちよこちよことベンチに近付きながら、問いかける。

聞こえる位置と声で言ったつもりだが、やはり返答は無く、何事も無かったように眠っている。

ぐつすりだ。いつそ憎たらしいぐらいに。

あの後輩が言っていたように、苦手な勉強で疲れたのだろう。横にしゃがんで、寝顔を近くで見してみる。

彼の寝顔は、子供のようなあどけなさがあるようにも、大人の色気を漂わせているようにも映り、そのどちらもを感じさせる不思議な感じだった。

(……成程。眺めたくなる気持ちも、分からんでもない、が……)

……いや、だからと言って、口付けたくなるか？

だが、あの後輩は割と当たり前のようにしていたし……。

ここは、今回世話になった私も、猫の為に奔走してくれたお礼とご褒美としてするべき、なのか？

いやいや。お礼と言えど、そういうのを軽々とやるのは淑女としてどうかと思うが、しかし……うむむむむむ……。

「……か、勘違いするんじゃないぞ？　これはあくまで、君の頑張りを讃えるものであって、私がしたいからとかじゃ……ないからな」

……唇は以ての外として、頬にするのも、なんだか癩だ。
となると、と考え、彼の頭を撫でるように、前髪をどかせる。
そして。

……
まあ、一分とかそこら掛かって。

新城のおでこに、軽く唇を触れさせた。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

——後になつて落ち着いて考えれば。

彼は寝ていようと攻撃に対しては鋭敏に察知して反応するのだから、手刀を止められた事が起きていた事の証左にはならないのだが。

私ともう一度新城と面と向かつて話せるようになったのは、それから一週間後の事になつた。